

第二部 「青嵐篇」——川越時代の私たち

村の神童・悪童たち、川越に大集合

あの日あの頃

東 敏 雄

資料として使ったものかどうか二枚の感謝状を目の前にして迷っている。しかし「あの日あの頃」と題したこの文章の趣旨からすると隠しておくわけにもいくまい。

「感謝状 今次事変ニ際シ国防充実ノ趣旨ニ依リ献金ヲ辱フシ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス
昭和拾貳年九月 海軍大臣 米内光政 東敏雄殿」

昭和十二年といえ、まだ数えて六歳。これはまだ自発的な行動とは考えられない。実際のところはっきりした記憶がない。しかし次の感謝状となると事情は違う。

「感謝状 今次大東亜戦争ニ際シ国防資材ノ献納ヲ辱ウシ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス
昭和十八年九月十日 陸軍大臣 東條英機 東敏雄殿」

こちらははっきり覚えている。進んで廃品回収をしたことはもちろん、その心情まで思い出すことができる。紛れもなく軍国少年だったのである。川越中学校へ入学したのはそれから二年あとの昭和二十年のことであった。入学試験もいまでは想像もできないようなものであった。物理化学教室あたりのグラウンドで武徳殿の方にむけて短

棒を投げたり、駆けていって鉄棒で逆上がりをし、障害物によじ登ったり、こんなことが頭の片隅にある。ペーパーテストの記憶はない。試験場の教室に一人ずつ呼ばれて、B 29には何人乗っているのか、はい十一人です。では十九機撃墜したらアメリカ兵何人を殲滅できるのか。君の尊敬する人物は誰か。はい楠木正成です。こんなやり取りも微かに記憶している。なんの疑問も持たなかったのは時代とともに私自身の精神構造の故であった。中学一年生となっても、軍国意識は高まりこそすれ、衰えるものではなかったのである。そしてその夏、あの敗戦の日を迎えたのであった。

夏休みではあったがあの日は学校に出ている。暑い日であった。武徳殿の南にある畑で作業していたように記憶しているが、はつきりはしていない。十時過ぎであったか、空襲警報が発令された。敵小型機、木更津上空。当時、校内には部隊が駐屯していた。後で考えるとこの日の兵隊たちの動きは異常であった。しかし、当時その理由を詮索するだけの力は中学一年生にはなかった。正午に正面玄関前に集まるよう指示された。そこには兵隊たちが整列していた。私たちは、あだ名でチビ少尉と呼んでいた将校が、常に似ずこぎれいな服装をしているのに驚いたりしていた。玉音放送を聴いたのはその直後のことである。放送の内容を明確に理解したというわけではなかったが、戦争が重大な局面に至ったのだということとはわかった。直後、Sさんという先輩が解説してくれた。どのような身分であったのかは知らないが、Sさんは正面玄関脇にあった事務室におられたのである。負けたのだよ。一言でいえばそのような解説であった。私はSさんの顔に微かな笑みがあると思った。そして激しい怒りを感じたことを今でも鮮明に思い起こすことができる。

その日、その後、西町の川越駅まで歩き、川越線を武蔵高萩まで乗って、歩いて約十分のわが家に帰ったはずな

のに、この間の記憶はそれこそ真白である。これは四十八年を経たいま、あらためて思い起こして空白だと言っているわけではない。もうかなり以前から、何回もこの中間の記憶をたぐったことがあるのだが無駄だったのである。これはもう、夢遊病のごとくであったと考えるほかない。

わが家は暗く、暑い日の夕方だというのにひんやりと冷たかった。いや、冷たいと感じた。性能の悪いラジオからは陸軍の将軍が自決したというようなニュースが流れていた。家族は多かったが声もなかった。家全体が沈黙のしじまに包まれていた。その夜、私は寝呆けて家中を狂ったようにひれ伏しては歩き、歩いてはひれ伏し、天皇陛下に申し訳ないと叫んでいた、という。

昨年の暮れ、堀陽さんから電話で誘われて、この本の準備会のような集まりに出席した。席上、二年上の小山誠三さんたちが創られた『遠い飛行機雲』という冊子を拝見した。飛行機雲、成層圏を飛ぶB29が描き出した空のシユプール。それは否応なく戦争と飛行機を見上げる自分を結びつける鮮烈な空模様であった。その限りでは二年上の先輩たちとわれわれを区別するものはない。だが雲を眺める目の奥にある意識ということになれば、その位相にずれがあったのではないか。冊子をめくりながら、何故かあのSさんの表情に見たかすかな笑みが思い起こされたのであった。

小学校を高萩村という純農村で過ごした私と川越の町なかで育った都会っ子の友人たちと一緒にすることはできないかもしれない。しかし、それにしても私たち昭和七年前後の生まれは、あの八月十五日を極めて特殊な年齢状況で迎えたのではなかったか。社会を見る目、見ようとす意識、これらはいささか身に備えながらも、社会現象に対し批判的な目、意識を持つには幼なすぎる、そういった年齢ではなかったのか。二、三歳上であれば、Sさん

の笑みから予想される批判の精神、あるいは社会現象を相対化する力量を持ち得たであろうし、逆に二、三歳下であったならば、私たちのものであった社会を見る目、見ようとする意識すら持てなかったであろう。いってみれば、私たちは戦時教育の中で純粹培養されたモルモットのな軍国少年ではなかったのか。この「地の利」を生かし、この少年たちが迎えた敗戦、そして過ぎた学窓の一こまでも描ければ、『遠い飛行機雲』とはまた別味の本がができるのではなからうか、そんな趣旨の発言をしたのであった。

敗戦から三年を経過した昭和二十三年、川越中学校は開校五十年と新制高等学校への昇格という二重の節目を迎えた。このとき『創立五十年記念誌』が刊行されている。私はこの雑誌に「高校昇格に当りて」という文章を書いている。学校で出す雑誌の文章であるから、飾ったところもあろうし、いい子ぶっているところもあろう。しかしまったく思ってもいないことを書くことはない。私は高等学校一年の自分をのぞき込むような気持ちでこの文章を読んでみた。そこには軍国少年の変身した姿と迷いの姿があった。

「戦時中は其の目的はいざ知らず我々初雁健児は工場に農村にひたすらなる若き情熱を傾けて来たのである。それがあの八月十五日に終戦の大詔は下り五年間に亘る大戦も結末を告げ、軍国主義より民主主義へと我が国は未曾有の大転換が為された。それより三年、(中略)此の間に於ける教育界の変化は大なるものが有る。即ち教育の民主主義は六か年の義務教育を九年へと延長し、六三制の上に新制高校が作られて我々は初めての高校生となったのである。蓋し我々高校生の使命は新学制に則り民主的なる学問を身につけ、新日本の次の時代の指導者になるに存するのであり、ここに昇格に対する意義が有るのである。……」

何とも面映ゆいばかりの変身である。しかし迷いのあったことも事実である。同じ文章で私はこんなふうにも書

いている。

「我々が高校昇格を祝う時、同時に自己の心よりある物を要求されるのを感じる。以前は我々は目的はいざ知らず歴史を誇り自尊心を持ち進んで来た。総て進歩は自尊心と之に伴う信念に依り為されることは言うまでもなく、自己を卑下する処に進歩は有り得ない。しかし現在の日本は自尊心より卑下心の方が多くなった傾向が見られ、之が学生に於いても言える事実になって来た」

そこには依り処を失った者の姿がある。口では民主主義をいつているが、根本において信ずるものを失い、捜しあぐね、精神的に飢えていたのである。川越線で貨車に鮪詰めになり、これでも人間かと思つたあの頃、批判の力量を持ち得なかつたかつてのモルモットの軍国少年の心が虚ろだったのは当然であつたかもしれない。

もつとも飢えは精神だけではなかつた。実際のところいつも空腹だったのは当然であつたかもしれない。野球のグループがあつて、グレート・ハングリーとかグリーン・ピースとか名前をつけていた。誰かが「若き飢えてるの悩み、わが青春に食い物なし」などいつて皆の喝采を博したこともあつた。学校からの帰路、壺焼き芋を売る店があつた。時には歩きながら食べたこともあるが、買い求める金子のないこともあつた。「川越の壺焼きはほのかに香りて、空き腹の胃は軽ろくそぞろに鳴るなり、食べたさに君呼べど懐さびしく、芋屋なき道を選びて帰り行く」。「山小屋の灯」のメロディーで唄うのである。

精神的にも肉体的にも飢え、だからこそ身体いっばい何かを求めていたのだ。それが私たちのあの日あの頃であつた。いま思い起こし限りなくとおしくも懐かしいのはこのためだと思つている。

境遇が激変した昭和二十年

森田重敏

毎年三月になると、自分の境遇が激変した日の事を思い出します。

下町に生れ、運送業、ハイヤー業の恵まれた家庭に育ち、当時珍しい幼稚園に入園し、毎日母又は常時一、二人いたお手伝いさんの送り迎えを受け、小学校四年生の時から家庭教師が付き、都内のナンバーの付く中学校を目指し、小学校で初めての七中入学者の一人かと、周囲からも期待されていた境遇でしたが、戦争による学童の集団疎開と、卒業のための帰京直後の大空襲が、私の境遇を変えたのでした。

昭和二十年三月九日夜、アメリカのB 29爆撃機がマリアナ諸島のサイパン、グアム島より編隊を組んで東京の下町一帯を空襲し、一夜にして百十六万人を罹災させ八万人の命を奪いました。これは広島、長崎の原爆被害にも匹敵するものです。

夜十時頃、一度警戒警報が発令され、各戸一斉に電灯を消した真暗闇の中で、木製の真空管ラジオの情報を聞いていましたが、三十分位で警戒警報は解除されましたので、今夜はもう空襲はないものと思って、深い眠りに就いた十二時頃、空襲警報のケタタマしいサイレンの音の中を起こされました。ラジオはB 29爆撃機が既に東京上空に來ている事を告げていました。

春の突風が強く吹いている夜でしたが、父の立っている家の前の、広い道路に出て空を見上げると、既にB29爆撃機は幾つもの編隊を組み、いつもよりかなり低空を飛んでいました。民家も、工場も、あたり一帯真暗闇の中、時々日本軍の探照灯が照らす光の帯の中を、ドス黒い重そうな機体は何機も何機も北西へ向って行き、鐘ヶ淵・南千住あたりの工場群に大型の焼夷弾を投下していました。落ちると共に、赤い火柱が上がり火の粉が舞い上がり、火事が発生し、その附近が明るくなり、なお黒い焼夷弾を雨のように附近に落としているのがよく見えました。

家族揃って逃げる事にしました。十五歳の姉は八歳と五歳の妹を連れ、手には預金通帳など大切な証書が入っているトランクを持って、江戸川区寄りの、中川の土手の方へ先に行きました（別にそこが安全という訳ではありませんが）。

父母と私は、庭の片隅に掘ったコンクリート製一坪位の防空壕へ衣類・蒲団・食糧を夢中で押し込み、最後に行き、李・衣料・僅かの食糧をリヤカーに積んで中川の土手に向かいました。相変らず強い風が吹いていました。強制疎開をさせて作った、帯状の広場に掘ってある消火用池（五、六十坪位）の近くに来た時には、B29爆撃機の別の編隊は、下町の民家の上空に別の種類の油脂焼夷弾・黄燐焼夷弾・エレクトロン焼夷弾を落していました。一塊りの火の束がスーッと落ちると、空中で五十個位に飛び散り、黄色・青色・ナトリウム色の火花の尾を引いて強風に流されて落ちて行きます。あちらこちらで火災が発生し、火炎は、どんどん木造の家を呑み込んで風下へと拡がって行き、火の粉は流れるように風下へ飛んで行きました。

姉や妹の行った方向へ逃げようと、叫び哀願する母に、大正十二年の関東大震災を同じ下町で経験した父は、「こんな時は水辺の傍にいて、最悪の場合水の中に浸っているのが一番安全だ」と言っていました。

「夏でもあるまいし、こんな寒い時にこんな汚い池には絶対に入りません」と母は言う。

「燃える物が皆燃えてしまうと、火は自然に消えるものだ」と父。

二、三十分も経ったでしょうが、最初、北西約十キロメートル位離れた所に発生した火事は、すぐ一、二キロ位手前に迫ってきました。北からも西からも火は迫って火の粉が雨霰のように降っていました。細長い広場の脇の道を沢山の人が両手に荷物を持ち、背中に風呂敷包みや荷物を背負って、風下へ流れるように小走りに行きます。赤ん坊を背負った女性も、両手に荷物を下げて流されて行きます。気が付いたら、私も母も頭に防空頭巾を被って、汚い防火用水池に胸まで浸っていました。火の粉は逃げる人の背中にも、荷物にも、ネンネコにも付き、燃やしていました。皆背中の燃えているのも気づかず、赤ん坊の火傷にも気づかず、カチカチ山の狸のように必死で風下へ走って行きます。真赤に焼けたトタン板や、燃えている板が強風に煽られて、池の周りに飛んできます。池に落ちるとジュツといって水蒸気が立ちます。父がバケツで汚い水を掬って、防空頭巾の頭から何度もかけてくれました。その頃は首まで水に浸っていました。深みに嵌らないように、母が私の片手を常に握っていてくれました。池の近くに置いてある丸太の電柱に、火の粉が付いてどんどん燃えています。私の通った木造二階建ての学校が燃える頃が最盛期で、池の中から時々首を出してその様子を見ていました。映画で見る火事のシーンのように羽目板が燃え、屋根が燃え落ち、柱が最後まで真赤に火を噴いていました。

地獄のような何時間が過ぎました。燃える物が少なくなつて、火が下火になりましたが、風下の方は今が盛りとまだまだ燃えています。段々空が白んで、明け方の近い事を思わせます。池の水が冷たいと思うようになりました。ああ生きてるんだとしみじみと思いました。

池から出てあたりを見ると、丸太や木片の燃えかすに手をかざして暖を取る、父母の顔は真黒、目は火にやられて真赤に血走っています。母の髪は水と泥と火炎で形容しがたい状態、洋服は濡れ、寒さと過ぎた恐怖でガタガタ震えが止まらない。この池に焦げたまま浮いている人、池にうつ伏したまま死んでいる人がいました。荷物を持って風下へ逃げるつもりの人、道路に真黒焦げて死んでいました。子供を背負ったまま親子が死んでいました。私も防空頭巾とバケツがなかったら、あの池で死んだ筈でした。

自分の家の焼け跡に戻ると、大きな金庫と中がまだくすぶっているコンクリートの防空壕だけが残って、土台の木が所々で燃え、水道管の裂け目からは水が漏れていました。

姉と妹を探しに行った父が「何処に行ったか皆目分らない」と言って一人で戻って来ました。

母はその間に、焼け跡の瓦礫の中から使えそうな物、食べられそうな物を集めていましたが、強い火を浴びて殆ど硬貨、鉄製の鍋釜、漬物の一部位で、お腹の足しになる物は残っていませんでした。

高架の総武線も、十数キロ離れている山手線の御徒町駅も、今迄二階建ての家が密集して見えなかったのに、この時だけははっきり見えました。無残に焼けた浅草の、松屋デパートの八階建ての建物がすぐ近くに見えました。

国電亀戸駅の前に大きな穴を掘って、真黒焦げの死体を幾つも兵隊が投げ入れていましたが、死体が多くて、何日も片付かなかったようでした。

三日後に山手線が復旧して運行しているのが見えたので、無事だった姉妹達と一緒に上野駅迄リヤカーに載せていた荷物を手に持って、身すばらしい乞食の格好で、母の実家の越生町に夕方着きました。埼玉県入間郡の田舎の

生活と川越との縁がここから始まりました。

伯父の尽力で「川越中学に受験出来る事になった」と知らされたが、戦火の恐ろしさで何かウワの空で聞いていたようでした。下町の小学校で一、二位の私だったが頭の中はカラッポ、心はウツロになっていた様でした。

受験日は忘れましたが、越生に行つて数日後だと思えますが、朝五時半に伯父の家を出て学校に着くのは八時頃、学校には既に頭の良さそうな、綺麗な服装をした受験生がいっぱいいました。筆記試験については何も覚えていませんが、面接試験だけは覚えています。先生の一人（那須さん）、

問「君の一番尊敬できる人は誰ですか？」

問「尊敬する理由は何故ですか？」

問「B29爆撃機の搭乗人員は何人ですか？」

問「その飛行機を十一機撃ち落したら、何人のアメリカ兵を殺した事になりますか？」

今でも覚えているのはこれだけ。川中で私より二年上級生の従兄弟が合格発表を見に行つてくれた夜、伯父より合格と聞かされました。

今なら東武東上線で坂戸乗り換えて一時間半もあれば通える中学校が、戦争中の事なので、八高線の越生から高麗川乗り換えて、川越線通学のため、毎日暗いうちに家を出て、暗くなって家に着きました。通学の往復になんと数時間もかかる遠い所に、川越中学校がありました。家と衣料を焼かれ、教科書・ノートを買うお金もない私には、境遇の点でも川越中学校は遠い所がありました。

川中時代の思い出

中内洋一

高校から入学された方はまったく御存知がないと存じますので、最初に自己紹介させていただきます。昭和二十一年四月下旬に一年三組に転入学し、昭和二十二年九月に都立一中に転校しました者です。従って川中での生活は二年半という短い期間でありましたが、この間の時代の変動の強さは、計りしれないものがあり、川中時代は我が人生でも、「最も忘れ難い年」の一つにあたります。

思い起こせば、その波瀾の幕開けは、奇しくも終戦の丁度一年前の昭和十九年八月十五日でありました。この日に学童集団疎開として、東京から宮城県の鳴子温泉に追いやられ、大雪と食糧不足になやまされた半年を過ごしました。昭和二十年三月九日に、国民学校卒業をむかえ、漸く、なつかしい東京に帰ることになりました。クラスメイト全員が希望に胸をふくらませて、東京行ききの汽車に乗りましたが、汽車は途中の平駅たいらでストップしました。その時、東京は三月十日の大空襲の真っ只中で、空は真赤に焼けていました。翌日、汽車は北千住でストップ、そこから小石川の学校まで、煙のくすぶる焼け野原をテクテクと歩かされ、漸くの思いで帰宅することができました。折角、東京に帰って来ても、毎日空襲警報の連続で、東北の山の中で暮してきた学童には、東京の空襲は荷が重すぎるといふことで、二週間後には知人の疎開している埼玉県入間郡大家村字欠ウツの上えへと再び疎開し、埼玉県人としての第二の人生が始まったわけです。今でこそ欠の上も坂戸市に入っていますが、東上線の坂戸駅から中学一年生

の足では一時間ぐらいはかかる大家村でも最も辺鄙な部落で、畠の奥は比企郡川角村でした。また住居も農家の納屋の一部に増築した、荒壁のむき出ししている六帖と三帖の二部屋で、ここで家族六人の耐乏生活がはじまりました。

このように三月中に埼玉県民となったのですが、転校の手續に非常に時間がかかり、漸く川中に入學できたのは四月下旬だったと思います。この一か月間は何もする事がなく、毎日子供向きの自転車を乗り廻し、埼玉の大自然を満喫していました。川中に入って最初に驚いたのは、東京と埼玉の間の教育格差でありました。当時、東京では空襲下の混乱した時期であっても、小学生の多くは中学へ進学するのが当然という感じでありました。しかし東上線で一時間位しか離れていない川越では、川越市以外の村の小学校では、中学校に進学できるのは、頭腦明晰しかも経済的にも恵まれた数人のエリートだけでした。大家村でも、同級生は中島君一人だったと記憶しています。現代では、「何が何でも大学を出ないと」という風潮が強いようですが、わずか五十年前には東京近県でも、多くの小学生は小学校、或いは高等小学校卒業のあとは家業の手伝いという厳しい現実に直面し、非常に驚いたものでした。その後の八月十五日の終戦の日を中心とした一年間は、本当に忘れ得ない一年でした。敗戦の詔勅を聞いた時には、ラジオの音声も悪く、充分にその内容を理解することはできませんでしたが、「くやしい」というより「漸く終わった」という安堵感の方が強かったと思います。その後の社会の大きな変動は、我々、中学生にとつては、またとない活きた教訓であったと思います。今まで大切な物として教えられていた教科書は、或る日突然に墨で真黒に塗りつぶされ、鬼畜米英が一夜にして平和の天使になり、こわかった陸軍さんも日毎に肩を落して行き、尊敬していた中学の先生方も何となく元気がなくなっていく姿を目の当たりに見聞するということは、神国日本は絶対に負けないと徹底的に教育されてきた少国民にとつては、思いもかけない大転換でありました。

これを機会に、人間という動物は、表面的にはいくら立派そうに振舞っていても、「個人の堅固な意志なるものは、周囲環境の圧力により容易に左右されることが多い」という人生教訓を得ることができました。この教訓は現在でも、田中さんのロッキード事件、今回の金丸問題でも見事に証明されていると思います。この教訓は、或る点では人間不信の第一歩となるやや危険な教訓かとも思えますが、今まで六十年間の人生を無難に過ごして来られたのは、この教訓と、川中時代片道一時間以上の道を、テクテクと歩かされた体力の賜たまものであると考えており、川中時代は、短くかつ厳しい時代ではありましたが、一生脳裏から消えない時代になっています。

昭和二十年の冬から夏

根本 暎 男

敗戦の八月十五日、私は十三歳でいまの中学一年生とおない年でした。いまにして思えば、日本の大転換期に遭遇していたわけです。しかし、毎日起こる「大変」なことを「大変」とも感ぜずに暮らしていました。以下、この年昭和二十（一九四五）年の冬から夏にかけて、私の身のまわりに起こったあれこれを書きつけます。

兄の炭坑行き

七草粥がゆを食べたあくる日、十六歳の兄は母が夜なべをして作った綿入り半纏と綿入りズボンを持って、北海道夕張炭坑に発っていきました。

青年学校に籍をおいた兄たちは、前年の初冬に、志願兵となり戦地に行くか、北海道の炭坑で石炭を掘るか、ど

ちらかを選ぶよう言い渡されたのです。兄は志願兵になりました。私以下四人の子供が床についたあと、父母と兄で、灯火管制のため暗い居間の囲炉裏をかこんで、ひそひそ話しこんでいる姿がありました。その結果が炭坑行きてした。

兄の発ったあと、北海道は寒く遠い所としか知らない母が、兄のために毎日陰膳を据える姿がつづきました。隣家の倉次さんは志願兵となり、いまだに帰ってきません。

三月九日の夜

私はいつもの樫の木の枝に腰を下ろし、「東の空の美しさ」に見とれていました。空襲警報のサイレンが鳴ると、暴風防げにずっと昔からつくつてある高さ二十メートルほどの生け垣の樫の木に登ることにしていたのです。

超低空で急に現われたP51に機銃掃射され、命からがら芋穴に飛び込んで助かったことがあるのです。それを知った父に「芋穴は悪いガスがあつて危い」と注意されました。防空壕に逃げるのが学校で指導された方法なのですが、農村のこと、いつも身近に防空壕があるわけではありません。そこで子供たちが考えたのが、白いシャツなどは脱ぎすて、身近にある樫の木などの常緑樹に登り、葉の間に身を隠す方法だったのです。自宅にいるとき、いつも登る木が決まってしまったので、三月九日夜も「いつもの樫の木」に登って東の空を見ていたのです。

母が「今夜は大きい。ほら、私の影がこんなにさしています。震災のときと同じですわねえ。方角はあのときと同じですから本所や深川ですかねえ」と父に語りかけているのが聞こえてきました。木の上の私は「すげえな」「すげえな」「花火のようだ」と、火と火の「饗宴」にわれを忘れて見とれていました。十年後の昭和三十（一九五五）年に墨田区の業平小学校に勤務するようになり、あの「饗宴」の下で十万人の人が殺されていたのを知り愕然としま

した。

グライダー訓練

手前に引いていた操縦桿をあわててぐっと前に倒した。グライダーは頭から荒川に突っ込んでしまった。私が初めてグライダーに乗ったときのことです。四月になり国民学校高等科一年（いまの中学一年）に進んですぐに、県内の各学校から一人ずつ選ばれてグライダーの操縦訓練の合宿にはいったときのことです。学校代表に選ばれたとき、私は「これで歩兵ではなく飛行機乗りになれる、よかった」と思いました。自宅から歩いて三十分ほどのところに軍の飛行場があったこともあって、「いつかは戦闘機に乗り、鬼畜米英をやっつけるのだ」と固く信じていました。

しかし、代表に選ばれてうれしかったのは、洋服とズック靴を支給されたことです。洋服といっても、桑の皮の織維でつくったものです。靴が履けたこともうれしくて思わず走りだしたものです。温かい季節は裸足、冬は自分で作った下駄かわら草履しかの暮らしにとつて、ズック靴を履き、洋服を着られる「身分」は鼻の高いものでした。

塹壕兵舎

麦が色づき初夏がやってきました。毎日毎日、グラマン、P51が編隊でやってきては無差別に機銃掃射と25キロ爆弾を落としていきます。もうすでに国民学校は兵舎になっており、授業はまったくなくなっていました。ある日、その兵舎（校舎）にも爆弾が落とされ、三分の一ほどふきとんでしまいました。

「本土決戦」が近づきました。朝、登校すると軍のトラックが待っています。高等科の男子は点呼のあとトラックの荷台に、家から持ってきた野鍬のくわを持って乗り込みます。自動車などどこにもあるわけではないので、気分がうきうきしてきます。担任の先生の合図で軍歌を合唱しながら目的の松林に向かいます。

松林では、兵隊さんたちがもう塹壕を掘ったり、塹壕の上に屋根を支える木組みをしたり、木組みのまた上にタール紙を敷いたりしています。「兵隊さん」というと、そらいの軍服を着たきびきびした格好のいいものと頭に描いていたのですが、私たちの村の国民学校に来た兵隊さんは「なんだか近所のおじさんみたいだな」と思ったりしました。

トラックから降りると、いっせいに畑の畦道の道芝を野鍬で切り取る作業にかかります。分隊ごとに切り取った道芝を塹壕兵舎までもついで運びます。そこに兵舎があることを敵軍にみつけれないために、その野芝を屋根に植えるのです。「国賊」、この作業で初めて経験した叱られ方です。野芝の切取りはとても疲れるので汗をふきながらひと休みしていると、鞭を持った軍人さんが急に現われ、怒鳴られたのです。「国賊」という言葉は知っていましたが、もつともつと国のためにならない大悪人のことだと思っていましたので、私たちがいざ「国賊」と怒鳴られてみても、ピンときませんでした。

不思議なことに、まったく不思議としか思えなかったのですが、この作業を終えて校庭にトラックで夕方帰ると、お金をくれるのです。五銭だったか五円だったか、記憶がさだかではありません。たぶん五銭だったのでしょう。それにしても、私にとって初めて働いて得たお金でした。

八月十五日

夏休みのただひとつの宿題だった「軍人勅諭」の暗記・暗唱も、毎日十行ずつ憶えていったおかげでできるようになりました。朝、正午に天皇陛下の玉音放送があるという話を耳にしながらも、ガキ大将に引きつけられた部落の子供たちは川遊びに出かけました。夕方、遊びつかれて部落に帰ると、いやにひっそりしています。辻では大人

たちがひそひそ話しています。戦争に負けたらしいのです。

翌十六日全校登校日だったので、校庭に集合すると、校長先生から戦争が終った話があり、先生方がみんな泣いていました。私にはなぜ泣くのかよくわかりませんでした。それよりも、せつかく暗記した軍人勅諭を先生に聞いてもらえないことが残念でした。

空腹・空襲の青春

丸田（岩澤）謙三

僕は大昔、川越の仙波が一面の海であったという仙芳仙人伝説の地である小仙波に、岩澤家四人兄弟の末っ子として生れた。岩澤と名乗る人はこの仙波に非常に多い。謙三という僕の名の由来は、幕末開国のころ、その岩澤家と縁者であった郷土の偉人、高林謙三の名をもらったものだ。謙三翁は丁度豊田佐吉翁のような当時の発明家で日本専売特許、第二号のレコード保持者。特に製茶機械開発への寄与が高かった人といわれ、旧友塩入亮善大僧正おわず喜多院には翁の大きな顕彰石碑、また市立博物館にはその偉業を称える展示物も多い。

長兄は家業を継ぐので川商へ、下の三人は相ついで川中へと教育熱心な両親のおかげで僕も名門川中の門をくぐることになった。

川中への登校は我が家の裏の茶畑の中を横切って、当時既に廃線になっていた川越・大宮間の俗称チンチン電車の草ぼうぼうの線路を朝露にぬれての出発で始まる。ここで近所の悪童仲間松岡が待っていて一緒に行ったものだ。

この線路は僕の自家の頭領、岩澤虎吉が発起人となってつくったもので、明治三十九年から昭和十五年まで市電のようなのんきな電車が、大宮まで往復していたのだった。

更に琵琶橋を渡り、自家の所有であった浮島神社を抜け、川越高女、通称お泉のナンバーワン才媛の山本早百合ちゃん（小学校同級）の家を横目に、右に葦の茂った川越七不思議の筆頭の七ツ釜、底無し沼を見ながら、田圃道を通り川中へと登校したものである。

当時の服装はというと川中の徽章を戴く白線入りの戦闘帽に、まちまちの改造軍服、足にはゲートル、そして軍靴か地下足袋。鞆は陸軍背囊はいぶさといういでたち。途中で先生や上級生に会うと挙手の敬礼、というきまりであった。

いまこの辺は立体交差の道路網、そして住宅街になってしまい、当時ののどかな風景は全くどこかに行ってしまった。

学校はというと戦争下でも毎日毎日軍事教練、防空壕掘りに明け暮れ、いつも腹ペコだった印象しか残っていない。

家に帰ればお八ツは「沖繩種川越いも」が待っていた。本来川越芋は紅朱べにあかといって皮は赤く中身は黄金色でホクホク。甘味があつて栗よりうまい十三里芋と、天下に名が通っていたのだが増産のため、グロテスクな甘味のない大味な沖繩種に転作させられてしまって、配給芋といえは全てこれなので僕等はこれを食べるしか仕方がなかった。そうなるとう当の子供は発明の天才だから「新高ドロップニイタカ」という工夫をしてこのマズい芋を美味しくする方法を考えたものだ。——それは坂戸の陸軍飛行場までわざわざ行って、軍用機の風防ガラスの破片を拾って来て、それを着衣でこすると不思議なことに瞬間的にドロップの甘い香りが出るのである。その匂いを嗅ぎながら味の全くな

い沖繩芋をのみ下したのだった。

南瓜かぼちゃも貴重な主食だった。現在はベータ・カロチンが体によいとかパンプキンとか洒落たフーズの地位を獲得しているが、あれも毎日食べていると嫌になってしまう。或る日近所にお住いの川中の西洋史の名物教諭、佐々木タロー先生が僕の父の所に遊びに来て世間話をしているのを、聞くともなしに聞いていると「こう毎日毎日カボチャばかり食っているせいだ、出るモノも色鮮やか、汗も色がついてシャツもこの通り。体もこの様に黄色くなって参りました。ワツハツハ……」というくだりがあった。そんな気でタロー先生の授業を聞いていると確かに先生の顔は黄色い。それからは僕は南瓜を食べるのをなるべく控えるようにしたのだった。

空襲もひんばんになって東京から叔父が僕の家の土蔵の前の蔵前納屋に疎開して来た。この叔父は器用な人でその土蔵でドブロクを造った。「謙三、今日はウイスキーを造ろう、松の葉っぱを採ってこい」——僕が採つてくると、何処で手に入れたか消毒用のアルコールと氷砂糖を自慢そうに取り出し瓶の中で調合し、松の葉で香りをつけ即席ウイスキーだ。

僕は夜中に時々これをくすねて、密かに一人酔っぱらった思い出がある。

川中に入学した頃から急に戦況が不利となり、空襲もひんばんになり、学徒勤労動員であちこちの工場で働かされた。一年生は比較的危険の少ない三久保町の石川蚕糸に行かされた。昼食には銀シャリと大豆の混ぜご飯が出て大変嬉しかったものである。また本川越駅の側の日清製粉でも働いたが、主にトウモロコシ粉の荷運びが仕事だった。三時の休みに、その粉で焼いたパンが出るのだが、毎日の荷役でトウモロコシのあの何とも言えない異様な匂いが鼻についてしまい、余りうまくなかった。食べ物というものは一度鼻につくと駄目なものである。

その日清製粉で遂に敵機による超低空機銃掃射を初体験した。

作業中空襲警報。防空壕に退避直後P51が沢山飛来して工場中を何回も機銃掃射した。敵機が去った後の弾痕を見ると製粉装置の鉄板や十ミリも厚味のあるモーターベルトが大きな穴で撃ち抜かれており、その威力に大いに驚くと共に戦火が身近に迫ったという実感がした。

川越は大規模な爆撃は免れたが小型機の空襲はよくあつて僕等はそのうち慣れてしまった。ところがそのうちにじかに狙われるという体験もする破目となった。

或る日、前にも書いたお定まりの通学コースを松岡と下校中 田圃道の真ん中で空襲警報が鳴り、アツという間に雲間から銀色のP51が二機現れ、二人めがけて超低空で迫って来てダダダッと機銃掃射をやられた。弾はそんなに近くには命中しなかったが、迫って来る飛行機の爆音と弾の音というのは、すごい迫力のあるもので、とても映画やテレビの様な甘つちよろいものではない。いわゆる腹の底までこたえるすごい音だ。あの時の飛行士が下手クソだったからよかつたようなものの、もう少しで危うく一命を失くすところだった。二人とも畦道から青田の中に飛び込み、側の雑木林の中に逃げ込んで身を寄せ合つて伏せたが、戦火の中をくぐつた戦友のような気分になつてしまった。チビで、大柄の僕の半分位しかなかつた松岡の方が、こういう時は有利で僕より早く林に逃げ込み、「グラマンだ！ グラマンだ！ チキショー」と金切り声で叫ぶ。僕は太い声で「馬鹿！ あれはP51だ。かつお節の様な格好をしているじゃないか！」と敵前で口喧嘩をしたのを覚えている。遠くでの機銃掃射は慣れてしまうとそう恐ろしいものではないが、こうやって相対で狙われてみると、もう一度引返して来るのではないかとの恐怖が湧き起るものだ。しばらくの間、膝がガクガクして動けなかつた。腰から下は水田にはまり軍靴と巻脚絆は泥だ

らけになってしまった。この時ほど戦争の怖さを実感したことはなかった。

敵機が去ってしまつたあと、火薬の匂いのブンブンする薬莖が散乱していて二人でそれを拾い集めた。まるで宝物でも探し出したようなワクワクした気持ちで持ち帰り、学校に持って行って見せびらかしたり、それを束ねて箸立てや鉛筆立てに使用したりしたものだ。

爆撃は僕の知る限り一回、被弾した敵機が誘爆を恐れて苦しまぎれに捨てた爆弾が、松江町の米屋の岩澤と歯医者の稲生の家の中間あたりで破裂した時の音を覚えている。この時は大した被害はなかったと聞いている。

B 29は真青な夏空を飛行機雲をなびかせ、キラキラ光りながら大編隊を組んで川越の南をよく飛んだ。体当りか、高射砲が命中したか、新河岸の方に一機を撃ち落したことがあり、叔父と二人で自転車で赤間川沿いに駆けつけたことがある。行くに従つて見物帰りの人とすれ違う。「アメリカ兵の死体がころがっている」「裸同様だった」「女もいたぞ」(これは多分少年兵を間違つたのだろう)「化粧道具、釣具、浮袋のボートが散乱している」等々……。最後に戻つて来た人がこう言った。「憲兵が落下傘で死体を覆い、機体は縄張りをしてしまいもう近づけない、云々」叔父「じゃあ見に行つても仕方がない、謙三帰ろう」——これが僕のB 29撃墜目撃記である。

夜間空襲は、夜寝られず体にこたえた。それに電灯を全部消さねばならず、試験の前の日などは困った。三月十日の東京大空襲以来、東南の空を火炎で赤く染める日が多くなり、敗色は一段と濃厚となった。東京だけでなく地方都市も次々と焼かれた。川越の番はいつだろう。

戦死した庸一長兄(昭和十八年十月二十九日、北支・山東省で戦死)の墓に詣でて言った。「兄さん！ 神国は一体どうなるんだ。神風は吹かないのか。欲しがりません勝つまでは、と我慢してきた僕等だ。奇跡を起してくれ」ただ

祈る日々であった。

最後に見た空襲は八月十四日、熊谷市がやられた日だった。今度は北の方の空が真赤に焼けるのが僕の家からも見えた。「次は川越かな、我が家も川中も焼けてしまうのかな」などと思ったりした。

その翌日、天皇陛下のあの放送があり、バツタリと空襲はなくなった。夜、明りをつけてよいことになり、黒い傘をとった電球の光のまぶしさに改めて驚き、戦争が終ったことを実感した。

生れたのが昭和七年。この日は昭和二十年八月十五日、十二年間、戦争をしている世界しか知らない僕等だった。この日以来四十八年間、今度は戦争のない世界を生きたことになる。日本は僕等の力もいささか関わって今日の復興と繁栄を見た。

還暦を迎え、戦中の川中時代を回想し感慨無量のものがある。

初期青春時代と還暦の今と

畑 喜千松

初雁に三中の校章の白線帽、憧れの旧制県立川越中学校に入学できるのは、我々の時代には川越を中心としての町や村の小学校のエリート集団だった。

火の気の全くない寒い教室での受験

「約〇〇〇キロ先のサイパン島から時速××キロの速さで敵の飛行機が、日本にやってくるすると、今から何時間後で、君は、その時どうするか。サイパン島は、どの辺にあるか知ってるか」と、算数と時世の認識と少国民としての対応を口頭試問され、ときはき答えられた。那須教官だったと思う。続いて「君が一番、尊敬している歴史上の人物は誰」「ハイッ、楠木正成と東郷元帥です」と当時の受験予行練習通り満面満身に自信をもって答えたら、「君、一番とは、一人の事だよ」。一礼して受験室を出たとたん、お先まっ暗。もう駄目だと泣きべそを掻いたのが強く印象に残っている。

「合格!!」。新芽の強烈な匂いの楠の下の正門前で拳手敬礼をして、通用門しか通れなくとも昭和二十年の春、僅か十二歳の畑少年が、小軀に脚絆を巻き付けて、立派な軍人になって、お国の為に尽すんだ（誰も同じ気構え）と胸ふくらませて入学。

度重なる空襲の下、吉沢バカタライの体罰一辺倒の軍事教練に耐え、その合間に、修身を中心に軍事教育されたが熱が入っていた。やがて、形ばかりの夏休みもカワラセンベイを二枚のおやつで、日清製粉川越工場に動員された空爆は日増しに激しくなるばかり。P51の機銃掃射の実弾が身近で炸裂し恐くて電車の下に身を伏せ、動き出した電車の下敷きになって死んだ人の悲惨さに、子供心に敵憎しと感じた。通学する電車も時々動かず、坂戸や高麗川駅から越生まで、十余キロの薄暗くなる道を歩いて帰った事も数回。

暑い夏の陽光に、熱い原爆の閃光の一発

終戦!! 少国民には敗戦でなく一時休戦の意味で知らされ、敗戦を実感するには一か月位かかった。

戦後の物不足と社会不安、混乱の中で新たな望みに賭けて、昨日までを否定しながらも何か中間的な教育から順次、新時代の勉強を、そして遊んだりの初期青春時代を、むらさき匂う武蔵野の城址の古い校舎で過した。

成績順位は百二十三番（123）と並び数字で、いつも尻から数えた方が早かった。俺がいるから一番の〇〇君があるんだと屁理屈言って親父に雷を落されたのも今は懐かしい。越生町のエリートも所詮は井の中の蛙だった。

アダ名は小軀で行動的だったせいか、名前にひっかけてチヨロマツだった。

掛ゾウの数学の問題の解答に指名されて、居ねむりをしていたのかなア、

「ホラ、鳩（畑）が豆鉄砲、喰らってらア」

と叱られ笑われた。お蔭で小さな冒険は、三時限後のちよつとの休み時間にハヤベン喰って講堂の南の小さな丘の陽だまりで昼休み時間を知的な言葉遊びをしたもんだ。

そして二十一年の暮れ、買出し部隊で混雑する川越市駅で止まる間際の電車とホームの間に落ち、骨盤複雑骨折して赤心堂病院に入院。窓から女学生の通学するのを見るのが慰めだったが殆ど動けず、松葉杖から離れた翌年の二期期から原田先生のお蔭で留年することなく復学が認められて、社会研究会から郷土部と部活に熱中していた。部室は本館の二階の奥まった行在所のあった部屋で、何かとサボった奴は俺に保護されたのを身に憶えている事だろうよ。

昭和二十五年の夏休みに、所沢の遺跡発掘調査で、奈良時代の一住居跡に二つの炉跡が発見され、これは珍しいと新聞に載った記事と写真を今も記念として持っている。

遺跡からの土器破片を原型に復元したり登呂遺跡の模型を作ったり、江戸と川越のいろいろな関り合いの歴史を調査研究やら、山村の民俗資料の収集、コドナ（子供と大人の中間）の目から見た戦前戦後の社会変化の比較図表など、その成果を展示会に。それを口実にして新制川越一中の女生徒と恋愛映画を見に行ったが、誰かに告げ口されて職員室に呼ばれて叱られたと、スリッパを抱いて泣かれた。女の涙に弱い俺、あああのかわい子ちゃん、今どうしているかなア。

「スウさん 憶えているだろう」それから川越女子高校のカラタチの生垣の刺の間をくぐり抜けて校庭に入り、まぶしかったブルマー姿の女学生に白線帽を取り上げ喰っちゃって、泣いて謝って返して貰った三ツ編み髪の××子さんも、今はお婆ちゃんに決まっているなア。山岳部にも属して秩父縦走や雪の中の武甲山、笛吹川東沢登り、富士山など、人それぞれに思い出は尽きないだろうよ。

「おーい畑、肝心の勉強したのか？」

卒業当時の世相は三黒景気時代、秋田鉱専校の進学を希望したが、なにせ実力不足に経済的理由もあって断念し上京。時代の先端を行く洋紙卸売商社で四十二年間勤め上げた。

その間、旧友とは「むらさき会」を結成し、中村君を頭目にして夢は戦後の日本の進路をリードしかねない集団になるかもと場末で飲み語り校歌高唱しても、事實は小説より奇なり、何もなくバブルと消え、旧交を温めただけの小市民団体でよかった。

そして今は、還暦と共にリタイアして孫三人に囲まれて、週四日程近くの新職場で小遣い稼ぎと老化防止にと（と

はいえ決して職務は愚かにはしていないし働きながら早くも年金生活で、共通の価値観を持つ多くの友と心豊かな多くの趣味を持ち、健康第一にし、小さな社会奉仕の第二の人生を歩き始めた。

今年の夏は、サッカー愛好会の友と夫婦してミュンヘンからウィーンへ熟年者同士の国際親善サッカー試合を兼ねて十日程 旅立つ事になっていると知ったら友は驚くであろう。社交ダンスは十年近くのキャリア、水墨画と和紙はり絵は自学自習のためか上達せずも、チェスやビリヤードも手掛け、目黒歩こう会の幹事、目黒区政モニターやわが街の稲荷奉賛会など地域活動にも積極的に参加している。

ゴルフと賭け事や証券株に貯金はやめざるを得ないのが ちよつと寂しい。しかし小さな旅を重ね、タイプ式ワープロを使いこなして、その思い出やらを散文詩にし、ノートする趣味は楽しく捨てがたい。

過去を振り向かず、明日を信じ、今日の今が一番の幸せと感謝しつつ生きて行く。

川中入学の頃

松村 祐二

太平洋戦争も終末期を迎えた昭和十九年から二十年にかけて東京は焦土と化し日本国も敗戦の様相が色濃くなってきた。といっても子供ごろにはそんなこと知る由もない。必勝を信ずるのみだった。

軍需施設の見あたらない川越は相変わらずのんびりしていて、B29が飛来してもわが家の前の武州銀行(現川越商工会議所)の屋上にこっそり登り、飛行機雲を描きながら東京方面に飛行する銀翼(太陽に照らされ、瞬時きらめ

く、この輝きは忘れられない)を眺めていたものだ。

その頃、小学校(国民学校)には毎日のように疎開学童が転入学して来た。学校はすでに分列行進、突撃訓練といった軍事教練まがいの授業か、お百姓も顔負けの農作業に、学校の決戦畑(と称していた)で汗を流していた。体力に自信のあった田舎者の僕らでさえも、なれない訓練や作業でへばっていたわけだから、疎開で来た友人たちは、今にして思えば、かなりこたえたのではなかったかと思う。

放課後、疎開の友人たちの家に遊びに行くとは昼間の肉体労働授業の時のうつろな姿と打って変わり、話す言葉もいきいきとしていた。そして話題が豊富で、楽しかったが、内容が難しいところもあり、理解するのに骨折ることもままあった。しかし、なんとなく新鮮な雰囲気を感じられた。学友の本棚には見たこともない本や雑誌がおかれ、「子供の科学」(といったかな)というような読んだこともない雑誌が無造作に積まれ、まして話題がその内容にふれようものなら、全くお手上げ。そばで疎開の友人同士が気楽に喋る一言一言が、なにか高度な科学についての議論しているように思えて、感服したことが忘れられない。今様にいえばカルチャーショックということになるのか。

東京の小学生はこうして「科学するところ」(戦時中に毎日聞かされたキーワード)を養っている。それについても、毎日、決戦畑で「芋づくりするところ」に励む川越にいて、鬼畜米英を、果たして科学戦で破れるのか、と小さい胸を痛めたことを思い出す。

このことは、後に、川中に入學しても同様の経験を持った。他校から入學したが一年二組で同じクラスになるA君が「ベル」は電気でなぜ鳴るか、という命題をいとも楽しげに凶入りで解説してくれた。この時のコイルの凶柄が、今でも鮮明に思い出される。

大袈裟に言うことを許してもらえれば、メソポタミアから発したといわれる人類の文明が世界各地の独自の風俗、文化と交流し、融合して新しい文明を誕生させた経緯もかくやと思う。日本で言えば日中関係における遣隋使、遣唐使を待つまでもなく、僕らの仲間の故里であり、通学区でもある高麗の歴史の中にも、こんなシーンがあったに違いない。

この友人たちがもたらしてくれた数々の先端文化。これは驚きの連続であり、刺激であった。また、田舎の小中学生には呪われた戦争からの唯一の贈り物といってよいだろう。疎開の友人、そして川中の仲間が与えてくれた恵みは数しれない。改めて感謝したい。

○

わが家は昔から川越で生計を営む商家。小学校を卒えれば商業学校に行くかデッチ小僧に行つて商人見習いをするか、のどちらかであった。両親も特に教育に熱心というわけではないから、自ずと将来はぼんやりみえていた。二人の兄達も、商業学校だった。しかし戦争が激しくなり、商売も企業統合のあおりを受けてさっぱり振るわず、わが家も閉店の憂き目に合い、オヤジは組合（統合の結果、同業組合ができた）勤めになった。長兄は商業学校を卒えて川崎に見習いに行っていたが、現役で徴兵されることになり川越から出征（なつかしい言葉だが永遠に死語としたい）した。出征の当日、なんと着物をきて、泣きべそかいて家族と店の前で撮影した写真が残っている。勇ましかるべき出征兵士が着物とはと、いぶかる向きもあったと思うが、泣きべそどおり、生きて帰れず、遺骨で帰還した。別に反戦思想の持ち主でもなんでもない、ただ商売がやりたかった普通の青年だったのだが。この兄の「おまえは中学に行け」の一言で中学に決まったようなものだ。「商売はもうだめだ」と彼は感じとったからではな

かったかと思う。

もつとも、昭和二十年の入学時は、彼はすでに死んでこの世にはいかなかった。したがって遺言ということになってしまったわけだが、中学となるとそう簡単には入れないのは百も承知。困ったことになった。勉強しようにも、前述のように当時、小学校は農作業と教練まがいの毎日で受験勉強どころか普通の授業すら、ろくにしていないうり様。たまにある授業でも、たとえば音楽の時間には、空襲に備えての敵機の爆音を言い当てる訓練だったりして、まったく勉強に値しない内容だった。これさえも「銃後を守る少国民」にとっては「天皇陛下」の「御為」（おんためと言わないとおめだまを頂戴したに当然のことと信じきっていたわけだから、今思えば笑止千万の茶番だが、真剣そのものだった。あらためて全体主義の恐ろしさと教育の大切さを痛感せざるをえない。

授業をあまりしない状態だから、教科書は半分も済んでいないにもかかわらず担任教師はそれぞれの教科ごとに教科書を示しながら、「口頭試問で聞かれたら、ここまで終了したと言いなさい」と指示するていたらく。言うのは勝手だが迷惑するのは僕ら受験生ではないか。後は勝手に自習するとも思っていたのか。しかし、親より偉い学校の先生がそうおっしゃるなら試験官の前で嘘をつくしかないとあきらめた。だが、幸いなことに入試にはペーパーテストはなく、簡単な面接と校庭での短棒投げ（こんな競技があったんですね、その後公式の競技種目でお目にかからないところを見ると、これも軍事教練の一教科だったかも知れない）。こうなればしめたもの、体力にものをいわせてかなり遠投したように記憶している。かくなる入学試験でなかりせば今の友人たちにめぐり合えなかったわけだから運命の女神の微笑もまんざらではないわいと思う。

思い出二題

水野 洋策

神山三男さんのこと

私は、皆さんより一年早く、昭和十九年に川越中学校に入學した。そうして多分三学期からだだったと記憶するが、当村上福岡にあった陸軍の火工廠に動員され、毎日地雷や機関砲の弾作りが始まった。もっとも、授業料を取っている関係か、或いは学校の維持管理の為か、四クラスあったが一クラスずつ、一週間交替で授業を受けた。作業の時間が多かった。

廠長は年配の大佐で、軍曹を長とする憲兵隊も常駐していた。少しずつこぼれた火薬が、兵隊さん達が歩くと、鋏を打った軍靴の下で、パチパチと小さな火花を散らせた。

そんな或る日の出来事である。生徒が持参する弁当が何回か失くなった。当時は米を一日当り七勺程持参し、火工廠で調理し給食を受けていた訳だから、何故弁当を持って行った者がいたのか、よく分らないが、多分農家出身の生徒が給食では足りず、持って行ったものではあるまいか。同級生のNが、弁当を置いた近くに身を潜ませ、遂に犯人を発見しそのことを報告した。それは体の大きな、一つ星の陸軍の初年兵だった。

この事件について、私は関わった訳ではなく、事後に全てを知らされたのだが、Nもはしたない事をするという思いと、兵隊さんにもひどい奴がいるものだ、といった位の感じ方だったと思う。

当時川越中学からは、一年生の私達と二級上の三年生が、火工廠に動員されていた。当日か翌日か今は忘れたが、三年生の神山三男さんが私の所へ来られ、これこれの事は事実なのかと質された。私はその通りですと答え、有りの儘を説明した。すると神山さんは何とも言えない苦り切った顔をされ「もっと別の方法があった筈だ。オトリを使ってネズミを捕る様な真似は、川中生のする事ではない」又「兵隊だって腹が減っているんだよ。まして初年兵ではなお更だ。表沙汰にせず、勘弁してやれなかつたのか。おそらくその兵隊は、半殺しの制裁を受けてるだろう」とだいたい、こういった意味の事を言って、去って行かれた。

当時の状況の中で、しかも二歳しか違わぬ人の中に、こんな考え方の出来る人がいる事に、私は大変な驚きと敬意を感じた。川越中学・高校七年間で一番感銘を受けた一時^{ひととき}だった。

神山三男さんは所沢の人、家は魚屋さんと聞いた。いつも潤んだ様な目をして、下級生をいじめる様な事もせず、気風の良い上級生だった。その後 甲種子科練に志願し、復員後復学して、当時の水産講習所（現在の水産大学）に進まれた。その後お会いする機会もないまま、現在に至っているが、最近の名簿で、海上保安庁にお勤めだった事を知った。

旧制高校の受験

旧制中学に入学した者の大半は、何といっても旧制高校にあこがれ、これを目指していたのではあるまいか。私は昭和二十三年、旧制中学四年生の時、学制改革でこれが最後という年に、旧制高校受験の機会を得た。

旧制高校にも難易^があり、弘前高校、山形高校、高知高校などは易しい方だった。山形高校には、前年飯能の観音寺の息子服部さんが四年で合格、先輩として在学していた。そんな関係もあり、私は迷うことなく、山形高校を

受験する事に決めた。

昭和二十三年二月のことである。夜上野を発ち、朝早く降り立った山形の駅は、雪が無い曇天の厳しい寒さだったと記憶する。当時食糧は何もなく、宿屋へは米を持参の旅だったが、どうした訳か、干し柿だけは売店に沢山売っていたのが印象的だった。

一級上の五年生からは、吉野、五十嶺の二人、四年生からは、上西、川中、かわなかそれに私を含め合計五人が挑戦した。服部さんの友人である五年生の小山さんは、蔵王の樹氷と山寺を見るという事で、いわば観光で同行された。

試験は一日で終わったのか、二日かかったのか、今でははっきりしない。ただ各問題とも、それ程難解なものはない。試験は一日で終わったのか、二日かかったのか、今でははっきりしない。ただ各問題とも、それ程難解なものはない。試験は一日で終わったのか、二日かかったのか、今でははっきりしない。ただ各問題とも、それ程難解なものはない。試験は一日で終わったのか、二日かかったのか、今でははっきりしない。ただ各問題とも、それ程難解なものはない。

あとは発表を待つだけ。東北と違い、明るい晴天の続く関東で数日が過ぎた頃、大変な事が新聞に出た。山形高校の入試にからみ、大がかりな入試問題の漏洩があり、合否の判定は、内申書と進学適性検査の点数だけで、決めるというものだった。

その結果、五年生の吉野、五十嶺の両氏が合格し、四年生は全員不合格となった。

私は深い挫折感を味わった。愚かしくも将来の進路を断たれた様に感じた。そして間もなく重症の湿性肋膜炎を発病、高熱が続き、生死の境をさまよった。休学し、復学したのは新制高校の二年、佐藤徳四郎先生のクラスであった。

合格した吉野さんは、現在あさひ銀行の頭取として活躍中である。五十嶺さんはどうしておられるか名簿にはな

い。蔵王の樹氷見物に同行された小山さんは、現在の飯能市長である。観音寺の服部さんは、その後僧侶の大学に進まれ家を継いだ。が、齒の麻酔によるショックで、若くして急逝された。同級生上西正人君は、会社役員として活躍中という。もう一人の同級生川中三郎君は、すでに鬼籍に入っている。

そして私は、浮きも沈みもしない様な、平凡な人生を過している。今後変わる事は、まずないだろう。

昭和維新で処刑された或る青年将校が言ったという「人生は一局の碁に似たり」、まさに言い得て妙である。

俳句

去年九月、吹き荒れた台風十七号が、房総沖に去り、あとは快晴となった。白雲一つただよおうのを見て、

野分去る 白雲一つ 吹き残し

私の職場は、日高カントリーの近く、ホンダ出荷センターです。秋が深まるにつれて、男体山をはじめ、群馬、栃木の山々が、くつきり見える様になります。

両毛の 山々近く 秋深む

終戦雑感

柴崎 建治

還暦を迎えるに際し過去をふりかえる時、思い出の人として、私は四十数年前の暗い時代の一人の陸軍航空将校を思い出します。

私の家（現在和光市、当時は大和町）に、当時陸軍予科士官学校の区隊長、中村大尉が下宿しておりました。

その同期生の、紅顔の美丈夫真崎大尉の事です。大尉は終戦まで、帝都防衛を目的とした、陸軍航空隊戦闘機専用のすぐ近くの、成増飛行場（現在は光が丘団地）の中隊長で、よく中村大尉を訪ねて私の家に立ち寄ったものです。

手土産の、航空食の入った一箱が、当時小学校六年生の私にとって、何よりの楽しみでした。

私の父も同席して酒を出し、子供の私はもらったチョコレートをなめながら、二人の青年将校の男っぽい語らいを、座敷の隅で聞いたものです。

ある日、私は、真崎大尉に君の小学校はどこかねと聞かれました。私は、毎朝大尉さんが訓練の為飛び上がって来ると、最初にみえる学校ですよという、よしそれでは明日は飛んだら、すぐ翼を左右にふるからみていなさい、と言われ、早く明日がこないかなと子供ながらうれしさのあまり寝つきの悪かった事が思い出されます。

翌日、早朝小学校校庭で遊んでいると、爆音高く離陸した三機編隊の、先頭の胴体に白線を引いた隊長機が、左右に二度程翼を振って上昇して行ったのを見、欣喜雀躍したのを鮮明に思い出します。

後日、真崎大尉が我が家に来たとき、翼を振ってくれてありがとうと、礼を言った後、「大尉さん、私も手を振っていたの見えませんでしたか」と言ったら、見えたよと言ってくれたのが、余韻として今でも耳の中に残っております。

やがて、サイパン島が陥落し、東京もB29の空襲にさらされ、風雲急を告げる時代となりました。

昭和十九年晩秋、当時三十九歳であった私の父に、遅い「赤紙」が来ました。出征前に、一升下げてきた真崎大尉が真顔ではっきり、こう言ったのを覚えています。

「おやじさん、兵隊に行っても死んではいけない。このかわいい子供達のためにも、どんな事があっても我慢して帰って来なさい。日本は技術（戦闘機がB29に追いつけない）と石油不足で負けだ」

私ははつきり負けると、航空隊の隊長が言ったのを聞いておどろいた次第です。

終戦の年の四月、川越中学校に入学。学校へ行く私の後姿を見送る母の視線を感じながら、米國艦載機グラマンF6Fの空襲下の、いつも死との対面のある毎日を送ったものです。

やがて八月十五日、この日、私は川越中学校の校庭の一隅に、防空壕を掘るのにかり出され、昼時、校長先生と共に玉音放送を聞いた次第です。

子供ながら、敗戦というくやしさと、生きながらえたといううれしさが同居して、不思議な気持の動揺を感じた事を、今でもはつきり覚えております。

帰路、校門を出て、友人五、六人の集団と記憶しておりますが、これからの日本はどうなるのだ、といいながら不安を胸に抱きながら、帰って行った事を思い出します。

父は、昭和二十三年シベリアより帰国し、私は川越高等学校一年生として、上野駅に喜びの涙で迎えました。真崎大尉は、いまだに消息不明です。

あれから半世紀、日本の国際貢献として、遅ればせながらカンボジアへ自衛隊が行っておりますが、私は戦争の悲惨さを知る一人として、平和憲法は守るべきだと考えます。

戦前の翼賛政治、治安維持、国家総動員と、次々に公布された法令に、国民が狂ったのは半世紀前のことです。その結果、国民は世界で初めて、原爆の洗礼を受けることになりました。

「平和を守り、武力を行使しない」という日本国憲法は、国民の大きな犠牲によって生れたものです。現在の日本の進路はむずかしいと思いますが、国際貢献も国連行動の範囲内で、且つ、武力活動以外にての、限定されたものとしての行動に、とどめ置くべきものと思います。

戦争のむなしさ、平和のありがたさを、真崎大尉との子供時代のコミュニケーションを通じて、川越中学校時代の思い出を通じて、痛切に感じる今日この頃であります。

豆事典・機銃掃射

本来は機関銃を旋回銃座に据え、銃口を扇状に振りながら撃つことを言うのだろうが、私たちの場合は敵の戦闘機が機銃を発射しながら低空を通り過ぎて行くことだった。地面の凹みに身を伏せて、目の前の土がパッパッと土煙を上げ、それがこっちへ近付いて来て、もうダメかと思ったという経験をした人もいた。

今となりては懐かしき

清水良平

私が川中、川高に在学したのは中三から高三までの約四年間である。

旧満州からの引揚者で、終戦直前に父が応召し、母子家族だけで引き揚げて来たこと、引揚げ後父が外地で死亡したことがわかり、私は長男だったからその後の生活苦を家長としてまともに食らったこと、など私の川高時代は人生の最も暗い時期だった。

また、私が転入生であり、引揚げにからんで一歳齡を食っていたことなどの事情もからみ、精神的にも経済的にも、学友からは常に一步も二歩も離れた所に身を置かざるを得なかった。川高における私の存在感が薄いものであろうことは当然であろう。

親戚筋の眼からは、私が川高に通うことは、当時の境遇からすればとんでもないことであり、私はいわば針のむしろに坐る思いで学校に通っていたのだから。

だから、すったもんだの末、川中に入れることになった時は天にも昇る気持だった。

入学に際し帽子だけは無理して新調したが、服は払い下げの兵隊服で、履物は軍靴か下駄だ。

通学路は片道約十キロ、自転車で一時間弱である。自転車通学は傍^{はた}で見るほど楽ではない。雨の日は全身濡れ風になる。村から川越までの県道はほぼ南北に伸び、帰路は北風を真向かいから受ける。冬の秩父^{おろし}嵐をともに受けると自転車は前に進まない。指はあかぎれだらけになる。

戦時中製造の粗製中古自転車だから、チェーンは切れ易く、パンクの頻度も高い。チェーンがばちんと切れて踏んでいた足が急に空回りした時や、パンクしてがたがたという振動が尻に伝わってきた時の感じの何と情けなかったことか。

途中でパンクすると、沿道の自転車屋で修理してもらうのが普通のやり方だが、私は小遣いを持たないから家まで引きずって来て自分で直す。それでも母の実家に不義理をして買ってもらったものだから文句は言えない。

当時の道路は県道とはいえ、舗装なし外灯なしである。月の出ていない夜道は目を凝らしてもよく見えない程の真暗闇で、小さなライトだけが頼りだ。だが私の車にはライトがなかった。買えなかったのである。仕方がないので、走行中は指で鈴を鳴らしっぱなしにして、対向車がぶつかってこないようにする。

今と違って交通量は少なかったが、よく事故に遭わなかったものだ。課外授業などで夜遅くなると、道から逸^それて田圃との境の側溝に、再三^{さん}ずり落ちたものだ。

通学は文字通り、家と学校との間を往復するだけで、寄り道をしたことは殆どない。

四年間通学したが、私はついに川越市内の地理を覚えられなかった。友達付き合いも最小限度に押さえざるを得なかった。

毎日、学校から帰ると、母が勤める村役場まで妹を迎えに行く。母は幼い下の妹を連れて勤めに出っていたので

ある。

休日には荒川沿いの旧軍の飛行場を開墾して作った一反ほどのさつま芋畑や、家の裏の二畝ばかりの野菜畑で農作業をやる。便所の汲み取りは私と弟、それに上の妹の仕事である。

父の死を知らせる公報が届いたのは高一の年の春さきだった。県庁から村役場に父のことで何か通知があったらしいことは、その前日には気配でわかっていた。恐れていたことが現実になって来たのだ。

当日の夕刻、隣組の世話役が正式にその旨の伝達に来た。口の中で何やら言葉にならない低い声でぼそぼそ話すその人に向かって、居ずまいを正した母は声を励ませて応対していた。

二年以上生死不明の時日が経過していたこともあって、私自身は「やはり駄目だったか」という落胆の気持はあったものの、不思議と悲しさは感じなかった。今更悲しんでみてもどうにもならないし、それに悲しみなどという感情も枯れてしまった、捨て鉢な無力感があった。日々の生活がそのような感傷に浸っていられる状況ではなかったのである。

葬儀は父の実家で行われた。会葬者は伯父の顔が集めた村内の顔ぶれがすべてで、私達母子は脇役だった。父の勤め先だった満鉄関係者の引揚げ先なども皆目わからず、連絡のすべもなかった。譬えそれができたとしても、葬儀場も会葬者への対応もすべてあなたまかせである以上、何も言い出せる筋合いではなかった。

一方、学校の授業は張り合いがあった。周囲の友達とは境遇が違うのだと自分自身に言い聞かせながら必死に毎日を生きた、と憚ることなく言うことができる。

川高時代の恩師で終生忘れ得ないのは佐藤徳四郎先生である。通称「徳さん」、国語漢文の担任だったが、本来の

教科書は半年くらいで終り、残りは自分で編集して父兄がやっている印刷屋で印刷させた独自の漢文教科書を使った。それには古典や現代中国作家の中国文がぎっしり詰めこまれていた。そのほかに論語の素読をさせる。「学而第一」から始まる論語二十編を送り仮名や返り点なしの白文で訳読させるのである。もちろん試験にも必ず出題された。わたくしは先生のお陰でその当時、論語の初めから終りまで完全に素読することができた。

又、教科書の中で万葉集の歌が出ていると、強制的にはなかったが、岩波文庫の万葉集を購入させ、その歌を万葉仮名（つまり漢字ばかり）で表記したもので授業された。

先生は又、全校生徒に毎月十句の俳句を提出させた。先生は吉田冬葉主宰の「癩祭」同人であって、提出作品の中で目ばしい句をそこに投句してくれた。後には誌上に「川越高校生徒作品」（欄）という特設コーナーさえ設けられた。宿直室では毎月一回句会が開かれた。

これらは正規の授業として行われたのだが、先生はさらに、国文学部という部活動の指導に当たられ、放課後週一回、源氏物語を輪読された。参加者は約二十名で、私は「桐壺」の中途「野分だちてにはかに肌寒き頃より……」というところから参加し、卒業までの四年間に「若紫」の中途まで読んだ。もちろん原文で、である。

先生との個人的想い出としては次の様なことがあった。

ある時の模擬試験に、A群とB群の語群の中の各語を、それぞれ関連があるもの同士、線で結ぶ問題が出た。その中に顧炎武（中国清代の考証学者）と日知録（彼の著書）を結ぶというものがあつた。私は知らなかったが消去法でいくと、結果的に正解となつた。

徳四郎先生、このことを殊の外喜ばれ、数日後職員室に私を呼び出した。先生曰く、

「おい、清水、これが本物の日知録だ。よく拝んでおけ」

秘蔵の書物を私に示し、私がお愛想に手にとって開こうとすると、

「駄目駄目、俺が開いて見せてやる」

余程の貴重品だったのだろう。私は日知録よりも机の上に開かれた先生の弁当の白米のご飯の方がまぶしかった。相模湖遠足では湖畔での昼食の時間、先生が大声で、

「さあ、俺はここですつまでも食おう」

とおっしゃって、さつま芋の弁当をほおぼっておられた姿が懐かしい。

その先生の俳句の上での友人が当時宮内庁に勤めておられ、その方の案内で国文学部の生徒二、三十名と、戦後の荒れ果てた皇居の中を見学したのも思い出深い。

先生には卒業後も間接的にお世話になった。

私は後年、さる銀行に職を得たのだが、入行するや否や、五、六年上職の伊富貴さんという方から電話があった。

「おい、清水良平さんというのはお前さんか、佐藤徳四郎というのを知っているだろう。今度、お前の銀行に清水という男が入ったから面倒を見てやれ、と言われたから面倒を見てやる。については銀行の俳句会に入れ」

というご宣託だ。やれやれ、又俳句か。

おかげで俳句とは今日まで付き合っている。

この伊富貴先輩は、徳四郎先生が東京の学校で教えておられた頃の生徒だったそうだ。

私が川高での先生の教えぶりをお話しすると彼は、

「俺の学校では徳四郎は極く普通の教師だった。川越に行ってからそんなに変わったのかなあ」ということだった。

思うに佐藤先生にとって川越高校は教師として、人生最高の脂の乗り切った時期だったに違いない。すると先生をそのように開眼させた我々も先生にとって最高の生徒だったのかも知れない。川高三回生も捨てたものではない訳だ。

徳さんの話ばかり長くなったが、歴史の佐々木太郎先生、英語の野口先生その他の諸先生など、お一人お一人それぞれ忘れ難い。原稿用紙百枚が許されるならば先生方について書きたいことは山程ある。

最後に、皆さん言われれば思い出すだろうが、当時高一にあたる学年を第十学年、高二にあたる学年を第十一年、などと称していた。学制改革の過渡的な呼称で、我々は計らずも今はやりの中高一貫教育を受けたわけだ。

私の高校時代——それは苦しい時代だった。だが、想い出深い懐かしい時代でもあった。喜びもあった。

しかし、二度と繰り返したいとは思わない。京都への修学旅行は参加できなかった。理由は言わずもがなである。

わが青春と「川越」

高橋 幸男

遠い昔の学校生活にまつわる記憶は、薄れて鮮明に残ってはいませんが、しかし、懐かしい思い出の場面は浮かんできます。

私は、最初から川越中学に入学したのではなく、終戦の年に外地から引き揚げて転入学したものです。

大東亜戦争の末期に、外地で日本人学校の中学に入学したものの、アメリカ軍の空襲、配属将校による軍事教練そして航空燃料油の材料になるという松根掘りにかり出されるなどで、勉強という勉強は殆どしませんでした。

重大放送があるという八月十五日は、学校の校庭で配属将校達と共に、ラジオに耳を傾けていましたが、内容については何のことだかよくわからなかった。あとで戦争に敗けたのだと知らされ、「欲しがりません勝つまでは」と勝つと信じていた勇ましい姿から、いっぺんに不安と恐怖に落ちこんだことを憶えています。

異国の地での敗戦は、惨めそのもの、毎日が苦難の連続で、経験したものでなければ理解しがたい辛酸が始まりました。

何はともあれ、着のみ着のままですその年のうちに引き揚げることができ、川越中学に転入学することができました。しかし、この間のブランクは大きく、島崎トーン先生の国語の授業にもついて行けず、苦労したことを憶えています。

このとき以来、同級の皆さんには、何もわからない私を蔭に日向に応援していただきました。お蔭さまで、戦後の混乱時代の勉強をようやく乗り切ることができました。これも同級生の皆さんのご支援であると今でも感謝の氣持で一杯です。有難うございました。

昭和二十二年に新しい「六、三、三、四制」に学制が変わったことにより、私達は新しい高等学校の併設中学の生徒となりました。

そして、翌年には名称を変えた県立川越高等学校へ入学し、中・高の六年間を同じ校舎で学びました。このこと

は他の学年ではみられないことであり、この六年間が私にとって貴重な青春時代を過ごした、川越の街でありました。

私は、東松山から通学していたので、体育の石川ゴエモン先生とはよく一緒に電車の中などで、ときどき気合を入れられました。

校庭でのキャッチボール、休み時間に急いでコッペパンを買いに行ったことなど、今思うと、この六年間の同級の皆さんとの関わり合いが、今日大いに役立つっており、私の青春時代に培った最大の財産と言えるようです。

昨年、新宿区教育委員会主催の、文化財めぐり「川越の史跡と文化財を訪ねて」に参加したところ、同行した解説者が川越城の説明をしながら、この奥に見えるのが「伝統のある有名な高校で県立川越高校です」と、指さして説明したときは我ながら意を強くしたものです。

私は、この三月、長年勤務した新宿区を定年退職いたしました。これからは川越の街を愛し、川越高校に誇りを持ちながら、還暦を迎えた皆さんと旧交をあたたため、人生八十年時代を楽しく過ごしていきたいと思っております。

逆境に勝る教育なし

鈴木淳一

今から当時（昭和二十年頃）を振りかえると、よく乗り切ったものだと思う。

(一) 先ず教科書がなかった。東京からの疎開者で誰も知る人がいない。先輩のいるものは借りることができたが、その手づるがない。

止むを得ず、誰かから借りて来た隣の机にいる友人から又借りをした。

アルファベットも未だ充分書きこなせないのに、英語の教科書を幾日もかけて写した。こんな危ないテキストは天下広しと言えども数少ない。でもこの帳面型の教科書は、安物のダイヤより遥かに大事な存在であった。

押し戴いて神棚に置きたい存在であつて、とても丸めて無造作にカバンの中に押し込めなかつた。

(二) 昼の弁当が待ち遠しいやら、またサツマ芋かと、がっかりする心とが複雑な氣持となつて、午前中の授業中、頭の中をうずまく。

あけて見ると茶色がかつた麦飯である。やれやれと梅干だか漬物を相手にかぶりつく。

時折り中身のゆるい御飯で横にするなど言われて、ていねいに、こぼれないように持参した「おかゆ」の時もあつた。

隣の友人は純白に近い銀メシである。当方は弁当の蓋で顔を隠しながら食べるのだが、どうしても「ズルズル」という音がする。「なんでこんなもの入れたのか」と、半分親を怨みつつ喉に流し込む。なんとも、みじめであり恥ずかしい思ひであつた。

しかし「おかゆ」を子供の弁当に持たせた親の方は、多分昼は食事をしなかつたのではないかと、親になつてみて、はっと氣づくものがある。

(三) 頭や身体は時折り、DDTの粉末剤で消毒された。服はどこで手に入れたか、みすばらしい一言である。

時折りテレビで発展途国の子供の姿の中に自分を発見する。つぎ当てはあたりまえ、とにかく着るものがあれば上等とせねばならない。

東京から疎開した家庭では親の着物は、ほとんどダンスの中から消え失せて食糧に替えられた。しかも半分、「もの乞い」するような、ペコペコしながら取り換えてもらっている親の姿に、なんともやるせない気分になった。それ故、どんな粗末な服を着せられても、粗末な食事でも、大事に受け止めようと、その時は思った。

(四) 北風が冷たいというより強かった。必死に踏みこむのだが、なかなか自転車が進まない。道は小砂利で、ずるずる横すべりする。

時折り大穴、小穴の中に車輪を取られ、倒れないのが奇蹟というところだ。

身体が小さいので、力もないし、まともにサドルの上に座ると、足がペダルにとどかぬから、とにかくこぐしかない。やっと坂道を下る時、サドルに腰かけ、ほんの一時足をたらして休息の体勢となる。だがそれも長続きはしない、よくよく自転車のタイヤを見ると「ムク」のタイヤである。空気が入っていない輪である。子供の三輪車のタイヤの親方のようなものである。走っている時、何かを引き摺るような音がして、とても軽やかさとは縁遠い代物だ。

どんなにペダルを踏んでも惰力がつかない。踏んだ力しか進まぬ代物だ。それでも父が「なげなし」の金をはたいて、闇市で買ってくれた愛の車である、文句を言っではならぬと、自分に言いきかせつつ北風に向った。

今考えるとよく乗り越えたと思う、でもそんな苦境の中から、じっと堪える力、貫く力、やり抜く力等、根性みたいなものを自然と体得した気がする。

消費は美德と言われても、とてもその気になれぬ。物を大切にす。宇宙自然の一部であり、限りある資源の中で製品を粗末にはならないと、その結果として「もったいない」という感覚を身につけた。

古いようだが、その意味するものを大切にすべきではないかと思う。人間も自然の中に生きつつも生かされている存在であるという、宇宙自然の神秘の営みの中で生かされ、自然の恵みの中でのみ生かされている存在と思う。

自分一人の狭い心の中に閉じ籠らず、大いなる働きの中に自分があることに、限らない喜びを発見すべきと考える。孔子が言われた「しん六十にして耳順う」という年についての間になつた。とてもそんな立派な心、心開かれた安心立命の世界には覚束ないが、人生上の一つ一つの問題や現象が、私自身の人間を造ってきたようである。

若いころの苦勞が、その人を創る。苦勞を私を活かすための材料として受け止めると、なにか良かつたなあと思えてくる。

苦しかったが、それなりの意義のあつた時代であり、経験であつたと感謝の心が満ちてくる。

二か年半程の川越中学校の在籍で東京に戻つたが、川越という名を聞くと、心が揺り動くのは確実に第二の故郷として、私の心の中に定着しているためであろう。

同窓の皆様のご健勝とご多幸を祈るのみである。

私と戦争の思い出

朝久野 貞 郎

川越は幸いにして戦災に遭わず当時の我々中学生にとって余り大きな悲劇にならなかったと言える。戦後五十年も経つと戦争は風化してくるものとはいえ、私にとって戦争は私の一生を左右したといえるし、還暦という人生の節目を機に当時いかに生き抜いたかその一端を紹介したい。

私の父は職業軍人であったため、大東亜戦争勃発時には既に中支より仏印（今のベトナム）に出征していて、私はいわば今でいう母子家庭で小学生を過した。

勃発当時は東京世田谷の荏原尋常高等小学校（今の若林小）三年在学であったと思う。その後任んでいた借家のそばに山崎小学校ができた名称が国民学校に変わった。学校が非常に近かったので予鈴を聞いてからでも遅刻が避けられた程であった。

当時世田谷は東京の片田舎であり、戦争が激しくなるにつれ校庭を畠に変え、鶏・豚・うさぎを飼い、毎日その世話をするため当番を決めて町の食堂の残飯をもらうことが日課になっていた。また時には東京空襲に備え取り壊した、渋谷の古い木造家屋の釘付きの材木をリヤカー隊を編成し、学校の暖房用に運搬した、こんな思い出もある。陸軍大隊長の父がニュース映画に出るということで、母や姉と共に渋谷の映画館に見に行った。画面は三十秒ぐらいだったと思うが、仏印でフランス兵に混じって浅黒く日焼けした父の姿が映っていた。

その後、父はマレー半島、シンガポール、スマトラと転戦後、陸軍参謀本部に呼び戻され、当時軍隊のまねをして寝泊りしていた山崎国民学校に参謀肩章を付けたままの軍服姿で現われ、児童達を前に南方の話をしたことがあった。

戦争がかなり逼迫して来ると、時の政府は小学三―六年生を対象に集団又は縁故疎開を勧めてきた。

演習などで時々佐久間旅館などに泊ったことがあり、歴史のある静かな城下町川越が大変気に入って、大正十二年宇都宮師団長を最後に退官し、川越に隠居していた祖父の所に一人で縁故疎開することに決った。小学六年二期だったと思う。

川越の家は東京の借家と比べだだっ広く、格式の高い祖父(居間の坐る場所が決っていた)と躰しっかの厳格な祖母(漢学者荻生徂徠おぎゅうそらいの子孫で結婚前は荻生千代といった)それに祖母に教育された女中頭とく(祖父勘十郎が現役時代には女中が二、三人いてそれを取り仕切っていて一生独身で過した女性)が私を迎え入れた。急に孫の面倒をみるこ
とになった祖父一家は私をどの国民学校に入れるか悩んだらしいが、特別扱いはいけないということで、近くの第三国民学校でなく、当時の学区制に従い仙波の第四国民学校に行くことになった。東京で田舎生活に慣れていたつもりであったが、使ったことのない大きな鎌で開墾したこと、雪の降る日でも素足で通学したこと、足が火傷する程発酵した堆肥を作ったこと、先生が当時の第一回東京大空襲の不発焼夷弾を生徒の面前で燃やしたこと、農家の友達のお弁当にオモチが入っていてうらやましかったことなど色々な思い出を残してくれた。

父母がいない私に対する教育はイタズラ盛りなので大変だったようだ。

当時の川越の家には軍刀、拳銃、肩章、色々あったけれど、前二者の兵器の取扱いに対する考えは、異常な程厳

しく触らせてももらえなかった。反面中将や少将などの肩章は実用品でも玩具にしか思っていないかった。友達の要望もあり、その肩章を学校に持って行って遊んでいる所を先生に見付かり、先生が大あわてして今後このような大事な品を持ってこないように厳重注意されたこともあった。

仙波の学校は二、三学期だけで昭和二十年四月に川越中を受験した。当時口頭試問が主であり、渡辺君、高梨君、鈴木君、沼田君、私の五人だけが合格者だったと思う。私の家に近かったせいか、高梨、鈴木両君が毎日のように迎えにきてくれ、徒歩で川越市内の端から端迄通学した。

川越市内は城下町のせいか迷路が多く、迷ってもと来た路に戻ったことも多く、よく遅刻しそうになったものだ。川中の部活は山崎国民学校時代、家の近くの松陰神社の境内にあった剣道場に通ったことがあったので剣道部に入った。小学時代は中々面をかぶらせてもらえなかったが、川中では比較的早くかぶらせてくれた。

柔道部との交流試合が恒例になっていて、柔道では勝てなかったが、剣道では上級生の柔道部員をやつつけたこともあり結構たのしんだが、戦後、柔剣道部が占領軍の命令で廃止され剣道は以後やめてしまった。

川中時代の最も嫌な思い出といえば吉沢教官の教練の時間であった。この配属教官の言動は品性のかけらもなく「このオ○○コ野郎、女学校に行け」などの言を吐いていたし、体力のない私にとって木銃を担いでほぐの匍匐前進や手榴弾投げなどにが手であった。

それにしても引退で権限などなかったが、朝久野中将閣下の孫ということで大目に見てもらったこともあり、助かった面もあった。後程父の話によると、敗戦間近では戦力になる兵士がはず、実戦では使い物にならない将校を教練の教官に採用せざるをえなかったらしい。こんなことも敗戦を早めた一因といえる。

我々の上級生では、死亡者も出る程過酷な重労働であった動員が中学一年生にもまわってきた。初めは石川蚕糸で蚕を倉庫から製糸場に運ぶ作業だったと思う。繭の蛹まぶたの臭気が倉庫内に充満していて息苦しく運搬作業そのものよりもその方がつらかった。期間は一〜二か月だったと思う。

最後に御苦勞様ということとで白米のおにぎりを全員が食べた。今思えば質素そのものであったが、育ちざかりの我々にとってこんな御馳走はなかった。その次は日清製粉が作業場になった。これも小麦粉や大豆粉などをトロツコで運搬する軽作業であったが、空腹な我々にとってはつらく、こっそり小麦粉袋を破って生のまま口にほおぼる者がいた。

そういう食糧難だったので、三時に同工場の小麦粉を使って焼いたパンを中学生一人一人に与える習慣があり、三時が来るのがなによりも待遠しくパン焼き器のそばに並んだものだ。

我々は天皇の玉音放送を同工場の屋上で聞くことになった。ラジオの音声が悪かったし、敗けるという言葉がタブーであったせいも、放送の意味を励ましのお言葉ととらえる者もいて敗戦がピンとこなかった。子供心にいずれはこんな結果になるとは思っていたが、参謀本部にいた父は既に一年前からわかっていたらしい。

軍人一家朝久野家にとって敗戦のショックは大きく、祖父の恩給（隠居のくせに川越市長の月給より多かった）の廃止と東京空襲が激化し、難をのがれるため全員川越に引越していたし、父の失業問題もあった。

まず一番深刻に感じた祖母の意見で下駄のハナオの内職を始め、父は昔からの趣味を活かして写真屋を始めた。私は写真の現像や写真代の集金の手伝いをした。

後程父の日記でわかったことであるが、家の金が底をつき父が祖父に金を借りたこと。当時の県立立女子高（オケン）

に写真の仕事で入り込め、息がつけたことである。

又戦時に戻るが、川越駅を米艦戦機が機銃掃射でおそったことがある。駅に近く住んでいたせいか、私の家の屋根もぶち抜かれた。たまたま昼過ぎ時だったので一家全員防空壕に入らず家の中にいたので生きた心地がしなかった。気丈な祖母が地団太踏んでいたのが今でも脳裏に焼き付いている。

川越市内に小型爆弾が一発落ちたことがあったが、ヒューという不気味な音と爆発音だけの一瞬の出来事であり、これに比し機銃掃射は何時弾が当るかわからない恐怖感があった。

多感な中学生時代、軍国一色だった戦時下の先生、その同じ先生が敗戦と共に今迄とは百八十度違ったことを言わざるをえなかったこと、戦時中朝久野閣下の家族ということでも置かない態度をとっていた者が、敗戦と共に急に態度が変わったことなどを経験し、人間とはいかに弱い者か、強烈に感じた。

もしもという仮定はこの際無意味だが、大東亜戦争がなく平和であったら、私共は東京世田谷に住んでいたし、祖父一家も川越でのんびり余生を過していたであろうし、私にとって川越はただの田舎の家に過ぎなかったと思う。私はこの年になっても未だに見る美しくも、もの悲しい夢は、淡い初恋が芽生えた疎開前の自宅でのおわかれパーティーの晩であり、不思議と嫌な戦争の夢がなくなっているのは、私にとって戦争は既に過去のものとなってしまったのだろうか。

卒業と転学

小熊 忠三郎

右者昭和二十年三月十日山谷堀國民學校初等科の課程を終了したことを證する

昭和五十二年三月十二日

東京都台東区教育委員会

右の者本校第十學年に轉學を許可する

來る四月二十六日(月)午前八時三十分までに生徒とご出校下さい

昭和二十三年四月二十四日

埼玉縣立川越高等學校長

保護者

小熊 瀨松殿

卒業證書と轉學許可書。大切に保存しているこの二枚が私の人生に深いかかわりをもつ。昭和五十二年三月五日付読売新聞都民版は東京大空襲三十三回忌の特集を行った。そのトップに「四十四歳の小学校卒業式、胸はずませ

て五十八人——散り散りのさびしさ今消えて」という記事に、私が生れ育った隅田川畔にたつ旧東京市浅草区山谷堀国民学校の卒業式をとりあげている。KDDニューヨーク事務所駐在の昭和四十年代の半ば頃、日本から送られてくる新聞をみて毎年三月になると「二十〇年ぶりの卒業式」といった記事をかきかけるたびに、やつてもらえなかった卒業式のことを気にかかり、小学校の卒業証書をもたないさびしさを感じていた……。

昭和十九年八月、当時六年生だった私はメンコ、ビー玉、剣玉遊びにあげられた「竹馬」の友と、お国のために、宮城県の川渡温泉（現鳴子町）に学童疎開した。「つぎの世を背負ふべき身ぞたくましく正しくのびよりにうつりて」その年の暮、皇后が皇太子の御誕生日に学童疎開の学童を思われて詠まれた歌が伝達され、同時に配られた「御賜」の菓子（ビスケット数枚）が甘味の絶えた我々を喜ばせた。つらい苦しい集団生活を七か月、やっと進学のため東京、両親と会えた嬉しさも束の間、四日目の三月十日未明、B 29の大群による焼夷弾攻撃に遭遇した。木造家屋の多かった当時では残ったのは鉄筋造りの建物や煙突の残骸だけ、見渡す限りの焦土と化した。二時間余にわたる焦熱地獄、その中からよくぞ生き残ったあの体験は決して忘れられない。死者七万六千人の中には、ともに集団疎開をした何人かの幼い命があった……。

大空襲後、過疎地域となったため、戦後間もなく小学校は建物を残し廃校となってしまった。このため卒業証書の発行者名をどうするかが問題になったが、地元の区会議員にも働きかけ、幸いにも東京都台東区教育委員会の異例のはからいで「卒業を証明する書」という名の卒業証書を区教委が発行することで決着した。

卒業式は三月十三日、都立台東商業高校に転身した旧校舎に集まって、物故者の冥福を祈り、黙禱をはじめに昔の小学校の卒業式そのままの雰囲気の中で、七十七歳になった当時の教頭先生より一人ずつ証書を受け取った。校

歌は全員誰もがそろって歌えた。

古人いにしへのひとの言問ことばし、墨田河原すみだがわらにほど近く、待乳山まちちまの春秋はるあきに、恵まれ建たてる學舎まなびやは、その名もゆかし山谷堀さんやぼり

どんな国民学校でも、ふつうなら戦後はまた小学校と名前が元に戻って、卒業生を出し続けているはずだが、山谷堀国民学校に限っていえば、我々が最後の卒業生であとは一人も卒業生を出していない「最後の卒業式」となった。そして同じ年頃の小学生の子供をもつ身になって誰いうとなく「オレたちの戦後はコレをもって終った！」

私の小学校では、下町のせいか、高等小学校が実業学校へ進むものが殆どで普通科の中学進学希望者は少なかった。当時東京の公立校受験には学区制のはしりのようなものがあつて進学先は府立三中（両国高校）、府立七中（墨田川高校）、市立二中（上野高校）のいずれかときめていた。

空襲で焼け出された私達一家は、西町通りの、いま長崎屋となつてゐる場所にあつた中富魚店に寄留した。小さい頃、川越へ行くには泊りがけとなり楽しい思い出があつたが、いざ居住するとなると「都落ち」で気が重かつた。商売柄顔の広い叔母に、川中進学の希望を申しでたらすぐに入学手続は終了してしまつたとのこと。工業の機械科なら受け入れてくれるとの話があり、気が進まなかつたがとりあえず入学した。実業学校は実習など専門科目に重点がおかれ、共通科目はどうしても軽くあつかわれる。授業が面白くないのでよく池袋へ出て洋画をみた。ずるずると過しているうち、「六・三・三制」というアメリカ同様の新しい教育制度がしかれ、川越工業高校併設中学生となつた。なんとか工業からぬけだしたいと思つていた私は、進路指導の先生に新制川高転入学を相談してみた。旧制松山中学出身の松崎正之先生は、私の申出でを全面的に了承され親身になつて川中とあたつて下さつた。センカ紙に書かれた先生のエンピツ走り書きメモがある。

「川中へ転学の件。校長、教務主任への交渉の結果、種々困難なる模様でしたが漸く許可となりました。本日成績証明書、転学願、身体検査表相添え手続を致しました。来る四月十五日午前八時半迄に川中へ出頭し受験して下さい。他にも希望者もあります故大いに常々の実力発揮して頑張ってください。猶受験科目は英語、数学、理科（物象）、国語の四科目です」

試験の方は英語を除きよい出来とは思えなかったが幸い転学ができて、三年ごしの希望がかなえられた。工業からはカムカム英語の達人土金達夫君が一緒に、あとで根本暎夫君も新制川高入学組とわかった。

ちなみに板橋にある北園高校に改称する前の、東京都立第九新制高等学校第一学年入学志願者心得によると、一部昼間普通科十五名、二部夜間三十名の募集を行うとあり、志願者に対する注意がおもしろい。「本校は大学進学を目標とする普通科の高等学校であり、学問を極め教養を高める熱意のある者でなければならぬ。必須科目として外国語を課するので中学卒業程度の英語に十分習熟したものでないといけない」

川越の生活にやっとなじみ、両親は大正初期に始めて世帯をもった地でもあり、東京へ戻ることを断念していたし、松崎先生のすすめもあり私は川高をまよわず選んだ。

転入学し十年A組、十一年D組、三年C組を通じ多くの良き友に恵まれた。排球部、音楽部、英語部に所属し同好の諸兄とも親しくしていただいた。卒業後は連馨寺読書会、川中20回、むらさき会の仲間入りをさせてもらい、川中先輩のつくられた在京初雁会の末席を汚している。公私にわたり、いつもあたたかい援助の手をさしのべてくれる同窓の諸兄に感謝の気持で一杯だ。そして少しでもなにかお役にたてることはないかと転入学者の、考えたのが、いつも名簿の最後にのっている、青山幹君以下の中途退学者の同窓会本部正会員への推薦である。関係者該当

者の意向をうかがい、平成三年十月二十日、同窓会役員会で議決承認され、千五百円の終身会費を納め正会員になった。川中諸先輩の役員の中には六・三・三制による併設中、川高と六年間在籍したレア・ケースをご存知ない方もおられ話題を提供することになった。佐々木雄司君から「これでヒカゲモノでなくなります！」とのメモをもらい嬉しくホツとした。一方、自分が併設中学生であった川越工業高校の同窓会員でないことにあらためて気がついた。いつか工業の昔の仲間に推薦方をお願いしようと考えている。

早大を卒業した就職難の昭和三十一年、なんとかKDDに入社（東上線福岡駅横のいも畑にアンテナ多数があった「福岡無線」の本社）、三十七年間のサラリーマン生活を終えることとなった。小鷹邦夫君と一緒である。コムンスメント。定年〓卒業。私の人生もこれから再出発となる。

私の中学・高校時代

大山 勝地

終戦の年の四月、連日の空襲の合間を縫うようにして東京で中学に入学したと思ったのも束の間、すぐに我が家はその空襲で丸焼け、着の身着のままであちこちを転々とし、行き着いたのは埼玉の高麗村でした。そして川越中学に転入を許されたのはその年の八月、夏休みに入ってからでした。夏休みとはいえ戦時中、学校へ通っては暑い陽射しの中で防空壕掘り、あの八月十五日も昼まで防空壕を掘っていて、昼に突然正面玄関の前に整列させられて聞かされたのが玉音放送、これが私の走馬灯「中学時代」の始まりです。

中学校が併設中学とやらに変わり、やがて川越高等学校に昇格、私はトコロテン式に六年間に少し足りない年月を川越の母校で過ごした事になります。青春時代の六年間ですから、本当にいろいろな事がありました。楽しかった事、辛かった事、私の人生を揺さぶるような事件も多々ありましたが、今日は敢えて、苦い思い出を掘り起こしてみようと思います。

着の身着のまま焼け出されて、見知らぬ人達の間で始まった戦後生活。米の配給制度はあっても配給されるのは米ではなくて、大豆粕だの甘藷だのがほとんどで、私が持たされる弁当は蒸した甘藷、それに通う学校は川越にあっても、あの「川越いも」ではなくて、「農林何号」だの「沖繩何号」だの、それを毎日持って行って昼食に抜げる時、子供心にやはり恥ずかしい気持ちでした。しかもそれに追い討ちをかけたのは「オイ、ソカイ、お前いが好きだなあ」という言葉でした。それはそうです、毎日これ以外に持って行く食糧はなかったのですから。

「オイ、ソカイ」そうです、戦争から来て者はほとんど皆が、そう呼ばれました。姓などは関係ないんです。「ソカイ」これが私達の呼び名でした。住んでいた高麗村でもそう呼ばれていました。「オイ、ソカイ、俺んちの島の草盗むなよ」これは蛋白源に家で飼いだめた兔のために島の隅の雑草をつんだ時に言われたことです。そして学校へ行っても「ソカイ」です。いや、もちろん全ての人が、というわけではありません。親切にくれた者もいて、仲好しの友達もできました。かばってくれる先生もいらっしゃいました。でも大多数の者はそう呼んだのです。

これは子供同士の世界の話です。しかし、やはりこれは大人の世界の映してもあったのだと思います。これには当時子供だった私など知る由もない、いろいろな時代背景があつての事だつたらうと思います。「ソカイ」と呼ぶの

はその一つの単なる結果であつて、とやかく言う問題ではないでしょうが、中学に入ったばかりの、青春に足を踏み入れたばかりの子供心には強烈な経験でもあつたのです。こんな状況が本当に消えるまでには、三年か四年も掛つたように思います。

「今頃になって、そんなつまらない事を、またなんて思い出したりするのだ」と言われるかも知れませんが、実はその訳は少し大袈裟な話になるのです。

冷戦が漸く終つた現代世界、やれやれと思つていたら間もなくあちこちで始まつた、小国同士の、民族間の、そして部族と部族の小競り合い。一体何故、傍らからは無意味と思われる事柄で人々は争いを起こし、それがエスカレートして泥沼化するのか、と考え、これは結局、文化の相違の根の深さを示しているのではないかと思ひ至つた時、ふと、「ソカイ」を思い出したのです。

今はもうほとんど消え去りましたが、当時は、地方と東京の文化の相違が大きかつた、その軋轢あつれきに私わたくしが挟み込まれた訳だと思つた次第です。文化の相違というものをお互いお互いが認め合う事ができない限り、この世の中から争いごととは決してなくならない。しかもこれは恐らく冷戦を終らせた力をもつてしても、難しい問題なのだろうと思ひます。

私は自文化に誇りを持ち、しかも他文化も同等に受け入れられる人間になりたいと思ひ続けて人生を歩んで来たつもりです。そして還暦を迎えた今、改めて考えてみると、これはあの川越の中学・高校で送つた六年間の青春時代から得た、尊い贈物だつたという気がします。そんな訳ですから、喜びに溢れているべきこの文集のページの中に、樂しからざる一文を紛れ込ませた事を、お許し願ひたいと思ひます。

時に厚味トキはあるか

斎藤賢治

編集準備委員諸氏の作成された「参考・作文のヒント」（本당にご苦勞様でした）を読みながら、四十数年前のヒトトキに思いをはせ、記憶の糸をたぐり寄せてみた。

時は九三年一月二十七日午後二時過ぎ。曇。母親は老人会の会合へ。女房は神戸へ出張。子どもたちは、一人はイギリスに留学、一人は就職して地方暮らし。つまり今家にいるのは小生一人きり。過去に遊ぶには好都合である。時々庭に餌を求めて飛来するヒヨドリや四十雀を見やりながら書いている。

昭和二十年の前半はこんなだった。

三月、奥多摩の氷川町の集団疎開先から帰京（卒業式の記憶はない）、四月攻玉社中学に入学、五月B29二百五十機の空襲で被災（その翌日にも同規模の空襲があり、目黒不動尊の本堂焼失）、父母の出身地旧山田村寺山へ避難、九月川中に転入学。

こうして川中生になった。中学一年の一学期はほとんど何も勉強しなかった。が同時に勤勞動員にも行かずに済

んだ。

ところで、この一年生の時、山田村から通ったのか上福岡村から通ったのか、記憶がはっきりしない。そればかりではない。「アンケートのお願い」をみながら、何組にいたのか、担任は誰だったのかをはじめ実に多くの事を忘れており、今や一人では思い出すこともできなくなっているのに気づき愕然としている。

この「記憶の喪失」には、あのいやな事は忘れようとする無意識の力が働いているのかもしれない。食糧難、住宅難はいうに及ばず、燃料にもことかく始末であった。今でも思い出すが、旧山田村に持っていた畠（これは耕作していたので農地改革からは免がれた。水田は全部取り上げられてしまった）から桑の根を抜き、上福岡まで大八車で運んだことや、鶴ヶ島村の山林に行き松ボックリをリュック一杯に詰め持ち帰ったことである。いずれも一度ならずである。

① 住宅難
それで思い出した。個人史という意味あいからも、何点か書いておきたい。

川中に入った当初は間借り生活。四帖半一間に一家五人、それに一帖ぐらいの大きさの玄関と玄関先を炊事場として使用していた。

どのくらいこの生活が続いたのか、今では忘れてしまったが、次に移ったのが四軒長屋のまん中。六帖一間の畳の部屋と三帖の板の間一室、それに台所。それでもその時はこれで気兼ねしなくてすむというので大変嬉しかったことを覚えている。今考えると、よくあんな所で受験勉強、いや生活ができたと驚くばかりである。大学二年の秋

までこんな生活が続いた。ちなみに小学生時代の事を書いておけば、建坪は三十坪を超えていたろう。鉤形をした表廊下に中廊下があり、女中部屋や使用人の部屋があった。小学五年生の時勉強部屋を与えられた。八帖の洋室でベッドを使用していた。この落差は大きかった。妹もこの長屋から川越高女に通学、そして卒業。弟も川高に一年ぐらいいて東京に転校。小生一家の住宅難は、昭和二十九年秋、生れ育った所に戻って終った。

② 銭湯

間借り生活中は、風呂屋が近所ないものだから学校の帰り銭湯に入って帰ってくるようにいわれた。川中そばの小学校の校庭前にあった銭湯などにはよく入って帰った。恥ずかしくて、同級生などに見られないよう周囲をキョロキョロ見回しては、サッと風呂屋に入ったことを覚えている。

③ 通学難

買出し列車で有名だった東上線は、朝からいつも大変な混みようであった。電車の屋根の上に乗っていたのを実際に目撃している。度胸がなかったのもそんなことはしなかったが、ドアのわきについている鉄の手すりにつかまり、やっと乗ったりしたので時々肩にかけたカバンが線路わきの鉄塔にぶつかるといふようなこともあった。連結器の上に乗れば上等で、特に最後部の電車の後部連結器などは、風当りも比較的弱く、安全でしかも見晴らし最高ときたから特等席のようなものだった。

ちなみに、通勤ラッシュを小生はまったくといっていいほど経験していない。午前十時出勤だったので、家を九時二十分に出れば充分間に合った。その意味では重役出勤のような毎日であった。

夜七時のニュースは、貴花田とりえの婚約解消を伝えている。りえの記者会見での受け答えを見ると、年に似合わずうまく質問をかわしているのに驚く。夕食の準備やらで中断していたがまた始めよう。書きはじめの時よくだいぶ思い出してきた。『思い出してきた』と書いてきて石島君の名前が浮かんだ。あれは稲荷山公園であつたらうか。彼が皆から歌を強要(?)されて歌つたのが『思い出した』思い出した。思い出したよ。ではじまる歌だつた。いつもにこにこしていた彼は、確か氣象大学校に入るため、中途入学で中途退学していった筈だ。今どうしているだろうか。

川中では、テニス部↓図書部↓新聞部と三つの部活を経験したように思う。テニス部では、上級生(実に彼等はうまかつた)はプレイできるのに下級生のわれわれはいつもローラーかけばかりやらされたので、怒りをこめて作文に『磁気嵐』を書いたことがあつた。

図書部では高三の時か、五十嵐(威)、森田、根本、長谷川の諸君らと伊豆半島一周のヒッチハイクをやつた。あれは八幡野あたりであつたらうか、景色のよい、眼下に海の見える岩場で野宿したことを思い出す。下田の小学校に泊つたり、西伊豆では農家で五右衛門風呂にはじめて入つたりで、とても楽しかつた。旅行といえば、家に金がかつたので親にいい出せず、修学旅行には参加しなかつた。いずれ京都・奈良には行けるさと楽天的に考えていたが、それが思わぬ事で実現した。女房が京都西陣の商家の娘なのだ。店はつぶれてしまつたが東京にいるのは女房だけで、兄弟妹は京都あるいは大阪に住んでいる。京都へは数え切れないくらい出かけた。

先生では、化学の本橋先生、名前が思い出せない(失礼!)のだが火薬が専門の先生、英語の木島先生、数学の大

川先生などが印象深い。木島先生は就任の挨拶の時冒頭で「只今校長から紹介された……」と語り出した。校長先生といわず、校長と呼び捨てにされた。これは新鮮だった。と同時に学校の中に校長よりえらい人がいるというので驚きでもあった。高等商船学校の元教授だったから呼び捨てにしたのか。いやそうじゃないだろう。私は「独立自尊」の精神のあらわれでなかったかと解釈している。

大川先生には、問題を解く楽しさを教わったような気がしている。

卒業後村山利喜君と一緒に成増にある東京図書館という印刷会社に勤めた。日給確か百二十円であった。写真植字機のオペレーターである。昼休みは近くの丘に上がり、同僚の女性たちと食事をした。女性と食事をしたというのはこれがはじめてではなかったろうか。楽しい半年であった。入学金、授業料を準備して満を持した。

今、テレビは「日本一びつくり面白ペット君全員集合」が終りに近づいている。断続的に書いてきたのだが、七時間近く経過した。

過去を振り返らず前を見て進むことばかりを考えて、この三月で六十歳を迎えた。思えばこの過去というのは不思議なものだ。某洋酒メーカーのCMに「時は積み重なる……」というのがある。確かに過去の経験・体験が現在に反映している。その意味では時は積み重なるといえるのだろう。しかし頭の中では、過去は時間順に積層化されてはいない。どちらかといえば、横一線に並んでいる感じだ。横一線に並ぶような道しか歩んでこなかったからか。そうとばかりはいえまい。サラリーマンの誰しもが「あっ！ という間に定年退職の時を……」という。時に厚味

があつたら、あの「あつ！」という間」という言葉は出てこない筈だ。

その意味からも「今を大事にしたい」。その思いが痛切だ。私は五十七歳から「一日は兩日に似たり」の生活に入った。場所は辞める前に用意した。伊豆半島の中央部、天城山系の南側山麓に小さな山小屋を求めておいた。大島から神津島まで見える。雲の動き、山の色、風の音、どれもがすべていついっても新鮮だ。しかしまだ過去を引きずっている。前職の関係から、情報化社会論を講じたり意識調査のコンサルをしたり、まちづくりを精を出したりで、まだ一日は一・五日に似たりといったところだ。五十七歳でとった車の免許、今マークIIに乗っているが、これを二、三年後には四駆のジープにかえ、もっと山の中に、林道に入っていこうかとも考えている。ま、そんな事はどうでもよい。私は、今ナチュラリスト志向の真最中なのだ。年間百二十日は山にこもる。そしてできれば、子どもたちのための自然体験教室を開き、自然がいかに楽しいか、そしてまたいかにこわいかを教えたいと考えている。

小学校の六年間、毎年夏休みには母親の実家に行き、入間川で遊んだ。この体験が、今せつないくらい貴重なものに思えてくる。あの時の田園は貧しかったが美しかった。今は豊かになつたが、復元不可能なまでにきたなくなつた。

中野孝次の『清貧の思想』は、心貧しき人への救心の書かもしれない。テレビは今ニュースで、国会の憲法論議を伝えている。彼等にこそ「清貧の思想」が必要のようだ。

うまいはなし

武 長 洋 平

本郷は寺が多い。門前の商店街には縁日になると夜店が立つ。アセチレンガスの臭いと、焼そばの匂いが、ないまぜになって、雑踏へ人々を誘い込む。私が小学生の頃の話である。薬局を経営していた叔父が本郷にいたので、夜店にはよく出掛けた。この叔父は川中の出身である。数年後、病で他界したが追悼の辞で、叔父のカラー写真の研究が「完成間近で、恐らくアグファに先んじたであろう」と千葉薬専の方が残念がっておられたのを覚えている。私が川越の第二国民学校へ転じたのは、六年生の二期期の時である。入省へ戦闘機を見に森岡君と出掛かけたり、間中先生の道場で撃剣を習ったりして川越の生活は楽しく、私が同級生多数の方々と川中に入學したのも自然の成り行きだった。私の家はその頃小石川を引き払って成増の借家に移っていた。東上線で通學したが片道一時間位であつた。今となると戦後の混乱期と言われるが、私は二つの形で影響を受けた。

一つは買出しである。配給制度がまるで機能しないから、我が家には食糧がない。川越には食糧がある。勢い私は調達係となつてしまつた。取締りのある日は川越市立図書館にいて、深夜に帰宅するのである。横田君の伯父さんが館長で大変御世話になつた。今一つは金がないのである（この点は今も変わらないが）。新田切替え、預金封鎖、財産税の徴収と経済的打撃が続く中で、父が家を新築したからである。月謝と定期代は出してくれた。があと
は……。

教科書は杉本君に借りた。明治文庫の本は殆ど読んだ。窮余の一策である。事情を推察した杉本君が、父が「蔵書を全部貸してもいい」と言っていると助けてくれた。学校でノート提出の時は困った。それは私のノートは手製の一冊だけだったからである。びっくり仰天されたのか、どの先生も私に提出義務を免除してくれた。その後制度が変って川中は川高となり、二年の初めに私は扁桃腺の手術を受けた。術後、細菌に汚染されて東京通信病院に一月程入院した。病室から外の道路を往来する学生を見て、つくづく羨ましく思った。高三の二月に急性肝炎がもとで死にかけた。危うく一命は取り止めたが、一家は家族も医師も死を覚悟した程の重態だった。死の淵から生還しかけた時、西川先生と佐々木（雄）君が見舞って下さり、特に佐々木君は受験で忙しい中を時間を割いて下さって感謝の言葉もない。その後にも中沢君達大勢の諸兄の御見舞を頂いた。

良き師、良き友に恵まれた川中・川高時代を懐かしく思い出す。

人生いろいろあって、興教大師の語にある「迷中是非俱非」が実感されるようになって、私は正規の学問をしていない事が物足りなくなってきた。実務の必要にも迫られて数年前柳田友道先生に入門した。旨味の研究では第一人者である柳田先生の御指導はしきついで。が楽しみもある。仮すに時日を以てすれば私も何がしか出来そうな気がしてくるから妙なものだ。夜店が縁で川中に入った私が旨い物を世に送り出して、又夜店が流行るとしたら泉下の叔父も又以て瞑すべしであろう。

当時の思い出

小林 堅 造

私は当時の府立十一中から川越中学へ転校した疎開者の一人でした。従って入学は二か月か三か月後れたと思います。その頃私共の家族は住居を親類の家を転々としていた。最初は比企郡の都幾川村、次は坂戸、次は鶴ヶ島、次は霞ヶ関、次は朝霞という具合で、段々東京に近づいていった。坂戸在住中には同級の森田重敏氏の近隣であったのでその後も何度かお会いしている。

中学一年の時、上級生のお説教が何度かあり、同級に加藤（博）氏のお兄さんをふくむ数人が恰好をつけて来ておどかしを受けたのも記憶にある。その頃、柔道部に入って受身を教わったが終戦で廃部になった。同部にいた上級生の小池（得？）さん（小仙波）には本を借りたり、お世話になったのを覚えている。

戦争も末期に近づいた頃、授業中米軍のP51が来襲、早退途中、川越市駅でP51の機銃掃射に遭い、食べていた昼食のニギリ飯を落とし、ホームの下に身を伏せた。後で同駅の売店に同機の銃弾の跡を見た。その日霞ヶ関の駅では蒸気機関車の乗務員が射たれ、無人の機関車が人を何人か轢いたと聞く。その頃勤労動員があり、私は何度か霞ヶ関の農家へお手伝いに行った事を覚えている。その農家で水村（哲）氏の家が木屋製作所である事を聞いた。

鶴ヶ島在住中には川中の先輩の持木さんを知り、同氏から部厚い漢和辞書をお借りしたりお世話になった。当時の鶴ヶ島は未だ松や雑木の山（平地）ばかりで、私共の家には電気もなく、小さなランプに油を入れ、夜はその下で

勉強したり、毎日の様に母と風呂を沸かすための松ボックリや枯枝を取りに行つた。少し足をのばすと坂戸の飛行場があり、山の中でキノコを採つたりしたが、その松林の中に敵の目をごまかすために木製の飛行機があつたのを見た。もちろん本物の飛行機も何機かはいて、空襲になると、どこかへ行つていなかったようだ。

その後ラグビー会が少人数で始まり、放課後練習をした。腹がへつてランニングの途中でイモセンベイを食つたり、その程度の事で同会はあつた。高校になつた頃に霞ヶ関、朝霞へと引越しをした。その頃は英語全盛の世と変つた。当時私の席の前は所沢の酒屋の子息村山祥男氏で、どこから仕入れて来るのか最新の英会話が得意だつたのを覚えてゐる。平和が来たが未だ物不足で軍隊の払い下げのカバンや靴で通学していた。

そんな私の学生生活も凡々の中に終り、社会へ出る時期が来た。大学へ進学出来ない私は、数人の友と日清製粉に就職する試験を受け見事不採用となつた。

東京の俵松屋に就職となり初めてお金をいただく身とはなつたが、未だ服は買えず学生服のボタンを貝のボタンに替え、靴は軍靴で浅草松屋の呉服売場の店員となつた。昭和二十六年の春であつた。その二年後に進駐軍に接收されていた銀座店が返還されてオープンになり、そこへ転勤となつた。洋服売場勤務の時、見合い結婚して現在に至つてゐる。

川越・胸の底の想い出

村山英夫

私が、当時の千葉一中から川中に転校したのは昭和二十年十月、所謂「疎開組」であった。それより先、七月六日夜の千葉市の空襲で家を焼失し、父親を亡くした私達母子は、縁を頼って馬宮村（現大宮市西遊馬）に疎開したまま、千葉市に戻る方途を失ってしまっていた。それから何とか曲りなりにも川高を卒業するまでの五年半川越でお世話になったが、ご承知のとおりの方時の社会状況で、決して楽な生活ではなく、正直なところ記録に残すような良い想い出もない。修学旅行等にも行かなかった（行けなかった）ので、写真等手懸りになる物もない。

疎開組の担任は佐藤徳四郎先生だったから、大いに叱られたり、俳句のご指導を頂いたり、同じ疎開組として何か気持ちのつながりがあったような気がするが、これとて在川越の諸兄には及ばないだろう。

そんなわけで、今回の記念文集に躊躇していた私を、熱心に誘って下さったのは斉藤恒氏であった。氏はこれまでも、疎遠がちの私に川越を想い出させるキーマンであった。

そんなわけで今迄私の胸の底にあった想いのなから一つ二つ記して、同窓のお仲間に入れて頂く。

帽章（徽章）のこと

先に記したように、戦災で途中から川中に転校した私は、当時の物不足と土地不案内から、学帽の徽章が手に入らなかった。止むを得ず白い布切れに墨で川中の徽章の図柄を書き、それを戦闘帽に縫いつけて通学していた。友

人達のちゃんとした徽章に比べ、正直なところ内心の抵抗はあったが、当時の戦闘帽や、大きな軍靴を履いての通学だから何とか我慢していた。

そんなある日、帰校途中の路上で見知らぬ男の人に呼び止められ、「自分が使ったものだが、君にあげよう」と言つて、古びてはいたが磨きのかかった、当時では手に入らない真鍮製の貫禄のある川中の徽章を頂いた。思いもかけないことであつた。私は本当に嬉しかった。その日から私の戦闘帽にはその貫禄のある徽章が輝いた。他の誰のより「価値のある徽章」だつたと思う。

その先輩の名は浪江さん。川中を卒業され水産講習所（水産大）に行つておられるとのこと、私のみすばらしい通学姿を見て気の毒になり、ご自分が使つて大事にしまつておいた徽章を下さつたのだ。

その後、ある事情で住居を転々とした私は、その大事にしていた徽章を紛失してしまい、浪江さんには大変申し訳ないことをしてしまつた。社会に出て四十年程、曲折の間にはいろんな人との出会いがあつたが、浪江さんの温かいお気持ちは今でも決して忘れていない。

卒業証書のこと

私は川高の卒業式には出席していない。と言うより出席出来なかつたと言つた方が正確である。理由は簡単、当時全くの金欠病だつたための「授業料滞納」であつた。何度も督促されたが払えなかつた。学校当局からは卒業式に出席するなどは言われなかつたが、学校に行けば納入の催促をされたし、卒業式当日は卒業生は前列に座らせられるし、どうにも手の打ちようがない。母親に言つても苦しめるだけ、黙つて欠席するのがよい。それだけのことであつた。

当日私は所在なく家でボンヤリしていた。すると昼過ぎ頃、同じ馬宮村から川高に通学していた同年の葩島君が、私の卒業証書を持って訪ねて来てくれた。だから私には卒業証書はあるが、卒業記念写真はない（なお学校にご迷惑をかけた授業料は、暫くして工面して納入した）。

さて、その後、職も住居も転々とした私は、お世話をかけた葩島君とも音信不通のままである。

ところが最近のこと、わが社のK監査役が行きつけのバーで、葩島君と飲み仲間になり、私のことが話題になったと報告に来た。事の次第はこうである。私の今の会社は印刷関係の会社で、「J・T日本たばこ産業」ともお取引き頂いている。葩島君は私が専売公社（日本たばこ産業）に勤めていたのを知っているらしく、K氏に私の名前を出したらしい。K氏は「その村山さんなら、日本たばこの専務取締役から、現在は当社の社長をしているよ」と言つて酒の肴にしたということであった。葩島君は現在は「浅倉君」と姓が変わつて建設関係の会社におられ、台北に駐在されてるそうだが、そのバーでもよく飲み、歌が上手だそうだ。青年時代とはお互い想像もつかない人物像になっているようだ。そのうち旧交を温める機会を持ちたい思い、切である。

さて、胸の底に納めてあつた古い想い出を記録することになったが、これも人生六十年の一齣としてよいかも知れない。川越との想いを繋いでくれた斉藤恒氏の温かい友情に重ねて厚く感謝申し上げる。

川越高校卒業まで

(第六の人生を迎えるに際しての回顧録)

永島 俊三郎

1. 近況紹介

家族構成は妻と娘二人で、長女は歯科大学生、次女は看護短期大学生であり、彼女らへの仕送りのため還暦を迎えた私は自分に鞭打って懸命に仕事をしています。彼女らの卒業後は良い結婚相手を探すことになり、皆様にお世話になることもあるので、その節は宜しくお願いいたします。

私は永年勤続した石川島播磨重工業(株)を平成元年に退職し、関係会社である機械設計・エンジニアリング会社の(株)アイメック(東京都江東区役所そばの十階建てビル内)に転籍し、平取締役として働いています。又、毎週一日は母校の早稲田大学理工学部の非常勤講師として蒸気タービンを中心としたプラントの講義を担当させて頂いております。心身と頭脳の健康が維持できる限り、七十歳迄、非常勤講師として働きたいと考えている今日です。

その他については別途、機会があったら自己紹介したいと思います。

今回は恥を忍んで、川越の小学校時代から川越高校卒業迄の失敗談を中心に得た教訓を面白可笑しく記述します。

2・第二次世界大戦時に得た教訓

(1) 学童疎開の時

私の本籍は川越市で、出生場所は東京市深川区高橋二丁目（現在の江東区森下町）でした。入学した小学校は現在もそのままの名前を残し、地区教育の代表校として有名な深川小学校です。

敗戦色が濃厚になった昭和十八年に、学童集団疎開の計画が決定され、新潟県へ全員疎開ということになりました。

ところが、父が他界したすぐ後であり色々雑事が多いことと、生来病弱な私を母が気遣って集団疎開に参加させず、本籍地の川越に単独疎開させることにしました。

この結果、幼な馴染みの多くの友達と別れ、川越の第一小学校に転校しました。

ここで、大変な次のような体験をしました。

① 私の運動神経が鈍感で、且つ体格自体も女子の最低レベルと同じというものでした。東京では考えられない六年生で男女共学のクラスに転入した点もあり、マラソンはいつも最後、竹登りは出来ない、跳び箱は跳べる段数が少ないなど、全員の前で恥をかきました。当時、私には東京と較べると川越は本当にのんびりした田舎であり、幼少の時から遊びを通して、可成り運動神経を高度に発達できる環境にあり、同時代の人には絶対勝負できないことを知りました。

② 軍国主義の固まりと思える理科の若い教師が青白い東京から来た生意気な私を鍛えようと思ったのか、私をし

ごきました。この教師にとって、私のような虚弱な学童は非国民と思えたのでしよう。深川小学校では体験しなかった往復ビンタを川越の小学校でよく受けました。

③ 単身で、単調で、ただ川越の小学校に通っている自分の将来に自信がなく、ノイローゼになっていたのでしょう。体操と理科の教科に恐怖を感じてしまいました。

夏休みに、東京へ帰ってから、今日問題となっている登校拒否（当時では脱走）が始まりました。登校を嫌い、東京が夜空襲を受けている最中でも、川越から東京の実家に単身で帰ってしまう、当時では非国民、劣等小学生となっていました。母にはこの時大変苦勞をかけてしまいました。川越を転出して、私を元の深川小学校の残留組に転入させてくれました。残留組は家庭や身体障害の事情で疎開できない人達から構成していた特殊学級でした。現在も登校拒否の児童が非常に多いことが、マスコミで知らされています。私の経験から考えると、経験者による暖かい補導で必ず解決できると確信しています。

この時、自分で得た教訓として「自分の意志は貫徹できる」ということでした。

しかし、この為、迷惑を受けた人には川越小学校の担任の先生と母、兄、姉があつたことを無視してはいけません。と、社会人となってから反省するようになりました。

(2) 東京大空襲の時

深川小学校の六年生残留組と新潟から戻ってきた集団疎開組とが校庭で集まり、今後の中学受験と就職と卒業式に関する話があつたその夜、予想をしていたアメリカの超・空の要塞B 29大編隊による東京大空襲を受けました。

雨あられと空から落ちてくる焼夷弾により、木造家屋が殆どであつたこともあつて、火の回りが早く、本来なら家

族が一同となって安全な場所に退避すべきでありましたが、母が私に「早く逃げろ」と叫び、近所に住んでいた母の弟の子供と一緒にこの母方の親族の方へと急ぎました。清澄通りの交差点の交番では警官が「逃げるな。消火作業をせよ」と叫んでいましたが、熱風が交差点で渦を巻いていて、逃げなければ死ぬと思い、燃えていない場所を探しては逃げていました。丁度、清澄庭園の北側のコンクリートの塀通りに来た時、木のはしごがかかっている、「皆、中に逃げろ」とその地区の消防隊の人が怒鳴っていました。私達はどうしても生きたいと思ひ、はしごを使って庭園の中に入り葉がついている木の茂みに身を伏せ、火の粉を避けました。赤い空に、熱風により火の粉の熱い雪が吹き付けるという光景で、灼熱、息苦しい地獄の一夜を耐え、何とも表現できない色の空に太陽が赤く輝いている、悪臭に満ちた空気の朝を迎えました。

生きられたという実感が湧いてきました。庭園を出て見ると地獄の光景が展開していました。いやというほど男女の各種の死体を見ました。現在も夢みることはありません。

この時得た教訓として、「大火災の時は葉を付けた木の多く茂っている庭園が避難の場所として一番よいこと」、また「熱くて、息苦しくてもその場所を移動せず、鎮火するまで耐えることが必要である」ことを知りました。

更に、「生きることは苦しく、死ぬときも苦しい」のたということも実感しました。

幸い、母、兄、姉も無事であることが分かり、戦火を逃れた月島の親戚に全員で挨拶してから、徒歩で池袋へ行き、本籍地の川越に一家揃って引っ越すことになりました。この戦火により失った資産は大変な額で、私達は以後貧困に悩まされることになりました。

これから、私の試練に満ちた第二の人生が始まりました。

(3) 川越中学一年生の夏期学徒動員の時

終戦前、上級生は軍需工場、飛行場建設、松の根掘りに動員されていました。一年生もこれにならって職場協力という形で動員されました。私は体育担当で担任の石川先生引率のもとで、西武線本川越駅の貨物線の横にあった日清製粉で貨車から麻の小麦袋の荷おろしと紙製の小麦粉袋の積込みの肉体労働をしました。

初日、石川先生から「絶対に工場内に落ちてはいる小麦粉や黄粉きまこを構外に持って出てはならない。但し、構内での粉をなめる程度はよい」と注意がありました。この動員の良いところは午後三時にはビスケットが出たことでありました。それを楽しみに、喜んで毎日通勤しました。工場の人足作業に慣れてくると、悪い仲間がいて構内のトロッコレールにまとまってこぼれている小麦粉を自宅へ持ち帰ったということから、私たちも分からないようにポケットに入れて持ち帰り、家の皆にすいとんを食べさせ、喜んでもらう、あるいはパンを作ってもらうなどということになり、実行しました。

この日、運悪く工場の誰かがポケットに小麦粉を入れ、盗んでいた仲間の一人を見つけたそうです。早速、石川先生から全員集合がかかってしまいました。倉庫の中で全員のすべてのポケットが点検され、その結果、殆ど全員（私もその一人）のポケットから粉が出てきました。先生は全員に往復ビンタ二回以上加えらるとともに、「全員退学手続きをとる」と絶叫し、「もう工場にも、学校にも来るな」ということになりました。当時、敗戦色が強く、明日は川越が空襲を受けるというデマもでていた時でした。但し、艦載機やP51の機銃掃射による被害は毎日ありました。以後、仕方がないので私は母の買出しの手伝いを兼ねて上福岡あるいは南古谷あるいは南大塚へと徒歩で同行し、遂に上福岡のある農家で昭和天皇の終戦のことは聞き、内心私の第三の人生が始まったと安堵しました。

この時得た教訓は「悪事の単独行動は命とりになる」「人の悪事のまねをするな」「武士は食わねど高楊枝——」の心は今後は絶対に必要だ」です。

しかし、成長盛りの私にとって空腹は非常に苦痛で、水を多く含んだ雑炊を食べ、飢えをしのいだこともあり、後で「白豚」の渾名を頂くようになってしまいました。

日本が敗戦し、すべてが変革してしまいました。遂に退学のこと自然消滅してしまいました。終戦のことばが万一九月に放送されていたら、川越は空襲を受け、川越は全焼し、その上、川越中学から退学通知を受け、今日の私はなかったでしょう。

3・併設川越中学校から川越高校卒業まで

敗戦後、教育改革が進まず、英語と国語の教科書は当分の間は古い教科書を使うことになっていました。私は自分の教科書はなく、他人からの借り物で勉強など一切していませんでした。私は漢文の佐藤先生担任の疎開・転入組の生徒になりました。

学校では追放された先生の涙の挨拶、新任の先生の希望に満ちた挨拶など、戦前と大変革した朝礼が多く、毎日学校では富んでいました。

特攻隊から戻ってきた先輩による先生の吊し上げ集会などもあり、毎日、こんなに学校は楽しいものかと本当に勉強していませんでしたので、遂に天罰が下りました。

学力試験が実施されたのです。その結果、佐藤先生のクラスの殆どが学力不足ということで、父兄召集令状が学校から劣等生徒に出されました。勿論、私もその一員でした。私は母に率直に「以後、勉強して今後呼び出されな

いようにするから、佐藤先生に面談してほしい」と話しました。

母はまたかという顔もせず、その翌日、学校で佐藤先生に会ったのでした。隣家には数学担当の忍田先生が住んでいることから、母が「数学の個人教育をしてもらったらどうか」とのことであったが私は拒否し、自力で皆に追いつくことを約束しました。

世の中が平和となり、スポーツが盛んになりました。

石川先生は川越高校を埼玉県での代表高校にしようという考えから、学校出たてのフレッシュな体育教員も着任し、スポーツ器具が充実されました。この時、一番金がかからないマラソンが定期的に行われることになりました。川越中学・高校を出て、大宮街道を経てめがね橋に至り、田圃道を経て再び川越市内に入り、校内に戻るというご承知の五千メートルマラソンだったのです。本当にこの時は体育の時間の前の授業中、雨が降ればよいと願っていましたが、この時に限って雨は降りませんでした。

体力に自信のない私ではご推察の通り、最初のマラソンでビリから数えれば優勝という順位でした。しかも、完全にはたしてしまい、次の授業ではチンパンカンパンでした。

この時得た教訓は次の通りです。

① 初めから集団から遅れても、マイペースで走る。即ち、勉強でも同じで、マイペースで最善を尽くせば、普通並み以上の成果が得られる。

② マラソンは苦しさに対する自己の忍耐力の養成になる。即ち、自己への挑戦である。人生はマラソンの苦しさに似ている。

このマラソンから得た教訓から、お陰さまで体育を除く、学力だけは皆さんと同一レベルに達することができました。母へ約束した通り、学校からの父兄召集令状を受け取ることはなくなりました。卒業する迄、マラソンでも決してビリと落伍者にはなりませんでした。

4・最後に

高校卒業後、大学での第四の人生、社会に入ってから第五の人生と多くの試練と難関がありました。上記の教訓のお陰もあって第五の人生に終止符を打つ時期が近付いてきました。この文中の母は既に他界しました。世界の歴史は大きく革新しています。

これからは第六の人生があり、更に第七の人生が待っています。

心身の健康に留意し、世の中に貢献したいと考えています。

この文集を借りて、六年間在学中にご迷惑を掛けました。諸先生をはじめとする学校事務職員の方々と同期の方々に謝意を表させていただきます。

思い出と近況

小川 章

一 はじめに

最初に自己紹介を致します。

仲町の「かぶ小川」が親戚であった関係上川越に疎開し、昭和二十年三月、川越中学校を受験しました。何とか合格し、校章の焼印入りの表札を授与され、皆に喜ばれたことを思い出します。

昭和二十三年、併設中学校卒業後、東京の学校へ転じてしまったので、在学期間は、諸兄の半分ですが、戦中・戦後の激動期を過ごさせていただきました私にとり、川越中学校時代は、懐かしい、そして、意義あるものでありました。

社会人としての経験は、製紙会社の研究員としての三十有余年で、専ら木を育てる仕事に携わってきました。宜しくお願い致します。

二 川中時代の一、二の思い出

(その一、戦中)「内陸国を知っているか」と、地理の時間に先生の質問。「アフガニスタン」と答えた生徒がいました(青山君?)。私は国名すら知らず、さすが川越中学校にはすごい人がいるものだとびっくりし、感心した記憶が、なぜか鮮明によみがえってきます。

(その二、戦中)川中からの帰り道、氷川神社との中間の坂道で敵機(グラマン)から機銃掃射を受け、左側の土手(今でもあるのでしょうか)の陰へ必死に走り、辛うじて助かりました。

(その三、戦後)連馨寺前の万年筆店の前で、「レックス」という名の靴クリームを売っている露天商がいました。「ジス イズ ア レックス ハウ マッチ テンエン」という口上を思い出します。

三 近況

勤務先の王子製紙は、民間で日本一の山林所有者であり、近年は海外にも山林を保有しています。

担当業務のフィールドは、国内だけでなく、二十余年以前からソロモン、パプアニューギニア、マレーシア、ベトナム、ブラジル等熱帯地域にもわたり、Sustainable developmentを旨し、且つ、地球環境保全と森づくりとの両立という課題に挑戦しております。

四 今後の人生

先ず、川中時代の諸兄と杯を傾けながら、語り合うことから始めさせて頂きたいと熱望しております。

思 い 出

西 川 博

私達の中学・高校時代は戦後の混乱と貧困の中にあった。中学時代は学生服が手に入らず、放出版物の軍服の袖丈を詰めて着たり、両足が入りそうな大きな軍靴を履いて通学したものである。高校時代になって、やっと学生服を身につけることが出来たが、下駄履き姿ではなかったろうか。食べたい盛り年頃に満足な食事も出来ず、誰もひもじい思いをしたことだろう。その様な環境にあっても六年間を同じ校舎で学び、多くの友人との友情を育み、思い切り青春を謳歌した楽しい時代でもあった。

さて、中学・高校時代の思い出となると、断片的となってしまう。

私達が卒業した二年後に、思い出深い木造校舎が取り払われ、現在のコンクリート造りに建て替えられた。古い校舎とともに懐かしい思い出の数々も遥か彼方に忘れ去ってしまった様な気がする。

中学時代は興味を引くことは何でもやってみたい年頃であった。

部活で最初に入部したのは柔道部であった。五十嵐（統）君、小林君も同じ柔道部にいたと思う。校庭の北側に建っていた木造二階建校舎の一階に柔道場があった。稽古を休んだときなど上級生に酷くしごかれたものであった。怖い顔の上級生。今でも時としてお会いすることがあるが、温厚な人柄からはかつての面影は見られない。

柔道部が強制的に解散させられた後は、一時野球に熱中したことがある。丁度中学二年のときに、市主催の少年野球大会が催されたので、有志が集まって、野球部の上級生の指導の下、練習に励んだものである。しかし、その甲斐もなく一回戦で敗れてしまい、上級生に部室でたっぷりお説教を食ったことを思い出す。誠に申し訳ないが、当時のメンバーの名をどうしても思い出すことが出来ない。

次が自動車部である。軍が放置して行った乗用車やトラックを使って練習していた。当時の運転免許は小型車が十四歳以上、大型車が十七歳以上となっていたが、無謀にも無免許で大型車を運転し、お巡りさんに見付かったことがある。幸い道交法がなかった時代で、何のお咎めもなかった。自動車部にいたときは随分と学校に迷惑を掛けたものである。何回も事故を起した経験から、車社会の今日、どうしてもハンドルを握る気にはなれない。

中学時代は態度が生意気だったこともあって、大勢の上級生に酷い目に合わされたことがあった。上級生に反抗することが許されない時代、相手のなすがままになっているより仕方がなかった。

当時は書籍など買う余裕はなかったので、参考書は先輩から拝借したり、譲り受けたりした。その関係で先輩とお付合いは多かった。特に自宅近くには同級生より先輩が多く、早朝から夜遅くまでご自宅にお邪魔したことを思い出す。今でも通勤の途上、これら先輩の方々にお会いすることがあるが、当時が懐かしく思えてならない。

読書といえ、自宅にあった夏目漱石全集・シェークスピア全集・平家物語・太平記などであり、また火野葦平の小説を読んでいた。しかし本来体を動かす方が好きな私の読書量は大したものではなかった。

中学時代の友達には大島・正木・越・飯島・小川・山崎の諸兄がおられるが、大島・越の両君が夭逝されたことは誠に残念である。心から冥福を祈りたい。

高校時代ともなると落着きが出て来たせい、部活より友達との語らいに時間を費やす様になった。大川・川崎・岩澤・伊藤（明）の諸兄とは家を昼夜の別もなく行き来しては、進学進路や将来の夢を語り合ったものである。また桃井君宅には明治大正文学全集が全巻揃っていた。徳富蘆花、樋口一葉、二葉亭四迷、尾崎紅葉、森鷗外等の作品を読むことが出来たのも彼のお陰である。自宅には英文学叢書の原書があったが、手取り早い翻訳物ばかりを読んでいた。そのせいで語学力は身に付かず、社会に出てから不勉強を大いに後悔するばかりだった。

また、ご自宅が近かったため、小泉先生・野村先生・大川先生のお宅に伺っては色々と有意義なお話をお聞かせいただいたものである。特に、大川先生には数学の個人的指導を受けていたお陰で、数学の授業には苦勞することがなかった。

親父が英語の教師をしていたため、本橋先生を始め担任の先生から東京教育大学に進学することを勧められたが、生来勉強嫌いなため、教師への道には進まず、都立大学に進学し、卒業後は損保会社に就職することとなった。

還暦を過ぎ、そろそろサラリーマン生活に終止符を打つ時が近付いてきた。中学・高校時代から憧れていた外国生活も味わい、また海外出張が年中行事となっていた生活ともお別れである。今迄は地元や東京で開かれる同窓会に出席するのが精一杯であって、十分なお付き合いをすることが出来なかった。今後は、私にとって第二の故郷とも

言える川越で、中学・高校時代の知人、友人と旧交を温めていきたいと考えている。

S 君

野口 八郎

私達は敗戦色濃い、昭和二十年（一九四五）四月、埼玉県立川越中学校へ入学。

八月十五日に敗戦を迎え、戦後の学制等の変更により昭和二十六年（一九五二）三月、埼玉県立川越高等学校第三回生として卒業した。

当時、朝鮮戦争は一進一退の状態であったと思う。

その後講和条約等を経て、今迄の混乱の世相も漸く明るさを取り戻し、戦後の復興を成し神武・岩戸の拡大景気を迎え、国力も増大し、第一次・第二次のオイルショックを消化し、今日を迎えた。

私達はその様な劇的な変化の時代に、青春と壮年の時を過し、それなりに社会に貢献したという自負心を各々皆様お持ちであると思います。

私は卒業以来、故郷を離れ、勤務の関係上、全国を転々と廻っておりました。

その時、いつも川越より様子をお知らせ下さったのがS君でありました。

S君は川越中学校、川越高等学校当時は、入間郡山田村（現在は川越市山田）のご出身で学校までは自転車通学で、青春時代をご一緒させていただきました。

今日まで相も変わらず、お世話下されたことを感謝しております。

私も本社勤務になり、クラス会等に出席の機会を持てる様になり、出席させていただきますと、S君をはじめ地元有志のご苦勞を見てただただ、感謝しておった次第です。

そしてS君とは、斉藤恒君です。

感謝の心をこめて、誌上をお借りして、記した次第です。今後もよろしくお願い致します。

麦秋の頃

遠藤 公平

県立川越中学校へ入学したのは、昭和二十年四月。空襲は日夜激しく、食糧をはじめ、物資窮乏のさなかだった。半ズボンに端切れを足し、長ズボンに調整して、ゲートルを初めて巻いた。三つ年上の姉が、おぼつかない裁断で作ってくれた長ズボンが、唯一の制服だった。中学校に駐屯していた兵隊が、飯盒で赤飯を食べていた。家の者に、ひそかに話すと、それは高梁こうりょうだと笑われた。空腹故の幻視だった。漢文という生まれ初めて初めての授業は、上級学校に入った意識を新たにさせた。「子曰ク、学ビテ時ニ之ヲ習ウ、亦悦バシカラズ乎。朋アリ遠方ヨリ来ル、亦楽シカラズ乎」教室中一斉に唱和する。つい数か月前迄、小学校で歴代天皇の御名や、教育勅語を暗唱したのが、遠くのことかと思えた。柔道部に入部して、受身の練習。今では不必要なトレーニングとされている、兎跳びでは、大腿四頭筋の痛みを、数日かこちながらも、堪えて、大人への脱皮を試行した。先輩後輩という縦社会への第一歩だった。

戦線が熾烈を極めてくると、勤労働員として、防空壕掘り、運動場の開墾、近在の農家の手伝いに明け暮れた。校内の植込みの周囲は茶の木の生垣だった。新緑が出揃う頃に、茶摘みの初体験。中指、人差し指、拇指の三本で、若芽を摘み取る。茶洪が黒く指を染めた。次いで校内の青梅の収穫。竹の竿で梅の枝を打ち、実を落とす。青梅は甘く誘惑に満ちた芳香を放つ。青酸毒があるから、食べてはいけないと、親からきつく言い付けられていた。慢性空腹と初夏の香りに誘われるように、青い果実を口にした。私にとっては、禁を破る大冒険だった。数人の友達も一緒だった。何事も起らなかった。家に帰って夜になった。悪は暴かれるもの、腹が痛くなってきた。昼間の出来事を母に話した。父親に手を引かれるようにして、掛りつけの渡辺医院に診察を受けに行った。赤い電灯の光の下で、玄関の開くのを待った。先生と父が、私の病気とは何等関係ない話題で、楽しみに話していた。診察を受けながら、私は何の不安もなくなっていた。先生は「チア」といって、看護婦に注射を用意させた。帰路、私は助かったと実感した。友達も同じような事態になっているのだろうか。明日への不安が広がった。今にして思えば、注射は何であったのか。塩酸チアミンであったか、それとも、スルファチアゾールであったのか。それはどうでもよい。青酸毒なら腹痛ではすまされない。万事承知の渡辺先生は私にとって、名医でありつづけている。当時、私は医者になろうと思っていなかった。

狭山市は川越寄りの田舎、新狭山のはずれで、医院を開業して三十年になる。当初、周辺は殆ど田畠だった。来院する人は、農家の人達なので、農繁期には当方暇な日々となる。家の周囲の土地に作物をつくり、江戸期の医者よろしく、半農半医と気取って過した。農家は春蚕、苗代作り、田おこしと重なる。特に茶摘みの頃は繁忙を極めた。大きな籠に茶を摘みとり、茶工場へ運び込む。売り渡すのもあり、自家用に製茶してもらおうのもあった。近く

の市村栄一君（県議となつたが、他界した）は、この時期が最も忙しかった。製茶業をしていたからだ。山と積まれた茶の葉の中に、僅かな板の間を得て坐りこんでいた。日焼けしてかなり憔悴した顔を、僅かな裸電球の光にうつし出していた。徹夜で茶工場を管理していた彼を垣間見ながら、私は農作業に疲れ果てた人々を往診して歩いた。茶渋で染まり、ささくれ立った手の持主達だった。

川中時代、鶴ヶ島で初めて麦刈りをした。主人が出征している農家の手伝いだ。見ようみまねで、せつせと麦を刈った。鎌が自由に使えなくて、既に植えてあつた、さつま芋の苗を切りとつてしまった。米一粒が一年かかる。その重みを教え込まれていた当時なので、芋も同じに考えた。大変なことをしてしまつたと思つた。農家出身の友人が私の失敗を知つて、さつまの苗をよこせといつた。彼はさつまの茎を土の中に押し込んで、何くわぬ顔をしていた。私の心配を払拭するために、ごまかしてくれたのだ。ありがたいと思つた。今の記憶では細田君だつたと思ふ。彼は主人のいない農家で、不用品同様な黒牛を引き出して来た。荷車を付け、牛に鞭をあてた。戦車よろしく、畠へと突進した。勿論、我等同級生は荷台に同乗して大はしやぎ。黒牛の臀部の皮から、赤い血が流れていたのが痛々しかった。麦の刈取りと運搬はピッチが上つた。三時のおやつには何がいかと、この家のおばさんが聞いた。細田君は「ぼたもちがいい」と万事心得ていて返事してくれた。麦藁の埃にまぎれて、三時のおやつになつた。「ぼたもち」とは一体どんなものなのか、私は知らなかつた。その家のおばあさんが、ニコニコしながら私達の手のひらに取つてくれたのは「おはぎ」だつた。大きな、たつぷりとつぶし餡がついた「おはぎ」だつた。甘い！こんなうまい物が農家にはあつたのだ。手持ちの砂糖を全部使つての振舞だといつていた。女手だけの農家にとつて、大分役にたつたらしい。それも、牛の戦車に負うところが大きい。以後、私は「おはぎ」と「ぼたもち」の関

係にとらわれて来た。つい先日、中公新書『モチの文化誌』に接した。殆ど、その回答を得て、私のぼたもち考はやつと終った。最近、皇太子殿下の御成婚で、宮中の報道が多い。皇室用語では「おはぎ」のことを「やわやわ」というのだそう。公家世界に縁のない下じもには、珍しく聞こえる。いかにも京風の言葉だが、うまそうではない。

今、学校では「いじめ」が問題になっている。昔からあったことだ。町の子供が周辺の在方へ行くと、田舎の悪童達が取り囲んでいじめるのだ。生活の差、文化の格差が、所沢あたりでもあった。象徴的なのは、町の子供は洋服、在方の子供は和服だった。今ではどっちが高級かと戸惑ってしまう。食糧不足で、町なかでは主な食糧品は配給制だった。子供の多い家庭では大いに困窮した。子供五人の吾が父親は、近隣の農家へ伝手を頼りに、食糧の買出しに行った。話がついた時には、翌朝早く、私が自転車、リヤカーで受け取りに行くのが常だった。中学登校前の一仕事だ。私は新調した川中の帽子をかぶって行った。白線帽に初雁の校章が光っていた。家を出て西へ向った。金山町の三叉路を右へ行く、小手指の天神様へ行く道だ。家並が切れるあたりで、武蔵野線（現在、西武池袋線）のガードを潜る。ここからは、よその村だ。ひたすら、自転車をごく。リヤカーが後からこづく。森閑とした空気を覆うように両側から繁る大木の隧道。中は薄暗く、湿り気と冷気が淀んでいた。やはり、出て来た。田舎の悪太郎共が、私の行く手を塞いだ。仕方ない、何としても食糧を引き取らねばならない。目的の為、一心に自転車をこいだ。敵中突破。すると、目の前がひらけた。悪太郎共が道を開けた。あれは川中だ、と言って去って行った。その時程、白線帽の有難さを感じたことはなかった。目指す農家へ着いた。その庭先で見たのは、さつま芋の苗床だった。未だ芽がついているさつま芋もあった。芋が大きく見えた。その苗をどうするかをそこで学習した。

そして、私が手に入れたさつま芋は、苗を取った残り物だった。細田君が私の失敗を隠蔽すべく、芋の茎を土に押し込んだのは、さつま作りの当然の作業だった。私は何も知らなかったが、彼にしてみれば、当りまえの作業だったと理解した。

当時、登下校は警報下が多く、かなり危険だった。親の気持を思うと、その心配は計り知れない。入間川駅（現在、狭山市駅）で、空襲警報発令。運転手は早く電車から離れろと叫ぶ。電車が敵機の標的になるからだ。皆ホームから電車道に飛び降りて、ちりぢりに散った。入曾に向う踏切の手前左側に、一叢の竹林があった。多くの人々が、その方向へ走っていった。しかし、P51戦闘機が低空で、我々に向って来るではないか。私も竹林を指していた。咄嗟に方向を変えて、数人の友達と共に、左手斜面の青草の上を滑り降りた。行き着いた処は麦島。まだ、刈取りしていない。黄いろく熟れて、立ち並ぶ麦の畝の間に身を伏せた。麦島の中でも身体が隠せた（現在、この麦島の場所は、低地が埋め立てられ、狭山市駅東口、駅前広場となり、狭山台行の西武バスが発着している）。執拗に敵機は入間川の飛行場へ機銃掃射を浴びせている。かねてから、訓練した通りに、爆風から身を守るため、目と耳を指で押おさえて伏していた。しかし、恐い物見たさもあったし、この世の終りだとも思って、空をそっと見上げた。頭上で敵機が方向転換して、再び飛行場目指して突っ込んでいく。P51のパイロットの顔が見えた。鬼畜ではなく人間だった。小肥りで、口をもぐもぐさせ、飛行帽をかぶり、下界を見おろしていた。目が合った。もうだめだと半ば覚悟した。P51の波状攻撃は続いた。顔の上で機体の腹を見せて、敵機が旋回するのを見てみると、電車も私も、敵に発見されているのは明らかだ。いつ銃口が私に向って来るのか、恐怖を越えて諦観に近かった。これまでが私の人生だった。女々しいが、最期に母だけには逢いたいと思った。自分の家の中が、あれこれ心に映る。私がかこ

で死んでいることだけでも告げなかった。たった、十三歳なのだ。麦島を上から見れば全部分ってしまうのは当然。頭もしりも隠せなかった。そんな計算をする暇もなかった。安全な場所迄、逃げ切れなかったのは、自分の選んだ責任であり、自分の運命でもあった。戦後、誰かと誰かが麦島という歌が流行した。それを耳にする度に、入間川駅の麦島を想起した。ロマンチックで甘美なあやしさは塵だになかった。平和時に生きる者は誰もが、俯瞰の視点ではなく、水平の視座におるらしい。

現在、入間川町は狭山市となっている。所沢に生れ狭山市に居を構えている。戦中体験の町で、平和な時代を過している。アメリカ本土には、未だ足を踏み入れていない。人間の歴史が余りにも飛躍しているからだ。私はかつての同盟国だからと言うのではないが、イタリアを選んで旅を続けている。中学生時代、世界史は全然分らずに過した。ギリシアとマケドニアだけが不思議と記憶にある。ギリシアのアポロンの大理石彫像に似た、佐々木先生の特徴ある、ねむたげな口調が耳に残っているからだ。

エトルスクから始まり、ローマ美術へと、美術の流れに誘われて旅をしている。フィレンツェ・ルネサンスに、エミリア・ローマニヤ街道のマニエリスムそしてローマ・バロックへと、イタリアの田舎道を妻と二人だけで歩いている。今年も、イタリアの麦秋の頃、コモの工人のコモ湖畔にある、ピラ・デステと、美の庇護者イザベラ・デステのマントヴァに居座って、ギリシアからエステ家迄の伝言に耳をそばだて、目を見はるかす予定。風の中の女心と唄った、オペラ・リゴレットの舞台となった湖、ラーゴ・デイ・メッツオの向う側からマントヴァの古城を、ゆっくりと眺めるのを楽しみにしている。

まだまだ、想い出は尽きない。日清製粉で終戦を迎えたこと。戦後、物理班で浅間登山をした。鉱石ラジオをひ

ねくり廻し、ウクレレを弾いてみたり、クラシック音楽に傾倒したり。金島君、飯田君と草軽電鉄に乗って、草津白根山に登ったこと。佐藤徳四郎先生の国語の授業で、心ならずも、恋愛詩を級友の前で披露したり、友人に貸した俳句が入選したり。バレーボールで青春を燃やした。この文集のお蔭で、自分の青春を振り返る時を過せた。この度の企画に参加出来て、感謝しながら筆を置く次第です。

私はかく学んだ

松村 久

私達(四名)は昭和二十三年春、高等小学校一、二年、新制中学三年の三年間、市、町、村立の学校で学んだ者で最初の新制高校一年生として埼玉県立川越高校へ入学した。

私は、この三年間の多くを体育の自学自習で過ごし、健康には恵まれていたと記憶している。

入学当初、学んだ科目は殆ど初めて目にし耳にするもので、黒板に書かれたものを、ノートに書き取ることも出来ぬ間に拭き消され、明日は来たくないと考えたものだった。

理解出来たものも出来ないものも、唯ひたすら暗記するだけだった。一年の担当は望月先生で、「易しい事から教えてやりたいのだが、皆が知っていることなので松村君が頑張ってもらいたい」と言われた。先輩に「十二時前には寝られないよ」と言われ、自分はそんなに早く寝てはいなかったので安心した。深夜母親から「そんなに勉強すると死んでしまうよ」と言われ、死んだら一生懸命勉強して死んだのだと褒められると思いき喜んだ。布団に入ると

寝込んでしまうので、机の椅子に座って頭から毛布をかぶり、三十分位仮眠し、その後夜明けまで最も怖い掛象(掛原)先生の数学の予習をし、トイレに行きながら勉強し、朝食を取りながら勉強し、自転車の上で英単語を覚え、電車を待つ間、電車の中、電車を降りて学校までの道中、学校へ着くとすぐ椅子に座り、後を振向くこともなく一時間の予習をし、一時限が終ると二時間の予習をし、昼食がすむと午後の授業の予習をし、授業が終ると「さようなら」を言つて帰宅の途につき、来たときと同じように勉強しながら帰った。

家につくと家族と話すこともなく、勉強は早朝椅子の上でまどろむまで、これが連日繰り返された。日曜日の朝足元に線香をたき、仏になった気分になり、精神の統一をはかりながら机に向うと、脇目もふらず勉強し、唯周囲が明るくなりまた暗くなつていくのが感じられるだけだった。かくして、一学期の中間試験には不可を三個取り、通信簿と共に父兄宛の手紙を渡されたが、以後は手紙を渡されることもなく二学期には学年中位となり、二年の二学期には上位になった。以後も期末テストの終つた日の夜にだけ、十時に床につき翌日より次期期末テストの為に頑張った。

三年生の秋、二、三年生全員と、一部卒業生を含めた模擬試験の結果が発表された日に学校からの帰途、木島先生から、「この結果が一年早くていれば東大に合格出来たのにね」と言われた。

周囲の友達に恵まれたことと、多忙故に「さわらぬ神に祟りなし」の諺どおりの学生生活が送れたことで現在楽しいことのみ多い思い出が残っている。

昭和二十六年四月社会に船出し、平成四年四月定年の港に入り、その収穫はまことに大漁であったと自負し、これもひとえに川高精神の権化であると信じています。

川中・川高時代の思い出

君塚 功

私が旧制の県立川越中学校に入学したのは、太平洋戦争末期の昭和二十年四月であった。当時入学試験は、口頭試問と身体検査のみで、筆記試験は行われなかった。小学校の内申書が重視されたらしい。戦争中のことであり、小学校時代級長とか副級長をやった者が、有利だった様である。

口頭試問は、B 29は何人乗りか？ 六機撃墜したら、何人敵を殺した事になるか、と聞かれたのを覚えている。その時、「君は落ち着いているな」と誉められた。

これは、小学校六年の時、一年間神棚の前で十分間坐禅をやらされたからと思われる。もう少し続けていたら、もっと落ち着いた人間になっていたと思う。

川中に入っすぐ学力試験が行われた。各小学校の内申書が正しかったかを判断するため、行なったそうだが、二百人中、百八十番位だったと、記憶している。飯能方面から行った連中はあまり良くなかった。西部方面のレベルが低かったのかも知れない。

中学二年の時、向上賞を貰った。学生時代を通じて、賞を貰ったのはこれが初めて最後である。

さて、通学だが、朝六時の電車（当時武蔵野線）に乗り、稲荷山公園駅で降りて、入間川駅まで歩き、西武線で本川越駅まで行き、そこから上級生の引率で、整列して学校まで歩いて行き、時には走らされた。

当時、戦闘帽をかぶり、ゲートルを両下腿に巻いていた。

現在、飯能で稻荷山公園―入間川駅を往復歩いた我々より五年先輩の人達から我々の学年まで、ゲートル会というのを作って、親睦を深めている。尚、この会には一緒に歩いた横田先生（ゲジさん）も元気な姿で、おみえになっている。

川中に入って終戦までは、空襲がひどくなり、授業が時々中止されて、家に帰された。帰りの電車に乗っていて戦闘機の機銃掃射をうけ、電車から降りて畑に避難したことがあった。又交通がストップして川越から飯能まで歩いて帰った事もあった。

当時の川中の先生はこわかった。特に印象に残っているのは、教練の先生でO君が注意され、「僕ですか」と言ったら、か？ というのは、人を疑うことだと怒鳴られ、木銃で頭をつつかれた。その他にも何人か頭をつつかれた。もう一つ忘れないのは、防空壕を先生に怒鳴られながら毎日掘られ、完成した途端に、終戦になり、今度は防空壕をこわす作業を又、怒鳴られながら、やらされた。

終戦後、授業は比較的落着きをとりましたが、中学二年頃までは、軍の学校に行っていた人（例えば、予科練帰りの人々）が、上級生に入り、この人達がこわかった。講堂に集められ、ヤキを入られた事が何回もあった。

中学三年より六・三・三制の新制度となり、我々は併設中学三年となり、この頃より上級生はおとなしくなった。高校に入ってから、クラブ活動も始まり、私は山岳部に入った。白馬、八ヶ岳縦走、奥秩父縦走、秩父両神山の冬登山等に参加した。木村先生を中心として糟谷・柳下・市村・金子勇二・宮崎義宣・内沼・田村君等のメンバーであった。山小屋で酒を飲み、旧制高校の寮歌をよく歌った。特に、今は亡き市村君が登山中小さい身体で、決

して弱音をはかず頑張り、旧制三高の寮歌を愛唱していたのが、懐かしく思い出される。

川高生になって

田島晃夫

私は、旧制の川越工業に入り、新制となって川越高校に入学しました。川越高校入学は昭和二十三年四月でした。編入というか転入というか、その英語の試験の中で、USAの意味と略さない形を書けというような問題があったのを憶えています。もちろん書けましたけれど。

それで、私なりに川工と川高の比較を少し書きたいと思います。

まず先に、川高(中)生は「まじめ」という先入観がありました。

(一) 川高生になって間もなくの事です。私もあの白線の入った帽子に、小学校からあこがれをもっていました。当時はまだ一本線に川中の徽章でした。私もその帽子をかぶり、或るダムへ友人とボートをこぎに行きました。その時です。ボート小屋に上級生がいたのです。しかもその上級生はタバコを吸っているではありませんか！驚いたのなんの。私が川工生であった頃、よく先輩の家へ行きました。でもそこでは先輩は親も公認みだだったので、その上級生が川工生だったら驚くこともなかったと思いますが、川高(中)生は清廉潔白の紳士だと思っていましたのでその驚きは倍増されたのです。

(二) やはり川高に入学して間もない頃、弁当を持って行った最初の日だったと思います。川工生の頃はいつも二

時間目か三時間目の休み時間には、弁当は食べるのが普通の習慣になっていました。そんなつもりで二時間目の休み時間にこの弁当を机の上に出してしまいました。そしたら何と、二時間目の休み時間に食べる人は一人もいませんでした。三時間目もそうでした。私は、やはり川高生は「まじめ」なんだなと思いました。それがもの一か月もたたないうちに、川工生と同じことになっているではありませんか。でもこれもあとで解ったことですが、遠い所から来ている人にとってはあたりまえのことでした。吾野の方から来ている人たちは（私も何度か遊びに行きました）朝五時頃には起きて家を出るわけですから、おひるまで待つわけにはいかないのですね。

(三) 川工生の頃、下校の際よくパチンコ屋へ入りました。その頃のパチンコ屋は、今みたいに、大きな、きれいな店ではなく、屋台みたいな、十台ぐらい機械のある店で、しかも台は、ヒット、二塁打、三塁打、ホームランなどでした。そのお店へ白線の帽子をかぶって入りました。川工時代のくせだったのと川工生の友人と会う約束だったのかも知れません。そしたら、その店のおやじさんが、「ほう、白線のぼうやが来るのかよ」なんて言うではありませんか。

又、川工時代の同級生の兄さんと本川越駅で、ばったり会いました。そしたら、蓮馨寺へ行こうと言うてはありませんか。蓮馨寺は屋台やら人やらいつでも人がいっぱいでした。その通りの前には熊野神社があり、そこにも小さな小さな店がたくさんありました。その一軒に入りました。その店で梅割りのしょうちゅうをコップで二杯ものんだのです。もちろん白線の帽子をかぶってました。

でも、両方の店とも、そのおやじさんが言うことには「川高生」は「まじめ」ということでした。だから私がついというより、白線の帽子が入って来たことにびっくりしたのだと思います。その後白線は二本となり徽章も雁をあ

しらった川高の徽章へと変りました。美術の先生のデザインということです。

(四) 修学旅行の時、一番前の列車一輛は、どこかの中学校の団体でした。それが途中で降りたのであいていました。

同じクラスの人が、その列車に行こうというので一緒に行きましたら、十本入りのピースを出したではありませんか(その当時はフィルター付きなんてありませんでした)。そのピースを吸ったことは今でも憶えています。

なお、京都駅は私達が帰って二日後に焼けてしまいました。私はその京都駅を、京都に着くとすぐ、列からはなれ、写真にとっておいたので、学校に帰ってから、その原版が引く手あまたで、多くの人に貸したのを憶えています。

最後に、これは比較ではありません。部活で野球部に入らないかなんてさそいもありましたが、運動部には入らず、三年生の時の郷土部に籍を置いてあつたと思います。当時、皆、学生服が多かつたのですが、私は学生服は持っていませんでした。工員の着る上着を自分でウエストをちぢめ、ミシンをふみ、カバンをズックの布で作り、帽子も自分で作りました。そんな上着を着ていましたが、父親の背広の上衣も着ました。そんな或る日郷土部が何かの集まりのあと、教頭先生に呼ばれ、彼いわく「その背広の上衣はまずい。何とかしろ」と言われました。母は父の将校の軍服を黒く染め、えりを詰襟になおし、私はそれを着て高校へ通いました。

今の川高生には制服がありません。自由なのです。おそらく黒の詰襟の学生服なんて、高校生になつてからも買っていないと思います。まして帽子なんて。

従つて、白線にあこがれるとか徽章の形なんか知っている生徒は少ないのではないでしようか。

大抵の生徒はジーンズです。とにかく、黒い服とかズボンをあまり見ませんし、まして帽子をかぶった姿を最近は見えていません。

卒業後私は埼玉大学へ入学しました。川高の三年生の時はA組でした。A組では同級会を毎年行ない十年以上続いたと思います。私も毎年出席していました。それが全体へと移行しました。それからはあまり出席しません。

一昨年川越プリンスホテルで同窓会が行なわれ、出席しました。懐かしい顔もありましたがわからない人もありました。話をしない人もありました。故人になった人もいると聞きました。

先日、松岡君から電話があり、何か書いてくれとのことでした。そこで以上のようなことを書いてみました。ここでは先生方の名前や友人達の名前はあえて出しませんでした。

定年を迎え、過去の長い思いが浮かんできます。しかし、健康こそ、かけがえない財産です。十年ぐらい前からジョギングをしています。四月からは二、三日に一度、五キロ―七キロ走っています。走るのはつらいときもありますし、又、いつ頃まで続くかわかりませんが、休まず続けることが良い事だと信じ走っています。

いつまでも、お互いに、健康でありたいものです。

入間川同期生

竹 沢 靖

昭和二十年、終戦の年に入間川町の国民学校（小学校）から、憧れの川越中学へ入学した。

当時の入間川町の情景は、戦時下であれば当然なことだが、軍人の姿が特に多かった記憶がある。これは近くに陸軍航空士官学校や関連の飛行場施設があったためだろう。

アメリカ軍、B 29爆撃機来襲の警報で、よく避難させられたが、それ程切羽詰った避難は少なかったように思う。むしろ灯火管制や食べ物がお腹いっぱい食べられない状況の方が辛かった。

川越中学へ入学した同期生は、大野哲哉君、木村定雄君、小沢孝志君、青木勸輔君、松本進君、長谷川栄君、大野良三君等と私の八名、みんな仲の良い連中だったが、勉強が良くてきたのは大野哲哉君と長谷川栄君、ガキ大将で威張っていたのは、家業が酒屋の木村定雄君、これに張り合っていたのが負けん気の強い酒屋の青木勸輔君だった。大野哲哉君は身体も大きく大物の風格があり、みなが目おいていた存在だった。松本進君はちよつと偏屈なところがあつてみなに敬遠されることもあった。私は家が近い関係とウマが合うのかよく木村定雄君、小沢孝志君と一緒にすることが多かったが、勉強の方は、大野哲哉君に教えてもらった。

私達の川越中学への通学は西武線通学で二両連結車両の先頭車両に乗ることが決まりだった。これは後続車両は女子学生が乗車するので乗ってはいけないということだった。沿線風景で忘れられないことは、途中駅の南大塚駅の入間川寄りに、大きな肥溜こよだめ(人糞池)があったこと、東京のウンコを西武線の貨車が集めてきたわけで、これを農作物の肥料にしようとしたのだろうか。通る度に嗅ぐと臭くてたまらなかつた。本川越駅から川越中学までのコースは中央通りを直進し蓮馨寺のところを曲つて鶴川座の前を通り久保町の方へと辿つたのと、「時の鐘」の前を通つて行くコースなどがあつた。白線入りの戦闘帽に背囊、スネにゲートルを捲いて簡易地下足袋姿の通学だった。上級生の指揮で隊列を組み、走つたり早足だつたり、上級生が大変怖かつたことを思い出す。

私の一年のクラスは三組で忍田先生の担任だった。吉崎聰君、須永君、柴野君が同級にいた。入学後の授業では、みんな手を挙げて答えている様子を、こんな都会の秀才の中でついでにいけるのか不安な日々だった。

また「バカタレ」というアダ名の軍事教官が、教練を担当し、生徒に気合を入れ、できの悪い生徒は殴られたり、小突かれたりするので、私も教練の時はいつ、やられるか戦々恐々だった。

学業の方は気後れしながら、低空飛行でどうやら過ごしたが、大変だったのは、体育部の相撲部に拒みきれなくて入部してしまったことである。入間川の同期生大野哲哉君の兄さんが四年生で相撲部の副主将をしていたこと、勧誘されて大野哲哉君は勿論、小沢孝志君、松本進君も一緒に入らされた。

通用門を入れて直ぐの土俵で、稽古をするのだが、ゴツゴツした粗い布地のマワシを締めて、固い土俵の上で主に上級生に稽古をつけてもらう。投げ飛ばされたり、たたきつけられる稽古は厳しいもので、特に人並より痩せてチビで軟弱な私は、この稽古には到底耐えられないと思い、松本進君と計って、稽古のときは、トンズラすることにした。当然、見つかったらマズイので正門とか通用門からは出られない。そこで校庭南側の掘割を通り、御岳山富士見櫓のワキを通って逃げた。結果は、将来性のない新入部員は見放しても影響ないということで逃げて休んでいるうちに相撲部との縁が切れ、ホツとした。

さて、私共一年生にとって、共通の忘れえぬことと言えば、あの八月十五日、天皇陛下の戦争終結への玉音放送の思い出である。

夏休中だったが当日は登校日で、正午を期し、中学校の正面玄関玉砂利敷きの前に整列して、焼けるような暑さのなかで『万世のために太平を開かんと欲す』の天皇陛下のお言葉に、みんな茫然としていた。事務員、先生の申

には泣き出しそうな人もいたが私は特に昂る^{たかぶ}気持はなかったように思う。いろいろな感情が沸き上がってきたのは家に帰って、父をはじめまわりの人々の話などを繰り返して聞かされてからのことだった。日本が勝つことが当然と思っていたのでショックを受けたが、それより、勝ったアメリカ軍がやがて上陸し進駐してくるだろう恐怖と今後先々がどうなるのだろうかという不安の方が強かった。父が警察関係だったので特に難しい事態になることを心配した。

終戦後の学校生活は、軍事教練がなくなり、校庭の芋畑（他の野菜もあった）が運動場に戻り、軍事又は増産関連で工場へ行っていた上級生がみな戻ってきたことだと思ふ。通学での軍隊のような規制はなくなった。

野球やバスケット、庭球などの球技の活動、陸上競技などもトラックを整備し動き始めた。運動部に入らない連中も、徐々にキャッチボールや草野球を昼休みや放課後やり始めた。

入間川同期生も野球チームをつくろうということになってチームを結成した。

八名全員でもチームはできない、まして長谷川栄君は野球をやらない。足らないところは入間川にこだわらずメンバーに加えた。

威張っていた木村定雄君の主導権で、投手は木村定雄君、一塁手は大野哲哉君、二塁手が松本進君、小沢君や大野良三君は外野で、私は足が遅いのとキャッチングがうまいので捕手にまわされた。少し位の雨でも連日、入間川小学校の校庭で練習した。グラブ、ミットとバット、ボールなど貴重なもので大事に大事に使った。ユニホームなどなかった。普段着のスタイルでチームの愛称もなかったが、技術も向上し、対抗試合では一級上のチームに勝ったりしてますます野球にのめりこんでいった。今思うと腹をすかしながら、毎日毎日よく野球練習をしていたと思

う。他にやることがなかったからだ。

このような入間川からの同期生仲間も、中学そして高校卒業まで六年間一緒というわけにはいかなかった。木村定雄君、大野哲哉君、小沢孝志君等、転校したり家庭の都合で途中退められたりした。残念至極であった。また松本進君は高校卒業後、病に倒れとうとう帰らぬ人となってしまった。悔やまれてならない。

その後、私も大学を終え社会人になってからは勤めの関係で長く川越を離れていたのも、みんなの消息はなかなかうかがうことができなかった。先般、川越プリンスホテルでの同窓会で四十数年ぶり、青木勤輔君、小沢孝志君と逢うことができた。その後川中ゴルフコンペでも一緒になった。腕白時代の昔の面影がなつかしく、元氣一杯の様子に本当に嬉しかった。木村定雄君、大野哲哉君、長谷川栄君、大野良三君とも是非会って、入間川時代を語り合いたいと思っている。

老化……断片的な思い出

松平理

戦火が東京から地方にも広がり出した二十年四月、ゲートルに戦闘帽のいでたちで入学、バカタレの連続、蚤糸工場、日清製粉でのくり返しの動員、夜な夜な空襲で逃げまどい、そして終戦——戦後はうすよごれたザラ紙の教科書に、読み取りにくいほど「すみ」がぬられ、ビンタが急減、民主主義という言葉——なにかわけのわからぬ不信感、思い出したくもない時代でした。それから後の併設中学の時代の思い出はさだかではありません。

トコロテン式で進んだ新制高校の三年間、老化とともにどのクラスであったかもさだかではありませんがこの間、わずかに残った記憶の糸をたどっての思い出を二、三記しておきます。

いつの日か生物部に入り、実験や採集に精を出した真面目な時期もあったが、今はなき生物部長の田口氏が三年時、「今から一年にお説教に行く」という一行と共に下級生の誰かれかまわず満水のバケツを持たせ後ろにたたせて、ただニヤニヤしながら机の間を回っていたこと、昼休みに富士見櫓の裏山で、クルミひろいに夢中になり五時限をさぼってしまったことなど。

卒業間際古ぼけたよろいばりの校舎の窓は、上下開閉式で両側に小型の鬼の金棒のようなおもり錘が、丈夫なひもでついていた。もう一人のワルと共に放課後ひもを切り、今までの六年間のハライセのつもりで、二階の教室から数本の鬼の金棒をひょうたん池にドボンドボン、懐かしい思い出である。

はや半世紀になんなんとする時の流れは、校舎を変え、町を変え……。当時の面影を残すものは数少ない。ただ校門の楠の木だけが一まわりも二まわりも太く大きくそびえたっているのが印象的である（口絵参照）。

時移り 老化始まるこの年に

とわに変わらぬ若き葉をつけ

川高の歴史ささえて更に栄えよ

楠の大大木

断片的青春のページより

村山祥男

還暦などは意識もしていなかったのに、女房の奴が一年間違えて赤いスポーツシャツを買ってきて、一年早いぞと文句をつけたことがあった。しかし気は若いものの、事実すでに還暦であることは間違いない。

文集を出すというのは実に名案だ。学校にも自宅にも保存されるし、名誉も恥もひつくるめて、残るといものはありがたい。中に武勇伝や艶文などあれば、読む者にも大うけだろう。私も年賀状の付き合いは未だに続いていて、これも繋がり切れずにいる嬉しい形となっている。

斎藤弘行氏は、現在大学勤めのえらいさんだが、以前修業中だった私の勤め先の国分株式会社にはよく顔を出してくれた。学生時代にはわからなかったが、酒は豪の字上戸、飲めば愉快になるといいうい酒飲みだった。彼の訝えた目と学識、ユーモアなど申し分ない上、愉快に飲めるのだから、学生達には随分人気があるだろうと拝察している。私は四代続いた酒屋の当主であるのに、当時も今もアルコールには弱く、替わりにジュースでその場の雰囲気ですぐ酔えるという特技を習得している。彼とは卒業前も親しかったが、卒業後も新宿でよく逢ったのは、大学も同じだったということもあるだろう。

さて四十年も前の記憶は、終戦時のめまぐるしい世の移り変わりのせいか次第に薄れ、特記に値するものもないが、入学直後の厳しい整列で、三角定規風のを爪先からあてがわれ、三十度より広いと木銃で尻をつつかれた

ことや、下校の途中、本川越―南大塚間で機銃掃射を受け、電車から麦畑へ、頭隠して尻隠さずで逃れ出たこと、戦後所沢の御幸町駅で電車を待つ間、通過する「おわい列車」の「おわい」を浴びたこと、蓮馨寺闇市の、「ジス イズ ア レックス ハウマツチ テンエン」のおじさん、めがね橋五千メートル走で往路途中の橋の下に隠れ、復路を待つて何食わぬ顔で帰ったことなど、時効ものも混ざって思い出すことは断片的だが、いずれも青春の一ページを飾るもので、懐かしく感慨深く振り返っている。これも文集作成を提起してくださった諸兄のお蔭と深く感謝している次第である。

ここに各位のご多幸とご健勝をお祈りしながら、なお次の企画まで、楽しい人生を語れるよう歳を重ねていきたいと思う。

戦争が終つて・四題

斎藤 弘行

野球の応援

中等学校野球から高等学校野球へと変つたのはいつ頃かはつきりしない。とにかく大宮球場へ応援に行つたことだけは憶えている。文字通り川越線に揺られて、大宮駅から氷川神社の参道を通り、球場へ行つた。参道に多くのバラックがあつたのが印象的だつた。球場での応援といつても、誰がリーダーで、どういうようにやったかまるで憶えていない。どこと対戦し、勝つたのか負けたのかもさだかでない。ということではプレーヤーでない、ただの一

生徒にとって誠に心もとない、愛校心に欠けた応援だったのだろう。それに是が非でも勝ってもらいたいとか、自分をゲームに没入させて応援などしなかったから、そういう意味では青春の血は燃えなかったし、そんな血などなかったといってよいかもしれない。

それでも後年、全国大会の予選を見物しに初雁球場へ行くようになった。どういうわけか、川高とその周辺を歩くのがとてもいいのだ。毎年同じことを一日やってみる。もちろんわが川高が初雁球場でやっているとは限らない。どこの学校でもいいのだ。七月のまだ梅雨もすっきりあけきらない、ある晴れた日、わざわざ歩いて行く。川高の側をぬけて球場へ近づくにつれて歓声が大きくなってくる。不思議に胸が高鳴る。それは中年か老年の血が湧いて来たのだろう。

球場の前にはたいがい大型バスが停っている。チームの人たちが乗って来たのだ。秩父の方からやって来たバスがあるとともに心が熱くなる。そういう遠来のチームが勝つといいなと思う。わが川高がたまたま初雁球場で試合をしたのに何度か出会った。応援の生徒は少ない。反対に、対戦校が私立校のときは、女生徒の応援も加えてとても賑やかだ。見物は内野を避けて外野の土手に陣どることにする。木陰に座る。坂になっていて座り心地がよくない。両校の応援の様子がよく分る。風が吹きぬけて夏の暑さを忘れさせる。空を仰ぎ見ると雲が千切れて飛んで行く。歓声と楽器の音を遠くに聞きつつ目を閉じる。何十年前のことが突然蘇ってくる。具体的には何のことかはつきりしないが、一遍に過去に連れ去られてしまうのだ。川高の校歌がうたわれるときに、ある感情の頂点がやってくる。涙が出る。人が去りかけてわれに返る。高校生のみんなと共に茫然として門を出る。それがまたとても嬉しく、快いだ。何かとてもどえらいことをしたか、何か貴重なものを貰ったという感じで一杯になる。心も弾

んで、郭町、北久保町、上松江町、猪鼻町、志義町などを経て六軒町の旧自宅にもどる。

残念なことはあの球場で、あの当時の同級生の誰にも会わないことだ。外野から双眼鏡でのぞいても、それらしき人を見かけたこともない。もっともこちらがぼけてしまつて、当時の懐かしき人々の顔を忘れてしまつたせいでもあるが。

オケン球場

戦後は各町内に野球チームが続々と誕生した。草野球が最も盛んな時期は多分この昭和二十年代かもしれない。私も第三国民学校出身の川高生で構成された、野球チームに加えてもらった。相手チームは第一および第二国民学校のメンバーだった。球場は市内の各小学校の校庭である。学校が終るとどこからともなく、何組ものチームが集まり試合をしていた。私の所属するチームは、オケンの運動場がホームグラウンドであった。ここを中心にして数々の迷選手が登場し、珍ゲームが繰り返りひろげられた。私も補欠兼フライのとれない外野手として、少しばかりバットを振った。天下広しといえども（とはいっても狭い川越市内のことではあるが）、川高生あこがれのオケンのグラウンドが、ホームグラウンドたるチームはこれまで川越にはないし、今後もない。もっともグラウンドへの出入は、塀の破れ目からすることが多かった。誰も小言をいう人もいないし、学校管理のゆるやかなよき時代であった。

エセ高校生

戦後になって戦闘帽から学帽になったが、高等学校になったというので帽子に白線を二本入れるように決つた。

またはお齒下駄を履いて登校するのも流行った。マントこそつけないが、これで一人前の高等学校生徒になったような気がした。そういう気分が無惨にも破られることになった。昭和二十四年に「青い山脈」が上映され、そこに高等学校の生徒が登場する。それは旧制の高校の生徒である。その人たちの言葉遣いと、行動を見て愕然とするのである。自分の言動がどうも高校生らしくないと気がついたのである。しかもそこに出てくる、数々の女優さん演ずる役割が大そう眩く見えた。フィクションと現実をすっかりとり違えてしまった。その後、小津安二郎の映画をよく見るようになり、原節子が出る「東京物語」「晩春」などのビデオを手に入れて昔を懐かしがる。池袋の文芸地下劇場で、原節子の主演する映画を連日通って見たことがあったが、あの、「青い山脈」に出会うと、何とも言えない気分になった。二本線の入った帽子をかぶった、貧弱な高校生の自分のことが思い出されて、とても恥しくなってしまう。

いままも二十代前後の人たちとバス旅行をし、民宿に泊っていく日かを一緒に過す。バスの中で、夜の民宿で決ってカラオケだ。でもあの映画の主題歌は決して歌われない。彼等は知っているのだが歌わない。平成五年の一月にあの歌の作曲者、服部良一は死んだ。この若い人たちがいつあの歌を歌ってくれるのだろうか。

ゲートルがとれた

川越中学校へ入学して、自宅から学校への通路は誰に教わったかはつきりしないが、裏道伝いのことが多かった。これは上級生に会わない道、つまり敬礼しないでいい道だ。六軒町の自宅を出て志義町通りから、川越郵便局のうしろを行き、山屋の前を通ると銀行にぶつかる。それから江戸町のぬけ道を通って川越図書館の側へ出る。剣道

場を左に見て真つすぐ行けば川中の門の桶を見る。二十分か三十分かかったかどうか。今でもこの道は昔の面影をどうにか残しているようだ。

敗戦になって九月のある朝、家を出てしばらく歩いて、「もうこのゲートルはいらないのじゃないか」という気持ちがあふと心に浮んだ。それは何かの予感だ。志義町あたりに来て前を行く川中生、多分上級生かもしれないがゲートルなしで、長ズボンの裾をひらひらさせて歩いているのを見た。一瞬、自分の目を疑った。自分もそこに立ち止り、ゲートルをはずした。全く無意識でそうしたかのようにだった。とても楽になったような気がした。ちよつと気がひけたようだった。別に誰にたいしてそんなかはつきりしないのだが、どうも格好がつかない感じだ。このまま歩いていいのかしらとも思った。学校へ着くと、ゲートルをつけている人もいたし、ない人もいた。その前日学校を休んだのでどのような指令が出ていたのか知らなかったのだ。

人はよく八月十五日から戦後が始まったというけれど私の戦後はあのゲートルをはずした時、その時間が正に戦後だったと思う。ズボンの軽さもさることながら、今まで何かに縛られ、抑えられていたものが一度に消し飛んでしまった。自由だとか解放だとかいう表現は、後になって大人たちが教えた表現で、決してそんなものではない。今までやってきたことが変わったのだと思った。でも今までのことが悪くてこれからのことが良いのだ、というような価値観の転換など意識にのぼることももちろんなかった。ただ何となく嬉しかったし、でも少しばかり道を歩くのが恥しかっただけである。

あこがれの白線帽

岸 智

入 学

所沢町立小手指小学校から入学。あこがれの白線帽をかぶり、今も健在な母と、御幸町駅（所沢駅と航空公園駅の間にあった）の高いホームの上で、期待と不安の入り交じった気持ちで電車を待っていたのを想い出す。

終戦までの数か月、炎天下の埃っぽい運動場で、ゲートルを巻き、銃剣術でしごかれた光景も忘れられない。

真青な空に掃かれたB29の飛行機雲、ゼロ戦の小さな機影が一瞬キラリと光る。花火のような高射砲の弾幕……。夜間空襲で燃える東京の、不気味な赤い空。超低空で侵入するB29の巨大な機体を青白い探照灯の光が捉える。

陸軍飛行場のあった所沢も空襲の目標となり、終戦直前の七月三十日には、機銃掃射とロケット弾で多数の死者がでた。

雨の神宮外苑の、学徒出陣のフィルムを見るたびに、たまたま生を受けた年代が、戦争に狩り出された世代より、ほんの少し遅かったという偶然が、もって生まれた運命というものなのだろう。

私達の生まれ育った、いわゆる昭和ひとけたの世代は、確かに今日からみれば厳しく貧しい時代だった。が、私自身は、あながち、悪いことばかりではなかったような気がする。

水道はない、ガスはない、電話もない。車はおろか自転車すらない。そして戦中戦後は食べるものさえない……。

今はどうか。冷暖房完備の家に住み、衛星放送を見ながらスコッチを傾け、マイカーを駆って、スキーにゴルフにサーフィン、海外旅行も当たり前……という、何一つ不自由のない暮らしが普通になった。

しかしながら、心の隅にいまひとつ、満たされない何かがあるような気がしてならない。言うなれば、満腹飢餓シンドローム。美味しいものを腹いっぱい食べても、なお満足出来ぬもの足りなさとても言おうか。

けれども、私達の育った時代は、必ずしもそうではなかったように思う。空きっ腹を抱えた、ないないづくしの生活ではあっても、日々、それなりの充実感があつたようにも思えるのだが……。

足を知ればこそ、今日享受している生活の豊かさについて、そこその満腹満足感を持ち得るのだろう。

といつても、環境破壊はとどまるところを知らず、山紫水明は死語と化し、思いやりや礼節に欠け、政治不信極まる今日の世相に満足しているわけでは、毛頭ない。

閑話休題。

降るような蟬しぐれの庭で、昭和天皇の敗戦の詔勅を雑音のひどいラジオで聞き、混沌たる世相のなかで二学期が始まった。

小学校ではトップだった成績もアベレージクラスにダウン、名門中学のレベルの高さを思い知らされることになった。

通学電車は、いつも超満員。トッポイ運ちゃん^が、帽子を阿弥陀にかぶり、タバコをふかしながら片手運転していた姿^が眼に浮かぶ。

幹事諸兄の送ってくれた、いたれりつくせりのキーワードを見ながら、あの当時、部活^がこれほどあつたとは意

外だった。

部活の功罪はひとまず措くとして、若かりし時代の共通の体験が、往々にして、生涯つづく友情に発展することは、例えば、日経の「私の履歴書」にも明らか。

小生はといえば、ガットの切れたラケットと、パンクしてばかりのボールで、テニスもどきの遊びしかしなかったことが、今にして悔やまれる。

スポーツと言えば、やはり、めがね橋往復五千メートルマラソンを、喉のひりつきと共に思い出す。苦しかった体験も、時の流れは、ほろ苦さと懐かしさに変えていくものなのだろう。

「デキが良ければ句誌に載せてやる」というトクさんの甘言に釣られて、通学の往き帰り、あれこれ駄句をひねったが、結局は全部ボツ。生涯学習としてかまびすしい今日、パソコンの知恵でも借りて、六十の手習いも悪くはないかもしれない。

交 友

柳下と仲が良かった。武家屋敷のような回り廊下のある、成増の広い家によく泊まりに行った。築山の奥の静かな離れで、S盤と言われた、赤いラベルのレコードで聞いたドビュッシーの「月の光」。楽譜も読めず、ピアノも弾けぬカラオケ音痴の小生は、今でもこの曲が一番好きだ。

筑波大にいる長谷川は、ハンサムで頭脳明晰、あこがれの親友だった。入間川町に住んでいた。今はドブ川のように入間川も、当時は鮎も遡上する清流だった。暮れなずむまで川面に釣り糸を垂れながら、語り合った青春の甘ずっぱさを懐かしく思い出す。彼とは、社会人になってからも何度かテニスをしたが、いつの日にかまたコートで、

相まみえる機会は巡ってくるのだろうか？

もう一人、歩いて十分の所で酒屋を営む村山。昭和三十年、初任給が九千六百円の時ダットサンはなんと百万円。車はサラリーマンにとって、一生手の届かない贅沢品だった。かたつむりみたいにライトの飛び出たダットサントラックで、丸屋酒店の手伝いをしながら免許をとった時は、飛びあがらんばかりにうれしかった。途中更新を忘れ、昭和二十九年の取得月日は消えてしまったが、今も誇らかに、二種免許として登録されている。

近況

昨年三十七年間勤めた都庁を退職、NECの新入社員となった。休暇もままならなかった現役時代と違い、自由時間がたっぷりあるという意味で充実した第二の人生である。

まず、四月はニセコアンスプリの春スキー、五月、八甲田山、スキーを背負って半日、標高千八百メートルの大岳頂上からの滑降は、豪快そのものだった。八月、三十年来の懸案だった槍ヶ穂高縦走、そして、快晴の秋十月、黒部溪谷下の廊下を歩き、正月、カナダはバンクーバーのヘリスキーに挑戦、ダイヤモンドダストの燦々氷河の滑降は記憶に鮮明だ。

還暦

ゴルフで言えば、一ラウンド。カラブリから始まって、OB、池ポチャ、ダフリにトップにスライス、フック。バンカーにつかまってもがいたり、林の中で方向を見失ったことも一再ならず。ナイスショットのさほど多くはない人生だったような気がする。が、ホールインワンの出たところをみると、帳尻は案外合っているのかもしれない。父は一昨年、ワンハーフ目前にして逝った。母は来年ワンハーフ回れるだろう。果たして小生は、何番でホール

アウトすることやら……？ 最後は、エースかチップインバーディーで、スパツといきたいものだが……。

「青春とは人生のある期間をいうのではなく心の様相をいうのだ」ウルマンの有名な詩である。「年を重ねただけで人は老いない。情熱を失ったときに老いるのだ……」と続く。

あす四月一日、小生は一ラウンド回りを了える。

それでは、川の流れのように、夢探しながら、二ラウンド目に出発することにしよう。

たまげた話

宮崎 敏 昭

第一話 昭和二十年六月、中学一年の一学期、当日は午前中下校、加畑君と自転車で、市内の「札の辻」交差点を通過しようとした時、急に後ろからバリバリッと、機銃掃射を受けた。P51である。周章あわてて、二人とも自転車のまま、小川長商店（砂糖卸商）の店中へ飛び込んで、避難させて貰った。

家へ帰ったら、近くの田圃に赤トンボ（練習機）が、射ち落とされていた。

第二話 昭和二十年八月、当時、我が家に、坂戸飛行場の中隊長夫婦が下宿していた。また、貸した土蔵には、民間に殆どなくなった航空糧食の飴や、衣料などの物資が貯蔵されていた。敗戦になって数日後、その中隊長が、軍の大型トラックに、蔵の物資を満載にして、群馬の生家へ逃げ帰った。もちろん奥さんも乗せて帰った。後日、我が家の「くず小屋」から、飴の入った大きな木箱が、三つ出て来た。

第三話 昭和二十五年十二月、埼玉県高校駅伝大会で、アンカー（大宮から浦和の県庁まで）を受け持った時。トプを秩父農林が行った。我が校は五、六位かと、予想していたところを、何と一年の東島君（現ロッテ勤務）が、第二位で、人垣の中を飛び込んで来たこと。直ぐ後に浦高の上木選手（後に世界学生大会千五百メートルで優勝）が迫ってきた。結果は、北浦和駅付近で浦高に花をもたせ、三位となった（松本先生は熊谷のスタートから、県庁のゴールまで、自転車ですべて伴走してくれた）。この成績は、母校創立以来最高の順位であった。しかし、嬉しいことに翌年からは後輩が、県内ばかりでなく、関東での優勝を数年続け、全国大会でも連続入賞した。

第四話 昭和二十八年九月 会社の仲間数名で谷川岳へ、ヒツゴ沢のルートで登った時、滝の上の岩場で一休みして写真を撮ってもらおうとした際、足を滑らせて七、八メートル落下して滝壺に落ちた。一瞬どうなるかと心配したが、背負っていたザックが、浮袋の役をしてすぐ浮き、どこも怪我をしなかった。ずぶ濡れになったが「肩の小屋」に辿り着いた時には、半乾きになっていた（田中崇さんも同行）。

第五話 昭和三十年頃の冬、最初に勤めた会社の寮は、広い空地の中に建っていた。同室には田中崇さん、大川解さんほか二名がいた。冬の北風が部屋を吹き抜けるので、日曜日の掃除をしなかった。たまたまその日に、舎監が見廻りに来て、「何故、掃除しないか」と糾問するので、「掃除したら風邪を引いてしまいます」と、答えたところ、ただちに「始末書を書け」という。数時間後、始末書を持って、舎監室の戸をノックすると、暗い部屋から首だけ出して、片手で受け取ろうとした。何かおかしいので、引戸を思いきり、全部開けてしまった。蒲団は敷きっ放しで、部屋の中は、足の踏み場がないほど散らかっていた。

数年後、この舎監は退社して、後に、所沢の市長選挙に、立候補したことがある。一昔位前に亡くなられた。

第六話 昭和四十五年十二月、小学校へ勤めていた姪が、冬休みに、草津へスキーに行った。二十八日最初に滑り下りると、亜硫酸ガスが充滿しており、一緒に滑り下りた六名全員が、ストックを握ったままで死亡してしまつた。その中に、母校、川高の後輩が二名（志木と狭山の者）おり、ほかの三名は地元群馬の高校生であつた。その後もスキー・ブームが続き、草津のスキー場は、混み合っているようである。現在、遭難した場所には一枚岩で人文字の墓標が立ててある。

第七話 昭和四十八年、オイル・ショックで、物不足と物価が高騰した。出版社で資材の調達を担当する者にとつては最悪の時期であつた。それまでとは逆で、製紙会社・紙代理店に日参して、紙の確保に奔走した。頭がふらつくので、医者へ行くと、それまでは最高が百二十位の血圧が、百四十になつていた。しかし休んではいられない、毎晩酔い潰れた。その年の暮、某製紙会社より、トイレット・ペーパーの巨大な段ボール函が、歳暮として送られて来た。翌年三月頃、石油確保の目途もたつと、あちらこちらから隠匿された紙が、安売りされ出した。昭和五十三年に、また、オイル・ショックになり、同じことが繰り返された。そのおかげでか「髪」の毛が大変淋しくなつてしまつた。

第八話 平成三年十月、同期の山崎孝雄氏が、盛岡大学の助教教授になつた。これを餌にして、飲み仲間の、大澤米吉・益子弘道・柳田径伸と私の四人が、盛岡へ押しかけて八幡平に一泊し、翌日、浜民村の石川啄木の生家などを見学した。山崎氏は、急に自分の檀家の葬儀のため、ここで帰つてしまつた。残された四名は、予定どおり小岩井農場と田沢湖を巡つて、予約した国見温泉の宿を目差した。仙岩トンネルを出てすぐ温泉への道に入ったが、車の中で話に花が咲いてしまい、旅館へ右折する小さな標識を見落して、いつの間にか、落石がごろごろ転がっ

ている一車線の下り道に入ってしまった。九十九折の坂道には大きい石もあって、柳田の新車（ベンツ）の腹を擦った。戻るに戻れず進むと、路傍には線を外された電柱が並び立ち、西部劇の荒野のようであった。全員ただ沈黙するのみ。暫く行って急坂を下ると、先ほど潜ったトンネルの入口へ戻った。現在は廃道になっている旧国見峠であった。

第九話 小学校の運動会では、いつも「ヶヶヶ」か「ヶヶヶ二」であった者が、高校では陸上競技部で、長距離の選手になったことを、小学校の同期生はたまげているだろうか。

陸上競技に熱中していて、「トクさん」の俳句の宿題を忘れて、鼻を掴まれ、頬を抓られた者が、五十歳になって俳句の勉強を始めた。更に結社「霜林」に入門して、毎月の句会などで苦労していることを、先生は何と思っ
てくれているだろうか。

なお、四月に、出版社定年退社を記念して、句集「流鏑馬」を発行しました（非売品）。これも「トクさん」の体罰教育のお蔭と思っています。句集は、少し残っています。

旧校舎での情景

丸田 邦夫

○「東部軍管区情報、南方海上に数目標……」窓の外は灰色の空だった。

○「高千穂地方に天孫族といわれる部族が住みつき、次第にまわりを従えて……」（『五色の雲に包まれた天孫降臨』）

の世の中の I 先生の授業。

○ H 先生の授業というところ、クラス中が奇声を発し、先生を困らせた（私も一生懸命張り上げた。今でもショートパットを外すとその奇声が出てしまう）。

○ 化学班の M 君。校庭で何やらを大爆発させる。

○ めがね橋往復の五千メートル。みんなに遥かにとり残され、もうギブアップと思っても、ひとり真面目な表情で走って来る O 君に追われて、ついに頑張ってしまった。

○ 国語、漢文大嫌い、つとめて先生との接触を避けた（徳門十哲の諸兄には申し訳ない）。

○ 夏期受験補習。どういう訳かオケンが二、三人紛れ込む。以後、それだけを期待して出席。

○ 模試の英作文で百点。出題の K 先生にいたく褒められる。「参考書の『三位一体』に出ています」とは言えず、大いに困惑。

楠だけが思い出の校庭となってしまったが、旧校舎での六年間、場面場面の情景が次々と鮮明に甦ってくる。何ものにも代え難いこの六年間は、今は、旧友たちの顔に生き続けている。

第二の職場も折り返し点を過ぎ、残る日々が大切な齢となって、自分や家族の病気の際に、またゴルフ、花見、散策にと、旧友たちの少しも変らぬ友情に恵まれた幸せを実感している。

川中と私

青山 幹

昭和二十年四月、川越市立第三国民学校より弟と二人、名門川越中学を受験、二人揃って入学を果たした。当時私は三人兄弟の二男で、満州より帰国、二年目を迎えるところであった。兄は新京中学（現在の長春にあった）より川中に転校し一足先に川中生となっていた。私が弟と同じ学年だったのは満州時代結核にかかり二年近く休学したためである。弟とは年子であるが、私は早生まれのため同学年となったのである。兄弟の名は兄が雍（やすし）、私が幹（つよし）、弟が稔（みのる）であり、入学以前から弟とは双子同然の扱いをされていた。

入学試験ではガリ勉もさることながら、体育もあり苦手な跳び箱をつっかえつつかえ、最低の状態でクリヤーした思い出が強い。一緒に合格した友人には他界された水村君や、多分お元気な奥平君、佐々木君などが記憶にある。記憶にあるなどと頼りない言い方だが、入学後数か月で北九州の小倉中学に転校、終戦とともに岐阜県東濃中学、半年の後名古屋市にある愛知県立明倫中学と社会の激動のなか、かくも多くの中学を渡り歩かなければならない運命であったからである。父は軍人であり、川中時代は入間川にあった航空士官学校の教官、小倉では九州小倉連隊の連隊長となり、家族とともに移動をしたためである。

落ち着いたところは名古屋であり、家族共々苦勞して、兄と私は名古屋工業大学の建築科、弟は名古屋大学の工学部を卒業している。終戦後、父は焦土と化した国の再建は建築、ということから、兄と私は何時の日か共に建

築業へというサゼッションでもあった。しかるに兄は志半ばで交通事故死し、私は勉強のための小企業就職を一転させて、昭和三十一年十一月、(株)大林組への入社となり爾来三十七年の勤続となっている次第である。

現職における川中との関わりは直接的なものではないが、関東での名門校でもあるゆえに、幾多の素晴らしい先輩に恵まれ、仕事の上での恩恵に浴している点では計り知れないものがある。現職では建築材料の改良による建築施工法の合理化を手掛けているが、兄と御同級であった元ロンシール工業株式会社専務取締役、現(株)ニチロン代表取締役栗原三男先輩の御協力御指導を得て当社(大林組)の子会社に世界でも唯一の超厚型石膏ボード板(厚さ六十ミリ、二時間耐火合格品、商品名、ロンレックス)の連続生産設備並びに商標権を譲り受けて事業化に成功したり、これまた川中の大先輩、故西川桂之助、アトム化学塗料(株)社長の御協力を得て超耐久性フッソ樹脂系外装塗料(商品名、ライフロン)を共同開発し、当社大阪本店の外装に採用、十年経過後も支障なしの成果を上げるなど、川中人脈の尊さを身に沁みて感じている次第である。川中、ひいては川高の諸氏から、諸氏に比べれば瞬きにも近い私のごとき川中との繋がりの方に、種々のお誘い事が現実にあることを、私以上に諸氏が私を忘れないでいてくださる事の証と、感謝を噛みしめて擲筆する次第である。

思いつくままに

大野 良 三

♪……秋の日の図書館のノートとインクのにおい、枯葉の散る窓辺……と音痴ながら妻とカラオケで歌っている

と、学生時代とその後の方が思い浮かび、哀愁の涙が出てくる今日この頃である。「そんな歳になってしまったのね……」と妻が追い討ちをかけるからなおさらである。

昭和二十年三月、川越中学校入学試験の朝、母が「これはいていきな」と新しい靴下を出してくれた(アッ！これはかあちゃんのカシミヤのショールで作った)。数日前、近所の家から靴下の型紙を借りてきたのは知っていたが……綿のと違って、脂汗のしみついた靴をはいても、暖かく爽やかであった。そして、担任の引率で入試に臨み、口頭試問にもすらすらと答えられた。試験官は松田、掛原、那須先生は覚えている。

松田先生「入間川の太野か、大野大尽の息子だな」私「いえ違います」と言ったが、先生はそう思いこんでいたようであった。そして、次は体育検査、鉄棒・跳び箱などやりながら、グラウンドを一周するのであるが、石川正男先生が、グラウンドの真中でチェックしていた。先ず不得意な鉄棒だから、力んでさか上りをした。尻が上にきて、腹が勢いよく鉄棒にぶつかった瞬間、へがでてしまった。補助をしていた先輩二人が「バカヤロー！ テメエナンカ入学シタラ早速オ説教ダー」私は何も言えず、二人の顔を見て、そそくさと次の跳び箱へと走り去った(入学してから、おそろおそろ二人を探した。いたいた、二人ともテニス部で、芹沢・岡田さんで、私のことなど忘れてしまったようで、安心した)。そんなこともあったが、母の靴下のおかげで合格したのであった(その母も、今、八十八歳で、今年二月頃からベッドの上の生活になってしまった。父は六年前、自らのドライブ中の事故がもとで亡くなった。八十三歳であった。両親とも、何事も私のするがままにさせてくれた。その後も、ずうっとである)。

川中入学直後、学力検査があつたが、二百人中、百九十四番で家に帰って一人泣いた。この時も、両親は何も言わなかつた。小学校では遊び通したのだから仕方ない、これからやるしかないと思ひ、一年間、まじめに勉強した。

そして、二年では四十五番になった。やればできると思ったが、その後はあまり勉強しなかった。徳さんの授業で、宿題をやらす、漢文が読めず叱られ、発奮した。太陽堂で漢和辞典を買って勉強した。当時、物資がなかったから、太陽堂のオジサンが金より品物がほしいと言ったので、洗濯石けんの大きな塊二個と物々交換した。

川越図書館にもよく通った。ドストエフスキーの『罪と罰』を読んだ。ラスコーリニコフとソーニャの体温までが伝わってくるようだった。その後の映画やテレビでもあれほど感動したことはなかった。

高校になってから、東金子の豊泉君だったと思うが、ヴァン・デ・ヴェルデの性典『完全なる結婚』を持ってきて廻し読みした。私の番がきた。家の者が寝静まって、一人炬燵で、手に汗して読んだ。良い場面は皆がページを繰り返しめくったので、手垢で黒く汚れていた。青春時代、そして、初恋、ラブライターを書いてポケットに入れたが渡せなかったり、また別のひとを思ったり、その時その時が初恋だと思ったりした。高三の時、思っていたひと（川女一年美術部員Sさん、同じ入間川に住んでいた）がモデルを引き受けてくれた。芸大受験時に提出する油絵である。大学時代にうちあげたが、幼な友達と決まっているということで、失恋した。それから二十年近くしてから、私と同じ職場（中学校）のK先生の後妻にSさんが入った（Sさんも再婚）。その時K先生のことを聞きたいというSさんと上野で会った。「良ちゃん、いつもごめんね」でまたも失恋？ した。

話は前後するが、戦後、おとなから子供まで野球がさかんになり、小学校時代の仲間てチームを作った。父にグローブをねだって五百円で買ってもらった時は嬉しかった。二年位してチームが解散し、一人で入間川付近でスケッチしたり、山で掘った粘土で猫の像などつくったりしていた。高校で美術部に入り、画家を夢みた。三浪して芸大に入った。浪人中短期間であるが池田満寿夫と同じ画塾だった。芸大入試の時、同じ教室を受けたが彼は落ちた。

二、インド・ヨガを修業していた頃、インド、チベット、ネパールなどの仏像やマンダラも少々収集しました。
三、最近では東洋蘭、春蘭や風蘭の銘品を愛培しています。同じような趣味の方に交流を願います。

スカチンのひとりごと

山田 和 宏

入 学

Q 「B 29の搭乗員は？」 A 「十一名です」

Q 「では、十一機撃墜したら何人敵兵を殺した事に？」 A 「……百……二十一人です」

Q 「尊敬する人物は？」 A 「楠木正行です」

Q 「理由は？」 A 「君に忠、親に孝を実行した」「よし！」

昭和二十年の入学時の口頭試問である。

校庭の半分はいも畑、校舎も半分が軍の兵舎に、白線入りの戦闘帽に、ゲートルを巻き、正門でなく狭い通用門から登校し、正課に軍事教練があり、毎日の様に警戒・空襲警報のサイレンが鳴ったものだった。

終 戦（敗戦）

八月になり、空襲も激化して、早めに授業も中止となって帰宅の途中、電車が入曾駅でストップした。所沢迄徒歩で帰る事となった。現在の新所沢駅近くに、飛行場の発動機試験台があり、グラマンの空爆で線路脇の溝に身を

伏せた一、二メートル先の所に機銃弾が炸裂して、九死に一生の思い出もあった。そして十五日、ラジオからの玉音放送が流れ、何か心に穴があいた様な虚無感に襲われたものだ。

学校に行けば、正門の大正天皇行幸の記念碑が、倒されて埋められていた。昨日迄「鬼畜米英撃滅のため一身を投げ捨てろ」とハツパをかけていた先生が、「自由とは、民主主義とは」と公職追放を恐れる姿、又十五日以後忽然と消えた軍事教官達、少年期の私にも何か大きな思い出として残った一時期である。

大学へ、そして社会人

当初旧制中学四年で卒業の予定で、川中に入學したが、六・三・三制で川中（併設中学）、川高と六年にわたり通學し、大学入試の時は、旧制が消え、新制大学の一期生としての入試となったため、倍率が高く大変苦労したものであった。そして、三十年の卒業時は前年よりの不況で、新卒者の就職率は三十八パーセントであった。

私は、たまたま叔父が三井物産のパリ支店長であったので、そのツテで三井生命に入れてもらった。三十名募集であったのが、入社時は十九名しかいなかった。そして半年間は、毎日毎日大学の延長の様な授業ばかりだった。そして半年後、それぞれの勤務先が発表され、私の行き先は北海道である。帰宅し母にその事を告げたところ、「軍隊に行った兄二人も無事帰って来たし、四人の兄弟全員と所沢で住みたい」と父に泣き、私も心細さが先立ち、思いついて退社してしまった。その後、縁あって約二十六年間、電気通信設備会社へ勤め、昭和三十六年に結婚して娘一人を授かった。その娘も嫁に行き、現在老妻と二人での生活となった。

現在六十を過ぎて大病もなく、ゴルフ場通いと、良き友人との酒に、そして年に何度かの孫との対面を、楽しみに過している。因みに、娘はスキー場で有名な野沢温泉村に嫁ぎ、男子を出産し、その孫も三歳を迎えて、可愛い

さかりだ。

金さん・銀さんが百歳で、テレビ等で有名です。我々川中生同志も、健康にそして元気に、彼女達以上の年齢を超え、旧交を語る姿を思い浮べるのは私の夢であり、諸兄と共に、長生き競争に参加するものであります。

追記

人生五十年と言われた頃、この世に生を受けて、すでに十年余も長生きした。そして何とか今日まで過せたのも、母校川中・川高のおかげであり、そして友人諸兄があつたればこそその事と思い、末筆ながら、心よりお礼を申し上げます。拙文を収めさせていただきます。

スーさんの走馬灯

田 中 崇

- ① 日本の戦闘機十一機が、それぞれ十五機ずつの敵機を撃ち落とした。全部で何機撃ち落としたか？（川中入試口頭試問、答十五×十五）
- ② パリパリッとグラマンの機銃掃射、青空の下、茶の木のうねにかくれる中学生五人、唯一の戦争体験。
- ③ 配属将校、銃剣術、〇〇ッ、足が降参している。
- ④ めがね橋往復五千メートル、はだしのマラソン、はだしの足がしびれる冬の日。
- ⑤ 学校から本川越に帰る道、ツボヤキのにおいにさそわれて。

- ⑥ 三徳の機械冷却用の緑色の水のプールで水泳部の練習。
- ⑦ 化学実験室と杉林の間の空地、ゴムマリの三角ベース野球、川崎投手のカーブがさえて。
- ⑧ 夜行列車で河口湖へ、そこから歩いて富士登山、中島（正）、畑達と。
- ⑨ 雨の奥日光、物理部の夏山合宿、中沢、三友達と。
- ⑩ 日本最古の木器発掘、新聞報道あり、郷土部の荒川河川敷調査、金子、畑、沢田達と。
- ⑪ 五百人の労働組合大会、演壇の上で振る赤旗、インターナショナル。
- ⑫ 樺美智子さんの死んだ日の六十年安保反対国会デモ、友人の警官との対面もあり。
- ⑬ 砂川基地闘争、飛行場のゲート前で医学生生の田口陽世と合流。
- ⑭ ヤミ市の並ぶ池袋、路地裏の「のみ屋」で小切手を切る大川におどろく。
- ⑮ セガ・エンタープライズの株式上場に向けてガンバル金子武司部長に協力して、経営計画書の編集、印刷を受注する。
- ⑯ 一九六九年、ヨーロッパ二か月、二億円の印刷機の試運転、スイスでスキーも。
- ⑰ 小林洋左、金子武司、田中と洋左の従姉妹達オケンの生徒と歩いた入間川土手、三十年後に幼なじみのイクさんにアメリカで再会、通訳として協力してもらった。
- ⑱ 中学一年から大学卒業まで全部奨学金、結婚後まで返すのに大変。
- ⑲ 家具はカタヌマに、いつも濁沼（峰岸）に無理を言っただけでまけてもらう。
- ⑳ 医者と弁護士との友人は大切にせよ！ の諺どおり、中村弁護士にいろいろお世話に。

- ⑲ 佐々木雄ちゃんの東大教授退官のむらさき会のパーティーに出席の日に救急車入院。
- ⑳ 還暦記念の北海道大雪山縦走、女房の分の荷物も背負って合計十八キロ、コマクサ大群落。
- ㉑ 南米コロンビアにODAで印刷指導に、働くのが人生の目的ではないことを知る。
- ㉒ インドで印刷指導、ビフテキがない国で、辛いマトンでは下痢にもなります。
- ㉓ 実家の隣りに新設された中学の校長に府瀬川が着任。

中・高六年間の生活に感謝して

中 秀 男

私程、変化に富んだ人生を過した同窓生は少ないのではないのでしょうか？ 現所沢市三ヶ島の商家の末子の私は、親に反抗して勤めたり、再び脱サラをして開業をしたり……。

事業と借金と同居しながら、何時しか過ぎし六十余年の中で、私の人生に与えてくれた川越中・高六年の生活は、良きにつけ悪しきにつけ自分自身になっているような気が致します。

終戦をはさんだ人生に二度と会えないような世の中の大変化、中でも佐藤徳四郎先生の論語、成語、俳句の教育を受けた儒教思想は、何時しか己の身体の中に焼きついているような気がするのです。

まさに教育は反復なりを実感する（勿論当時はずっこけてばかりだが）。同窓生が、ゆとりの人生を送っている中で、私一人未だに事業借金から抜け切れず右往左往しているのも……さりとて又現在、なんとか事業に専念出来る

のも、川越六年の思い出と同窓生の協力があつてのことと感謝して生きています。特にここ二十年、共同事業からの脱却に悩み、ともすれば己の考察力が狭くなる時、常に私の心に休養とゆとりを与えてくれたのは中村弁護士の適切なアドバイスと、大川解さんの事業アドバイスです。今日、どうにか頑張っておられるのも同窓生のおかげであると感謝しています。良き友人は己の財産の一部であると思います。

又「徳さん」から教授された俳句（いや、私の場合は川柳ですが）がどんなにか、自分の苦しみを救ってくれたことでしょうか……。

手帳の片隅に秘かに書きとめた五、七、五の十七文字が私の過去の苦しみと、その脱却の喜びを教えてくれるのです。

川越生活六年での受けた思い出と友情に、いつも感謝しながら最後の頑張りに励む今日この頃です。

小学校からの友人

○守谷互君は三ヶ島小学校から川越中・高十二年間の親友である。

○彼は私と同じ巨人ファンで、同窓（本当は一年先輩）の平岡泰之さん（阪神ファン）と三人で後樂園で巨人・阪神戦をよく観戦した。巨人川上、千葉、阪神藤村、若林（投手）の全盛時代である。

○守谷互、平岡泰之両君と三ツ峠、山中湖キャンプをした時、山中湖キャンプでバンガローハウス（犬小屋型）の屋根をはずして、その上で夕食をしていしかられた（白線帽子の特権意識の現れか）。

○守谷君が日本鉱業から共石本社に出向した頃、昭和四十八年夏、私が秋田の開発石材業（後に大損、現在は村興し

産業として成長)に關係した時、現地の鉆区権の問題で大変お世話になった。

○私の妻も偶然なるかな、日本鉆業機械計算課でお世話になった女性である。これもなにかの御縁か？

亭主の仕事道楽を理解し、仕事大好き、本業(酒小売店)を守ってくれている、私にとってかけがえのない素敵な女房である。

○中義智君は小・中・高十二年の同窓生である。

西武池袋線での友人

私達三ヶ島出身者は西武池袋線で、狭山ヶ丘乗車、所沢經由で本川越を経て通学した関係でその線の仲間が多い。

○豊岡地区(昔の一町六か村、スポーツ村抗区域である)での友人——豊泉正次、柳沢、塩野(故人)、原島淡君。

○特に豊泉正次君とは、大学進学をあきらめ共に家業を手伝うため、川高三年三学期より村田簿記学校に進学、色々苦楽を共にした。彼は実兄が政治家(村議↓町議↓県議)であったため、弟でありながら実兄・家業の織維工場を守った。所謂己を犠牲にして兄をたてる儒教思想家である。

○中学三年で去った赤田康二君(埼玉銀行)とは私の実姉が飯能女学校在学中、彼の実父に教えていただいた関係もあり、八高線事故で亡くなられた姉君も含めて三年間親交した。

○加藤博君(飯能出身)とは豊泉、柳沢、塩野君を含めて西武池袋線での悪友の部類か。悪童の心理をよく理解出来る先生であったと拝察している。

○峰岸稔君 高三、D組隣席

大学進学をあきらめて家業手伝いを決めていた私だが、彼の進言（勿論、彼は忘れていてであろうけれども）で村田簿記を休んで立教大学経済学部と明大政経学部を親父に内緒で受験した。せつかく川越に通学したのだから、大学の試験がどんなものか経験しておけよとの彼の発想であった。ちなみに昭和二十六年一月二十三日の進学適性検査の共通テストの日、三年D組で非受験者は私一人で教室で一人寂しさを経験したことは忘れられない。幸か不幸か、立大経済学部の経営学科と明大政経学部経済学科に合格したが、中々親が許してくれない。結局親に反抗して、明大夜間部に半年間（昼間は村田簿記）通学、後昼間に移ったが、この半年間の明大夜間部での経験が、私の人生にとってプラスしたように思う。

同級の友人

○筑波大の長谷川栄君（入間川）とはよく交流し、勉強を教えて頂いた記憶が強い。

○三友善夫（故人）君とは交流深く、共に物理（化学？）部に所属し、那須先生と大島、伊豆研究旅行（大島初爆発）を共にしたり、又個人的に三友善夫、新井貞夫両君と三人で秩父武甲山、正丸峠の登山をした思い出がある。

○茨城大の東敏雄君には、ずい分お世話になった。多分高二E組（？）であったかと思うが隣席に三友善夫君、後席に東敏雄君、前席に永島（石川島）君が在席、試験時、後席より気楽に援軍してくれる神様であった。又中学三年の頃、東君他三、四名と村山国立療養所に静養中の原島淡君（宮寺村出身）を私の運転する自動三輪トラックでお見舞いしたことがある。

○豊泉正次、金子武司君と有馬山、川乗山を登山した思い出も深い。

卒業してから

○アジアカラー（株）、東洋色彩（株）社長大川解殿と親交厚く、お互いの事業のパートナーとして現在に至る。

○中村法律事務所 中村生秀殿

私の秋田での事業所、中野産業（株）の顧問弁護士として、又監査役として助力頂いております。

○水野洋策殿

川中一年入学してすぐ（一年先輩）、後アジアカラーを通して交流いただいた

在校中の最も印象深い出来事、思い出

○映画館の名前は忘れたが、谷崎潤一郎の『痴人の愛』の映画が上映されたが、確か試験と重なり、ついに見ることが出来なかった。止むを得ず原本を読んで楽しんだことがある。店頭に飾られた京マチ子の裸の入浴姿（泡の中から上半身否、首から上だけであつたかな？）が、まぶしく、恋しく登下校の途中仲間して見入った記憶は生々しい。現代の若者には考えられない、我々にとって初心うぶな、又プラトニックな青春の一コマであつた。妹を持たない私は女性に飢えていたのかも知れない。許せ、青春!!

○下校時食べた焼芋の味、十五円のかげうどん（七味唐辛子をたくさん入れて）、何れも連馨寺近くでの思い出。

○私は中二〜高一の頃であつたらうか、電気機関車の模型作りにかつたことがある。確か川越市内での模型展で入賞した記憶がある。青柳君も確か共通の趣味の持主で、彼から色々と学問的知識を修得した記憶がある。連馨寺近くの模型店で、ちなみにその店には女優三條美紀に似た女学生が、時折奥の方に見受けられたが、私の足を何回も運ばせた原因か？ 申しそえておく。

○西武新宿線での所沢→本川越駅間は、昔からの習慣で前車輛に男子、後部車輛に女子と分れて乗車することになっていた。高学年になり、前車の後部に乗り、今日はあの女性が見えた」とか仲間と語り合いなから電車通学を楽しんだ。時に、そのヒロインは映画を見るたびに変わるのだから……今思うと若さ故の楽しさか、特権か……。今迄は丸顔の女性好みかと思えば、次に見た映画のヒロインに魅せられ細型になったり、角型になったりしたのだから……結論から言えば、私を男として認めてくれる女性が一人でもいれば顔形が何であろうとよかったのだろう。要するに私にとって女性に飢えていた青春の楽しい(否、当時は寂しい)思い出の二こまだろう。

○修学旅行・京都高田屋旅館・秀ちゃんの思い出

私は明大卒業後、昭和三十年春、家業の手伝いをしないで又勤めてしまいました。幸か不幸か、京都駅前の丸物百貨店に勤務、後東京に出向転勤致しましたが、在京中「高田屋の秀ちゃん」が買物に来てくれました。旅行参加皆さんへの報告事項です(私は(株)丸物は十一年半で退職、家業に戻りました。後東久留米市にて支店開業致しました)。

カムカム英語

新井 涼 平

川中20会のゴルフ愛好会にお世話になって久しいが、腕前といえばハンデ40(現在36)でも未だ優勝ならず、ブービーの榮に浴することしばしばということである。ゴルフといえばホールインワン。ホールインワンといえば松村

兄から記念品をもらったことがある。それを知人の一人が先日してかし、たまたま保険に入っていたので派手に祝宴を催し、余興のクイズが、昔バーディーは小鳥でイーグルは鷲、アルバトロスを阿呆鳥と鳥に困んだ呼び方をした、では、ホールインワンは当時は何と言ったか？”で答えは風(おおとり)だったそう。

三角ベースに夢中だった頃にゴルフのごとき老人(?) スポーツ用語とは縁遠いものだったが。それに付けても配属将校がいて敵国の言葉は御法度の時勢に「I stand up, I bow, I sit down」と身体で憶えさせた先生がいたことは驚きだ。この話で川合兄はどうして英語を勉強するのか? の質問に斥候で敵に逢った時情報を得るに必要と答えたそう。今風というなら「FREEZE」で射殺されないようにとでもいうところか。でも長い私の人生でその時以外でこの「私は立ちます」とはあたりまえだが一度も使ったことはない。これと似ているのが例の「ヘイル トウーズイー」だ。言うならば十六世紀頃の死語ともいえる詩を暗記させられたことだ。不思議なことに今でも「Hail to thee, Bride Spirit Bird, Thou never wert, From heaven or near it……」と口をついてでてくる。これは一度だけ使ったことがある。それというのも、今所沢インターナショナル・ファミリーで外国人の為に英会話サロン部門を担当しているが、日本文化の紹介で源氏物語を話題にした時、徳さんの「源氏物語を原語で読めるこの幸せ」とはうらはらににかに難解かを知ってもらうために、たとえとしての「ヘイル トウーズイー」だった。中学→高校の六年にわたる英語教育を振り返ってみると何が一番社会に出て役にたったか? それはいわずもがな番外のカムカム英語で、新井(澄)、土金、吉野諸兄に負うところが多かったと感謝している。

還暦を迎えた今になって、やっと末っ子の坊主がこの春中学生になるが、その幼い身体つきをみるにつけても、よくもまあ、あの時日清製粉で貨車から粉袋を担いで運べたなあ、とつくづく感慨にふける今日この頃である。

思い出の川越の学び舎

中 義 智

戦火激しき頃の故郷の小学校をよい成績で卒業し、あこがれの川越中学に入学できたものの英語の私の成績はひじょうに悪かったようです。とにかく初体験の英語学習でチンプンカンプン！これをなんとか克服しようといやな英語部に入り、精進したことが強く思い出されます。

英語の辞書は買えず、父親が使用したコンサイスを活用し、むさぼるように単語を暗記しました。忘れないようにヤギのように食べたこともあります。しだいに英語が楽しくなると成績が廊下に貼り出されます。でもまだ、自分の満足感がなかったのです。

通学の電車でラジオ放送「COME COME ENGLISH」を聞くために駅長室に飛び込んで、十五分間を徹底的に暗記し、それを数人の仲間と英語で話し合いました。途中日本語になると、眉毛を剃る約束もできました。

中学に入るなり、空襲が激しくなり、グラマンやP51が通学の電車を襲います。たまたま、B29が新河岸あたりに撃墜され、その搭乗員が憲兵に連れられて、本校の英語教師の通訳で話をしてる姿を垣間見るのです。そして終戦、基地でのアルバイトは米軍機の降りる滑走路づくりに始まり、将校クラブでの仕事等、大学まで続けたのです。父を亡くした私の青年期は、そんな中から生まれたのです。おかげで英会話も得意になっていくのです。

この川越時代の六年間は私にとって英語への焦点化でした。豊岡で教職を始め、将校婦人を迎えての生きた英語

指導、所沢教員時代での海外研修、中英研への仕事、そして県教委での英語指導主事を経て、今国際理解教育のパイオニア的存在です。

このように社会が急速に変化する中で、入間地区小学校百八十校の教育を推進してきたのですが、学校週五日制問題、偏差値問題等生涯学習の教育課程のありかたが大きな課題となっています。まさに教育界は混沌となってきました。私たちは二十一世紀の新たな潮流に即した教育課程を用意し、子どもの全人間形成に不可欠な力の育成を目指しています。

それは国際社会の未来を志向した教育の創造であり、モデルなき小学校教育の創造なのです。それに対し困難と苦しみを感じながらも何事にも代え難い至高の教育的価値として受けとめ、学習主体形成の歩みに挑戦してきました。

教職の途中で身体障害者になったものの、持ち前の性格で管理職十年を勤め終えました。あるテレビでロックスピリッツの校長として放映されたのも私の歩みの産物でした。

かにかくに 思い出の学び舎は

恋しかり 思い出の友 思い出の教師

当時の思い出

吉野 正武

父が軍人（終戦時陸軍航空兵中佐）だった関係で、小学校を七回（所沢、満州の白城子、四平街、新京の三か所、熊谷、立川、所沢）、中学校は三回（桐朋、熊谷、川越）転校しました。小学校時代は父の転勤のため、中学時代は終戦後父が職もなく転々としたため、同じ所に一年以上住んだのは所沢だけという落ち着かない学校生活でした。

小学校、中学校を十回も変ったのは、全川高生の中でも私だけだろうと、変な自負をしています。一方環境が変りすぎたので、情緒不安定となり、性格的にも落ち着きのない悪い影響を及ぼしたことは否めません。しかし川越に中学三年編入して以来、高校卒業までの四年間を一か所で過ごせたことはとても幸せでした。

その頃の私の家庭の事情は、父が所沢飛行場の跡地を五反歩程払い下げてもらい、開墾をして畑にし、食糧を自給できるまでにするのが大変でした。学校から帰るとすぐリヤカーを引いて飛行場跡の畑まで約四キロの道を往復、週に二回は所沢市内の知合いの家の下肥をもらい、リヤカーで畑まで運ぶという生活、また現金収入を得るため、父が乳牛を育て上げたので、早朝父と一緒に飛行場の柵の中に入り草刈りをして牛の餌を確保、朝飯前に弟と二人で母が搾った牛乳をコカコーラの瓶につめて市内のお客に配達した上で、学校へ行くといった生活が続きました。そのため寝不足で授業にも身が入らないという事も屢々でした。

畑で穫れたさつま芋や小麦が私達一家の生活を支えました。母が各大学の生活課を廻って、相場よりも安く学生

下宿斡旋を依頼したので、一流大学の学生が下宿に来てくれました。家の各室を学生に提供、常時十人以上の下宿学生がいたので、大分にぎやかでした。

昭和二十五年六月、朝鮮戦争の勃発と共に、稲荷山公園にジョンソン基地があった関係で西所沢の吾が家の近所にも米兵とオンリーさんに部屋を貸す家が増えました。彼氏が朝鮮の前線に行ったあと、残されたオンリーさんとの間の文通が増えるにつれ、手紙の英訳、和訳が私のところに舞い込み、私は勉強そっちのけでラブレターの橋わたしをする破目になり、土日など時には徹夜で二十枚位の手紙を英語で書きなぐった事もありました。一枚百円の書き賃をとったので、親から学資も貰わずに川中、川高時代を過ごし、現金収入の少なかつた両親を助けることが出来ました。それについても思い出すのは、三年生の時修学旅行に参加出来ず、小人数の居残り組で淋しく補習授業を受けたことです。当時の事を母も憶えていてくれて、あとになって百万円私にくれたが、母も大分気にしていた事だったのでしよう。

また、大学四年の就職運動の時、当時のラブレター書きの経験を試験官に話したところ、面接の重役から、現物支給^①してもらったのではないかと（オンリーさんから）と冗談を言われ、赤くなったり、青くなったりした事もありました。

当時、ラジオで平川唯一のカムカム英語が盛んでしたが、近所にいた土金達男君、新井澄夫君達と一緒に英会話に熱中、電車通学で会う米兵に手当り次第話しかけ、スラング英語を仕込んだことも楽しい思い出です。得意でしゃべりしていると、同じ電車で通学していた生物の横田先生に横目でジロリと見とがめられ、後ろめたい気持ちになったこともありました。先生の年配では、仇敵の米兵と面白おかしくしゃべっている私達が苦々しく思われたの

でしょう。

また、学校の二年先輩が、米軍に接収されていた霞ヶ関GC・東京GCのキャディーのアルバイトを紹介してくれました。休みの日の一番電車で人間川駅下車、二キロばかり行った処で米車を待ち手を挙げて乗せてもらい、ゴルフ場まで連れて行ってもらって、キャディーで付くといったアルバイト（一ラウンド百八十円）も今となっては楽しい思い出となりました。

シボレー、キャデラックといった外車を運転しているアメリカ将校達を見て、こんな生活は私達の生きている間は到底無理だろうと思った事でした。

当時の私の家は下宿学生で一杯だったので、西川博君、三友善夫君などが訪ねてくれ、貧乏だった吾が家の生活を同情してくれたものと思います。

とりとめもなく、当時の生活を書きましたが、お金を得るためのアルバイト（ラブレター書き、キャディー、百姓仕事の手伝い、牛乳配達、等々）に追われ碌に勉強に打ち込めなかったのが、今考えると心残りです。でも、下宿の大学生の人達といろいろな話が出来、受験勉強の刺戟になった事は大きなメリットでした。初期の下宿人だった人達とは現在でも「吉野会」という会を作っており、毎年一回懇親旅行をやっています。

思い出の多い川中・川高時代、苦しかったけれど、楽しく生き甲斐のある生活でした。当時下肥をリヤカーで引いて父と一緒に歩いた新所沢の田園地帯も今では賑やかな街に変貌しました。車で新所沢あたりを通る度に、当時の苦しかった時代を思い出し感無量です。

以上のような生活で、授業が終ると一目散に川越の街中を走り抜け、電車にのって帰宅する毎日でしたので、川

越の街をゆっくりと歩いて廻ることもついぞありませんでした。

お蔭様で還暦を迎え、やっと自分の時間が持てる生活に入りましたので、これからは学生時代に見残した川越の街をゆっくりと見学したいと考えています。その節は、川越在住の同窓生の皆様のお宅にも是非お邪魔させて戴きたいと念願しております。

あの日あの頃

中 島 喜三郎

昭和二十年八月十五日、川中一年生であつた私は、当番に当てられ、学校で防空壕を掘つていた。正午、校舎の玄関前に集合し、例の放送を聴かされた。

聴き終えた後、先生から今のお話の意味が分かつたか、と聞かれたが、皆、無言であつた。雑音の多いラジオの音声でもあつたが、当時まだ、年端のいかない子供であつた私達には理解し難い内容ではなかつたのかと思う。

そのうち一人の先生が「今の意味は、日本が戦争に負けたということらしい。今日はもう帰つてよろしい」と言われた。私達は、何が何だかよくわからぬまま、半ば狐につままれたような気持で帰途に就いた。

川越市駅まで来た時、二十歳前後の青年が三人で「何の為に、サイパン、アッツで玉碎したのか」と肩を抱き合つて泣いている姿があつた。それを見て初めて「これは大変なことになつたのだ。これから日本はどうなるのだらう」と不安になつたのをよく覚えてる。

翌、二十一年の夏の初めに父が亡くなった。その時は、自転車で学校まで知らせてくれた近所の人が大汗をかいていた。それから間もなく……。

熊野神社の境内に、玉、二つか三つでタバコ一本とかいう、今のパチンコ屋の走りのような、バラック建ての小屋が幾軒か出来ていた。そんなことから仲間数人といたずら半分にタバコを覚え、それが学校当局に見つかって大目玉を喰らったことがある。

担任は原田先生であった。先生になられたばかりの頃で、随分ご迷惑をかけてしまったものだと思う。数年前、近所に御縁談ありとかで、御子息と共に突然我が家に立ち寄られたことがあったが、例の事件を覚えておいでになられたようで、冷や汗の出る思いであった。

熊野神社と言えば、卒業後ほどなく、第一回のA組のクラス会を開いた覚えがある。近くに住んでおられた稲生さんにお願ひして、社務所を借りていただいたのだと思う。佐々木先生をお招きして、今思えば質素ではあったが、楽しい集いであった。その佐々木先生が亡くなられた折、連絡をもらいながら、都合で御葬儀に参列出来なかったのを、今も申し訳なく思っている。

その後、高校一年から三年間、陸上競技部に所属し、もっぱら練習に励む日々であった。顧問の松本先生には大変お世話になった。幾度か大会に選手となって出場したが、勝てない悔しさに泣いたこともある。しかし、苦しかったことなども今となつてはすべて良き思い出だ。

中学、高校通じての六年間の川越での学生生活は、私にとって、まことに懐かしい青春の日々である。

芋小、芋中、芋高出と呼ばれ続けて

沼田芳造

川高時代の思い出は一番懐かしく、また楽しいものですが、やはり佐藤徳さんの授業が一番強烈でしかも社会に出てから意外と役にたっているような気がします。

ただ同じ国語の先生でも、佐々木ドンちゃんと言った「若いうちにあまり俳句ばかりやると後で長文が書けなくなるぞ」という意見も一理あるなと思ったりもしました。

前置きはともかく、授業中の小生は横道ばかり熱心でした。漢文の時など、誰からとなく耳にした「君子^{キミコ}あおむけに近寄らず、毛を見てせざるは勇無きなり」ともじった先人に頭が下がる思いをしたり、又和歌の方では、「朝起きて、見れば我が物起ちにけり、骨無し物の筋の強さよ」健康法師とか、俳句では、「我れと来て、遊べや親のない娘」一茶等々、とにかくつまらん方ばかり感激した時代でもあり、したがって成績は周知のようにいつもブービーかメーカーといったところでした。そして理数系の時間に至っては小熊の忠さんから借りた映画の雑誌を読んだり、時にはサボって都内まで足を運び、ジャック・フェデの「外人部隊」「ミモザ館」や、ルノワールの「大いなる幻影」やデュヴィヴィエの「望郷」などを見て、大きなショックを受け、身震いさえおぼえた程で、自分には何もわからぬ理数の授業を受けているより、少なくとも有益であるなんていう勝手な理屈を作り喜んでおりました。

そしてついに進学も日大芸術学部の映画科となったわけですが、ここでも相変わらずブービーの成績を守り続け、

落第はせず、卒業もし、就職もした時は、学校側でよくもあの不良学生が？　と言われました。

この世界の製作畑では川高出の先輩が見当らず、当初は、一人淋しい感もありましたが、好きな道に後はなく、幸いに私は巨匠達からのお座敷が多くかかり、小津安二郎の「浮草」、市川崑の「黒い十人の女」や山本薩夫の「白い巨塔」、衣笠貞之助の日ソ合作「小さい逃亡者」、七十ミリ映画「秦の始皇帝」、勅使河原宏の「燃えつきた地図」等約五十本の映画の製作担当として参加出来たのはあの川高時代の良き師、良き友のおかげとつくづく思います。

この時代は仕事も順調でしたが、ゴルフも昭和三十二年より始め「オフィシャルハンデ9」迄進み、絶好調でしたが、その後体調を悪くし、現在は又ブービーかメーカーに逆戻りしてしまったのは、やはり学生時代の横道にそれたための天罰がやって来たのだろうと反省もしております。とにかく今は川高時代の友人達と会えるだけで、心がなごむので、スコアの恥を忍んで今や伝統あるコンペに参加して迷惑を掛けております。どうぞ今後共よろしくお願いいたします。

つれづれの想い出

双木貞夫

思いもかけず、久方振りに旧友より電話をもらった。

それは忘れもしない松岡へんじん氏よりの声で、還暦を迎えての記念文集を出すにつき、寄稿の依頼であった。

私のこと、個人的信条として郷土飯能初雁会での活動には労を惜しまないものの、他地区への活動には……どう

も……ということ、今迄学友各位よりの諸会合へのお誘い等も遠慮していたところであるが、その不義理にも拘らず松岡兄よりの電話はありがたく心に沁みる思いであった。

その後送付された松岡兄の「川高悪童風雲録、爆弾小僧物語」を読ませていただき、はるか忘却の彼方になっていた学友達の名前が、そのニックネームまでポンポン出て来るのに一驚したと同時に、この素晴らしい記憶力は矢張り「大偏仁」でなければ出来ないこと……思いを新たにされた次第である。

川越からは西方僻地の飯能よりほお歯下駄、黒マントに破れ学帽で母校迄通学した思い出が今よみがえる。

制帽も戦闘帽から学帽に変わり、その真新しい学帽をワザワザ破り、がっかりしている母親に無理にミシンをかけてもらい、更にポマードを塗りたくってかぶるのをヨシとした——おそらく弊衣破帽をもってヨシとした旧制高校伝統のパフォーマンズの最終ランナーであつたらう。

そのように硬派を気どっている反面、登校時西武電車の後部の車輛に乗りたくてワザワザおくれ乗車したり(前の車輛は男子生徒、後の車輛は女子生徒という不文律があつた)して先輩にお説教をくらつたのもほろ苦い思い出の一こまである。

授業中サボってコロケを買って来て空腹をいやしたあの美味しさ、下校時に寄る伊勢屋でのアイスクャンデーの甘さ等青春の思い出はつきない。

六十歳の老人をみて、なんと年をとったジイサマなのだろうと思つたその年齢に自分も到つた今——感慨ひとしお一入のものがある。

年をとるといふことは年齢ではなく、心に、気持ちに若さと情熱を失つた時、はじめて人は老いるのだといふこ

とを聞いたことがある。正にそのとおりだと実感する。

企業での第一線をリタイアした現在、物故された学友の分までこれからの日本のため、社会のために尽したいと念願するものである。

青春時代の追憶

飯田清司

この頃にしては珍しく、かつこう鳥の鳴き声でふと目を覚まし庭を見ると、初夏の草花が色鮮やかに咲き初め、木々の緑もようやくその色を増し生命の息吹を感じる。

それに比べて自分の現在を思い浮べてみると、還暦も過ぎ退職後の第二の人生をどう有意義に楽しく生きていくか、常に考えているがなかなか思う通りにはならないものをつくづく感じると共に、過ぎ去った六十余年の人生を振り返り感慨に耽る今日この頃である。

激動の昭和の戦中戦後の時代を共に生きてきた同窓諸兄の現在の様子が大変気になってきた。

特に青春時代の一ページであり、大きなドラマであった学生時代が懐かしく思い出されてくる。

中でも多感な年齢の川中・川高の六年間の時代は強烈なインパクトを持って心に焼き付いて忘れられない。

その思い出は、次から次へと走馬灯の様に駆け巡る。その中から特に印象に残っている出来事を幾つか列記してみると、

○入学当時の厳しい教練をして勤労働員（日清製粉での昼のコッペパンが懐かしい）。

○上級生の昼食時にやって来てのお説教と中腰での構えはきつかった。

○戦後の東武東上線の通学電車の凄まじさは言語を絶するもので、朝夕戦争そのものであった。ボロ電車に定員の何倍もの人間が眺まじりを決して乗ったものであり、座席は固より網棚の上に乗って、外では連結器の上から屋根の上に乗って乗っていた。そんな毎日の通学であった。その上事故も多くよく電車が遅れたが一時間、二時間の遅れは当たり前、強く雨が降ったからと言っては止まり、雪が降ったと言ってはよく止まった。その都度客は皆あきらめて線路伝いに歩いて帰ったものである。

そう言えば絶対に忘れる事のできない出来事として、坂戸方面から通学していた畑君が川越市駅で帰りの電車に乗ろうとした時、大勢の乗客に後から押され、未だ停車前の動いている電車とホームとの隙間に落ち、そのまま引き摺られて骨盤骨折の重傷を負った事件である。そういう小生自身、東上線では二度危うく生命を落とすところであった（当時は電車の戸は手動で満員の時は戸が締まらない。その為カーブの所で降り落とされるところだった。入間川鉄橋上でも一度あった）。

○その他稲荷山行軍では「リンゴの唄」をクラス全員で合唱し記念写真を撮った思い出。

○授業をさぼって（途中抜け出て）映画鑑賞（青い山脈）「また逢う日まで」「山のかなた」等々……）。

○自習の時、講堂裏の芝生で仲間とよく女子高生の噂話やワイ談をした事。

○部活の帰りによく伊勢屋に寄って七〇円コース（だんご三本三〇円、ラーメン一杯四〇円）で腹を満たした事。

○予餞会の演劇で夏目漱石の「坊っちゃん」の中の「ばった事件」に出演の思い出。

○先生方の思い出としては、一人ひとり個性と特徴があり(現代の中学校、高校では絶対見られない教師像である)それぞれ思い出されるが、何と言っても強烈に印象に残っているのは佐藤徳四郎先生である。炎の様な情熱を持つての授業であったが特に漢文の授業では自分で編集した教科書を使い、一度ゆっくり読み上げ、二度目には指名して読ませ、読めないと烈火のごとく怒るのには皆まいったものである。

また強制的に学習させられた俳句の勉強(お蔭様で俳句についてはその歴史から有名な俳人までよく分かる様になった)。

思い出す授業中のエピソードとして三年の国語の授業の時、クラスの仲間の一人が(名前は書かないが)指名されたがよく分からなかった事に腹を立て、窓から逆さに吊したのにはびっくりしたが、仲間の胸のポケットから万年筆が下の池に落ち後で池の中を浚ったが出て来ず、謝っていたのはトクさんらしく思い出される。

しかし、小生にとって最も強烈に印象に残っている事は、卒業式終了後校庭の桶を仰ぎながら正門から下校する時、もう二度とこの校舎校庭で友と共に学ぶことがないのだ、誇りを持って被っていた学帽ももう被ることがないのだと思った時不覚にも、しかし自然に涙が流れ感傷的になった。いかにこの六年間の川中・川高時代が自分の生命の一部の様なものであったかという事を痛切に感ぜずにはいられなかった。

未だ未だ記述したい多くの思い出は沢山あるが長くなるのでこの辺で筆を置く。

最後に同窓諸兄の今後の御健勝と御多幸を衷心より祈ると共に、特に今回同窓による記念文集の編集に当りその労を進んで受け持たれた編集委員の諸兄に心より感謝すると共に御礼申し上げます。

追記 文集の完成を楽しみにしています。

若さで切りぬけた時代

塩 入 亮 善

私は川越の商工観光、文化財の保護向上などについてそれら組織の責任ある立場の一人として川越の発展に微力を尽している。母校に関わりあることとして平成二年に川越市立博物館が開館したが建築から開館、現在の博物館協議会でも副委員長として大護八郎先生が活動しておられ、私も当初より委員の一人として親しくさせて戴いている。川越は小江戸と呼ばれるだけの条件が備わった街で住んでみてその真価を知ることができると。

以上のことを何故先に書いたかというところが全く逆だからだ。

私のいる寺は家康、家光、天海の関わりから復興された七百五十石の御朱印地で出先の川越城主が管理した。明治維新で収入ゼロで投げ出された格好となった。終戦後一宗から選ばれ父が来た。建物や境内全般は極度に荒廃、当時一宗の長老の間で喜多院に行く者は「聖人君子が大馬鹿者か」と囁いたものだったといわれた。私も父と共に初めて川越にきた。母、姉も同様で家族四人。幸い末寺の中年の役僧が一人、初老夫婦の掃除人、化物屋敷の如き荒れはてた建物群、飛行場のような広い境内地の掃除と手製の補修の明け暮れだった。特に三、四年の間はひどく土地の人からよそ者扱いされ、米のご飯も食えることができなかった。わずかな収入を全部合わせても宅地の税金が払えず、何回か知合いに借りたと父はいつも苦しんでいたのを思い出す。火つけが怖いと境内の夜まわりは私がやった。十代の若さが行動可能にした。

こんなことだから近くに住む松岡章次君が当時の楽しい思い出を書けといつて来ても、何の思い出も浮ばないのである。在校中このような生活、内容等を私は友人に話したことはない。話しても却つて反発されるか酒の肴にされるのがオチだからだ。夢中で過した在校時代であった。

休学

菅間 昭

「肺の左側に小さな空洞が幾つかあります」レントゲン写真を指差しながら医者が発した言葉を、茫然として、まるで他人事のように聞いていた。夏休みに入つてずっと体調が悪く、母に連れられて、神田駿河台の杏雲堂病院で専門医の診断を仰いだのは、昭和二十五年八月十九日のことであった。

じりじりと照りつける夏の陽の下を、打ちひしがれた思いで言葉を交す元気もなく御茶ノ水駅から国電に乗った川越市内の多賀町にあった我が家に帰り着き、早速体温を測ると、その日の朝迄は精々三十八度程度にすぎなかったものが、三十九度を遥かに超える数字を示した。当時まだ死に至る病と恐れられていた肺結核であるとの宣告を受けた。精神的な打撃が大きかったからであろう。

本当は入院する必要があったのだろうが、家の経済状態からしてそれも叶わず、一間しかない狭い二階に、本家の明文堂から運んできた教科書の箱を並べた急造のベッドの上で、療養生活が始まることになった。症状が少し落ち着くと、半年余り後に迫った大学受験のことが気になり出した。九月の新学期早々から通学することは難しいと

しても、一か月位休めば学校へ行くことが出来るだろうと、当初はかなり楽観的なことを考えた。たりした。

学校が始まると、担任の佐々木信治先生や佐藤徳四郎先生、また多くの級友たちが続々と見舞いに訪れ、「あせらずにゆっくり治しなさい」「早く良くなつて出て来いよ」など、さまざまな激励の言葉をかけてくれたが、病人自身は、日が経つにつれて、回復の道が意外に遠いことを知るようになっていた。

何時の間にか季節が変り、外には爽やかな風が吹き始め、秋の行事が盛んに行われる中で、埼玉県高等学校総合体育大会で、川高が、常勝浦高を抑えて優勝するという大きなニュースがあった。

そうした学校内外の出来事を病床に届けてくれる友人たちの中で、実に頻繁に我が家を訪れてくれたのが大川解君であった。大川君自身、棒高跳びの選手として総合優勝に重要な貢献をしていたが、来る度、身体中にみみずるスポーツマン特有の明るさを、とかく暗くなり勝ちな病室一杯にふりまいてくれた。小柄で色白な朝久野貞郎君を新婦に、僧侶姿の川崎匡君を伴った、秋の運動会での仮装行列の模様など、家族ともども実に楽しく聞いたものだった。

昭和二十六年の年が明けてしばらくしたある日、ベッドの横に坐った大川君が、「卒業写真に入れるから適当なのを一枚くれ」と言う。「俺は今年卒業出来ないんだからいいんだよ」と断ると、「お前は中学の時から六年間ずっと一緒にいたんだから、卒業写真に載るのは当然だ。いいから俺にまかせろ」と言い張って、休む直前に写した一枚を持って行った。

写真でだけ卒業させてくれた大川君とは、病气から回復した数年後、大学を目指して一緒に受験勉強をしたり、彼が写真関係の事業で成功する以前、池袋の古アパートで共同生活をした仲で、現在に至る迄、長く親しいつき合

いを続けている。

寝たきりの病人を四六時中慰めてくれたのは枕元に置いた一台のラジオ。ある日、たまたまNHKの第二放送にチャンネルを合せると、高等学校向けの音楽の時間で、出演は東京都立駒場高校の生徒だった。ぼんやりと聞いていた女生徒の合唱が終ると「次は二年生五味たか子さんの独唱で、イタリア民謡『フニクリ・フニクラ』』というアナウンスが耳に飛び込んできた。戦前渋谷に住んでいた時の幼馴染、たか子ちゃんの歌ではないか。「赤い火を噴くあの山へ、登ろう、登ろう、そこは地獄の釜の中、のぞこう、のぞこう……」高校生にしては、やや低目の落ち着いた声だ。ラジオから流れる歌にじっと耳を傾けていると、手を取り合って仲良く遊んだ渋谷の頃、学童疎開先の富山での雪の日の別れのシーンなどが、次々に脳裏に浮んで来る。そして今、彼女は朗々と声を張り上げて青春を謳歌しているのに、自分は空しく病床に横たわり、何時とは知れない回復の日を待っているだけだ。もし病気をせず順調に東大へ入学していたら、駒場の駅あたりで、彼女と再会することが出来たのではなからうか。病と闘う中で、つとめて抑えてきた激しい念いが、ふつふつと胸中に湧き起って来たことを、暗い青春の一コマとして懐かしく思い出す。

入院もできなければ、良い薬も買えない、ナイナイ尽しの療養生活にあって、病人に寄せる家族の愛、思いやりには充分恵まれていたと思う。

父に対しては、もつときちんとした仕事についてくれれば、無理なアルバイトをして身体をこわさずにすんだかもしれないと、若干恨んだこともある。しかし戦後財閥解体のあおりで三菱を追われ、心ならずも中小企業に身を置き、日々満員電車にゆられて東京迄通勤していた、父の苦しみ、悲しみを、今になって良く理解することが

出来る。少しの酒に酔い、病室で歌ってくれた、母校旧制三高の寮歌や川中の校歌など、今は亡き父の特徴ある声
がはつきりと耳に残っている。

当時東大の学生だった二歳違いの兄は、学費を稼ぐというよりは家計を助けるために、少しでも収入の多いアルバイト探しに奔走していた。朝鮮戦争での米軍の戦死者遺体縫合作業に従事すると、普通の仕事の数倍の弁当を貰えると、真剣な顔で母に話していたのを憶えている。

中学生、小学生だった三人の弟たちも、毎日のように、二階にあった病床まで食事を運んでくれたり、尿瓶の始末をしてくれたり、きめ細かく世話を焼き、病人中心の生活に文句一つ言わなかった。

そして母、その存在を抜きに、長く苦しかった闘病生活の明け暮れを語ることはできない。母は、その間終始、病人に暗い顔を見せたことがなかったし、一言の愚痴を聞かせたこともなかった。

お金がなくなれば、さっさと訪問着などを風呂敷につつんで質屋へ飛んで行ったし、内職にも精を出し、皆が寝静まった深夜から早朝にかけて、ガチャガチャ ジー ガチャガチャ ジーと編物機を操作する音を、眠れぬベッドの上でよく聞いたものだった。

安静第一、ひたすらベッドに横たわっている病人にとって、朝夕二度体温を測り表に記録するのが、一日の中で大切な仕事であった。病状が安定してからは、午前中三十六度九分、午後はやや上って三十七度二分といった数字が続き、病人の神経をいらだたせた。きょうこそは三十六度台でとどまってほしいと、祈るような気持ちで眺める水銀柱の目盛は、たいいていの場合、無情にも赤く印してある三十七度の位置を少しばかりオーバーしてしまう。ある日、虫の居どころが極端に悪かったせいか、何時ものようにベッドの横で結果を気にしていた母に向って「こんな

ぶっこわれたやつはもう要らないよ」と毒づいて、体温計をほうり投げてしまった。壁にぶつかった体温計は真つ二つに折れて、中の水銀が畳の上に飛び散った。

母は、非難の一言もなく、すつと席を立つと折れた体温計の所へ走り寄り、膝まずいで破片を片づけ始めた。うつむいたままの母の表情をうかがい知ることはできなかつたが、何時終るとも知れない病床の生活に荒んだ息子の気持を思いやって、その心中は悲しみで一杯だったのだろう。黙々と水銀の粒を指先で拾い集める姿を眺め、興奮の静まった私は、母にかける言葉も見つからず、ただ申し訳ないと思うばかりだった。

数年の月日が流れて、昭和三十年の三月末、東大合格の報せを息せき切つて我が家へ持ち帰り、心底嬉しそうな母の顔に接した時、病床にあつた三年間、献身的に看病をしてくれた母に対して、多少なりと恩返しができたと、四十年経つた今でも折にふれて思い出すのである。

当 時

加 畑 栄

川中へ、川中へと憧れて入学してみれば、勉強どころか、吉沢教官（バカタレ教官）の軍事教練、上級生からのお説教、工場その他への学徒動員の毎日でした。又空襲による下校で今の川越市役所の辺りの防空壕に自転車を投げ出し、とび込んだ事もありました。しかし敗戦により多くの混乱もありましたが、次第に学生生活も落ち着いて運動会も出来る様になりました。当時の写真が手元にありましたので、お送り致します（口絵参照）。

私の秘密

松 本 英 男

その一 川中創立五十周年（昭和二十三年）の作品展の時、俳句の作品展の係の担当になり飾り付けの最中、フットの字でない私の作品を見つけた。裏を見ると一学年下のAの作品ではないか。私の出した句は姉の学校の文集より借りてきたものであった。当然、Aもそうなのである、お互いの姉が同級生であったのだから。役得上、Aのは
ボツ………^秘

その二 字の下手な私は書道は当然ニガ手。とある書道展の宿題を郷土部室で地図の拡大器（パンタグラフ）で手本を写し、それを下敷きにして書いたら、見事入賞。評には、形はよいが、全体に力なし………^秘

その三 本館二階の東、大正天皇行在所であったところが戦後、特別教室に転用された。その頃あった進学適性検査を間近にひかえ、私はその教室でサボリを決めていると突然間仕切りの柱が倒れその下敷きに。結局動けずそのまま入院。バチがあたり進学を断念………^秘

ツネさん

小沢孝志

川中に入學した時は三組、数学の忍田豊作先生が担任で斉藤恒さんと同じクラスだった。それ以来四十八年ツネさん・タカシーの付き合いが続いている。

ツネさんは川越は北郊、山田村の出で、自転車で川中に通って来ていた。どういう訳かウマが合って僕の家の入間川とは方角違いなのだが、よく遊びに行った。戦中戦後はあの食糧難時代で何時も腹をすかしていたのだが、行くと白米のご飯を腹一杯食べさせてくれて嬉しかったものだ。そういえば一緒に大勢の友人も押しかけていたので思い出す人もいるのではないかと思う。

ツネさんのお母さんは親切な方で、帰りには当時中々手に入らない野菜や豆などを子供の僕等に持たせて下さるほど慈愛深い方だった。今思い出してもその有難さが胸にこみ上げて来るし、あのやさしいお顔が目には浮かぶ。

僕の家は父親が戦争中は出征し、戦後復員してからも仕事で軌道に乗らなくて苦勞していた事情で家業を手伝うため、何時も学校を休んだり早退していたので、仲よしのツネさんと時たま遊ぶ以外、部活動のようなものは全くやれなかったから、イザ川中時代の思い出話を……と身がまえると話題に窮して原稿を出すのが遅れてしまった。そのおかげでこの出版の編集委員の青柳君を大分ハラハラさせたらしい――。

或る晩のことツネさんから大分ゴキゲンで電話が入り、散々お叱りを受けた上で「お前のことは子供の時から、

家のこと、仕事のことまでお前、以上、に知っているから、俺が書いて松岡に直させて出す」とまで言ってくれた。川中の友達は嬉しいこと言ってくれるなあと感動し、心から有難いと思ひこの題が決った。

ツネさんの長電話は級友の中でも有名で、僕の所にもよくかかって来るが、特にアルコールが入っている時には、また格別の味が出る。そしてお説教も入り、年のせいと同じことを何回も何回も聞かされるのだが、人徳のせいとか、何故か苦にならずに聞けるのが不思議である。ツネさんは僕だけではなく、二百余の級友全員に四十年間毎年欠かさず年賀状を出して、その消息をつないでくれたことは有名だが、この記念出版が実現するのも、またこの僕がこうやって登場するのも、そのおかげだろうと思う。本当に有難い世話人だ。

そのツネさんも今年三月、永らく勤めた西武鉄道を功成り名遂げて定年の勇退とか、いよいよ僕と本腰で清遊することになった訳だ。これからはお互いに人生の仕上げをする時代。一番は健康。注意して良い人生だったと言える様に過したいと思う今日この頃である。

昭和二十四年の日記より

相田俊孝

「少年の夏」というタイトルで終戦の年の中学入学から敗戦の夏休み、そして戦後の混乱と、一少年が体験した有史以来の大変動を小説風に書こうと資料を探し書き始めましたが、テーマが重く才能が追いつかずあきらめました。生来の易きにつく怠け者故、その時見付かった我が日記を写すことで責めを果たすことにいたしました。

一月一日 土曜日

本年は 何か悪い事ある如し

元旦の空 雨で風あり

梅の開花を一つ発見、何とまあ今年は暖かいのだらう。

年明けて 紅梅一つ ほころびぬ

一月七日 金曜日

冬休み最終日。過ぎ去りし冬休みよ、お前はどうかしてそんなに早く去ってしまうのだ。

俊孝よ、お前はどの冬休みを如何に過ごしたか、予定通り行なえたか。

Never put off till tomorrow what you can do today!

一月八日 土曜日

始業式。二期期の成績、中に下がる。図書館に寄り「リーダーズ・ダイジェスト」「学生」一月号を駒井君と共に借り読む。一時より映画館に行き「凸凹海軍の巻」を見る。始業式早々映画とは良からぬ事。

一月十日 月曜日

第三学期の授業始まる。一時間目は自習。二時間目物理。三時間目解析、黒板で一題やらされる、無事終る。四時間目徳さんの国語、トップバッターで一葉の「うつりゆく心」を読まされる、風情（フゼイ）をフウジョウと読み違える、危ないアブナイ。五時間目生物。神田君に一葉の全集を借りる。

一月十四日 金曜日

体育は校庭を七回り。途中教師用事のため去る。急にみんなの駆け方がいいかげんとなる。四回り、五回りにて止める者多し。我より他数名が七回りする。やがて教師戻りそのまま解散。教室に入り神田君と駒井君が議論する。神田君は何でも要領よくやらねば世の中に出てから生きていけないと言う。駒井君は俺はそれでも良いと言う。駒井君の意見に賛成する。

図書館に寄り一葉について調べようとせしが、既に一葉に関する本は全て無し。小島君より借りて写す。

二月八日 火曜日

鈴木楽山先生逝去。すばらしい書が見られない。あの自慢話が聞けない。

二月十一日 金曜日

「子餞会」三遊亭円歌、木下華声来る。

二月十二日 土曜日

雨、一日中降る。寒い。帰途、映画「五番街の出来事」を見る。住宅難を扱いながら明るい映画である。

二月十四日 月曜日

二時より鈴木楽山先生の葬儀。

二月十七日 木曜日

六時間目、講堂にて平田次三郎先生の「近代日本文学の展望」の講演あり。女学生も来て熱心に聞いていた。

二月二十一日 月曜日

風邪のため欠席続き久しぶりに登校。佐久間君にノートを借りる。徳さんの宿題「志賀直哉の文学について」論文五枚以上。新制高校一年生には少し難し過ぎる。何か良い参考書があればよいが。

三月五日 土曜日

卒業式。欠席する。柴崎君、社会科のレポートを届けてくれる。欠席が多く皆に迷惑をかける。

三月九日 水曜日

東上線、二十四時間ストライキ決行。

三月十一日 金曜日

期末試験始まる。英語。生物。

三月十二日 土曜日

幾何。国語は源氏物語より出題、徳さんが出しそうな予感があつたが調べて置かなかつた。靱負(ユゲイ)なんてわからないよ。出るなと感じたら調べて置くこと。

三月十四日 月曜日

英語。物理。

三月十五日 火曜日

化学。国文。

三月十六日 水曜日

地学。社会。

三月十七日 木曜日

解析。三学期の試験終る。

帰途、映画鑑賞。九つのアカデミー賞に輝く「我等の生涯の最良の年」

“The best year of our lives.”

家庭研修で二十四日まで休み。

四月七日 木曜日

春休み今日で終り。浦部君見える。

四月八日 金曜日

始業式。

第十一学年、B組、担任、那須先生、週五日制となり土曜は休み。

四月十一日 月曜日

第十一学年の授業開始。

四月二十一日 木曜日

晴天なりしが、午過ぎから雨降り出す。桜花、我が身にたまる雨に力尽きて散り地面に花の毛氈を形作る。社会科の時間に男女共学の是非につき論じたが、準備期間の後に実施すべしという結論に達した。

四月二十二日 金曜日 晴れ

暑い位の日なり、桜既に散り、時は何ものにも妨げらるることなく情け容赦もなく過ぎて行く。遠く後方に自分だけが取り残され、もがいている。

四月二十三日 土曜日

ソ連映画「シベリヤ物語」を松竹館にて観る。戦争中の日本の国策映画と同様、芸術も文化も皆強力な軍事政府に支配されているのを感じた。

四月二十五日 月曜日

今まさに野球狂時代。昨日の甲子園での巨人・阪神戦で試合見物の人垣が崩れ、何人か死傷者が出たと言う。

四月二十六日 火曜日

寂しかった木々に緑の若葉が現われる。隙間だらけの梢が緑色で満たされて行く。緑は希望の色、青年の色、人の心を落ち着かせる色。赤は人を興奮させ牛を怒らせる。共産党の旗が赤いのが分かった。

Friday, April 29th.

Today is the Emperor's Birthday, but people who raise Japanese flag are few.

Japanese have forgotten their National flag and song.

五月十一日 水曜日 晴れ

徳さんの宿題、俳句、厨川白村、清少納言、モンテ・ニユの伝記及び作品研究。図書館に行く。

寝つかれぬ 夜耳につく 蛙かな

田の蛙 驚さぬように 通りけり

五月十七日 火曜日

埼玉県知事選挙日

五月十九日 木曜日

学生協議会会長、副会長及び監査委員の選挙。模擬試験の答案戻る。平均半分も出来ぬ。易しい問題なのに半分とは。

五月二十日 金曜日

五月雨降る。

我が友Kは詩人である。小説家である。夢多い男である。考え方はすべて感傷的である。故に文学者に最も適している。自分の適性が何か、はつきりしている人は羨ましい。

理科か、文科か。国文秀を取るかと思えば次には可を取り、数学可を取れば次には秀。大海に浮かぶ一片の木の葉。変り易きは我が心。希望もなく、目的もなく唯その日その日を無為に過ごす。

June 23. Thursday.

Get up at 6. as usual. The rain had fallen continually for four days, and everything was damp and smelled musty.

But it is very fine today!

Typhoon "Dera" struck Kyushu yesterday.

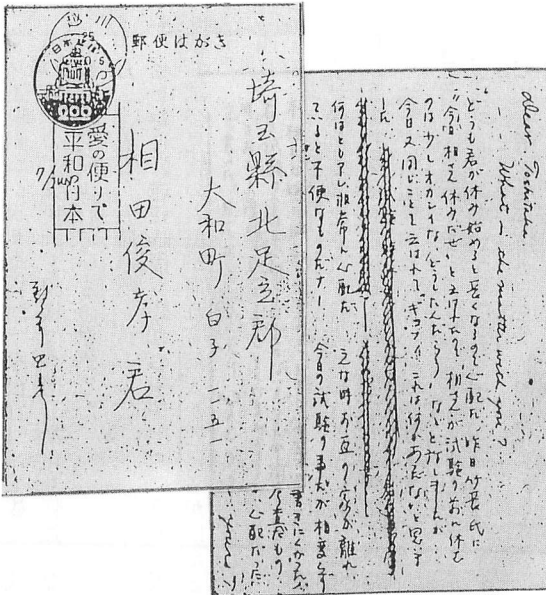
I attended Record Concert (Chopin's Prelude.

No15, Nocturne.) after school.

七月二十一日 誕生日

初恋の詩が記されているが、残念、予定の枚数が来てしまった。

人生の価値は出会った感動の数という、残された人生で感動の数を増やして行きたい。



▲川高在学中、故・駒井から相田の欠席を心配して送られて来たハガキ

昭和二十五・二十六年の日記から

小熊 忠三郎

(編集室・編)

昭和二十五年(十一年D組・三学期)

《新年》

一月一日(日) 小雨

昨日おそく迄起きていたので今朝は十時頃起き出し、家族全部が集まって新年の会食をしたのが十二時頃になった。昨晩から降り出した雨が続いてさびしく降っている。今年の正月ほど落ち着いた時はなかった。餅を八つ食べる。○さんからお年玉五百円を頂く。比留間等から今年新登場の「お年玉つき年賀葉書」が七通来た。

(蜃雪時代七十円)

一月二日(月) 晴

今朝は朝湯(小熊家は松の湯という風呂屋)が七時からあるので六時半頃、カルメンの音楽とともに起きる。店をあげたらすぐ客が来た。午前中はどこへも出ず。五日に女学校で開かれる英語会に何か簡単なスピーチでもやろうと思つていろいろ材料を探したが見当らなかつた。

《学生生活》

一月九日(月) 晴

いよいよ今日から三学期だ。皆元気でやって来た。体育室の掃除をやつて講堂で校長の訓話がある。出席をとつて帰る。水村、比留間と八木(時計・レコード店)に寄り、昨日頼んだものを聞いたらまだと言われる。水村は英語の歌を三、四枚買ったようだ。比留間が定期を買うというので本川越へ行き、鶴川座へ泉鏡花の「婦系図」を見に行く。海外版とあるので英語が入るのかと思つたらそうでない。それほど悪いとは思わなかつた。しかし外国人(二世)が見たら余り誉めるようなものでもあるまい。

(航空郵便二十四円)

一月十三日(金) 晴

今日は模試第一日で数学、国語、進学適性検査だ。午前中数学と国語を各二時間、午後一時間適性検査だった。一月十四日(土) 雪
十時頃から雪が降り出し、五時頃まで続く。模試第二

日目の英語は前の時よりもできたと思う(実力がついたためか?)しかし生物は全然駄目だ。日本史も前よりダメだ。

映画のビラ下タダ券が二枚あるので比留間と東宝へ行こうと思ったが、田中(修)にやって二人で行ってもらう。雪は三センチくらい積もったろう、下駄にくっついて歩きにくい。今日は停電なのでレコードも聴けない。

一月二十四日(火) 晴

今日は初めて日記を書き忘れてしまう。

模擬試験の答案、適性検査が返って来た。適性検査となると気がそわそわして問題文などもよく読まないでいるからいけないのだと思う。比留間、田中(修)、新井(涼)の「青きドナウ」を聴くが、まだまだ音が出ているに過ぎないとこだ。五時頃終わり、比留間のヴァイオリンを持って帰る。家でかなりいたずらしてみるのがドレミさえできない。

(予餞会費三十円、印刷代七円)

一月三十一日(火) 晴

もう一月も終わりだと思ふと日のたつのは早いものをつくづく感じられる。掛原さんの幾何は今日で終わった。明日からいよいよ解析IIとなる。日本史の模試が二番だと聞かされいささか嬉しくなる。音楽の二時間

は実際つまらない。「庭の千草」だった。英語劇に残る。皆もう一応暗記ができたようだった。

(月謝三百円)

二月三日(金) 雪

今朝から雪が降り出した。今年には雪の当たり年だ。府瀬川がスキーを持って来て大島がやっていたが全然なっていない。川渡(宮城県鳴子の疎開先)の頃が思い出される。六時間目のアッサクのくだらない「体育の目的」なる講義は全然聴かず、マイニチを見た。今日からチャールルの「回顧録」がまた始まった。比留間たちの合奏練習を見て沼田などと一緒に帰る。

二月十二日(日) 雨・晴

予餞会(卒業生を送る、下級生の演芸会)は九時頃から始まりくだらないものばかりだ。演劇部の「本尊」も失敗だった。比留間のヴァイオリン独奏「金婚式」は新井涼平の姉さん雅子さんの伴奏だったが、二人ともアガっているらしく比留間は音が小さく新井さんは大きい。田中のヴィヴァルディの協奏曲もよくない。新井さんのベートーヴェン(悲愴ソナタ)第一楽章は鮮やかだった。最後の合奏は非常に速くて失敗のようだ。五時頃終わる。

二月十七日(金) 晴

今日は劇の練習はやらずに女学校のを見学に行くとい

うので行く。先ず彼女達の「ドンキホーテ」から始まった。杉浦女史が目だった。次にこちらがやったがちっともアがるようなことはなかった。

二月十九日(日) 晴

七時頃起き、すぐ学校へ行って鶴川座へセットを運ぶ。他の生徒も早くから来ていた。母が見に来ていた。心が動揺したが舞台へ出たら大丈夫だ。特にリングをかじったらすっかり元気がついた。皆一生懸命練習した甲斐があり、うまくいった。終わって机などを学校に返し、女学校の「ドンキホーテ」を見に行く。十二時の電車で東京へ行く。神田の露店で「猿蓑」を買い、新宿へ出て先ず文化へいった。フエデの「女だけの都」だ。近頃でない傑作だ。

(電車代百円、映画百三十五円、本代百円)

《新学期》 (三年・C組)

四月十一日(火) 晴

新入生との対面式なるものが朝礼の時行われた。入学当初は誰も嬉しそうな顔付きだが、じきに嫌になってしまふだろう。今度の教室は二階の校長室の上で気持ちの良い部屋だ。化学の木村、西川、ドンチャン、オシテンから皆受験準備を早くしろといわれ嫌になってしまう。予定表を作りきちんと守って行こうと思う。掃除をさぼってすぐ帰る。

(教科書百四円)

五月二十八日(日) 雨

音楽を聴こうとしたが家族みんなのために千秋楽の相撲にした。照国が勝っているのは嬉しい。東富士が羽黒山に勝って優勝した。昔の面影がみられないのは残念だ。安芸ノ海時代を思い出す。

《音楽会》

六月二日(金) 雨

(音楽部の発表会でピアノ伴奏をしてくれるはずの末広先生が急に欠席した)

音楽の末広女史が急病で来れないと電報が来たので、原達はだいたい困っていたようだった。結局、比留間と青柳の先生(東山先生)が代わりにやってくれることになりました。彼女も実に悪いことをするものだ。

六月三日(土) 曇

今日は本校の講堂で音楽部の発表会があるというので十時頃出かける。用意はもうできていたようだ。一時近く約半数の人、とくに女生生が多かった。別に大したことはない。新井が最初に出た。トステイのセレナーデがちよっと気に入ったくらいのものであった。

《音楽部室》

十月一日(日) 晴

朝八時頃かなり一生懸命やろうと思って地学・数学の

本を持って音楽室へいったがさあ大変、レコードなんかかけられて目茶目茶だ。十時近く英語弁論大会があつて、うんとヤジつてやれたのが面白かった。結局オケンの子が一位。

(パン五円)

十月五日(木) 雨

(青柳がクライバー指揮、ベルリンフィルの未完成のレコードを学校へ持って来ていた)青柳と約束したので雨の中を重い(未完成交響曲)のレコードを持って出かける。授業はたったの四時間で、後は運動会の役員の会があるそうだ。帰りに青柳の「未完成」と聴きくらべをやる。私のワルター指揮、ウィーンフィルはもちろん良いが、第二楽章では青柳のベルリンも悪くはない。

《運動会》

十月七日(土) 晴

運動会なので少し早目に出かける。いろいろやってみたが結局二人組合わせて二等をとったきりだった。仮装行列は面白かった。朝久野のヨメさん、大川のムコ、川崎の坊主はよいトリオだ。沼田の格好も面白い。

(十月四日に運動会費十円の記入あり)

《試験》

十月九日(月) 晴

いよいよ適性検査の受験用紙が配られた。一応心配だ。

どの授業もつまらない、まるで柵に囲まれた囚人のように毎日学校へ来て、飯を食って、騒いで帰るというのが多い。学校なんて、みんなこんなものかも知れないが。

十月十七日(火) 晴

朝礼の時校舎建築についての話があり、月二百円ずつ出させられることになった。この校舎でもまだ五十年位はラクなのに……。

ゲールの英語が二時間もあつても受検受験といわれるのでかなわない。沼田があくびをした所今度は一番前へ来いなどと言われ、さつそく次の時間には帰ってしまった。

十月二十日(金) 晴

化学、日本史、世界史の試験。

十月二十三日(月) 晴

生物、英語、国語、

十月二十四日(火) 晴

数学(幾何・解析)、英語

英語は東大級の応用問題があり、良い問題だった。

《修学旅行》

十一月十二日(日) 曇

ちよつと早起きして鶴川座へ行く。「火を噴く三十八度線」という、ニュースをまとめた映画だがちよつとも面

白くなかった。前の対独戦のほうはずっと迫力もあり、カメラもすぐれていた。明日関西へ行くので頭を刈れどのおやじの命令により、安野へ行く。若い店員がこの前電気バリカンでやろうとしたので手バリカンでやってくれと言ったのを覚えていて、「手バリカンですか？」と尋ねた。気の利くやつだと感心する。

(床屋四十五円)

十一月十三日(月) 晴 へ修学旅行へ出発

授業四時間を終え、二時のラジオでNBC・クライバー(オーケストラと指揮者名)でシューベルト第五シムフォニー、ウィーンの森、ジブシー男爵に感激。六時半の電車で池袋へ行く。一時間早かったので暫くぶらぶらしていたが実に汚い町だ。

東京駅を十時半に出発、ちようどうまく先生連中のいない車に乗れたのでこれ幸いとデカイ声で怒鳴り合っていたが、一人寝、二人寝と結局静まってしまった。自分では寝なかったつもりだったが二、三時間も寝たろう、名古屋近辺で目がさめた。

十一月十四日(火) 晴

二見浦まで相当時間がかかった。悪評を聞いていたので期待していなかったが、浪が荒れていたのでもんざらではなかった。山田で飯を食い、皇大神宮へ行く。戦争に負けたとは言え大したものだ。ただお祈りはせ

ず「今日は」とやったが、かえってちよつと後味が悪かった。一方、外宮は殺風景で面白くなかった。亀山から奈良への車窓は実に良い。

奈良は寒かった。猿沢の池をひとめぐりして後は土産物屋をのぞく。皆宴会をやっていたが、やる気がしなかった。

(絵葉書百円、パン三十円)

十一月十五日(水) 晴

少し早目に起きて、案内人つきで、一応名所と名のつく所は廻って見た。若草山でセンベイを買ったが一枚もやらないうちに鹿がいなくなつたので、オカシナもなくなってしまった。大仏殿の大きさにはおどろかさされた。比留間と五重塔に上がったのが面白かった。スエーデンのペン・フレンドのペリットに絵葉書を出す。奈良は一日では無理だ。

京都着が二時。悪いとは思ったが、金鳥たちの後に歩いて行く。大丸でシナソバを食ってそこいらをウロついて丸物に入ってみた。あいつらは「スケ」の話ばかりでついて行けない。五時半に飲みコウを始めたが、金を出さないものが入ったりしてちよつとも酔えなかつた。

(シナソバ五十円、飲みコウ百三十円)

十一月十六日(木) 晴

朝から自動車で見物。三十三間堂の像、加茂川の水、清水寺、円山公園、八坂神社、インクライン、平安神宮、とくに平安神宮の紅白の塗りが印象的だ。銀閣寺、京大、北野神社から嵐山へ行く。途中のドライブウェイは悪くはないが人家があり過ぎる。保津川に沿って一人でかなり歩いたが、歩くにつれて美しさを増していた。保津川下りは面白だろう。二条城、御所は印象に残らぬ。宿へ戻って青柳、比留間と大丸へ食べに行く。その前に母の頼みで東本願寺にお参りする。時間が有り過ぎて、京極付近だけでもてあました。十一時十五分、あまり面白くなかった関西旅行に別れを告げる。

(ぶどう酒百円、絵葉書五十円、大丸百円、清水焼二百七十円)

十一月十七日(金) 晴

名古屋駅に停車。皆ふところがさびしいのと、疲労のため元氣なく寝ていた。青柳とウイスキーを飲み、寝ない約束をし、「セビリヤの理髪師」の楽譜を賭けた、本を読んだりする。小田原あたりから眠くてまいった。

一応池袋で解散して新宿へ行き、ブラブラしていたら柴野に会った。三十円劇場で「たそがれの維納」をみたが、眠ってしまった。こんなことは初めてだ。「たそがれの維納」が二回目だったせいもあるだろうが。

マルミ(新宿伊勢丹近くの有名な中古レコード店)でモーツアルトのシムフォニーを求めようとしたが、ワルター指揮のがないのでモーツアルトのセレナーデを求めた。盤が良いので新しく買ったようだ。電車が混んで危うく割るところだった。

(映画プロ三十五円、電車代五十五円、中古SPレコード二枚七百五十円)

十一月十八日(土) 雨

つかれがひどかった。十一時頃起きる。一時から映画部主催の映画会があるというので無理して出かける。画面がうすかったり、音がでなかったり、休みが長かったりして気分をすっかり悪くした。「晩春」も途中で終わってしまった。

五日間の旅行をかえりみて、結局行く前から思っていた通りつまらなかつた。

昭和二十六年

《卒業前》

一月二十三日(火) 晴

ついに進学適性検査の日来る。六時ごろ起き、七時二十八分の汽車に乗るべく早目に出て途中西町の「中富」に寄り、叔母さんの激励を受ける。車中はつとめて眠るように心がけた。北浦和で降り、駅前の道を真っ直ぐに行くと十分ほどで浦高につく。十時に検査官が二人

入って来て写真調べたりいろいろ注意をする。旺文社の時と違ってまわりが皆友達だったがそれでもアガリ気味だ。深呼吸をして落ち着かせる。十一時十分に試験が始まった。時間は百分、文科、理科の問題が各十五問ずつ。午後のは一時十分から五十分、こちらのほうはやさしいのが五十問あり、同じ系統のものをまとめながらやったら相当時間の節約になった。

二月十日（土） 晴

今日は久しぶりの登校日。予餞会があった。午後の部に末広女史が出たのには驚く。一番最後に奇術として林（松旭齋天智）が出てきたのにはこれこそ驚いた。彼とはしばらく会わなかったがいつの間にかあんな立派な芸人になっていた。

三月六日（火） 雨

今日は卒業式だというのに起きたのが十時。急いで自転車で行く。ちょうど式の始まった所に入る。今年の総代は長島。

写真をもらって皆と別れる。これで三年間やつかいになった川越高校ともグッドバイになるわけだ。しかし数少ない友を見つけることができたのは嬉しかった。

（月謝千百円）

（編集室・追記）

この日記はこの二十五年から発売された旺文社の

「学生日記」という日記帳に記されている。その付録にいろいろ出ているが、野球記録というところに、

第三十一回全国高校野球大会記録

熊谷高校（南関東）が二回戦で倉敷高校に九対一で敗れ、優勝は湘南高校。

第三十二回優勝は松山東高校だったこと

二十四年春の六大学では、末吉、荒川を擁する早大が優勝、立教の藤田が四割四厘で首位打者。秋は平古場、岩中の慶大。

二十五年春の優勝は早大。早大の石井が四割四分で首位打者。

都市対抗野球

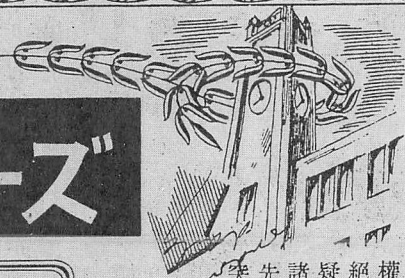
第二十回（二十四年）では豊岡物産を主体としたと思われるオール豊岡が緒戦（二回戦）で福岡の西日本鉄道に十一対三で敗れ、優勝は荒巻、今久留主兄弟の別府星野組。第二十一回優勝は山村兄弟のオール大阪。

職業野球

二十一年に復活し、同年は近畿、二十二年は阪神、二十三年は南海、二十四年は巨人が優勝。

ホームラン王は二十一年、大下弘二十本、二十二年、大下十七本、二十三年、青田、川上、各二十五本、二十四年、藤村四十六本と出ている。この年サンフランシスコ・シールズが来日、七戦全勝して帰った。

ス!!
シリーズ



權威ある本書は、必ずや諸君に
絶対不敗の對策を與えることを
疑われない。
諸君は自信と勇氣とを以つて、
先ず第一關門たる一月廿三日を
突破せよ。

一月二十三日に備えて!!

(全國) 斉適性検査施行

旺文社雑誌部長 根本峰好著

進学適性検査の
傾向と對策

ひらけ!

突破への王道を!!

進学適性検査

The Road to
Chrysomel
Phuket Boro

(特長)

- 一、執筆者は各書とも定評高い専門の權威者ぞろい。
- 二、入試の内容・傾向を解明し、明年を豫測させる。
- 三、受験準備の對策と、解答要領を具體的に明示す。
- 四、練習問題や應用問題を附し、實力の充實を期した。
- 五、昨年度版より更に増頁しながら、定價は据置きし。

旺文社「学生日記」に掲載された進学適性検査の広告断片

豆事典

寄宿舎

校舎の並んだ一番北側に木造二階建のボロボロの寄宿舎があった。先輩たちの頃は交通も不便で飯能の奥とか越生の先とか、あるいは川越周辺でも電車やバスの行っていない所の人たちは寄宿舎を利用したのだろう。川高の伝統の素晴らしい温床になったに違いない。言わば先輩の汗と涙とナントカの染み付いた史跡だったわけだ。私たちの頃にはもう、寄宿舎は廃止され、野球部などの部室として使われていた。野球部の部屋で授業中なのに構わず相撲を取っていた。よく床が抜けなかったものだ。

木造校舎

木造校舎は何てったって味がある。個性がある。温か味がある。それに音がいい。廊下を歩く足音が違うんだ。でもドシン、ドシンと歩くと叱られた。高三の頃、二階の教室の床を踏み抜いたヤツがいた。ドシン、ドシンで叱られたのは、うるさいからではなく、もしかしたら校舎が傷んでいたからだだったのかなあ。たぐでさえ古いボロ校舎を、紙のついたドタ靴でドカドカ歩いたんだから堪ったものではない。掃除の時、雑巾掛けを無精してバケツの水を床に撒いたら、床の隙間から下の校長室に流れて大目玉を食ったが、あれも木造校舎ならでは思い出だ。

整列登校

電車を降りると整列し、上級生の号令一下、学校まで整列して登校した。時には駆け足もあった。将校、先生、上級生に出会おうと「歩調取れ！ カシラーツ右」の号令がかかった。

防風ガラス

飛行機の風除け窓ガラス。ガラスよりも軽く、丈夫で、弾を受けても粉々にならないようプラスチックでできていた。当時は合成樹脂と呼んだがその破片に人気があった。墜落した敵機のもとは戦利品という感覚もあったが、それよりも、こすると何とも言えない甘い芳香がするのが嬉しかった。

他校

私たちが中学の時点で川越には中等学校（後に高校）がいくつかあった。県立工業、市立商業、県立農蚕学校、県立女子、市立女子、その他 山村（家政）、星野などがあり、県立聾啞学校もあった。しかし、工業、商業との野球以外にはこれといった定期的な交流はなく、とくに他校の生徒が大勢、本校に来るようなことはほとんどなかった。

学生時代

新藤 邦泰

私にとって川越中学、高校の六年間が時代の流れと、心の動きを身をもって感じ、めまぐるしく過し、そして二度と経験する事のない時であったと人生にすごく感謝している。私の人生は幸せである、素晴らしい過去があるから。仕事、友人、仲間、先輩等々恵まれた現在があるのは、過去の中でも中・高時代短い間であったが、戦争、戦後の時代、平和な日本への歩み、肋膜炎になり奈落の底に落された時、人生の縮図を短期間に学んだ私は、この病気のおかげで人生を正しく見、考える勉強をさせてもらったからだ。

昭和二十年四月入学の時は大東亜戦争末期であったはずだが、その頃の私は勝ち戦争、聖戦であるとの教育指導を信じ、国の為になれの言葉に憧れ、零戦で敵艦に玉砕する事を夢見ていた。

中学に入り、先輩より先ず決められた事があった。東上線は当時三輛編成であったが、一輛目は男子学生、三輛目に女学生、真中の車輛は各々の上級生が乗っており、どんなに混んでいても二輛目に乗るとお説教というものが待っていた。下車駅は川越駅（当時西町と言っていた）であり、川越市駅の方が少し学校に近いが上りから来るものは川越駅で降りなければならなかった（これは市駅の近くに女子校、通称オケンがあったから）。駅から三キロ近い

道を一年生を先頭にして列を組んで学校へと歩く。途中に八幡神社がありここで小休止、学徒動員で工場等へ行っている上級生が時々顔を見せる。上級生のいじめが始まる。例えば鉛筆を削れという。削り始め芯が出るとポキッと折れる、削る、芯ポキ、泣きたくなってくる。これは鉛筆を石に叩いてあり、芯は折れているのである。上級生は絶対であった。

或る日、米軍の飛行機に機銃掃射された。畑へ森の中へ逃げ込み青くなった事があった。その時川越駅のホームが焼かれた。

しかしこの様な悪い思い出ばかりでなく、或る時は同じ沿線の上級生は優しく、他の線の上級生にお説教をされていると助けてくれたりし、通学班の団結の固さがあった。

中学一年の時、私は少し体が大きかったのか相撲部から勧誘され、四年生の部の人から毎日誘われた。そして庄力をかける為か四年生の教室へ来る様に言われ、恐る恐る階段を上り教室へ行ったらオジサンばかりいて、何か言われる度に何も言えずガタガタふるえていたのを覚えている。相撲は大変と言われ、剣道部に入部した。

戦時中の想い出をもう一つ書くと、兵器の掃除当番の時である。銃の形をした木製の銃の中に菊の御紋章のついた三八銃がたしか二十挺あった。この三八銃が本物で引き金を引くとカチツとよい音をするので、いたずらをしていたら動かなくなってしまう。止むなく教官に報告に行き、教官が直すべく分解し始めたが直らずイライラして来たのか、当番全員を並べて履いていたスリッパでビンタをくった。これは痛かった。今でも痛さを思い出す。吉沢万年軍曹殿であった。変わった形の戦闘帽をかぶっていたこの教官についてはもう一つの想い出がある。軍事教練で木銃で型の訓練をしていた時、生徒に朝礼台の上からこの木銃を投げつけ、帽子の校章に見事に当り生徒は

倒れた。校章が砕け散った。コントロールの素晴らしさと、怖さを感じた次第である。戦争中の想い出のみで申し訳ないが、アメリカのB 29が新河岸付近に落され、米軍飛行士がパラシュートで降り、つれて来られたのを見たが、その時の感想は鬼畜米英と言われていたがオニではなく普通の人間であった。シャツ一枚姿で日本の飛行機乗りのスタイルと全然違うので「どうなっているのかな」と思った。一部の思想に動かされた事の恐しさを今感じている。

やはり戦時中、日清製粉、石川蚕糸、農家へと動員された。この時の経験も私にとって貴重な人生経験の一つである。例えば農家に手伝いに行けば銀シャリのオムスビを食べられる。石川蚕糸では背にかついだ袋から蛹まごのツユが耳に垂れてくる。しかしこのサナギが乾いた物体になると魚がよく釣れる餌になる。日清製粉では、たまたま落して割れた袋から出て来た黄色の粉が、食べてみたら甘く旨かったことでこれが黄粉きんこであると知った。いいつくせない味であった事がまだ口の中に残っている。

中学に入学し、併設中学になり、高校生として卒業した六年間、短くも長くもある人生の一頁である。この様な事を書いていると走馬灯の如く色々な想い出が頭をよぎっては消えてゆく。いたずら者であった私はよく怒られ、立たされもし、御岳山にサボリに行ったり、川越城の堀跡の中で喧嘩をしたり、切符を買って市駅から乗った石川五右衛門先生に見つかり怒られた。今でも理解出来ない。電車が混んでいて中に入れず屋根にしがみついて通学し落ちそうになったり、新聞部の部長選挙ではリンチ事件となり、当時の三Cの組の者が多数反省書を書かされ、その事件の準首謀者であった事等々、今となっては、楽しくも又ホロニガイ想い出である。

川高時代の最後の極めつきは、昭和二十六年一月七日からの肋膜炎による病氣入院である。前日当時の三年C組

のモサ達私に遊びに来てくれ一晚中騒いだ後、熱が出て即入院となつてしまつた。その為三学期は一日も出られず、卒業式にも出られず寂しい思いをした事である。又卒業写真にも写つてないのが心残りの最大のものである。しかし素晴らしい仲間を得、協力してもらつたり、時々逢えて楽しい話が出来、我が仲間に感謝している。最後になりますが、四十二歳厄年の時の同窓会で幹事を仰せ付かり、塩入大僧正の暖かい御配慮で喜多院の江戸城内の間で同窓会が出来、厄除けをしてもらった事を感謝しています。出来得るならば同窓の皆様全員が長生きをし、いつ迄も楽しい友人として同窓会を開いたり、語らいの場を作り、お逢い出来る事を祈念しております。

又今回の記念文集を作成するに当り何かと努力して頂きました、編集準備委員の方々、発起人の方々に心より御礼申し上げます。

ガソリン・カー通学の思い出

五十嵐 甫

私たち越生、毛呂山方面からの通学者にとつての悩みは、中学一、二年生の時の通学時間の問題でした。一年生の時は越生線（越生―坂戸）が廃止されていた時期で、私たちは八高線を利用し、越生から高麗川經由で、川越迄通つたものでした。

八高線は二時間置き、川越線も一時間半置き位で、朝は六時前に家を出て、夜、八時半頃帰宅する毎日でした。夕方、高麗川駅での連絡が悪く約二時間待つのです。

従つて家で勉強する時間がなく、優秀なみなさんの中で、果たして進級できるだろうか、落第したらどうしよう、などと心配したものでした。

小学校六年生の時まで「井の中の蛙」でいたのが、中学に入り大海へ出たようなもので大変とまどつたものでした。

一年生の時などは、玄関上の二階の教室から西の山脈やまなみ(越生方面)を眺め、とんだ所へ来たものだなあ、などと子供心に思ったものでした。

今では、「よき師、よき友」に出会い、楽しく充実した中学、高校時代を過ごせたことに感謝しております。そして、懐かしい思い出話として、語れることに幸せを感じております。

特に、通学時間が長くかかるので、父が、身体のことを心配してくれたことを思い出します。

川越に下宿していた先輩もおりました。

中学二年の途中から越生線が再開通し、坂戸経由で通学できることになり、時間がかなり緩和されました。

その頃の越生線はガソリン・カー(一時は木炭カー)と呼ばれ、マッチ箱というニックネームをつけられた程、小さな車輛(写真参照)でした。走行時速は三十キロメートルをそこそこで、上り坂の所では跳び下りたり、跳び乗ったりできる位でした。

夏には走っているところへ蟬が飛び込んで来たりして、今から思うと情緒豊かな通学時代でした。寒い冬の朝などは、ガソリン・カーのエンジンがかからず、私たち学生が数百メートル後押しをして、助走をつけてエンジンをかけたものでした。

おまけに寿司詰めで、終点坂戸駅に近い、一本松という駅付近の人は乗れずに遅刻することさえありました。

今でも何かの折、その思い出話に花が咲くことがあります。

しかし、昭和二十五年、越生―坂戸間が電化され本数も増えて来ました。昭和四十年代から沿線に住宅、高校、大学等ができ、今日の隆盛をみて、東京まで通勤する人さえいるようになりました。

改めて時の流れを感じている昨今です。

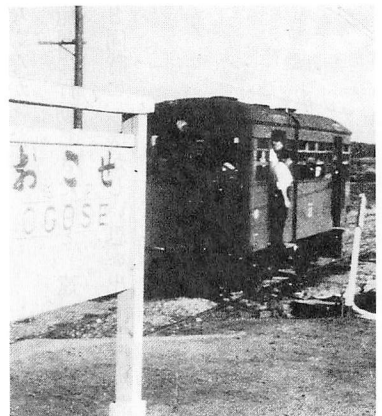
自転車通学の思い出

昭和二十年。第二次世界大戦も終末に近づき、連合国軍が日本本土に押し迫ってきた。三月十日には東京大空襲により、東京が焼け野原と化した。その直後の四月に中学校へ入学した私たちは、いろいろな体験をした。

福原村から学校まで約六キロの道を、毎日自転車で通学した。同じ学校の川越中学は勿論、川越工業・川越農蚕・川越商業に通学していた小学校の仲間や先輩達とも、よくいっしょに通ったものである。

ある日突然空襲警報が発令され、すぐ下校するよう指示を受けた。そして自転車で校門を出るとすぐ、バリバリ

関根（牛窪） 保雄



越生駅を出るガソリン・カー

という物凄い音がしたと思うや、前方の大きな木にぶつかるとは思わないかと思うような低空に米軍機が大きく見えた。夢中で自転車からとびおり、道路わきの生垣（今の川越小学校）の蔭に身を隠した。自転車は十メートルも走って道端に倒れていた。このことは今でも目に見え、耳に聞こえるようによく覚えている。この時は、川越女学校でも艦載機による機銃掃射があったとのことであった。

また、戦中から終戦直後だったので、道路は殆ど砂利道ばかりで、風が強いと埃がたち、雨が降ると水溜りだらけで大変だった。その上、砂利の尖ったのや釘のような物が落ちていたりして、パンクすることも時々あったように思う。その反面、自動車などは全くと言ってもよい位通らなかつたので、道いっばいになって話しながら行っても事故の心配なぞ全然なかつた。

日がたつにつれ、だんだん友達も多くなり、お互いに家へ行き来する人も何人もいた。時には、家とまるで方角のちがう所へ自転車で遊びに行ったこともあった。十キロ位の距離は気にならなかつた。

このように、自転車通学をしたことがもとで、川越を中心にかなり広い範囲に行動できたこと、遠い所へ自転車で行くことが苦にならないようになったことなどは、大変よかつたと思うと同時に、懐かしい思い出として残っている。

自転車部隊

半田 登

川中・川高を通して六年間、通学は自転車だった。誰が名付けたのか「自転車部隊」。今なら、銀輪輝く「サイクリング・グループ」とでも言いたいところだが、入学当時は、ドン、ドンと胃にまで響くノーパンクタイヤの代物部隊。よくもまあ、学校から四キロメートル離れた名細村(なぐわしむら)から、穴ぼこだらけの砂利道を通ったものである。

それでも上級生の中には、ハンドルを片手に本を読みながら通学をしたり、両手をポケットに入れて得意になってペダルをこぐ姿も見られた。また、友達と三人位が横一線になって楽しそうに走って行く姿に、いつかは、自分もとあこがれたものだった。

しかし、晴れた日はよかったが、雨の日や風の日は大変だった。とくに北風の強い冬の日の下校は、向い風となり、秩父おろしに煽られて自転車が前へ進まず転がして歩いたり、田んぼの中の一軒家の日溜まりに自転車を置き、放牧されている数頭のホルスタインを眺めながら一息いたものだった。この日溜まりでは、同じ様に、ハア、ハアと息を切らして自転車をこいできた他校の友達とも一緒になり、今なら情報交換というところだが、よくおしゃべりをしては帰宅したものだだった。

自転車通学で忘れられないのは、入学してから二、三か月後の米軍のP51戦闘機による空襲である。戦争末期の

当時は、米空軍機の本土空襲が頻繁で、一、二機なら警戒警報、それ以上になると、よく空襲警報が発令されたものだった。

その日は「空襲警報」のサイレンの合図と同時に、授業が中止され、下校となった。級友のF君と一緒に自転車で校門をとり出し、二、三分走った郭町の路上にさしかかると、突然、耳をつんざく様な爆音と同時に、機銃掃射。頭上の巨大な飛行機と金属音に、二人とも自転車を降り出し、夢中で道端の民家の軒下に飛び込んだ。体をまるめて突っ伏した姿勢で何分いたことか。

しばらくして、恐る恐る顔を上げると、そこは、部屋の中で、体には厚い布団が掛けられていた。「もう大丈夫よ」とおばさんの声。おばさんは、モンペ姿で地下足袋で立っていた。

軒下になうずくまる級友と二人の安全を守るために、その家の主婦が、自分の子どもと一緒に部屋に入れ、布団を掛けてくれたものだった。

「助かった」。過ぎ去ったばかりの初めての恐ろしい体験に、目をパチクリして声も出ない数分が過ぎた。F君と二人は、期せずして一緒に「おばさん、ありがとう」と何回もお礼を言ったことを覚えている。

戦時中、見知らぬおばさんから受けた、この温かい心は、ずっと身体の奥深く刻まれ、今も生きているように思う。

そのおばさんの家は、今はなくなってしまうが、郭町を通るたびに助けていただいたおばさんの姿を思い出し、その心に感謝している。

それについても、平和な今の時代を有難く思うと同時に、うすれ行く豊かな心の大切さをつくづくと思う。昨今で

ある。

終りに紹介を一つ。

東京都で教職関係に携わる川中・川高出身者の会に「初雁の会」がある。小・中・高の教員や教育委員会勤務者が中心で、百名余の会員数である。毎年十一月には懇親会が開かれ、川中・川高時代の思い出話に花が咲く。卒業年度や年齢を越えて、川中・川高という共通の基盤が支えとなつて、今年は七回目を迎える。同期の根本暎男、平井功、森田利寛、浦部俊久の諸兄も一緒に、毎年の盛会を世話人幹事の一人として嬉しく、有難く思っている。

川中の思い出など

小 沢 昭 治

還暦を過ぎてから総てに於いて、力の衰えを感じておりました昨今、諸兄らの、御発案による記念文集作成のしらせは、大きな心の支えとなりました。農家という職業柄、日頃文章には縁のない私にとってペンを握るのは非常に億劫でしたが、折角の機会だからと、妻や子供に尻を叩かれ、老化防止にもなるだろうと思ひ、川中時代の思い出と、今後の事を書いてみようと思ひ、ペンをとりました。

一、入学試験の口頭試問

私の順番は指扇の石川一次君の二人後で、亡くなった永田正君の前でした。そして次の問題は今でも良く覚えて
います。

一、川田谷の飛行場は大変広いようですが、面積はどの位ありますか。

二、君は農家の長男なのに、どうして農蚕に行かずにこの川中を受けたのですか。

三、一編隊十三機の敵機が、川越上空に十一編隊現れました。全部で何機ですか。

四、敵機の種類をB29の他に三つ以上あげて下さい。

特に、問一では実際の広さの見当がつかず、咄嗟に「軍の秘密になっているので答えられません」と答えてしまったのをよく覚えています。

二、釘無の橋の下で機銃掃射を受けたこと

目出度く合格はしたものの、直きに空襲が激しくなり、敗戦も間近に迫った七月の土曜日だったと思います。日清製粉での奉仕作業を半日で終え、親友の斎藤（清）君らと帰宅途中でした。府川の土手で警戒警報が鳴ったので、橋に着いてから水浴びでもして避難しようと思いました。すると川に入ったところで空襲警報が鳴り、鳴り止まぬうちに東の上空から、バシッバシッゴウという、ものすごい音がした途端、赤い幾つもの火の矢が西の方へ走りまわりました。黒いF4Fが何機も、鼓膜を破る程の爆音とともに、おそらく坂戸飛行場を目指し、超低空で飛んでゆきました。震えながらこの様子を見ていた私達の真上を通った敵機の中には、機関砲を発射している乗員の姿が見えました。この銃撃で伊草の落合橋では、三人の死傷者が出たそうですが、釘無の橋を渡る度に、あの時の恐しい光景を思い出します。

三、列車通学

中三の七月、台風で荒川の橋が流されてしまった事があり、前の晩に同級の永沢誠一君と、大宮回りで通学しよ

うと決めておいたので、桶川駅から汽車に乗りました。ところが、大宮で乗り換え、指扇まで行くと、荒川が洪水で不通だと、全員下されてしまいました。しかし、南古谷まで歩いてゆけば列車はあるとのことでした。どうしようかと何人かで話し合っていたところ、同級の田中小平君が、行こう行こうと寄ってきたのです。従わないと後で甘くみられると衆議一決し、よし行こうと線路を少し歩いてから川越線の鉄橋を渡り始めました。しかし、二メートル下は濁流が渦を巻いて流れ、橋脚は流木があたつてグラグラと揺れています。更に歩み板は三十センチメートル程の幅しかなく、所々に石炭殻による穴がありました。水泳には自信のある者にとつても心細い限りでした。半分程渡つて振り返ると、皆真青な顔をして歩きながら、下の板だけを見ており、私も諦めて、又ゆっくりと歩き出しました。そして最後の五メートルは危ないとは知りながら駆け足になってしまいました。

こうして、南古谷から又汽車に乗り、学校へは行けましたが、既に三時間目が始まっていました。それでもこのお蔭で川中三か年の皆勤賞を貰う事が出来、友人との思い出話の種にもなっています。

帰りは水が引け、ゆっくりではあったけれど汽車も鉄橋を渡れ、川越に泊らずに済みました。そして太郎右衛門橋の渡し舟が始まるまでの間、大宮回りの列車通学をすることになったのです。鉄橋を歩いて渡ったことは、思い出とはいっても、今の子供達からは無謀を笑われるだけだろうと思います。

四、今後のこと

私は川中で競技班の他に、郷土班にも入っていましたが、今でも古い事には関心があり、古民具等を集めています。これからは、地区の同好の士と話し合いながら、字に伝わる郷土芸能の保存育成に努めるつもりでおります。

又、お蔭様で昨年、私の息子も嫁さんを貰うことが出来ました。御承知の様に、特に農家には、嫁さんのなり

手が少なく、三十過ぎの有為の青年が周りに大勢います。私はこの世への恩返しとして、仲人をどんどん引き受け、若い人達の前途に希望を持たせる手助けをしていきたいと考えております。

幸い、市や字の役職は一通り終らせて頂き、暇も出来たので、現在三組目の成立に一喜一憂しております。仲人は、体は勿論、頭も使い、色々と勉強しなければならぬので、自分自身の健康維持と老化防止にも、大いに役立つと思つて毎日を頑張っております。

埼玉県立川越中学校一年生徒

想い出の記

小林 洋 左

合格発表

合格発表は見に来るなと、登校前に父から申し付けられた。小学校（当時は国民学校初等科）へ行ったら、担任が発表を見に行つて来いといつたので、受験者三人連れ立って出掛けた。川越中学校の通用門に差し掛ると、父が発表場所の方から、怖い顔で戻つて来た。てっきり、落ちたものと思ひ、足が竦んだ。友人が一人だけ落ちた。後で父にひどく叱られた。入学するまで、川中の記事と白線を付けた戦闘帽に得意満面だった。

通学

小さかったので、中学生になつても、最初は子供用の自転車で、約一里の道を最寄りの入間川駅まで通つた。途

中から、大人用自転車にノーパンクタイヤで通った。尻がひどく痛かった。自転車は同級の小沢の家や、村上耳鼻科の庭先に置かして貰った。

入間川駅は十数年前まで、当時のままだった。

西武線は、二両連結で前は男子、後は女子と決まっていた。前の車両に乗ると、上級生の背のうの下になって、呼吸するのも苦しかった。いつも、ぎゅうぎゅう詰めだった。遅くなって後の車両に飛び込むと、冬でも熱かった。車内の空気は全然違っていた。姉が川女生だったので、いつも話の種にされ、からかわれているような気がした。しかし、後の車両に乗ったことが分かると、上級生の説教が待っていた。講堂に集められ、掛矢で床を叩いて脅された。

空襲でよく電車が停まった。本川越・入間川間を線路伝いによく歩いた。一度、入間川駅で電車が止まるや否や、艦載機の機銃掃射を受け、夢中で近くの竹藪に逃げ込んだ。また、ある時は、川越市内でも機銃掃射に遭った。第二小学校の付近の民家に避難した。見知らぬ川中生を家族の布団の下に入れてくれた。

勤労働員

市内の製粉工場に動員された。暑い夏の炎天下でのトロッコ押しが仕事だった。三時のおやつにビスケットが二枚支給された。でも腹の足しにはならなかった。ある時、小さな布袋を家から持ち寄り、粉を手で詰め、かばんに隠したところを見つかり、担任から、激しい説教を受けた。不思議に、あまり悪いことをした意識はなかった。

製糸工場に繭かつぎにも動員された。繭をゆでながら、年輩の工員の焼いた蛹まなごを食わされた。恐る恐る食べたが、腹の足しにはならなかった。なにか、金魚になったような気がした。

荒川の畑の、麦刈りなどの農作業によく出掛けた。親から授業料や電車賃を払って貰い、只（無賃）というのは、なにか腑におちなかつた。

授業

入学早々、隣の席の生徒から、お前の名前は小林洋左シヨウワリシヨウサだといわれた。考えてもみなかつたので、都会の奴は違うなど驚いた。しかし、間髪を入れず先生に睨まれた。生物の先生だつた。

英語というのは不可思議な音だと思つた。Can Taro swim? に、勘太郎がどうのと聞こえた。当時としては、斬新なオーラル・メソッドだつた。

教練

配属軍人は下級生には下士官が充てられた。通称バカタレ軍曹だつた。夏の強い日差しの下で木銃を構え、不動の姿勢でよくも一時間立っていられたものだ。

アメリカ兵

アメリカ軍が進駐した当初、旧陸軍航空士官学校付近には近寄るな、といわれていた。そのうち、入間川の川原に、トラックで砂利取りに来るアメリカ兵と片言英語で会話し、チョコレートやキャンデーを貰つた。父親のためには、煙草を貰つた。ラッキーストライクやキャメル、チェスターフィールドなど懐かしい。

鯨皮の靴

軍靴が生徒に払い下げられた。くじ引きで十二文の鯨皮の靴が当たつた。どうにもならず、後に交換会でスケート靴と替えた。

グライダー

陸軍航空士官学校から数機の見事なグライダーが運び込まれた。風防ガラスの付いた上級用のものだった。しかし、いつの間にか、なくなっていた。

正門

入学式と卒業式の二回だけ通行を許されると説明されていたが、戦後の民主化政策により、いつの間にか撤廃された。

玉座

校舎の二階に玉座があった。金ピカの部屋に、天井からシャンデリアが下っていた。生徒は在学中一回見学を許された。校舎解体の際、どうなったのだろう。

階段教室

階段教室の授業は、矢張り中学ならではだと思った。床下には、使用済の答案が山と積まれていた。試験の際はその裏側が再利用され、試験中、先輩の答案を見て楽しんだ。

防空壕

城の内堀の脇腹にも防空壕が掘られていた。グラウンドは半分以上を防空壕にした。自分たちで掘り、終戦後又、自分たちで埋めた。

後記

中学時代については断片的な記憶しか残っていない。あつという間に過ぎ去った。勉強の記憶もあまりない。衣

服もなく、いつも空腹を感じていた。学校帰りに食べた、大根と人参だけのおでんの味が、今も記憶に新しい。そういえば、よく焼き芋を食べたものだ。しかし、その後、あの時代はどんな意義があったのだろうかと反問することもあった。

高麗の里からの痛学物語

佐々木 良 祐

秩父の峯から流れ出る高麗川の清流の畔の山寺、天台宗は松福院の跡とりたる運命をになつて生れた僕には、京都比叡山中學から川越中学への転校と共に、超遠距離通学という、或る宗門でいう「千日回峯修業」にも負けないような試練が、少年時代の六年間にわたつて待ち受けていた。それはそれは通学が大変なことだったので。

毎朝六時前、夜のとばりの中で起床。六時半には平沢の山門を出て山道を下つて国鉄・高麗川駅まで徒歩で四十分。道がけわしかったので自転車は使えなかつたし、当時はこれ位は歩くのは常識だったので。

当時の国鉄・川越線は貨物列車に貨物車改造客車を連結した奴で、これを引っぱるのは石炭焚きのSL、つまり黒い煤煙と白い湯気を吐き散らし、汽笛を鳴らしながらシュツシュツと走る真正銘の蒸気機関車だった。乗車時刻は忘れもしない七時十分。ガタゴトと一旅行したような気分をやつと川越駅に着いた後、川中までは徒歩で三十分。何しろ駅は城下町の南のはずれ、川中は北の端だったからなあ。

始業時刻は確か八時五十分だったと記憶するが、汽車がこれしかなかつた為に、一番乗り登校が在校中ずーっと

続いた。転入生の僕は級編成の都合で疎開組と一しょになり、徳さんが担任の五組に入れられてここで東京から転入してきたいろいろな人と知り合った。授業を待つ間、寒い冬の日には体の芯までこえてしまった。五組は西向き
の教室で特に寒かった。

考えてみると毎日毎日往復で二時間以上歩いてきたことになる。体も丈夫になる筈だ。当時の服装——白線をつけた戦闘帽に軍靴。かばんは陸軍の背のう。入間川の航空士官学校の払い下げ品で、あちこちにひもの一杯ついたものだった。

学期末試験の日の帰りには、少しでも早く帰宅したい一心で、六時間目の授業が終ると川越駅までみんなで一目散に走る。走っている途中で、川越の一つ隣の南古谷を発車する汽車の汽笛が聴こえてくることがある。それとばかりに川越の城下町を近道を選んで走り抜け、駅の改札口なんか通らないで線路の方からプラットホームに入り込み、のろのろと動いている列車のタラップにすべり込みの飛び乗りをよくやったものだ。当時の汽車は自動ドアでなく、開けっ放しのタラップだったからその点便利だった。

平井・内海・大山・東・大沢・吉武・榎山などがその川越線組だった。なつかしい面々だ。

今にしてケツサクだと思ふことは、このノロマな汽車を待ち伏せして隣の西川越まで歩くこともあったことだ。もっとひどい時は、その又隣の的場まで行ったこともある。今の人達には想像もつかないことだろうが、それ位汽車が遅く、停車時間が長く、ダイヤがのんびりしていた、ということだ。何しろ二時間置きしか来ないのだから。また昔の中学生はのんびりしていたものだ。

川越駅で時間をつぶす時は、駅のすぐそばの高梨昌夫くんの家、魚敬の店先に立ち寄り、お茶をよくごちそう

になった。当時親切にしてくれた高梨くんのお父さん、お母さんの姿が目には浮かぶ。今考えると本当になつかしく、又有難さが身にしてみる。こちらには又別のグループもよく来ていておかげで僕はこの関係の友人も多い。竹沢・宇都野・松岡・朝久野、そうだと森岡もよくいたな。

もう一つ歴史の一こまを書こう。戦争も末期、東京空襲もひんぱんになったころ、首記にも書いた僕の家、松福院は五十人の学童疎開を受け容れたことがあった。戦災を受けて大都市近郊にある山寺に、当時の国民学校の子供達が親元を離れ集団で避難して来て苦労する話は全国的にあって、戦中史の一つとして書き物や映画にもなっているが、僕の生家松福院もその典型的なモデルであったわけだ。僕は受け容れる側であったわけだが、同世代の少年としていろいろなエピソードは今でも強烈に覚えている。その内容は世に書かれて出ているものの通りだった。本当に可哀そうだった。体験した子供達にとっては、その想い出は余程イメージが悪かったのだろう。この関係で当寺を訪れる人はいない。

あの時の子供達は今それぞれどんな風になっているだろうか、ふとそんな事を思ってみることもある。

五十年——半世紀——時の移りに驚くばかりである。

僕は先生を長いことやったが、現在はこの松福院をまもってこの原稿を書いている。

「私の通学遍路」から

内海俊郎

昭和二十年の確か六月中旬だった。場所は、川中の正面玄関から入ってすぐ左側にある応接室。

「この成績じゃ普通ならとてもわが校では無理だが、非常時だから（転校を）認めざるを得ない。この学校は埼玉でも三番目の歴史と伝統を誇る県立中学である。市内はもちろん、近隣各町村、遠くは片道三時間もかかる所から優秀な生徒が集まってくる。みんなと一緒にやっていくには相当の覚悟と努力がいるぞ……東京で今までできなかった分も頑張るように。いいか」

小島校長のこんな話をコチンコチンになって聞いていたようだ。これが私の川中生としての第一歩になる。

戦闘帽に一本の白線。セルロイド製とはいえ、雁のシンボルと三つの「中」の字を組み合わせた徽章に自分が偉くなったような気がした。

私たち一家は、昭和二十年五月二十三日に東京青山で空襲に遭い、父が戦中から懇意にしていた入間郡高麗村（現・日高市）の聖天院に疎開した。ご住職とそのご家族、村の人たちの温かいご好意に甘えてこの地に七年もお世話になった。この間に受けた数々の恩恵と厚情は忘れることができない。

思えば昭和二十年代の前半は凄じい時代であった。中学生の小さな世界でも、一学期に教わったことが二学期になると、あれは間違っていた」となったんだから世の中全体がひっくり返って見えた。それでも何らかの形で直接戦

争に巻き込まれた先輩たちに比べれば、はるかに恵まれている。まして指導する先生方のご苦労は並大抵のもてはなかつたはずである。

あのタブロイド判の四つ折りを始め、教科書はどれも味気なく、一つも覚えていない。だが、仲間が揃えば決まって始まる先生の物真似では内容はもちろん、文句まで正確だ。

あー坊、カンちゃん、忍テン、プーラン、テンカイ、トクさん、かけぞう、ゲジさん、ゲール、那須さん、キンタ。どの先生も強い個性と独特の話術で教室の空気を支配しておられたし、生徒にとっては怖い存在であった。「だよお」も、「だあだ」も、「であるからして」も、いきなり現代のミサイルのように正確に飛んでくる白墨も、常に警戒し、半ば期待した。

昔、教科書を「コンニヤク」に譬えた人がいたそうだ。その骨組みに肉をつけ、味噌をぬるのが教師の仕事である、と。なるほど、してやられた感がある。しかしながら、せっかくコンニヤクを美味しく調理していただいたにもかかわらず、不肖の私はそのすべてに消化不良をおこしていたので、思い出は教室を出て校外に求めざるを得ない。

私の勤め先のすぐそばを地下鉄・有楽町線が走っている。駅(新富町)や車両に当然のように表示されている「川越市」という文字を見て今昔の感に堪えない。寝惚けたような話だが、半世紀も遡って通学の苦勞を思い出しているからである。

その地に生まれ育った人たちや今のサラリーマンならビクともしないことだろうが、都会育ちのひ弱な少年にとって、一番こたえたのが通学そのものだった。かかる時間は止むを得ないとしても、歩く距離の長さと同様の交

通機関の不便さにはほとほとまいった。

主な交通手段は、C11型の機関車が引つ張る四両編成の国鉄・川越線。

冬など朝五時に起きて星を見、霜を踏みながら高麗川駅まで急いても二十分。車中の三十分はいいとして、川越駅からがさあ大変。終戦までは最上級生をリーダーに整列して進む強歩の三十分はまいった。靴擦れはできる、ゲートルは緩むで疎開組には目に涙をためている奴もいた。チビの私などほとんど小走りに近かったが、不思議と落伍もせずにみんなについて行けたのは多分、東京で憧れの兵隊さんの行軍を見ていたせいだろう。

子供は誰でも汽車が好き。こんな中でも川越線はわいわいがやがやと楽しかった。が、それも初めからというわけにはいかなかった。

へお説教

転校して間もない日の帰り、高萩で降りる顔見知りのオイチの生徒に「サヨナラ」と手を振った。終点高麗川の車両の中で優しい顔の先輩と怖い顔の先輩、その他二、三人のお付きに取り囲まれて、

「おい、貴様、さつき女と口きいたろ」

「……?」

「サヨナラって手え振ったじゃねえか」

と言うなりガン！と顔面に一発。眼鏡は飛ぶ、鼻血は出る……さらに「ネクタイしめてたろう」とか、「襟や腕にジャバラ巻いてたろう」とか、当時の東京ではできようはずもない服装をいろいろ聞かれた。兵隊一色とはいえ、中学生には中学生なりの制服への憧れがあったと思う。このあと、川中の伝統とか、質実剛健、剛毅の気風に

ついで代わるがわるの講義が続き、「これから気をつけろ！」でやっと解放された。

殴った先輩が別れ際に小さな声でひとこと、「おふくろに言うなよ」……いきなりのショックは大きかったが、いわゆる硬派、軟派と子分たちといった組み合わせはなかなか料だし、最後の「おふくろ」という文句にいたっては何とも言えない聞かせどころで男っぽい味さえしてくる。当節ではこの時の痛みが賛辞に変わるような気がする。

これが「近隣から集まる優秀な生徒」のお説教かと納得。家路を急ぎながら、ようし、俺も上級生になったらやるぞ」と心に誓ったものの、あつという間に、それができないことはもちろん、やつても効き目のないご時勢となつた。

お説教といえば、上級生がいきなり十人くらいで教室へ猛々しく入り込んできて、「てめーら弛んでるぞ！」とやるあれもわが年代はやられ損で終わった。

還暦を過ぎた今、時代の待遇は年をとつても同じだったなあとぼやきながらも、だからこそ我が同期生には外柔内剛型が多いのだ、と勝手に思つたりする。

〈時間つぶし〉

戦後もしばらくたつて少しは慣れてくると大変なのは帰りがだった。何しろ一日四往復のダイヤだから、部活を途中でやめて駅まで走る。それがなければ、本来なら一番楽しい時間の筈なのに予備知識も土地勘もない。喜多院がいいからと言われて行けば、あの辺をウロウロするなと脅かされる。勉強する人はやるべきことをちゃんとやるが、私はそうはいかない。今なら当然ゲームセンターだろう。どうしても賑やかなところへと足が向いた。

特に蓮馨寺境内の市へよく寄つた。古い靴同士を叩いて汚してはピカピカに光らせる「レックス」の実演販売。

その頃はいていた払い下げのスエードの軍靴を磨いてみてくれと言って「バカヤロー」と怒鳴られた。多少はおしゃれの余裕もできてきたのかこれはよく売れていた。その頃から川越線の客車のシートが四角く切られて、しみに板だけになってしまったのも関係あるだろう。また、ここでのもう一つのヒット商品に英語辞書の紙（インディアン・ペーパー）を使ってやる「煙草巻き器」があった。わが家にもこれがあつてよく配給のタバコを巻く手伝いをしたものである。初体験もこの時になるが、頭はくらむ。煙にむせる。あげくにうまくもないので自然に興味を失った。その頃、野球に熱中していたせいもあるだろう。

私は、高三の夏に病気で休学、その後転地したために、都合五年ちよつとの間川越へ通つたことになる。こうして時間つぶしの思い出にひたつてみると、今さらながら何故もつともつと「江戸の母」の懐深く触れておかなかつたのか、と悔やむことしきりである。

へアメリカ・東京・三百五十円

何か呪文のようだが、中三の頃、西町の駅前でアメリカ兵がタバコやガムやチョコレットを売っているところをよく見かけたものだ。売る単位はカートンやケースで、値段はどれも三百五十円だったと記憶する。

学校の帰り道で五円の「たんきり飴」を買つては空腹をしのいでいた身に、アメリカのチョコレットやチュウイングガムなどまさに垂涎すいぜんの的。見ているほかになく、それだけ印象は深い。

ラッキーストライクをワンカートン高く掲げ、

「アメリカ・トウキョウ・サンビヤク・ゴジュエン」

と叫んでは何例によつてガムを噛みながらあたりを見る。また繰り返す。

来日？ 早々の彼にとって日本の地名はアツギを除けばカワゴエもウラワもない。すべてトウキョウだ。誰が三百五十円に決めたのか知らないが、ましてや物の値段など細かく言えるわけがない（為替レートが、一ドル＝三百六十円に固定されたのは昭和二十四年）。

やがて、怖いMPがジープに乗ってやって来る頃にはもうその姿はない。アツケラカンとしたものだった。しかし、あの見事なポーズは今でもそのままポスターになるだろう。

通に言わせるとジョンソン基地や横田基地の周辺ではワンカートン百円だったというから、西町は流通の末端の端だったのかも知れない（因みにあの頃の日本のタバコの値段を、一箱十本入りの「ひかり」を例に日本たばこ産業㈱にたずねてみた。まだ生まれていない時なので詳しい事情は分からないが、と前置きして、昭和二十一年十二月に一円五十銭に値上げ、昭和二十二年六月に四円に値上げ、昭和二十二年十二月に五十円に一挙に上がった後、昭和二十五年四月に四十円に値下げ、昭和二十六年には更に三十円に下がってますね」と説明してくれた。三十円がしばらく続いたことは我々の体験するところだが、こんなところにも時代が反映されていて面白いと思う）。

当時、タバコは大人たちにとって何よりの貴重品で、栽培農家といえども製品としては配給以外手に入らない時期があった。ましてや美しいパッケージに包まれた「洋モク」には吸う前に目が眩むのはやむを得ない。

川越線には時々二等車が連結されてきた。ジョンソン基地へ赴くアメリカ兵を運ぶ専用車両で、川越で全員が降りて日本人に解放される。ここだ。愛煙家のおじさん、おにいさんがどっと飛び込む。アメリカ兵が残した長い吸殻を競って拾う光景を見ていて少しも暗い感じはしなかった。それは、今や死語となった「モク拾い」のイメージとはかけ離れている。子供心にももう戦争は終わったし、あの焼夷弾も落ちてこなければグラマンも飛んでこない。

これからは安心して好きなことがやれるんだ、といった希望に満ちた活力を感じていたせいか、日本とアメリカの違いを万事ケロッと受け止めていたようだ。

〈西武線まわり〉

川越線の時刻に間に合わない時や、最終に乗れない時は本数の多い西武線で帰った。本川越―入間川(徒歩)稲荷山公園―飯能―高麗という遠まわりである。小遣いもかかるし辛いところだが、仲間はあるし、女学生が多い。乗換えもあって慣れるにつれて一本道の国鉄より気を惹かれるものがあった。しかし、楽しめば地獄。高麗駅から歩く四十分はちよつとした少年向きの教練となった。

忘れもしない。高校時代、トクさん(故・佐藤徳四郎先生)がクラス担任の時、掃除当番をさぼった。職員室に呼ばれ、あとはご存じの通り。お咎めは無期掃除刑。連日の西武線まわりで一週間くらいたった頃、泣きっ面に蜂の大雪に見舞われた。雪だから、と早退させるほど時代は甘くない。電車は止まるし、動いてもものろのろ。三十センチの雪道を喘ぎながら家にたどりついたのが十時を過ぎていた。自分で蒔いた種とは言え、こんなにトクさんを恨めしく思ったことはない。

翌朝、突然笑顔で刑の打ち切りを言い渡され、飛び上がって喜んだことを鮮明に覚えている。その時のセリフが「トシオ、よく帰れたな」

私に佐藤先生を語る資格はないかもしれないが、戦後の混乱期にあの独特の福島訛りで己の信じる教育方針を貫いた先生には頭が下がる思いがするが、学校も懐が深かったなと妙なところで感心している。

私が療養中、高麗村での吟行の途中だといってお見舞いいただいた時の温顔と不精鬚が忘れられない。

とうに故人となられた先生のご冥福を改めてお祈りする次第である。

合掌

〈木炭バス〉

……という若い人は、優雅な乗物をイメージするかも知れない。少なくとも日本が石油に困った時代の代用燃料という意識はないだろう。

世の中も大分落ちついてきた高二になると、志義町から出て高麗村を通過して飯能まで行く帝産オートバスの走らなくなった。こいつは柴だと早速飛びついたが、結果は後の「冗談音楽」の世界に近かった。なにしろ県道とはいえ、舗装されていないデコボコ道を力の無い木炭を燃料に走るわけだから。揺れる、遅いはまだいい。閉口したのはエンコだ。まるでエンジンが拗ねるように震えては止まった。

時々アメリカ将校が乗っているシツポを立てたでっかい車を見かけて、「すげエや！」と感嘆しても「コノヤロ！」とは思わなかったのはただ子供だったせいだろうか。

しかし、今はもう見ることができない武蔵野の林や田園風景をたっぷり味わわせてくれたのはこの木炭バスかと思うと、うしろのお釜を金棒でつつく運転手の姿とともに無性に懐かしくなってくる。

友人が増え、新しい体験を重ねるにつれて通学のことなんかでへこたれては何もできないぞ、ということも散々思い知らされることになる。それからは時間を忘れて最良の春を楽しんだ。

思い出しはもろん涙も感動もある。しかし、教室で、グラウンドで、しばられ、どやされ、殴られ、少しは褒められながら過ごした川中・川高時代に、暗い世相とウラハラの明るく伸び伸びした自由を感じるのは私だけだろうか。他愛ないことを書き連ねたのもそのせいとお許しいただきたい。

思い出「話」とはよく言うが、「文」となると難しい。木に譬えると、幹に絡まる蔓のようなもので、どこに話題の花が咲くか分からないからだ。一度咲いたら同花相見ても何度でも笑う。不思議だよなあ……。

終戦前後の思い出

赤田 康二

一、「こんなデッカイ人と戦争しているのか」

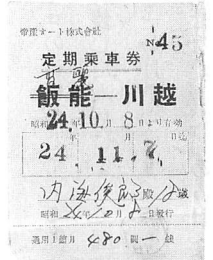
今、懐かしい小学校時代と川中一、二年生の通知表を見ている。その時の体格が記されている。

小學六年 身長一三三・五 體重二五・二

(現在平均) (一四四・五) (三八・〇)

中學二年 身長一三九・五 體重二八・五

(現在平均) (一五九・二) (四九・三)



高麗川～川越間を国鉄(JR)・西武・バスと使い分けた、当時の定期券(運賃)

国鉄	6か月	570円
西武	1か月	325円
バス	1か月	480円

(所要時間)

国鉄經由	約1時間半
西武 "	約2時間
バス "	約1時間弱

残念ながら一年生のは成績だけで、身体状況が記録されていないが、今の子どもたちと比べて、いかに小さかったかと改めて驚かされる。

昭和二十年春頃か、空襲警報が解除され、ホツとしていた時間だったと思う。学校の内外が何となく騒々しい。教室の窓から正門方向を見ると、楠の下を、大きな外人二人が目隠しされ、両手は後手にしばられて繋がれ、三人の憲兵につきそわれて、校舎に近づいてくる。その瞬間、怖さが私の全身を走った。外人があまりに大きく見え、日頃怖いと思っていた憲兵が、外人の肩にも届かず小さく見えたからだ。とつさに、今日の空襲で撃墜されたB29の搭乗員であろうと察しがついた。

「日本はこんなデツカイ外人と戦っているのか」と改めて怖くなった。と同時に「こんなデツカイ人を相手にして戦争に勝てるのか」と思いながらも、怖いもの見たさに、校舎の玄関から校長室に入っていく一行を距離を置いて廊下に出て見ていた。勿論、校長室には鍵が掛けられたようだが、とても怖くて近寄れなかった。英語の先生が通訳に当ることになったらしいときいて、日頃は生徒によく教えてくれる先生、外人との会話をうまくやって下さいと少年心に、しきりに心配した記憶がある。

二、初めての英語対話を通じた喜び

終戦後、通学路の稲荷山公園駅と入間川駅間の約二キロの道に面している陸軍航空士官学校は、米軍によって接収され、ジョンソン基地といわれたが、その通用門は武装した米兵によって固められていた。その頃、日本人は米兵に何をされるかわからないという風説がとんでいた。一か月ぐらいは、恐る恐る道の反対側の端を歩いて通った。しかし、米兵はただ我々を見ているだけで何の表情も見せなかった。ある日、一人の米兵が、稲荷山公園駅構内で、

数人の我々学生に向かつて「へい、ボーイ」といつて、チューインガムを一枚ずつ出してくれた。見上げる大男が笑みを浮かべていたように思えるが、一瞬は、突然のことと、欲しさと怖さで言葉が出なかった。しかし美味さは格別だった。その時から米兵に対する警戒心も解け始め、通学道も門衛側を通り、互いに目と目を合わせられるようになった。米兵の日本人に対して何もしない表情と、リッチな米兵という印象とが親しみに変化していった。チューインガムやチョコレートの欲しさも手伝い、何時の間にか学校で教わった英語を試そうという気持ちが変わってきた。そして帰り道、入間川駅を降り、ジョンソン基地の最初の通用門前の守衛の米兵に近づくと笑顔が見えた。試そうとしていた言葉は「Can you speak Japanese?」と決め、まだ後に続ける言葉は考えていなかった。同じ一年生の仲間もいっしょだったことに力を得て、ニコニコした顔で我々を見ている米兵に向かって、思い切つて声を出し話し掛けた。それがどうして間違えたのか、多分上がっていたのだろう。話した言葉は「JapaneseをEnglish」とり違えてしまった。米人に「英語は出来るか」と聞いてしまった。返ってきた言葉は「オー、イヤー」であった。一瞬耳を疑った。「Yes」ではない。後が続かない。仲間が助け舟を出してくれ言い直した。「Japanese?」その答えは「No」と返ってきた。我々少年は、言葉が通じた喜びにひたつた。それ以来英語をみんな好きになつたはずだ。次の会話はジープに乗せてもらったことだ。小柄な少年がカバンを背負い、土埃をあげて歩く姿にジープが止まった。米兵が「イナリヤマ」といい指で乗れと言っている。少年達の疲れた足は、米軍G Iの「乗れ」の合図が嬉しかった。そして稲荷山公園駅で降りしてくれた。「サンキュー、ベリマッチ」と言う「オー」と返事を笑顔とともに返してくれた。ますます米軍人に親しみを感じ、通学帰路にジープやトラックに乗せてもらうのが楽しみにになり、積極的に声を掛けようということになった。そして学校で「乗せて下さい」は何ていうのか仲先生に聞いた。

“Get on” それに please をつけければ丁寧になると教えられた。そして学校からの帰路、米軍の走る車を手を振って止めた。“Get on please” が通じて、ますます嬉しくなった。

こうして駐留した米兵のやさしさを知り、豊かな米兵から分けてもらったチョコレート等の美味さを知った以上に心が温まった。

学校で教わった英語が、初めて接した外人に通じた喜びは、今も鮮明に思い出されるのである。

稲荷山公園通学路

加藤 博

晴れの川中入学といっても、終戦間際の昭和二十年。戦闘帽にカーキ色の制服、編上げ靴（もちろん兄貴のお古）にゲートル、背囊という姿、これに鉄砲かつげば、そのまま兵隊さんである。

我々、飯能からの通学者は、武蔵野線（現西武池袋線）で飯能駅から稲荷山公園駅で下車、二キロの道を入間川駅（現狭山市駅）まで歩く、ここから再び本川越駅まで電車に乗る。駅から学校まで二キロ、往復八キロの道を歩いていたことになる。よくも毎日通学したものだと感じさせられる。

遙か昔の思い出が甦るのを期待しながら、四十数年ぶりに稲荷山通学路を歩いてみた。

それこそ心躍る思いで稲荷山公園駅に降りた。

駅は高校生、女子大生の姿が目立ち、駅周辺に並んでいる自転車の数からいって、朝夕の混雑は相当なものだと

思われ、往時とは想像もつかない程である。

それでも、基地内に並ぶ桜の巨木が、五百メートルは残っており、入学時、満開の桜並木を歩いた、往時を偲ぶことができた。本道から分かれると、桜並木はまったく姿をとどめず、滑走路のフェンス沿いに迂回。

ここから、よく航空士官学校の飛行機が、離着陸するのを見ていた。もう戦闘機は殆ど見られず、二枚翼の赤とんぼや高連ばかりだったように思う。戦後米軍に接収され、F51なども来たが、今は自衛隊機が轟音を響かせて飛び立っている。しばらく足を止めて入間川駅をさがしたが、立ち並ぶ建物のため、小学校も見当らず、市街地の拡大に目を見張るばかりである。

バイパスの横断にも手間取り、所用時間三十分で駅に到着した。当時どの位の時間で通ったか、記憶も薄れてしまったが、十五分あると前の電車に乗れるというので、走ったように思う。

入間川駅には、ホームいっぱいに通学生が集まったこと。男女別車両に分乗したこと。窓から乗り込むほどの、通学地獄であったこと。また、西武線利用者は、毎朝、本川越駅から縦隊に並んで駆け足で通学し、指揮する上級生が恐かったことなど。

四十数年の歳月の隔たりを、強烈に味わったひと時であった。ふと、西友のウィンドウに映る、白髪まじりの顔を眺め、ハッと我に返った。

長い教職の仕事から引退し、今、社会教育の仕事の一端を引き受けている。世は、まさに生涯学習の時代、自分の生き甲斐になり、少しでも社会に役立てればと、心を新たにしている。

「熟すべし、老ゆるべからず」を道しるべに、第二の人生を歩んでいきたい。

ある日の下校

柳 沢 隆

私はなぜか中学時代、それも入学時から終戦前後の思い出がすぐに脳裏をよぎります。川越一小の脇を通り、関東配電の建物を右へ折れての下校中、突然の空襲に遭った、すぐさま民家に飛び込み避難、忘れたいのはその後、有無を言わずもぐり込んだ押入れの中でムズムズと体を這うノミ、その気持の悪い感触、今でもそのお宅に感謝しながら時々思い出しています。本川越駅からの電車が入間川の駅に到着した途端また敵機の来襲、今度はホームを飛び下り一目散に麦畑？へ伏せる。当時はホームの東側は一面の畑であったということでしょう。西武線通学といえは思い出すのは登校時二両編成の列車の前が男子生徒、後が女子生徒とはつきり色分けされていたことです。もつとも中には元気のいい男の子が勇気を出して後の車へ乗り込み、悦に入ってた姿も見受けられました。入間川の駅から稲荷山公園の駅までは徒歩で下校したものです。当時は今のように靴はふんだんになく、殆どはお齒の高下駄で約二キロの道のりを頑張ったものでした。

ようやく終戦を迎え、稲荷山公園駅近くの基地にも占領軍の兵士が目につき始める。基地の門に立つ兵士の銃をもてあそぶ姿、初めて目にするジープ、すべてが奇異に映ったものでした。友達の一人が、兵士の前を通るときは静かに通らないと銃殺される、いや駆け抜けた方がいいと賛否両論でした。やがて「ジープ」「銃殺」が我々のはやり言葉となったものでした。四十七年前のある日の下校時の一コマでした。

初めてアメリカ兵を見る

豊泉正次

あれは終戦直後の昭和二十年十月頃だったと思う。学校からの帰り、飯能方面からの通学者が、いつもの様に西武線入間川駅から武蔵野線稲荷山公園駅に向って三々五々連れ立って歩いてた。歩き始めて五百メートル程入間川ゴムの所へ来た時、後ろから聞き馴れない音がする。振り返ると、アメリカ兵の乗ったジープではないか。私達は反射的に道路のみぎひだりに逃げ込んだ。その時A君が「逃げちゃあ駄目だ」と怒鳴った。その声に私達が立ち止った時、ジープはスピードを落してアメリカ兵が何か言っている様だったが、何事もなく通り過ぎて行った。その時の怖かったこと。ジープの姿が見えなくなった時、A君は「今度アメリカ兵に会った時は、逃げたりしないでいつもと同じ様にしていけば、俺達少年に危害を加える事はない」と話してくれた。小学校から鬼畜米英と教え込まれ、外国人を見たこともない私には、その話をにわかに納得することは出来なかった。

その後稲荷山公園駅周辺の陸軍航空士官学校が、進駐軍の基地となった。基地のゲートには銃を持った兵士が警備にあたってた。私達の通学路にも多くの軍用車が行き来していた。私達も最初の頃は、ゲート前の警備の兵士に挙手の敬礼をして通った。それはアメリカ兵に対する不安感を持つ少年の知恵だったのかも知れない。日がたつにつれ、アメリカ兵に対する警戒心は、だんだんと薄れて行った。時にはトラックに乗せてもらったりすると、「ああ、今日は歩かないで楽が出来た」と思ったり、帰りなどトラックが通ると、「乗せてくれ」と言わんばかりに手を

上げたりする様にもなっていた。激動のあの時期、初めてアメリカ兵を見た時の怖さが、うその様に私の心も変っていたのだった。

ゲートル会

浅見茂男

終戦から、はや半世紀近くになろうとしている。時代は激動の昭和史から平成へと移り、高度成長時代と共にがむしやらに突き進んできたわが世代も、遂に年寄りの仲間入りすることになってしまった。いやはや、時の流れの早さには、今更ながら驚嘆してしまふ。

終戦、昭和二十年。この年はまた、わが憧れの川越中学へ入学した年でもあった。四十数年前の六年間を川越で学び、また、多くの知己を得られたことに、深く感謝の意を述べたいと思う。

この度、記念誌の上梓に当たって、学生時代の思い出を原稿にといいお達しである。何を書こうかと思ひ倦ねていたのだが、飯能市にゲートル会という川中の仲間の会があり、ふと、ゲートルの苦い思い出が脳裏をよぎって来た。その事でも書いてみようと思う。

当時、飯能方面から川越中学へ通学する仲間は、稻荷山公園駅から入間川（現在の狭山市駅）、そして本川越へと辿るコースを利用していた。我が家から稻荷山公園までは電車で五十分、二キロの道程を入間川まで歩き、また電車に揺られて十五分、やっと本川越駅に辿り着く。そして川越の街を端から端へと横断し学校に到着する。片道所要

時間は約二時間を要した。また当時の服装は、大戦の只中ということもあって、カーキ色の制服に戦闘帽を被り、軍靴にゲートル（巻脚絆と言った）という出で立ちであった。そして稲荷山公園と入間川駅までの道程を、下級生から上級生まで列をなし、号令のもと、一斉登校したものである。

入学して間もない頃、登校の途中、ゲートルが解けてしまい、バツの悪い思いをしたことがある。ゲートルは稲荷山公園駅を降りると解けだし、引き摺りながら列に加わったが、結局、巻き直す羽目となった。動揺と焦りの中、必死に巻き直そうとするが、うまく巻けず、川中の一行から取り残され、挙句の果てには電車に乗り遅れ、授業にも遅刻し、お目玉を頂戴してしまったことである。

不器用なものにとって、いつも苦勞させられたゲートルも、終戦により五か月程のお付き合いで終わり、以後、忘れられてしまったのであるが、飯能市にゲートルの名が付いた会が作られ、ゲートルの苦い思い出が甦ってきたのである。これが飯能初雁ゲートル会である。

この会は飯能市在住の川中・川高出身者で戦時中、戦闘帽を被り、ゲートルを巻いて、稲荷山公園から入間川を通学道にしていた仲間達で作られている。飯能市在住の恩師の松田先生、横田先生を迎え、会長は四十四回卒業の関谷先輩にお願いし、会員は五十名を数えている。我々同期も、しんがり会員として末席を汚しており、会員の慶事の催しや、親睦会などに参加させて戴いている。

ゲートルと仲間。これも戦争の爪痕が残した奇妙な御縁だが、学びの庭は、この道程から始まり、幸いにして、今なお続いている。

この会の維持発展は、しんがり会員である我々同期の双肩に掛かっている事は勿論であるが、稲荷山公園から入

間川への道程はゲートルの思い出の場ばかりでなく、勉強、運動の場であり、競走の場であり（電車に乗り遅れないため）、気分転換の場でもあったが、何といつても友好を深める格好の場となっていたことを改めて知らされるのである。

飯能初雁ゲートル会の歌（校歌の曲で歌う）

松田 蘭風 作詞

一、初雁わたる川越の

城趾に学ぶいくとせか

巻ゲートルも凜々しげに

ほこる白線戦闘帽

思い出はるか若き日を

偲ぶ飯能ゲートル会

二、稲荷山から入間川

川中むすぶ通学路

花のあしたも武をきそい

もみじの夕べふみ読めど

純情多感の胸うずく

きびしくにかき青春よ

三、結成すでに十六年

還暦すぎてたくましく

時の流れに耐えながら

飽食暖衣の世となれど

濁りがちな人の世に

希望ふくらむゲートル会

四十五年ぶりのコール

吉田 浩一

記念文集のことは近所の柴崎が名簿の写真のことで電話をくれるまで、よく知りませんでした。思えば同窓会関係で連絡があるなんて四十余年ぶりのことで、唯、懐かしいの一言に尽きます。僕は三年迄でお別れしたのですが、いわゆる東上線下り組という(少年時代に戻って呼びすてでいうと)一番遠いのが都内の武長、鈴木。成増組は相田、吉田、柳下、柴崎、本田。朝霞が小林、岩崎、安田、そして志木は原(武)、榎本、新藤、諸橋。大和田が原(泰)、石井……といった連中で、当時の学区の關係で近場(ちかば)の中学に行かずに、ご苦労にも遠路逆コースの満員電車を通った真の川中ファン。その中の一人といえます。

当時の東上線の混み方は天下に有名で、「下り」は常にギユウづめの買出し列車の車体はドス黒いコゲ茶の木造が多く、窓から出入りできないように、鉄の棒が牢屋のようにはめてある車両さえありました。また車内には勇ましい人が群雄割拠していて、その中で鍛えられた僕等は自然に「実力」を身につけたような気がします。特にタバコなどは電車全体がいつも煙でモウモウとしていたので、たとえ吸わなくても匂いが身につけてしまい、徳さんには大分怪しまれたかも知れません。

三年間でしたが友達も沢山できて痛快な学生生活を送りました。何しろ川中といえは仲間でも「格」が違いましたから。

西武線の人達が連帯感が強いように、東上組も結束が固く、今でも会えば「オー」という仲よしですが、この度こうやって縁が更に戻ったことを機会に、もっと旧交を温めていきたいと思っています。

連絡が途絶えていた僕等を追っかけ廻して誘ってくれた柴崎、そして松村、松岡、発起人の方々に感謝します。久しぶりに川中時代が思い出せて本当に懐かしく嬉しい……。特に東上線の元気者達のことをいろいろ覚えている人が多いので、「四十五年ぶりのコール」ということで誘いに乗り、原稿締切りの土壇場で参加しました。では同窓会で会いましょう！

自転車通学 北面隊

笛 木 勇 三

川中時代の思い出話というと言ってもその頃の自転車通学のことになる。

川越の北方、つまり東松山や桶川の方角には山田村、川島村、井草村といった田園が広がっていて、この村々から川中に受かった秀才が白線をつけた戦闘帽をかぶって、親が苦勞して調達した貴重な自転車に乗って通ったものだ。

思い出せる連中を当時の呼び方で並べると小島さんぞく、斎藤なんばし、斎藤ツネちゃん、清水リョーヘイ、鈴木ジュンとビナン、長島なが芋、野口ハチ、小沢ライギョ、町田アニキ、田口ヨーセイ、高橋モトゾー、永沢セイイチ……この中にはトーダイに進んだような出来のいい人や、社長になった者、地元の指導者になった方などいろ

いろいろだが、惜しい事に他界した人もおられる。

とにかく当時はみんな罪のない坊主頭の子供で、調子のよくないボロ自転車に工夫をこらして改造をほどこし、一所懸命川中を通ったものだ。雨の日はサドルの前に三角の雨よけ。寒くなると一寸カッコが悪いがハンドルの所に風よけのカバー。パンク修理の材料はカバンの中に欠かせなかった。生ゴムをガソリンに溶かして自分で作ったパンクのり、チューブの切れ端、ヤスリとタイヤをはがすヘラなどだ。

何しろあの頃はゴムの質が悪い上、道も舗装された所など全くなかったので、実によくパンクした。雨や雪の日、ましてや台風の日など本当に困ったものだ。

今時の若い人は自転車といえば軽快な五段ギヤの高級車で、道路もどんな小道でも舗装されているからこの苦勞はわからないだろうな。そういえば当時はビニールとかポリフィルムとかいうものがなく、雨の時はゴワゴワの水のきかない合羽しかなくて学校に着くころはぐしょ濡れて本当に参った。同窓の連中全部で五十人近くはいたと思うが同志愛のようなものが未だにある。

つらい事ばかり書いたが何しろ当時の自家用車族なんだから、足を随分のばして遊んだものだ。歩きの連中より縄張りや広がったのじゃないか。それに自転車通学隊は男だけでなく、お県やお市に同数の女性部隊もいた訳だからこれをめぐっての面白い話も沢山あった。

自転車で鍛えたせいか体は丈夫で元気で働いている。友達ととんでもない所でバッタリ会って「オー フェキー」という場面がある。何年前か前、晴海の工業展の会場でウチの機械を見に来た松岡へんじんにバッタリ会って「何だお前！ こんな所で何してんだ」と同時に声が出て大笑いしたものだ。それが縁だったか実はこの投稿もあいつに

手伝わせている。

この間健康診断に埼玉医大に行ったら、待合室で堀バンチョにひょっこり出会った。往年の豪球投手も心臓に注意を要するとかで時々診てもらいに行くそうだが、どういふ訳か僕は久しぶりの連中にも第一声がニッコリ「オーフェキー」と川中時代の調子で呼ばれ、それから先はその当時のふんい気で話はずんだ。みんな又何処かで会おうや。

豆事典

ガソリン・カー

ガソリンで走る客車。現在のディーゼル・カーの前身。戦時中はガソリン節約で衰微したが、戦後未電化のローカル線に活躍。八高線、川越線でもSLに混じって使われた。越生線では小型のものが単機で活躍。

木炭自動車

初期は木炭もあったかも知れないが、終戦前後は木のチップを燻蒸して発生する木ガスで走った。「薪自動車」という言葉もあったと記憶する。坂道では一度降りて用を足してもまた乗れた。チップは吾野あたりでも作っていたし、本川越の近くにはチップの山があった。そういえばSLも薪で走っていた。

ラッキーストライク

洋モクのシンボル。他にはキャメル、チェスター・フィールドが続き、フィリップ・モリス、クルールなども人気があった。稲荷山あたりではアメリカ兵が「チニエンOK?」と言いながら直接売り込んで来た。一カートン（十箱入）は二百円。しかし川越では三百五十円くらいで売られていた。確かめたわけではないが、当時「チニエ

ン」で一回遊べたんだそうだ。

マツチ

マツチは「鉄カリ」と呼んだ。ライターはベンジンを使ったが、校用のロンソンが人気で、兵士用のジッポは手がベンジン臭くなるので下品だと言われた。しかし、ジッポを片手にビシユ！と蓋を開け、ジュパツ！と火を点けるのは何ともカッコよかった。

ゲートル

巻脚絆（まきぎやばん）。陸軍の兵士が両足に幅十センチほどの布帯を巻いていた。戦時中は中学生もこれを巻く規則があった。踝のあたりから外回りに巻き上げ、途中で二回折り返し、膝の下の外側で巻き終るように巻いて紐でとめた。家を出た時から帰るまで、途中でズリ落ちて何回も巻き直ししなければならなかった。

ジーブ

General Purpose（汎用車）。今では日本語になってしまったが、こういう万能車は日本になかったので、すごくカッコよかった。GIカット、チューインガムなどとともに進駐軍の代名詞的存在になって絶壁型の横顔が珍しく、U君のアダ名の語源ともなった。

川高庭球部卒

岡田立彦

その年、昭和二十四年、川高庭球部は戦後一回目の黄金期を迎えていました。高二であった私にとっても「今迄生きて来た中で一番記念すべき年」となったのです。

一年先輩に柿田、加藤、芹沢を擁し、同学年には一色、神田、津坂、そして一年後輩に三村、阿部、武村、田中等鉄壁の川高庭球部には、既に県内では学校対抗、個人戦共に敵するものとしてなく、すべての大会を加藤・柿田組か芹沢・岡田組が制していました。

この年の春、私達（即ち芹沢・岡田組）はお茶の水で開かれた関東高校庭球大会で準々決勝まで勝ち進み、この戦績から八月に行われた全国高校庭球選手権大会では十四番目にシードされたのです。

当時のレベルは圧倒的に関西優位、川高などは下馬評、大穴にも上がっていませんでした。よく甲子園の高校野球でも勝ち進むうちに実力以上の力を発揮すると聞きますが、この時の私達は正しくその通りだったと言えましよう。勝ち抜くこと六戦、そして遂に決勝戦に進出してしまったのです。応援の川中先輩（笹間、山本、岡野、島田などの各氏）、東日本の各連盟役員はおろか、当人達がとても信じられない破竹の快進撃でした。

兎に角、全国優勝しました。そして私達はこの年の高校第一位にランクされました（決勝戦の状況は先年田中啓彦氏〈前記の後輩〉の依頼で「創立八十周年記念誌」二百七十四頁に拙文を掲載させて頂きました。ご一読願えればと思います）。

旧制中一年の夏、油蟬のすだく中、南瓜畠となった隣家の庭で近所の人達と終戦の詔勅を聞きました。よく意味も理解出来ぬまま、只明日から始まる防空壕掘りの勤労働員が中止となることが嬉しく感じられた暑い一日でした。

軍事教練から解放され、特攻隊スタイルの上級生なども復学して来ましたが、体育の実技にボール競技などが取り入れられるようになったのは何時頃からだったのでしょうか。

クラブ活動も始まり、私は卓球部に入りました。一年上級の兄が卓球部だったからです。雨天体操場の床は波打ち、あちこちの踏み抜き床下からカビの臭いが立ち上り、野球部の右翼線二塁打にぶち破られた天井からは、幾筋もの光芒が射し込むすさまじい練習場風景でした。

中三の初め庭球部に移籍しました。体育実技で思いのほかうまく乱打出来たのがきっかけでした。庭球部の先輩達にオダテられノボセ上がったのです。

私は庭球に没頭し始めました。生活のすべてが庭球のためものとなりました。当世流に言えば自主トレでしょうが、しかしガイドブックも何もない時代のことです。ランニング、縄飛びなどは兎も角、東照宮石段の蛙飛び上りなどは今のトレーナーでは許してもらえない暴挙だったかも知れません。齢六十にして膝関節痛、腰痛がひんぴ

んと起こるのは、当時の無茶な自主トレの報いかも知れません。

当然のことながら学業も急低落です。入学時学年全体の成績順位を「その順番はクラスですか」とオンシに聞き直した程上位だった成績も、度重なる二階教室からのエスケープ、県主催の強化合宿などに参加して欠席が増えるともう理数課目は完全に行けなくなりました。数Ⅱで赤点を何回取ったことや。不思議に体育だけは終始5でした。

しかし社会人になって、富山、静岡、東京、徳島、東京、愛知、東京と幾度も転勤を繰り返しましたが、意外と私が有名人であることを発見したのも、栄光の川高庭球部卒である所以ゆえんでしょうか？

(追記)

私の庭球人生に又とないスポーツを与えてくれた芹沢氏が、一昨年癌に倒れ、六十歳の若さで逝きました。

その二年前、田中氏の提唱で同時代三年間の先輩後輩が川越市内の料亭に集い、一夜懐旧談に夜更けを忘れました。そして翌年今度は加藤氏の提唱で、柿田・加藤組対芹沢・岡田組のゴルフ対抗戦を武蔵カントリーで行いました。ゴルフでは柿田組に敗れ、いくばくかのチョコレートを買わされました。

良き哉旧友、良き哉ふる里。

追憶と祈り

谷 巖

学生生活六年間を思い浮かべてみますと、入学後四か月は、戦時中にて、校庭を畠にし防空壕作り、軍事教練、勤労奉仕などで過ごし、新しい時代に入り、まず剣道部に入部（半年で廃部）、その後、野球部が復活し、すぐ入部以来卒業までの五年間、野球部生活に明け暮れた次第です。野球部生活における追憶は数知れずあれど、一般の学生としては、殆どない様におもわれます。

食糧事情も悪い時に、各自が米や薪や布団などを持ち寄っての合宿生活など考えると五年間もよく続いたと思います。暑さ寒さを超えて、なんとか憧れの全国大会甲子園出場を目指しての励みが、あったからだと言えます。また多くの野球部先輩が伝統を作り、これを後輩に引き継ぐとの使命感を持ち合わせた所以と感じています。他の学生諸君より、多方面にわたり幸福な時代を送ったと自負しております。

五十一歳の手習いでゴルフを始め、一年後、川中二〇会なるコンペに入会させて頂き、以来このコンペを同窓会と考え、一生懸命出席する様にしております。入会后、年四回のコンペ開催ですが、今までに三回位の欠席で、あとは非常に楽しくプレイをしておる現状です。会場を提供して下さる新井治雄氏、その都度の幹事になる方には、絶大なる敬意を表し、益々の発展を祈り、一年でも多く出席出来る様努力したいと考えております。

たった一度のホームラン

川 合 敬 三

何度もためらいつつ、白球の魅力に勝てずに中学三年の春、復活もない野球部に誘われるまま入部する。三男だった私は長兄(三十八回卒)が庭球部、次兄(四十一回卒)が剣道部といずれも川中OBで大正生まれの兄達のアルバムを見て、旧制中の運動部生活にあこがれていた。しかし反面には、いわゆる文武両道の道もけわしいことは聞かされていて、特に野球部は大変ともいわれ迷いがあった。長兄はすでに昭和十九年中国の戦線で戦死し、遺品のラケットが何本も淋しく家に残されていた。次兄は運よく学徒動員のみで済み再び学生生活に戻っていたが、弟の野球部入りには勉強中心をすすめ消極的だった。

結局私は戦後復活した野球ブームにすっかり魅せられ、家族の反対をおし切って入部を決めてしまった。昭和二十二年春にはれて野球部員になると、KAWACHUのマーク入りのユニホームを渡され、更に当時は貴重品のアメリカ製ファーストミットを手にした。その頃の上下級生全ての部員の名前は今もきのうの如く記憶している。

監督は大先輩の家村さん、部長は美術の白井先生、主将は一年上の田中さんだった。その後続ける中で何度か監督・部長さんは変っていくが、はじめて硬式ボールを握った感触はいまも忘れない。運動能力は小学校の頃から自負していたし、野球もそれなりに自信はあったので、最初からレギュラー扱いで、いわゆる下積みの経験がなく辛運だった。もともと丁度一塁手のポジションが退部した先輩のため空席であり、私がスカウトされたといえる。

授業が終わるとこれまで呑気にぶらぶらと本川越駅まで仲間と話しながら帰る生活に代って、元寄宿舎の二階にあった部屋に直行、ユニホームに着替え、グラウンドに出る毎日になった。無理して買ったスパイクをはき、バット片手のユニホーム姿がなんとなく誇らしく、天下晴れて野球が出来るのが無性にうれしかったのだ。今でもグラウンドの後輩達の練習を時折のぞく時に、当時のままであり、飯田先生の碑の前に一礼する姿に接すると、見事に四十五年前にタイムスリップしてしまふ気がする。

さて正確には昭和二十三年春、ようやくシーズンを迎えた四月の土曜日午後、隣の川越商業と練習試合をした時のことである。メンバーは投手大野、捕手浅井、一塁川合、二塁谷、三塁田中、遊撃相沢、左翼小野、中堅松本、右翼宮原の皆さんで、相手は投手落合、捕手土金だった。この投手落合君は剛球で鳴らし、当時の職業野球金星スターズの監督藤本定義氏を通してプロ入りの噂の高い投手だったので、自信满满私達の前に現われたのである。私もやっと一人前の選手らしくなり、六番打者だったが、やや守備の人であり、打撃開眼とまではいかなかった。

当時はまだ娯楽が少なかったので、戦後の野球ブームも、まず手近な学生野球の復活からという調子で、人気は高く、練習風景さえ見物に来る人がいたほどだった。特に当日は地元同士の対戦に、川高・川商生をはじめ近くの小学生や大人で、一・三塁の両側は相当の観衆だったのを記憶している。どちらも負けられない緊張の中で、私は第一打席に入った。速球が胸をえぐるようになる。落合投手は気が強く、遠慮なくぶつけてくるぞと聞かされていたが、こちらまけてなるものかと思ひ切りよく振った時に、見事快心の一打が生まれた。

自称弾丸ライナーで、今とくらべると粗末なバットやボールの時代にしては、カーンという硬式独特の鋭い音がさえて、白球は遊撃手の上を越え、そのまま左中間をあっという間に抜いて、ランニングホームランとなった。い

わゆるだれもが目のさめる最初の一撃となったのだった（少し自画自賛を許されたい）。

その上に、この試合は第二打席も三塁線を抜く二塁打、第三打席も中堅前のヒットの大きくなり、見事相手エースをノックアウトして大勝したのだった。チームメイトには大根切りのホームランと冷やかされたが、監督の家村さんが、速球を恐れずに向かっていく気迫が打たせたのだから、みんなその気力を見習えといわれているのを耳にして内心得意絶頂だった。しかも数日後、登校の朝に前を歩く小学生達が、私のホームランの話をしているのを耳にして、ひとりスター気取りになったものだった。

その後、野球部生活は高校三年まで続き、数々の試合、合宿生活や、先輩、後輩の皆さんとも交誼の思い出とエピソードは欠くことがない。しかし途中で目を痛め、選手生活が途切れたのは残念だった。母校を去ってすでに四十年以上にもなる。その後いろいろと草野球生活も多く、四十代になると町のソフトボール・チームにも参加したりして、沢山のスポーツ生活を味わった。この三月で長い中学校の教師生活も終わったが、自分の学校の野球部の生徒達と一寸キャッチボールなどとすると、オヤ！この年寄りの校長さん、野球の経験があるのかしらなどと首をかしげられる楽しい一時もあった。少年の頃の思い出とか美化されるといわれるが、川中・川高時代をふり返り、我が野球部生活を顧みると、やはりあの時のホームランが、生涯にたった一度の輝ける一打だったように思われる。還暦の記念文集のお陰で楽しく回顧させていただいたことを深謝します。

尾瀬

豊田 孜

昭和二十年、戦争が激しくなった時代に中学一年生になった。部活動も当然軍事色濃く、剣道、柔道部に入る人が多かった。体の小さかった私は体力に自信がなかった。そんな中、隣の町の先輩の誘いもあつて生物部に入った。もともと生き物が好きな少年であつた。これが後の私の人生に大きく影響することになる。木造二室の生物室は他から独立した棟で、たまり場としても楽しい場所であつた。居残りの先輩から教室では学べない多くのことを学んだ。うさぎの解剖をするからといわれ、家から電車に乗って運んだのに、知らないうちに先輩たちの鍋に入ってしまった。横田稲吉先生は教室とは違って兄貴のような親しみを憶えた。

戦争が終つた後の昭和二十三、四年の頃だつた。尾瀬沼へ採集旅行に行くことになつた。物資の乏しい時代だつたので大変だつた。写真は残っていないが相当みすばらしい姿だつたろう。木村冉先生を中心に上越線の沼田からバスで尾瀬に向つた。バスの都合で木村先生と二人だけで先に出た。先生は当時クモの研究をされていたと聞く。クモのイメージから何か暗く、こわい、とつきにくい先生だつた。尾瀬の入口の大清水の小学校の分校に川中の先輩が教員をしていた。そこが宿泊所であつた。先生と二人で飯盒で飯を炊く。うまくいかず半煮えだつた。おかずは海苔のつくだけにだけ、それでも美味だつた。遅れてきた仲間は夜、学校の薪を使ってえらく分校先生に叱られた。尾瀬は今では有名な観光地になつていて訪れる人も多いが、当時はあくまでも静かな秘境であつた。次の日、長

蔵小屋で宿をとる。雨で飯がたけず、わらじに油をかけてもやす。入口の壁に、宮沢賢治の「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」の詩があったのが印象に残っている。尾瀬湿原は又太が道のかわりに並べてある。足を踏みはずと、腰までズブー。あちこちの沼には浮島があった。田口君が跳びそこねてびしょぬれになってしまった。湿原特有のモウセンゴケが珍しかった。今では許されないが採取して持ち帰った。急なガレ場の燧岳ひらなぶに登る。頂上にはトンボがいっぱい、尾瀬はトンボの宝庫といわれた。あの感動は忘れられない。三条の滝に向う。この滝は平滑ひらなめの滝と共に幻の滝ともいわれ、百メートル余の大瀑布で訪れる人は当時殆どなかったという。道もなく、探した。当時戦争のなごりでダム計画の道が中断し、先生を先頭に迷子にならなかった。木の根、岩を伝わり、三条の滝を見た。大音響の中に流れ落ちるその素晴らしさは忘れない。物の不自由な、貧乏学生が自然のみごとさの中にひたれたのも、生物部にいたおかげと思う。生物部はその他、正丸峠、槍ヶ岳など採集旅行をした。現代の何でも揃っている観光旅行では得られないものを数多く経験したと思う。その中で私は植物に多くの興味をもち、それから朧乱を肩に植物採集にのめりこんでいった。佐藤徳四郎先生の影響で俳句を作ったり、文学へも夢も抱いたりしたが、ひよんなことから教員になり、三十余年、理科、とくに植物を中心に研究のまねごとを続けた。三月で定年を迎えたが、ライフワークとして雑草の研究を続けたい。木村先生の校内誌に野草の文があったことを思い出す。雑草でなく野草であるといった内容であった。横田先生は飯能の地で今もご健在で、私は時候の挨拶を続けている。よき師、すばらしき先輩に川越中学で逢えたことを今更のように感謝している。

定年後、ゆつくり尾瀬へ行きたいと思う。しかし、観光化された尾瀬は昔の少年の夢をふくらませてくれた尾瀬ではないのではないかという不安で二の足を踏んでいるきょうこの頃である。

野球生活一色

浅井敏彦

高校時代は野球生活でした。未だに川越高校を卒業したとは思えないで野球部卒業だと思っています。明けても暮れても野球の練習で下井草まで帰るのが辛かった。カバンの中の教科書は全部入っているので忘れ物はしなかった。弁当の入れ替えだけで勉強は下井草から所沢までの四十分間だけ毎朝やって、特に月曜日は、徳さんの俳句を十句出さなければならぬので苦労しました。また、英会話の時間で必ず、昨日の日曜日の試合のことを聞かれるのでその用意もしたものです。所沢に着くと川高生が乗ってきます。話がはずんで楽しい電車通学でした。

練習が終って本川越の駅へ行くと電車が運休することがしばしばあって家に着くのが夜九時を過ぎることもしばしばでした。さらに練習の疲れと、一人しか乗っていないので話し相手がなく、つい居ねむりをして高田馬場まで何回もいってしまったことがありました。

時々柴田君がにぎり飯を本川越の駅へ届けてくれたり、川越市内の後援者からパンの差し入れがあったりして助かったことがありました。

また、野球部の試合のすべてを父親が観ているのも特筆しておきたいことです。公式戦はもとより練習試合でも、熊谷・本庄・秩父と来ていました。帰ると試合の批評があり、家にも監督がいるようなもので話を聞くだけでも疲れたものです。

現在公務員を退職して嘱託として学校に勤務しておりますが、未だに時々野球部の練習の手伝いをしながら当時を思い出しております。

私の川越生活は楽しいことばかりで、現在までの生活で最も充実していた時期と思えます。谷君の家にしばしばおじゃましてご迷惑をおかけしましたが、自分の家にいるような感じでゆったりさせてもらったことを今でもよく憶えています。感謝にたえません。

現在は退職した身ですので、暇を持て余すことがあるのでゴルフをはじめました。止まっているボールを打つのはなんか簡単だと思っていましたでしたが難しいものですね。自分の間納得のできるゴルフにならないようです。

同期の皆さんの文集が完成された時また、当時がよみがえってくることでしよう。幹事の方々のご苦勞に感謝して筆を置きます。

「バスケット」回想の記

新井治雄

大宮公園、アウトドア、砂コート、そして青い空——鮮明に思い出されるあの日、あの時、高校最後の春の学徒総合体育大会、大接戦の末、二十六対二十五で浦高を破り、県下初制覇を成し遂げた一瞬は、今でも強烈な印象となって甦ってくる。飯能方面を主力に部員を集め、伝統を受けついできたバスケット部の、長い歴史の中で、唯一燦然と輝く誇るべき金字塔である。

この日から正に実感となつて近づいた、秋の国体出場を目指してのバスケづけの日々——遠征試合、夏の伊那・岡谷合宿練習——校友の声援を背に、諸先輩の援助にもすがりながらの猛練習が続いたのであった。教育大学の名コーチ、関口莊次氏を招聘し、浦和一女（全国優勝の実力チーム）との合同練習、帯同合宿は厳しくもまた楽しいものであった。知る人ぞ知る、今は亡き俊才、キューピーこと杉本雅夫君が浦一某女に熱をあげた微笑ましきエピソードが、ふと脳裡をよぎる。当時の校内新聞に、村山主幹の期待をこめた特集記事があるが、チームの実力も日ましにつき、合宿の終る頃には国体出場の夢実現を確信できるまでになっていた。

九月二十二日、練習の成果が問われる待ちに待った秋季県民体育大会兼国体予選の日が来た。さわめて順当に勝ち進み決勝戦を迎えた。相手は勿論、宿敵浦和、予想通りの因縁の顔合わせである。場所は埼玉大学屋内体育館、不動のベストファイブは、新井、石田、沼田、平井、斉藤（二年）、外は鬱陶しい雨だった。館内は応援の熱気に包まれ、追いつ追われつつの接戦を演じながらも、やや優勢に経過したが、第四クォーターに入りリードを奪われ、結局健闘空しく三十八対三十七の一点差で春のしつぺ返しとなり、惜敗の涙をのんだのである。一点の重圧を思い知らされ、全身の力が抜け、悔しさと、やるだけやった諦めの気持が交錯して、暫し茫然と未練のコートに立っていたことを覚えている。思えば浦一女と国体に行けないのが何よりも残念、というのが偽らざる心境だった。存分に戦い、力を出しきって苦杯を喫したこの瞬間、中学以来続いたバスケット生活のピリオドは、無情に、しかしあつけなく打たれたのである。

年は過ぎ日は経ち幾星霜——あれもこれも、遠い青春の情景のひとつまとなつてしまった。今忘れかけていた記憶、往年の勇姿が目に見え、NBAリーグ（アメリカのプロバスケット）のテレビを見ながらふと、ボールを持ちた

い衝動にかられている。チャンスはないが、もしコートに立ったらシュートができるのか、ボールがとどくのか、考えるだけで胸騒ぎを禁じえない。特にプロを意識したわけではなく、健康回復(肋膜炎)を願ってゴルフ場に関係し三十年、レッスンを受けることも、クラブの練習場で打つことも殆どなく、従って腕前の方は三昔変らないが、年四回、すでに米寿?(八十八回)を数えた川中二〇回ゴルフコンペでの、旧友談笑を楽しみながら健康ゴルフ、お遊びゴルフに徹し、月二、三回ペースでひたすら歩き、白球に戯れる今日のごろである。

「太郎さん」と図書部

宮寺(五十嵐) 威

卒業記念文集の募集があり、何か参考になればと写真を探してみました。書いてみようかと思っただけなのは、図書部の夏の旅行の写真がでてきたからです。その写真を見ていると、「太郎さん」や山口先輩、それに同期の皆さんが想いだされました(口絵参照)。

旅行の話のまえに、その当時の図書部の皆さんを紹介しましょう。

夏の旅行写真以外に、図書部卒業記念写真が二枚あります。その写真の裏面をみると、一九五〇年二月二十七日、川高玄関前、図書部記念撮影と記入されています。誰が書いてくれたのか、年号が昭和でなく西暦で書かれているだけでも大したものですよ。写っている人は、「太郎さん」、野村先生に山口部長、高井副部長などの先輩達と、同期の金子(勇二)、堀、長谷川、森田(重敏)、斎藤(賢治)、山崎、中村、それに私です。もう一枚の卒業記念写真は

二十六名の大世帯で、一九五一年三月某日と記入され、女性の事務員であった佐々木さんも写っています。

夏の旅行の写真を撮影した日は一九四九年八月十二日です。場所は館山海岸、参加した同期生は、長谷川、根岸、小林（洋左）、大澤（米吉）それに私です。もちろん「太郎さん」、山口部長、田中さん、飯野さんなどの諸先輩もおります。最初の二泊は館山、三泊めは鴨川でした。館山はいつまでも続く遠浅で、波もおだやかで、鴨川は磯で、波が荒く対照的な海水浴場でした。

写真をみると全員が坊主頭であり、海水パンツをはいているのは、田中さんだけでしょうか。それも現在の海水パンツでなく、昔の水泳選手のはいたランニングスタイルのもんです。身体をみても太っているのは一人もおらず、食糧難をよく現わしています。特に山口部長、堀君などは肋骨がみえるようです。宿泊は小学校の家庭科室を借りてのゴロ寝ですので、蚊帳などはなく、蚊にさされたと思います。しかし、泳ぎ疲れて気にもならなかったのですが、夜中に目がさめた記憶もありません。高校図書室を一時間ほど見学するだけで、後は何もするわけではないので、それは気ままなもので、食べること以外は泳いでばかりしていたような気がします。飯盒で炊いたご飯はおいしく、たいしたおかずはなくても「美味」「美味」の毎日でした。特に鴨川の海岸で、漁師からわけもらった鯖は、味噌煮にして食べましたが、この世に、こんなおいしいものがあるかと思えるほどでした。我が家の夕食に鯖の味噌煮がでるたびにこの話をするものですから、「ああまたか」という顔をされる始末です。

翌年の旅行は、沼津から中伊豆へ入り、西伊豆へ抜け、海岸づたいに沼津へ戻りました。見学したのは沼津駅裏の沼津北高、それに大仁高校であったと思います。沼津から大仁高校へ行く途中、頼朝で有名な蛭ヶ小島に寄り、それから江川太郎佐衛門邸、反射炉とみました。その当時はまだ観光地化していないため訪れる人も少なく、江川

太郎佐衛門邸でも邸内も気持ちよく案内して頂きました。五年ほどまえ、家内と伊豆を車で回りましたが、余りの観光地化にびっくりしました。

当日は反射炉をみてから長岡温泉を抜け、西海岸の三津浜（内裏湾）まで、夏の暑い道を夕陽を浴びながら歩いたような気がします。この歩きはこの旅行の一番の難行苦行であったでしょう。特に三津浜の手前の小さな登り坂は一番こたえたと思います。宿泊は、前年同様小学校を借り、毎日が水泳さんまいで、夜中でも泳いだり、メチャ楽しかった日々でした。

特に三津浜についていえば、海水浴に最適であり、きれいな小島が目の前にあり、富士山の美しさは最高でした。さすが浮世絵に描かれただけの名所です。私の生まれた所は秩父の山が里におりた所にある毛呂山町（鎌北湖・埼玉医大のあるところ）で、富士山に縁がありません。ここでは真正面からみえるだけでなく、真近にみえるので余りに大きく、ショックを受けたことを覚えています。

次に「太郎さん」について書いてみます。先生の図書部顧問は長かったのでしょうか。主ぬしのような気がしました。専門は西洋史であり、フランス革命に熱心であった気がします。ある意味では受験に縁のない先生でしょう。

そのような先生だからこそ、夏の旅行の企画が立てられたのかもしれませんが。高校図書室の見学は二、三校で、終ればレクリエーションでした。しかし、経費を最低限にするため、小学校へ泊まるなどというアイデアをだす点は大変なものです。

まず第一に、宿泊施設を探したため、地図を調べます。近隣に観光地・海水浴場がないとためです。次に依頼の手紙を書いたり、電話をします。一回でうまくいかず、二回、三回とやられたことと思います。あの、「太郎さん」

のどこにそんなエネルギーがあったのでしょうか。いまでも解りませんが、それは地味な図書部員に対する愛情の表現であつたと解釈することになっています。

終りに一言。

一昨年、家を新築、お祝いに荘子の書を頂きました。有名な書家の立派な書です。「白駒過隙」と書かれています。「はくくげきをすぐ」と読みます。意味は次のようです。

家の中から外を見ていると白馬の通り過ぎるのがちらりとみえた。人生もあつという間に過ぎてしまう

この言葉のように六十年はあつという間に過ぎてしまつた気がします。しかし、考えようでまだ二十年位は寿命はありそうです。私ももう三年ほどで「宮仕え」も終わります。それからの二十年は、これまでの五十年位の人生にしたいと思っています。お互いにかんばりましょう。

懐かしき川中・川高郷土部

沢田 明

一 川高郷土部卒業

私は川中・川高の六年間を通して郷土部に在籍した。在学中はあまり勉強もせず、郷土部室に入り浸りの生活だつた。だから、私は川高卒ではなく、むしろ同高校の郷土部卒というのが妥当である。不勉強の当然の報いから浪人する羽目になり、一年後にやっと早大に潜りこんだ。

そんな訳で、私にとって川中・川高の思い出は、郷土部に關するものが大部分を占める。特に、当時郷土部を指導された、先生や先輩または同窓諸君の一挙一動か、近頃寄る年波の所為せゐであろうか、やたら頻繁に思い出される。それらの情景は、何故か眩しい太陽と青い空で彩色されていて、背景は山村であつたり、谷間の河原が多い。どうも飯いごう炊飯の場面らしい。

二 郷土部で出会った先生

原田節二先生は真剣にメモを取る際などに、アーとかウーとか口中で呟かれる為か、密かに「アー坊」とお呼び申し上げたが、誠に兄貴のような師であつた。民俗学に造詣深く、郷土部員を引率して山奥深く分け入り、熱心に民間伝承を収集された。

大護八郎先生は考古学研究の本格派で、同先生のご指導により、平方町の荒川河川敷発掘調査を行った。後年、先生は埼玉博物館の館長として活躍された。

その他に、野村先生、小泉先生が熱心に指導された。

三 優しい先輩

優秀な先輩が郷土部に多く在籍され、何方どなたも優しく親切であつた。二年先輩の小山部長は私達に堂々たる部員募集演説を行い、私はその演説に魅せられて入部した。過日、小山先輩が飯能市長として活躍されている由を聞き及び、昔日の氏のリーダーシップを思い出して、快哉を叫びながら一人で乾杯した。やはり二年上の吉川先輩は異色の人材で、東大へ進学された後、ベ平連（ベトナム平和連合）の事務局長として活躍された。

一年上の木川部長は温厚な紳士で、一橋大から日本郵船ゆふせんへ進まれた。登呂遺跡の模型は氏の部長時代に制作し

た。同年に名栗村出身の本橋先輩がおられた。山村で鍛えた氏の健脚は、我々後輩の山歩きの際に最高の先達であつた。

四 活躍する同窓生

同窓には、松村君・畑君・金子武司君・松本君・田中崇君・小林洋左君等の実力者が在籍された。皆さん研究熱心であつた。

五 部活動の成果

我々の時代に郷土部は全盛期を迎えた。その活発な部活動の一端について語りたい。

常に、飯ごう・米・その他の食料・毛布一枚をリュックに詰めて、小学校の教室を定宿とするから、多少は身体の節々が痛いものの、費用は誠に安く済んだ。食事は、近くの河原で飯ごう炊飯して、一日分を炊いた。その時の新鮮な山の空気が今でも胸中に蘇ることがある。従つて、金はなくとも気軽に出掛けることが出来た。

○飯能の奥の名栗村から鳥首峠を越えて、当時無灯村であつた秩父郡浦山村へ行き、民間伝承を収集した。浦山小学校の教室に合宿した。

○関東で鎌倉に次いで名跡の多い川越で、郷土部の看板を掲げながら地元のことを何も知らなくては、という訳で、自転車で市内を回り、勉強して歩いた。その際に、同窓の塩入君の父君である喜多院の先代大僧正にお逢いして、親しくお話を聞いた。また、川越イモ発祥の地も訪問したが、後年同窓の石田君が副社長を務める埼玉トヨベツト(株)主催のイモ掘り大会へ出掛けたところ、嘗て郷土部で訪問した同じ家であつた。

○南大塚の古墳群をひそかに探訪したことがある。収穫は何もなかった。

○秩父郡大滝村へ民俗学資料の収集に出掛けた。二瀬小学校に合宿して、山の神様とご神木、二十三夜塔、焼畑を見て回った。三峰山の奥、日窪鉦山まで中津川溪谷を遡った。帰りに大陽寺という山寺に泊まった。ひぐらしが合唱する中で寺の風呂に入った。

○活火山の勉強という理由を付けて箱根外輪山を縦走した。泥だらけのズボンに地下足袋の土方スタイルであった。飯ごうと大きな鍋をぶら下げて歩き、足柄山の金太郎気分であった。

○同様に、日光へも出掛けた。

○名栗村の名郷小学校に合宿して民族学資料を収集した。

○平方町小学校に合宿して、荒川河川敷を発掘調査した。古代の粘土層から木器を発掘し、翌朝の埼玉新聞に写真入りで報道された。

○秩父札所のうち、吉田町のお寺へ参詣し、素朴な古来の信仰の原点に触れた。

六 むすび

振り返って見ると、わが郷土部は土器掘り、民俗学資料の収集を本業としながら、他面では旅行部または登山部であった。また、部誌などをガリ版で刷って、PRに努めたりしたところを見ると、立派な新聞部だったとも言える。しかし、実態はともあれ、ワイワイとやたら楽しく、戦後の困窮した時代にも拘わらず、当時としては稀にみる楽しい学校生活を謳歌出来た。また、この郷土部活動を通じて、私達は豊かな感性を身に付けたと思う。これは、偏ひとへに良き師とやさしい先輩に守られて、のびのびと活動出来た結果である。ここに深く感謝申し上げたい。

我が師 小泉 功先生

金子 武 司

今、手許に一冊の古びた小冊子がある。昭和二十五年十一月五日発行の「武蔵野研究、第五号」。この中の八頁から十一頁にかけての「平方遺跡について」の記事が、我が生涯で初めて原稿が活字になった記念すべき号である。

平方遺跡の発掘は、昭和二十五年五月に始まった。本発掘が同年の七月十八日から二十三日迄とある。大学入試を来春に控えた大事な年に土方仕事をしていたのだから当時の入試はのんびりしたものだった……と思う。この発掘は全面的に小泉先生の指導で行われた。

この年四月、小泉功先生は東洋大学史学科を卒業され我が川高の社会科、世界史担当教諭として着任され、同時に郷土部の顧問として指導に当って戴くことになった。前年に夜間部が設立され、今迄ご指導戴いて来た大護、原田の両先生がその夜間部に廻られて以来、若干低調気味だった部活動が、小泉先生の指導で一氣に活気を呈して来た。そして新進気鋭の先生の公私にわたる教えに、私は目を洗われる思いで傾注して行った。

平方遺跡の本格発掘は連日の炎天下のもと、平方の河川敷の穴倉のような所で、本当に土方のようになって汗と泥にまみれての辛い作業の毎日だった。宿舎はかなり離れた地元の小学校。小泉先生始め東洋大学の講師、和島誠一先生始め多くの考古学者がかけつけて下さったと記憶している。参加部員も田中崇、小林洋左、畑喜千松、松本英雄、沢田明、等の諸君を始め約四十名。途中今は亡き大島和道君が写真撮影の為来訪され、アイスキャンデイを

いっぱい差し入れてくれたのも忘れ難い思い出。私達はこの時の作業を通じて貴重な発掘体験をすると共に、その成果として、縄文後期と見られる木製容器の一部を出土し、考古学界に清新なニュースを提供したのだった。私は、たとえばその代償に急性腎臓炎にかかり、点滴と塩抜き食事療法を二週間も余儀なくされ、暑い暑い毎日、寝床の中で呻吟苦吟したことを今もまざまざと思い出す。

同じ年の八月、今度は所沢、吾妻小学校校庭での「土師住居址発掘調査」に参加した。メンバーは大護・小泉両先生と、三年四名、二年四名、一年二名の計十二名。今度も小学校に泊り込んでの四日間。平方では遺跡のみで住居址は得られなかったが、吾妻小のこの発掘においては土師（器）時代のしかも二基の窯の備わった完全な竪穴住居址が発掘された。

発掘途中、真夜中に豪雨が降り、やっと床面が出たばかりの住居址が雨水でいっぱいになり、真夜中に排水作業をしたなどはこちらの方の思い出もつきない。

さて、これらの現地での発掘の实地指導も含め、その後の資料の分析、研究、発表の段階で戴いた文字通りマンツーマンの小泉先生の御指導が後年の私の人格形成に大きく影響するものがあった。先生は私に、物事に対する考え方の基本を教えてくださいました人であった、と言っても過言でない。推論を許さず、何事も事実に基づいて、或いは試行錯誤の中から事実を掴み、客観的判断を導き出す——この考えが後年の私の物の考え方の基本になったことを思えば、私にとって先生の出現は誠に大きな出来事だったと言える。同年の秋開催された校内郷土部室での「郷土社会展」は小泉先生の指揮のもと、当時の川越地方では望めない程の質と量をほこる画期的な展示会となった。校外からの参観も大変多く近藤鉄城先生、野村潤先生、原田節二先生等の講演やら、小泉先生の考古学講座ありと中々

盛り沢山の三日間だったと記憶している。

秋も深まった或る日曜日の午後、その展示会に來觀してくれて以来我々のファンになってくれた近くの女子中学生との集団デートが荒川土手で実現した。何をお互いに話したのかは全く覚えていない。ただ、何かこう、無性にマドロッコシクで、やるせなくて、それでも何かとても満たされたような思いにいっぱい、私はその中の意中の女の子の顔をひたすら、じっと見つめていた。コスモスが秋の陽をいっぱいを受けて咲き乱れている中の我々のサークルの一角に、まだ独身の小泉先生のおだやかな、我々を見守ってくれているような長身の存在があった。

学 兄

「我が師小泉 功先生」を書き終って、どうしても、もう一つの文を書き綴りたくなかった。それは学兄、佐原君のことである。

昭和二十五年、来年は入試というその年になって小泉先生の登場で、にわか私に私の周辺は忙しくなってきた。先生は考古学に対する興味を限りなくかき立ててくれたばかりでなく、わずか半年程で一種の憧憬的な思いへと導いて下さったのである。

丁度、平方遺跡に関する私の記事が「武蔵野研究、第五号」に出た頃、私は一人の見知らぬ高校生から一通の葉書を受け取った。東京練馬区小竹町の住人で竹早高校の三年生とある。平方遺跡の木の器の記事を「貝塚」に投稿しないか？ との誘いである。「貝塚」は当時東大人類学教室で新進気鋭の貝塚の専門家、酒浩伸男氏の編集していた月刊の機関誌で、私が喜んで返事を差し上げたことは言うまでもない。以来、何回かのやり取りの後、年も改まった昭和二十六年一月に、再びこの学兄から熱心な手紙を貰った。

「君は将来も考古学をおやりですか？ 僕は家自体も五月頃京都に移るので、京大に進み梅原氏の下に進みます。（もつとも長い病で入学は来年になるでしょうが……）金子君には是非お会いしたいと思えます。お互いに受験後連絡しましょう。考古学科のあるのは、東大、京大、明大だけであとは講座があるだけです。官立では京都、私立では断然明治が光っている感じです。では、又」

簡単な文ではあったが、それ迄まるで無目的に学生生活を送って来た自分にとって、はつきりと自分の進路をみつめ、将来のターゲットを定めているこの友人の存在に、大変啓蒙され思い悩む日々を送ったものだった。しかし結局は平凡な現実判断により、私にとつての考古学は単なる趣味の域から脱することなく、太古からの発見や、その感激にひたる機会もないまま平凡なサラリーマンの道を歩み続けて今日に至った。

還暦を迎え、そろそろ、懐旧趣味が出はじめようかという或る日のこと、会社の帰りに立ち寄った本屋の店頭で偶然目に入った岩波書店の「日本考古学講座（全九巻）」の宣伝パンフレット。何かひかれるものがあり、何気なく持ち帰ったパンフレットの説明文の中に、その学兄の名が大きく編集委員の一人として掲載されていた。

その人の名は「佐原 真」。奈良国立文化財研究所研究指導部長を経て現在、国立歴史民俗博物館副館長。初志を貫いたわが「学兄」の一筋の姿である。

当時の思い出

齋藤 守弘

私が川越に学んで以来早や四十数年もたち、記憶も大分薄らいで来ましたのでほんの断片的にしか綴れないので御許しにただきたいと思えます。

当時は非常に食糧事情が悪く米の代りに得意なサツマ芋が配給になり、たまには弁当などにも顔を出すようになりました。

そんな中で部活の勧誘も盛んになり、強そうな先輩がゴロゴロしていた柔道部に入部したのでした。ところが毎日猛練習ありと下校口の黒板に書かれてあり、正に毎日畳に先輩から叩きつけられておりました。そのうち六か月位してから当時の進駐軍の命により、柔道部が突然廃部という事になってしまいました。部活がなくなると今迄嫌だった練習もなにか恋しくなるものです。

その後少時部活も休止していましたが、そのうち一年先輩の方達と数人が集まって映画部を作ろうという事になりました。

早速田中正雄先生を顧問にして映画部を設立しました。当時何も分からないので近くにあった東宝撮影所に行つたのですが、予約もしないでいきなり行きましたので、田舎の中学生が何しに来たとばかり、田中先生がいろいろと説得しましたが体よく追い帰されました。その後後手つてを頼つて映画関係者の方々を探しましたところ、数年先輩

の方で近藤宏さんという方が東宝に俳優としておられる事が分かり、学校にお呼びして映画に関する講義を受けた次第です。その後近藤先輩を通じて正式に東宝撮影所を見学しました。その時は正に田舎の中学生丸出してアッチコッチ、キョロキョロと見るものが珍しかったものでした。

その頃は映画をよく見に行つたものでした。始めのうちは川越でもよく見ていたものですが、封切りが遅いのでその後は新宿とか有楽町などへ友達と連れ立って行つたものです。

その後一通り新東宝、松竹、大映などの撮影所の見学も終わりましたが、もうターゲットがなくなると自然に部活も休みが多くなり、解散の方向へといったのではないかと思います。その他運動会の思い出のひとつに、その年度だけだったのでよく憶えているのですが、一位になつたものだけにくれた校章の入つたバッジを八百メートルリレーで貰つた事がありました。

六年間お世話になつた割には貧弱な思い出しがなくて誠にお恥ずかしい次第ですが、良き諸兄に恵まれて幸いですと思ひます。終りに当り、皆様方の御多幸を祈りペンを置きます。

山岳部時代

柳 下 満

還暦という節目の年を迎え、諸兄にはこれからの人生に向け、それぞれの夢を描かれています。私は今日迄に幸い？ にも三つの異なる社会を経験致しました。川高卒後五年間の農業、二十年間の会社員、そして十六

年間の市政への参加でした。新しい社会に入るたびに驚きと戸惑いはありましたが、大変多くの人々と出会い、毎日が新しい発見であり、勉強でした。

常に変らなかつたのは山岳部時代の想い出であり交友でした。大変お世話になつた木村信寿先生、今でも時折お目にかかり、御指導を頂けることは本当に幸せに思います。先生に教わつた寮歌・山の歌など今でも歌い続けております。山岳部のメンバーの方々が私を種々の面で育ててくれたものと感謝致しております。

メンバーの一人、今は亡き市村栄一君のことが昨日の様に思い出されます。市村君は卒業後製茶業を営み、県議会議員当選後一回の登庁ですぐ入院という、その当時の彼の無念さはとても想像することも出来ません、残念至極です。

私は今日迄、この山岳部時代からの思考から脱却出来ずにいる一人であり、またそれが私の支えになっているものと思っております。

先日鎌倉の建長寺を訪れた際に管長さんから色紙を頂きました。それには「山色清浄心」と書かれておりました。

野球部の思い出、その他

柴田 五郎

昭和二十年四月、憧れの川越中学に入学、戦時中であり、戦闘帽でゲートル巻いて通学しました。

通用門のすぐ右手にある教室で担任は那須先生、最初の挨拶は「ボケ那須です」と言つた様に聞こえた。一年一

組、同級には佐々木雄ちゃんがいたと思う。一番印象に残っているのは軍事教練の時間にバカタレ軍曹がチョビヒゲをはやしてきたので、おかしくてクスクス笑ってしまい、見つかり、谷君と二人で台の上から木銃で突かれ、大きなコブが出来たことです。

一年生は石川工場へ動員され、繭まゆの袋をかつがされ工場の二階へ上がったところ、すぐ下に新婚の市川先生の家があり、丁度先生がおられたので皆で冷やかしましたが、先生は別に怒りもせずユーマアたっぷりな言葉が返ってきました。

終戦になると上級生が学徒動員や予科練から帰って来てすぐにお説教が始まり、教室で手を上げさせられたり、ビンタをくらったり、講堂へ全員集合させられ「貴様らタルンどる」とどなられたりしてびっくりしました。

中三の頃と思いますが、新校舎での試験の時のこと、カンニングをしております、隣席のS君が運悪くカケズウに見つかってあげられ、私はセーフでしたが試験が終るまで冷や汗の連続でした。

元阪神監督の藤本定義さんが親戚関係にあり、上京の都度、私の家へ来られ野球の話をよくされておりましたので段々と野球に憧れを持つ様になり、中学三年の秋の頃でしたか、川高野球部に入りました。でも生来不器用で運動神経の鈍い私でしたので専ら球拾い専門でした。一度、家村監督にサウスポーとして登用され、高一の春休みに長瀬の長生館で埼玉県高野連主催のバッテリー講習会があり、家村監督、一級上の大野さん、浅井君、私と四人で参加しました。ピッチングの練習の時、稲門倶楽部の阿部さんから、私のドロップは大変良いとほめられました。その時は、嬉しくて今に大投手になってやろう、なんて思ったものでした。

先輩との練習試合に一度投げさせて貰いましたが三振十個、四球十五個という、さんざんな投球内容ですぐに

ピッチャーはクビになりました。今にして思えば片想いの失恋状態の時でしたので、球が真ん中に入るわけがありません。皆に大変迷惑をかけてしまい、特に浅井君には済まなく思っております。

高二の夏の合宿の頃、藤本さんが大映スターズにおり、初雁球場でプロ野球の試合があり、選手が私の家の隣の松村屋旅館に泊ったので夜、私の家へ野球部の人達を呼びスタルヒン、真田投手、藤井外野手が来まして色々野球の技術について教わったことがありますが、今では懐かしい思い出となっております。

昭和二十四年の夏の大会の時、熊谷高校と対戦しまして初めは六対一とリードしていましたが、相沢投手が打ちこまれ、延長戦で十対六と逆転負けをしてしまいました。途中私が大宮球場三塁側のブルペンでウォームアップを少しやりましたが、遂に出番はなく終りました。

秋の新チームでは一年下の大附君が投手となり、私は右翼手として練習試合に何度か出して貰いましたが、特に印象に残っているのは、深谷商業に遠征し、秋の大会の優勝投手の高橋から三安打したことです。昭和二十五年の春の合宿は平方の太平中学で行われましたが、山本監督が入間地方の中学校の優秀選手を多数参加させまして、これでは私の出番は到底ないと思いい、高校二年で野球部は止めました。

高三の四月、川合君におだてられ、生徒会の審査委員選挙に出ましたが気が落ちこんでいる時でしたので、講堂の演壇に上がるとすっかり上がってしまい、何もしやべらずに降りて来てしまい、大変恥をかきました。

川高卒業後は、日大の工学部土木工学科へ進み、建設技術研究所、鹿島建設と現場をあちこちと廻りました。

新潟県の荒川では測量中、先輩が増水中の川に流され、溺死するという悲しい思い出もあります。昭和三十八年家の都合で、家業の米穀商を継ぎ現在に至っております。同業の岩澤君には大変お世話になり感謝しています。

平成元年五月に損害保険の普通資格を取り、三井海上火災保険株式会社板屋代理店として営業もしております。その他、菩提寺喜多町広濟寺の世話人、川越市善光寺年参講の世話人も祖父の代から三代続いてやっております。これは毎年七月初めにバス二、三台で信州の善光寺さんにお参りしてから、二泊三日の観光旅行をやるものです。数年前よりリュウマチを患い季節の変わり目には大変痛みがひどく、この記念文集も二か月余り遅れてしまい、幹事さんに迷惑をかけ申し訳ありません。皆様も健康には充分に気をつけられ、長寿を全うされることをお祈りして終りとします。

籠球部、学制変り目を乗り切る

石田 照 男

籠球ろうきゅうというと今時の人は漢方の丸薬と間違えそうだが、これが僕が川中時代打ち込んだバスケットボールの当時の呼び名だ。

飯能の手前、仏子ぶしというところから進学したのだが、加藤博君の兄さんが西武線、飯能方面組のボスで籠球部の選手であった事も縁で、この部に籍を置くことになり、新井、峰岸、沼田、平井、比留間、内海、佐々木といった仲間と一緒に化学実験室の南側のバスケットボール・コートが僕の青春の汗を流した想い出の場所となった。当時のボールはゴムの球型チューブのまわりを西瓜のような縫い目のある皮で包んだもので、今の若者が見たら珍しいものかも知れない。もっとも卒業の頃は今使われているような総ゴムのボールになってスポーツ史の変遷に一寸付

き合った感じになる。

今でいう高一、当時の妙な呼び方で十年生C組の時の同級生で、隣の席だった松岡は化学部を熱心に行っていて、放課後はいつもさきに書いた化学実験室にいたので部も隣組同士という事で仲よしだった。

時々練習ボールが実験室の窓を破って飛び込み、中の薬品の瓶やガラス器具をこわしたりした。化学部の連中もいたずらが好きで、コートに地雷のようなものを仕掛けて爆発させ大きな穴をあけ、学校中大騒ぎになったりしたこともあった。

不思議な学年の呼び名の十Cは通称新校舎にあり、担任は元陸軍中尉の若い望月先生で、分厚い近眼鏡をかけた化学の先生だったが、この方が温厚なことをいいことにして級中でひどいいたずらをやったものだ——授業中突然誰かがインディアンの鬨こゑの声みたいな奇声を発すると、級中の者が一斉にその声に和し、床を踏み鳴らし、机をたたき、椅子をガタガタやる。モチ先生がいくら制してもこれを五分間もつづけピタッと止める。覚えている顔ぶれは水村（博）、宮崎（義）、新井（治）、峰岸、五十嵐（統）、内沼、堀、竹沢、森岡、松岡（章）……なぜああいうことをやったのかわからないが若さのほけ口だったのかなあ。この遊びは他の級にも伝染して、一時は新校舎がこわれてしまうのじゃないかと思う位流行したがきつとみんなも記憶があるだろう。

さてその十Cだが、なぜそんな妙な呼び方をしたかという点、僕等は旧制と新制の境目に当たるからなのだ。多分文部省のお達しなのだろうが、僕等が中学三年になった年から学制が変って新制中学が全国に発足したから、楽しみにしていた一年生が入ってこなくなってしまう。それと区別するため新制中学一年生を七年生、二年を八年生……と順に呼ぶことにしたらしい。だから僕等は十Cとか十一Aだとかいう呼称で高二まで級の名を呼ばなければ

ばならなかったのだ。もう一つの珍しい経験は僕等が楽しみ？ にしていた下級生が一歳年下の学年以外は二年間入学してこなかったことだ。これは運動部。特に野球や籠球、排球（バレー）の様な大勢でチームを組まないで成立しない部にとっては大きな問題だった。僕等が新入生を迎えることが出来たのは、高三になってやっと新制中学を卒業した連中が入って来た時のことで、つまり計算上は正味三年間、新入一年坊主にありつけずに川中・川高時代を過ごしたことになる。少年の世界だから先輩風を吹かせるにはやはり年は三ツ四ツ離れていた方が具合がよいのだが、僕等はその経験は出来ず仕舞いだった。

今迄五学年あつた学年が急に三学年しかなくなったのだから運動部は困つたものだ。そんな訳で我が籠球部も一人でも抜けるとゲームが出来なくなってしまう危機感もあつて結束も固く兄弟のように仲よくがんばつた。それでも激しいスポーツなので体をこわす人も多く、卒業までには半数位になつてしまつた記憶がある。

それ位熱を入れたのでチームは埼玉西部地区では相手がいない程強くなり、強敵を求めて浦和高校などに遠征したりした。みんなもよく遠くまで応援に来てくれた。

三年の春には県大会で優勝、これに気をよくして秋の大会も勝ち、国体に出ようと血の出るような猛練習を重ねた。その頃浦和一女を天下の名チームに育てた実績のある、関口先生が助っ人コーチに就任され、僕等の「籠球開眼」の大きな支えになつて下さつた。

忘れもしない九月二十二日、好敵浦和高校との勝負の日が来た。前半不利で三十八対二十五まで離されたのだが、ラストに立て続けにシュートを決めて追い上げ、終了二十秒前に何と一点差、三十八対三十七まで詰め寄つた。一点差の緊迫試合は、皆さんもテレビなどで見ることもあるだろうが、やっている当人達のスリルと緊張感とは又格別

のものだ。

最後の一瞬まで全力を尽くしたのだが、結局この一点差に泣いて国体出場は夢と消えた。この残念さは籠球部一同にとっても大変後を引き、卒業後会った時の話題はいつの間にかこれになるし、還暦を迎えてもそれは同じだろう。とは言うものの、この残念準優勝も寄与するところもあって、川高は秋の県大会では総合優勝となり、優勝旗を母校にもたらすことになったのは誇らしい思い出だ。

僕と平井はチームの中のゲームをメイクするポジションで、ポインドゲッターの新井と沼田、斉藤（一年後輩だ）が後にオリンピックに出る程の名手だった）にボールを回し、それは絶妙なチームワークでゴールをあげたものだ。籠球の醍醐味は正にこれなのだが、苦楽を共にした仲間達と一緒にプレイをした一球一球の瞬間は、今でも鮮明に思い起こすことが出来る。そしてそれは川中・川高・十C……時代の友人達の面影とも重なって更に懐かしい想い出へとつながっていく。

バスケットボールとの心中

平井 功

今、川中・川高時代をふりかえってみるとバスケットボール漬けの六年間であった。

最もエネルギーのあるあの頃、もつと多くのことを学び経験していたなら、人生も今とは変わっていたのではないかと思うこともあった。しかし、夢中でボールを追いかけた青春に悔いはない。

私とバスケットボールとの出会いは、兄が川中でバスケットボール部に所属していたことが影響して、入学すると何の疑問もなく入部してしまった。これが結果的にみるとこの六年間をバスケットボール一色にしてしまったといえる。身長は学級でも小さい方で、バスケット部の中では「チビ」の部類に属していたのだから、バスケットボールの世界に入ることにたい間違っていたのだと今になって思う。

しかし、とにかく六年間はひたすら部活動に没頭してしまった。朝、早くから、夕方遅くまで、練習がないのはテスト期間中と冬休みと夏休みの間に何日かあった程度で、全く飽きずによく練習したものである。

始めは部員が飯能方面から通学している者が多かったし、川中にバスケットのできる体育館がなかったので、飯能女子高の体育館を借りて練習した。とにかく、夕方の五時ごろから現地集合で練習をすることもよくあった。そのようなことから夏の合宿も中学の頃は殆ど飯能一小の作法室を借用してやった。

始めは一緒に入部して汗を流した仲間は結構多かったが、結果的には六年間続けた人は少なくなってしまう。それは練習が変則的だったことや、練習内容が結構きつかったことなどが原因で余程物好きな人間でないと続かなかったのではないかと思われる。

最後は高麗の新井、仏子の石田、川越の沼田、飯能の峰岸、マネージャーの上福岡の杉本（惜しくも早世された）の六人になってしまったが、六年間多くの先輩や仲間を支えられて、心と体を鍛えられて、一生の財産として残すことができた事を深く感謝している。

特に、高校三年の時は最後の年でもあり、五月の春季県大会で宿敵浦和高校を破って優勝もしたので、秋の県大会に勝って、全国大会の第五回の国体（名古屋開催）に出場したいと意気込んで練習もやった。今考えると、当時川

高には体育館がなかったのだから、全く情けないの一言である。高校二年の年に剣道場の中に一つだけリングをつけてもらって梁がじゃまだったが、めげずによく練習した。

そんなことで体育館を求めてよくジプシーをやっていた。高校になってからはコーチの指導を受ける関係で、近くでオールコートの体育館で練習できるように川女へも借用にでかけていった。

三年の夏の合宿は長野の伊那市でやったが、伊那北高校との合同練習でビッシリと絞られた。この高校は山の上にあつて、練習が終わって天竜川を渡って宿舎までのんびりと帰るのが、なんともいえず嬉しかったのを今でも思い出すことがある。

こんな苦勞をして、勉強も忘れて試合に賭けたのに、秋の県大会では浦高に「一点差」で惜敗してしまった。

丁度この年から秋の県大会に初めて総合の得点制度が取り入れられた。その記念すべき第一回目の大会で川越高校は総合優勝を果たすことができた。陸上競技部の選手達が優勝旗を持って意気揚々と川越駅におりた姿を思い出す。この優勝にバスケットボール部も大きな貢献をすることができた。しかし、全国大会への出場の夢は断たれて未だに悔いを残す結果になってしまった。苦しい出だ。

演劇部の思い出

根 岸 宏

昨年、田中崇君に誘われて卒業以来始めて東大でのクラス会に出席、懐かしい顔、顔、顔に對面。あの木造校舎

にタイムスリップしたような気持ちになった。その席で皆に「サッカーをやっていた根岸だな」と言われ改めて蹴球部員であったことが印象強いことを認識した次第。というのは、自分ではたまたま新しく出来た演劇部に、若くして亡くなった松本進に入部を勧められ、彼の一言がなかったら俺の今の人生はなかったらうと常々思っているからだ。

生徒をどう教育してよいか迷っている職員室の中では、演劇部は鼻つまみ者の集まりと思われていたことと思う。女の出演しない芝居探しにくたびれ、二部の女性を引っ張り出したり、学校の枠を飛び越え市役所の文化事業部？を垂らし込み、「川越演劇研究会」なるものを先輩や「お県」の連中と作り鶴川座で公演したりした。今三人の子の親になってみてつくづく無茶な生徒だったと思う。しかし、それが縁でTV会社、広告会社、そして今在職中のプロダクションで飯を食うことに成った。

豆事典・音楽部室

講堂の西端に来賓控え室みたいな小さな部屋がふたつあり、その一つを音楽部室として貰った。財産はビクトローラの手巻き蓄音器、今なら欲しいくらいの高重量だが、我々にとってはやや大きいというだけのオンボロで、電音が欲しかった。レコードは数枚しかなく、みんなで自宅から重いSPを担いで来た。壁に図書館の雑誌からガメて来た指揮者の写真を貼り、音楽も聴いたけど、サボリ部屋といったほうが早かった。

音楽室でバツハを聴いていたら、
愛川先生が涙を流しながら入って来たっけ。



(上) 音楽部発表会ポスター
オケンに貼られたもの
(デザイン・青柳)



当時は楽器を弾ける学生は珍しかったが、ヴァイオリン5人、ピアノ3人、何かが弾けるのがいて、当時としてはレベルは高かった。レコードもみんなが持ち寄った。ある日、カザルスのバツハを聴いていたらドアが静かに開いて、愛川先生が「聴かせてください」と言いながら入って来た。先生の目に涙がいつばい浮かんでいたのが驚いた。二十五年、六月三日、講堂で発表会をやった。皆舞い上がって、デキは散々だったが楽しかった。伴奏の末広幸子先生が当日、急病？で来られなくなり、大騒ぎというオマケまでついた。

音楽会のプロ
上掲のポスターと記憶を摺合すると：
(順不同、一部は失念)

昭和二十五年六月三日(土) 十二時半開場

ピアノ 原 銀波 (ワイマン)
新井(滄) 前奏曲 (シヨパン)
月光一楽章 (ベートルヴェン)
乙女の祈り (バダルゼウスカ)
柳田がソナチネかなんかやったような気もする。

ヴァイオリン
原 ソナタ 第三番(ヘンデル)
メヌエット (モーツァルト)
メヌエット ト長調 (ベートルヴェン)
比留間 ユーモレスク (ドヴォルザーク)
ニーナの死 (ベルゴレッセ)
オリエンタル (タイ)
田中(修) ロマンズへ長調 (ベートルヴェン)

ヴァイオリン二重奏
原・比留間 フアランドール (ビゼー・「アルルの女」より)

バリトン独唱
東山先生ご主人(特別出演) 菩提樹 (シューベルト)
魔王 (「」他)

ピアノ伴奏 東山先生、新井稚子(滄平姉君)

演出・司会 青柳
ポスターはオケン、本川越駅、一中の三カ所に貼られた。

結構大物を掘り出していた「郷土部」

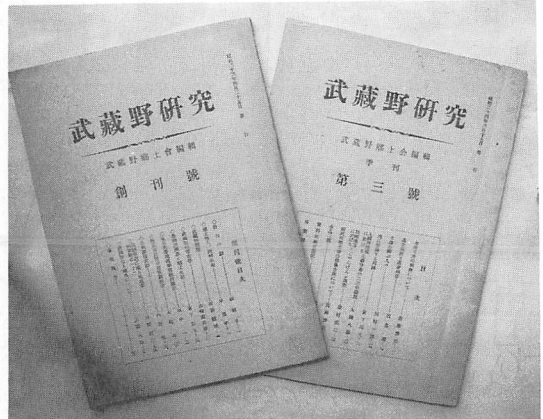
郷土部の仕事は、勿論発掘ばかりではないが、平方遺跡、所沢吾妻の土師式住居遺跡などの発掘に成功。県内学会でも高く評価され、川高の名を大に上げた。



郷土部、日光調査見学会

前列；畑、松本、沢田など。

後列；山下、大護先生、中島、松村、内沼など
(S.23. 夏)



「武蔵野研究」

入間郡下の先生方が発刊した研究発表誌。郷土部員も論文を数多く発表した。



郷土部記念写真（原田、日新、大護先生と）
中列左→柴崎、松村、沢田、2人おいて正木、岡田
後左→小川（章）、内沼など。(S.23頃)

断片集

喜多 弘

中学・高校時代の思い出が時折テレビドラマの一コマのように頭の中に去来する。それらを記憶のお蔵に逃げ込む前に捕まえて記録してみた。従って思い出はすべて断片的であって、大河の流れのようにならない。

○ 国民学校六年の冬、川中受験の直前父を亡くした。しかし予定通り中学には行くことにして入試を受けた。昭和二十年で、当時は筆記試験はなく、口頭試験だけであった。同じ学校から行った数人が一緒に試問を受けた。何を聞かれたか憶えていないが、一つだけ記憶に残っているのは、敵機（多分B29爆撃機）の乗員が十何人とかで、それを十何機が撃墜したら、何人敵兵をやっつけたことになるかという問いである。頭の悪い自分は二桁の掛け算がすぐ暗算で出来ず、適当な答えを言った憶えがある。これでは多分落第だろうと思っていたら、運良く入れた。同じ国民学校から受けた隣のクラスの人は何人か落ちた。後から聞いたところでは、担任の先生が不慣れで、内申書の書き方が拙かったのだという。でもその中の何人かは他の中学に入ってから、川中に転校して来て、又一緒になったように思う。

○ 大正天皇の行在所というのがあって、赤色か何かの絨緞が敷き詰められたその部屋は、何時もカーテンが閉

められていて、大切に保存されていた。勿論普段はそこには入れなかったが、入学後暫くして、生徒全員が順々にそこを拝観させてもらった。何先生だったか忘れたが、「恐れ多くも天皇陛下が踏まれたところを君達が踏んでいるかも知れない」と言われたのを憶えている。

○ 入学して間もなく、褒められたことが一度ある。それは佐々木タロー先生の歴史の時間で、その前の試験に確か「都市国家」という問題が出た。小生は授業で彼が説明したことをそのまま書いた。そしたら「この中で良く出来た者がいる。キタ生徒だ」と言われた。そのあとX大人に、歴史の大家にされてしまった。大家ではないけれど、今でも歴史は好きである。

○ これも又入学して間もなくのこと、アーボー（原田先生）以後先生のお名前は親愛の情を込めて渾名にさせて頂く）が怒ったことがある。何で叱られたかは忘れたが、何人か一列に並ばされてビンタを食らった。打たれた頬が痛かった。その時ふと眼が彼の殴った右手に行った。彼の右手は微かに震えていた。そこに僕は彼の心の動揺を見た気がした。

○ アフリカ軍曹という軍事教練の配属軍人がいた。頭が横から見るとアフリカの地図の形をしていたので、そういう渾名が付いたのだろう。木銃で銃剣術を習った。ある時H君じやなかったかと思うのだが、彼の怒りを買って前へ呼び出された。何をするかと思ったら、指揮台上の彼は、下にいるH君の頭上に、木銃を、重力の作用するままに落下せしめたのである。あっ、ひどいことをするなと思った。H君、まだあの痛さを憶えているかい？

○ 敗戦の日のことは比較的良く憶えている。その日の正午に玉音放送があるとかで、僕は水飲み場で口を濯いだ。その頃川中には陸軍が駐屯していた。その流し場近くには残飯入れの大きな木の桶があり、兵隊さん達が食べ

残した飯やおかずがわんさど入っていた。我々は腹を減らしていた。兵隊さん達は戦争をするだけのことはあつて、結構毎日我々の口に出来ない米を食っているのだなあと考えた。放送が始まった。音が悪く、何だか言っていることが良く分らない。僕はその時日本は神国で敗ける筈がないから、堪え難きを堪え、忍び難きを忍んで、更に頑張って戦えと言っていると、勝手に思った。放送が終了した時、X大人が言った。「日本は敗けた」。僕はやっぱりX大人は偉いと思った。僕とは出来が違うと思った。蟬が鳴いていたように思う。

○ さて敗戦後のこととなると、旧制中学、併設中学、新制高校と名前は変わったが、連続して同じキャンパスで過したので、どれが中学で、どれが高校の思い出か判然としなくなってくる。兎に角思い出すままにペンを進めていこう。関根正樹さんという、確か復員して来た、優しいお兄さんがいた。彼の家は農家で、そうでない我々は始終腹ペコであつた。それを見兼ねた彼は、何回か自分の弁当をそのまま僕にそつと渡してくれた。その弁当は、中味は何だったか忘れたが、とてもうまかつた。このあと、一度だけ母と彼の家へ買出しに出かけたことがある。その時には何か食べ物を分けてくれたが、彼は遠慮勝ちに、こういうことはもうしないようにと言つた。あの頃は日本人は誰もが食べ物を求めて買出しに精出していたのだが、関根さんの優しさに甘えた自分がいけないと思つた。彼には済まなかつたと思つている。

○ アフリカ軍曹と連動して思い出されるのがカケゾウである。誰が何で怒られたのか忘れたが、教卓の前に立たせて、キセルで、その生徒が泣き出す迄、頭をポカポカと、木魚を叩くようにたたいていたのが鮮明に記憶に残っている。今でも一寸残酷だなあと思っている。

○ 同じ数学の先生で、つまらぬことを憶えているのがオシテンである。先生は三角定規を使って、黒板に綺麗

な図を描かれた。確か冬の幾何の時間だったと思うのだが、黒板に図をかかれたあと、「やってみな」と言われて、御本人は窓際の日当りの良い所に立って、片方の手を開き、他方の手を握って擦り合わせながら、寒さに耐えている。そんなことでその時間が終ってしまう。大抵はそんな調子の授業だったように思う。その時、もっとしつかり数学を教えてくださいければ、オレ達の実力もつくのにとうらめしく思った。でも今考えてみると、先生はあの頃でもおじいさんの風格があつたし、冬の寒い日暖房もない教室で授業をするのは大変だったのかも知れないと、同情の気持も湧いてくる。

○ 佐々木雄ちゃんは秀才である。僕は出来が悪い上に怠け者だった。数学の時間何時も授業後、雄ちゃんのノートを借りて、解答を写させてもらった。成程なあ、こうやって解くのかあと感心しながら休み時間にノートした人が解いたものでも、正解が分るといふのは何か気持の良いものである。雄ちゃんはその後武蔵高校に転校してしまったので、その恩恵に与れなくなってしまったのは残念だった。トクさんが、雄ちゃんの転校後、「皆出来る奴は東京の学校に転校してしまう。残ったお前らもつと頑張れ」と発破を掛けたのを憶えている。

○ トクさんについては幾つかの思い出がある。どういう経緯でそうなったのかは憶えていないが、句会の後か源氏物語の講読会の後かに、その日宿直だったトクさんに、「キタ、泊っていくか」と誘われたことがある。何とはなしに「ハイ」と言ったので、彼と宿直室に泊る破目になった。その時オヤジがいなかった僕に、寂しかろうと同情してくれたのかどうか、今となっては分らない。何の話をしたか忘れたが、夜彼が大きな屁をひったことだけ憶えている。

高峰三枝子に皆が熱を上げていた時のことと思う。トクさんはその熱を冷まして勉強に向わせようとしたのか、

「高峰三枝子だってウンコをするのだぞ」と授業の時言った。彼女だって普通の人と変らないのだということだったのだろう。その時は余りいい気持ちじゃなかった。下品で嫌だと思った。譬え彼女がウンコをしても、僕は、永遠の恋人のように、高峰三枝子が大好きである。

源氏物語の講読会には出来る丈出るようにした。トクさんは吉沢義則の、藁半紙に印刷したようなテキストを持って来て、綺麗に洗った手で、大事そうに頁を捲めくっていた。彼は蔵書家で、本を大切にしていたようだ。僕も本が好きで、本を大切にす。後年大学に入って、教大付属高の女の子と知り合いになった時、高校の授業の話をしたことがある。その時唯一僕の方が彼女より威張れたのは国語の授業だった。トクさんは源氏物語だけでなく、芭蕉の俳句とか、色々知的なことを教えてくれた。今でも有難いと思っている。

俳句と言えば一つ悪いことをしたことがある。「瀬祭」に出す宿題の俳句が、朝になっても出来上らなかった。そこで止むを得ず、父の本棚にあった岩波文庫の「子規句集」を開いた。有名な句ではバレルので、余り人が知っていないさそうな句を一つ盗んで書いた。後になって驚いたことに、その句が「瀬祭」に載ってしまったのである。勿論盗作なんだから、誇らしい気持ちなど一つもない。盗みが発覚するのを恐れている罪人の心境である。その時思ったことは、矢張り選句をする人の眼は高いということであった。思いがけず一つの実験をした結果となった。その句は今でも憶えている。

桶踏んで冬菜を洗ふ女かな 子規

(先生、ごめんなさい)

高校の時、小説家になりたいと思ったことがある。それをトクさんに話したら、年賀状か何かでたしなめられた。

「水が一杯溜っていないのにダムを放流するようなものです。お止めなさい」。それ以後小説家になろうという気はトンとなくなつた。でも今でも小説家に対する憧れみたいなものはある。

トクさんのクラスになつた時、嬉しかったことが一つある。その頃は学年全体で成績の順位(席次とか言っていた)をつけていて、トクさんが「この組に三番の者がいる」と言つた。どうしたことが、それが僕だったのだ。しかし怠け者だったから、それ以後三番になつたことは、一度もない。

トクさんで忘れられないことの一つは便所掃除であらう。今までやったこともないので嫌だったが、彼が率先してやっているので、仕方なしに清掃した覚えがある。

○ 化学部に入つて本橋信治先生には色々教えて頂いた。我々に実験を見せる為、金箔を惜し気もなく融かしてしまつたのには驚いたと同時に有難く思つた。それに大学入試の直前纏め授業をやって下さつて、その中からほとんどの問題が出た。実力のあつた先生のひとりと思つている。

○ ボケナスに叱られたことがある。僕の家は三芳野天神様の前で、裏から急いで行けば五分位で学校に着いた。その為何時も遅刻していた。ある日遅刻の常習を見兼ねたボケナスに、職員室に呼び出された。「家が近くせに遅刻の連続とは何事だ」というのだ。近いと却つて油断して遅れるもののだが、そんなのは言い訳にならぬ。そのうち、「君のお父さんはそんなことでいいとは思つていないだろう」と死んだオヤジのことを言い出した。オヤジのことを出されると、僕は何だかとても悲しくなつて、泣き出してしまつた。そしたら許してくれた。

○ トーソンと言えば「からかつくいけれ」が先ず頭に浮ぶ。徳富蘆花の『自然と人世』を習つた。確かその中の「寒月」が教材だった。彼は、表現が大袈裟だから嫌いだと言つた。だけど僕は彼の文章がとても気に入つた。

その時、若くて感受性の鋭い生徒の前では、好きだ、嫌いだと言ってもらいたくないと思った。先生の影響は大きいからだ。

風船

私は一九六八年九月から一九七六年八月迄、生理学の研究の為ニューヨーク州に滞在した。最初の三年間はマンハッタンにあるニューヨーク大学医学部で、続く五年間はロング・アイランドの真中辺にあるニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校医学部で過した。その間多くの人々に随分と親切にしてもらい、今ではアメリカが第二の故郷の様な感じがしている。そしてアメリカ人の合理的な考え方がとても気に入っている。

渡米して二年目の秋の初めだったように思うが、ボスの教授が、彼の家族と一緒に、我々夫婦を、ニューヨーク州のやや北部にあるステアリング・フォレストという森林公園に連れていってくれた。彼の二人の息子は五歳と二歳位だったかと思う。我々は園内の遊覧列車に乗ったり、大きな山羊に餌をやったりした。息子達はらくだに乗せてもらったりして、はしゃいでいた。彼等は園内で風船を買ってもらった。兄貴の方は風船の糸をズボンのバンド通しのところに結びつけ、自分の後ろに風船をふわふわさせて悦に入っていた。ところが弟の方のズボンにはバンド通しがなく、兄貴のように出来ない。その内兄貴が弟に、「しっ、しっ、そんなことしちゃ駄目だ」と言っているのが耳に入った。見ると弟は兄貴と同じようにズボンのところから風船の糸を延ばして、自分の脇に風船をフワフワさせて歩いている。はて何処に風船の糸を結びつけたのかなと思って、兄と弟の遣り取りを注視していたら、何と弟は自分のオチンチンに糸を結びつけていたのである。小生は彼の独創性に驚き入った。成程アメリカにはノーベル賞受賞者が多いわけだと思った。しかし兄貴は、糸を結び付けたものが単なる小便を導くホースではないこと

を知っていたのか、そのものをそんなことに使つてはいけな^きいと論じていたのである。確かにそれは人類の繁栄にとって大切なもので、風船の繫留などに使うべきものではないかも知れない。結局弟は兄貴の忠告を受け入れて糸を解いたのだが、その途端どうしたとか、風船は彼の手から離れて、空中に飛び出したのである。風船は見る見る空高く舞い上り、弟の手ではどうしようもなくなった。彼は激しく泣き出した。折角買ってもらった風船が逃げ出して、残念だったのであろう。風船はもう空の上遥か彼方である。その時わがボスは弟に優しく言った。「あの風船はね、ドクター・キタの日本のお友達にハローを言いに飛んで行つたのだよ」すると泣いていた弟は静かになり、小さくなっていく風船をじつと見つめていた。小生は何かほっとしたような気持で、青空に吸い込まれていく風船を眺めていた。日本の友達が懐かしかった。その時の空の青さは今でも目に焼き付いている。

弟は医学部を卒業して、今は医者^の卵である。息子が一人いる。兄貴に感謝しているに違いない。

思い出の断片

比留間 和夫

中学、高校と激しい時代の変化の中で過ごした六年間、思い出は様々なものがあります。自宅から四キロ程の道程を歩き、一時間に一、二本の川越線で中学に通っていた。雑嚢を片方の肩に掛けてはいけ^ないの、紐が長すぎるの、ゲートルの巻き方が悪いのと、上級生や教官から文句をつけられ、困りを気にしながらの通学だった。入学当初、比較的背が高いのと、田舎育ちで山や川を飛び回っていた体力と、身のこなしが軽いからか、バスケット部に

入れられ、校庭の片隅の土埃のひどいコートで背番号7をつけ、汗まみれになっていた。おかげで体力と反射神経の鍛練には、今も役立っている様に思います。

吉沢教官の教練の時間、余所見を見咎められたのか、木銃で額を小突かれ、何でこんな目に逢うのか、と目をむきながら一つ突かれては一步下がり、一つ突かれては一步下がりして校庭を半周程したのには参った。

鈴木楽山先生のお習字の時間、身が入らず、終了時間間に慌てて提出した。翌日楽山先生に職員室に呼び出され、さてはお説教と覚悟をして恐る恐る入って行くと、いきなり頭を下げられ「お見逸れました、何方の先生におつきですか」と言われた時はびっくり、その習字には「王羲之の作に通じ伯仲の白眉なり」とあり、改めて楽山先生を見直したものです。もつともその一回限りでその後はさっぱり、今でも書く事は苦手です。

徳さん先生、戦後間もない頃、高麗川に吟行に来られた折、お袋の手作りのまんじゅうを差し入れに行ったところ、旨そうに食べてその後顔を合わせる度、「お前のお袋のまんじゅうは旨い」と言われ、照れ臭い思いをしたものです。又音大を出て間もない頃、室内楽団のメンバーで、九段会館での演奏会に、徳さんがわざわざ聞きに来られ、感激した様子で、肩をたたいて喜んでくれた事を覚えています。

石川アツパク先生には苦い経験があります。正月早々沼田君と、通用門から一目散に逃げ出し「初逃げ成功」などと喜び勇んで映画を観に行ったところ、窓越しにすっかり見られていて二人してこつてり絞られてしまいました。当時沼田君や小熊君の影響もあり、フランス映画に凝り、よく帝劇や地球座に通ったものです。その折有楽町のガード横にトンカツ屋があり、弁当箱に飯だけを詰め、当時としては珍しいトンカツを食った、その時の味忘れ難く、おかげで現在でも何かというとトンカツということになります。

中一当時は校舎の一部に軍隊が入っていて、ある一人の兵士が、小銃を持ったままトイレに入り小用を足して出て来たところ、上官に見つかり「陛下から拝領の銃を便所に持ち込むとは」とそれは酷く殴られており、身を疎めの様子を見ていた小生は、その兵士にいたく同情し、改めて軍国主義の怖さを垣間見た思いでした。終戦となり、今迄の教科書の軍や皇室に関する部分は黒く塗り潰し、総て反対の教育、その矛盾を打ち消すかの様に、何物かを求めて貪る様にレコードに聴き入ったものです。青柳君の家には大型の電蓄と多くのレコードがあり、特にフーベルマンのスペイン交響曲はレコードが擦り減る程聴きその深さ、雄大さ、エキゾチシズムに感動したものです。当時は病弱な叔父がおり、弓の毛の切れかかったヴァイオリンが、紐でくくった木綿の袋に入って柱に下がって置かれていました。叔父の留守にそっと手にした感触、形やニスの色に魅入られていました。何とかしたいとの思いが募り、



ごあいさつ

日仏会館ホールでの発表会も回を重ね20回目を迎えることとなりました。

この間、多くの生徒達が社会に音楽分野に果立ち、それぞれに活躍している様子を見るにつけ、深い感慨と喜びを感じております。

思えば終戦直後の混乱の中、小江戸と云われる川越の中学から音楽を求め、志ざしてまいりました。音大卒業の後、宗教学、オーケストラ、室内楽、等経験し、音楽の厳しさと喜びを身にしみ体験し、その後指導する立場になってからも音楽のもつ深さ、大きさ、楽しさを少しでも分かりたいと願って生徒達と接してまいりました。

殊に日頃のレッスンで大切なことは、素直、集中力、根気と云っています。今、心の時代と云われていますが、この会の経験が助みとなり、音楽を通して将来に何らかのよい影響が得られ、心の糧となるよう願っております。

ここに30周年（第1回・昭和35年・日仏会館）を迎えることができましたことは、よき生徒達とご父兄の皆さまのご理解とご協力によるものと、深い感謝の気持で一杯です。

今後とも生徒達と一緒に同一層音楽に挑み、頑しで行きたいと思っております。

第30回記念 ヴァイオリン・ピアノ発表会 プログラムより

お茶の水の楽器店や古道具屋を歩き廻り、あげく向う見ずというか、いい度胸というか、音大の演奏会の折に日比谷公会堂の楽屋を訪ね、先生に頼み込み、目白の福井先生（後の武蔵野音大先生）のお宅にレッスンに通う様になりました。今から思えば田舎の自然、音楽の好きな友人、激しい時代の変化が当時としては異質とも思われる音楽の道に導いてくれた様に思います。

NHKラジオ

府瀬川 忠芳

「健忘症が最近ひどくなったなあ」と感じている。新聞などでは痴呆症という言葉が目につくが、その言葉の横には必ずお年寄りの写真が載っている。

今年の一月に腹を切ってから、すっかり臆病になり主治医にいろいろと注文をつけるようになった。「ここが痛い」「ここがおかしい」とすぐに治してほしいような事を言う。すると主治医は「もう年だから病気と仲良くつき合っていくようにした方がよいですよ」と逃げられてしまう。

こんなわけで、高校時代の事を思い出しているが、全く断片的にししか思い浮かばない。

或る朝、登校してすぐに職員室に呼ばれた。何も叱られる事はしていないし、普段職員室には御無沙汰なので小さくなって行った事を覚えている。今思うと若い先生で他学年担当の先生だったと思う人が、私を手招きして「こっち来い」と言った。

「おまえは、NHK（ラジオ）に川越高校の名前で何か言ったかね」という質問のようだった。何が何やらさっぱり分らない。まさに茫然と立っていた。お説教をもらっている生徒だとはかの先生は見ていたと思う。

その時、私の脳裏？ をかすめたのは、丁度その前の晩のNHKの番組に、高校生が何人かグループになって、他の高校とクイズの競争をする番組があった。そのタイトルは忘れた。日比谷高校対川越高校と言った具合で、問

題に答える形式のものだった。その番組に、私が出題者となったのである。この番組を聞いた先生が私の名前を覚えていて、翌朝、私を呼び出したのだと分った。詳しいことは話してくれなかったが、我々の一年先輩がNHKに川越高校チームとして申し込んだのだろう。その事で学校に問い合わせがあったようだ。

書いたついでに、この頃私もクイズに凝っていて、いろいろな問題を葉書に書いて送った。それにはちよっと下調べもしなければならず、文学青年を装った？

次の出だしの文句の作品と著者を言ってください。

- 一、をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとて
(土佐日記 紀貫之)
- 一、いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひけるなかに
(源氏物語 紫式部)
- 一、ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず
(方丈記 鴨長明)
- 一、月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉てて入らんとする
(雨月物語 上田秋成)
- 一、春はあけぼの、やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて
(枕草子 清少納言)

このような簡単な問題だったので、全部解答されたようだった。
何日か後に、切手が郵送されて来た。ちよっといい気分になったような記憶がある。

その額は、覚えていないが、少額だったことには間違いない。「NHK」——日本薄謝協会だと誰かが教えてくれた。

「馬鹿たれ！」たちの中学生活

松村 祐二

晴れて入学を許された川中は、勉強どころではない。工場やら、農家やらに勤労働員されて肉体労働に明け暮れる状況。週は何回か登校して授業らしい日もあったにはあったが、すでに先輩たちは学校には姿を見せず、自宅から直行直帰で上福岡の火工廠、朝霞の被服廠などの軍需工場で工員として働かされていた。

教練も小学校とはだいぶ違った。教官は軍人だし、スタイルも軍人らしかった。しかし一年生は残念ながら、軍刀をさした尉官ではなく、下士官で、それも万年軍曹とやら。この通称「まんぐん」氏は古ぼけた焦げ茶の革の脚絆を愛用し、その古さが、なんとなく数々の実戦の軍歴を語っているようで、重々しく見えた。軍人らしく、常々「わしは、諸君と苦勞をともしする」と言っではいたが、ところかまわず、やたらと「馬鹿たれ！」と僕らを怒鳴り散らすのには、いささか辟易へまえました。

教練の時間の前には、クラスの当番が「まんぐん」氏に授業の指示を受けに行くことになっていた。部屋のある武器庫（考えてみればおかしなもので、勉強だけするはずの中学校にこんな部屋があったんですね）に行つては、不動の姿勢で入り口に立ち「二年二組松村祐二、教練の指示を受けに参りました。入つて良くありますか」と声を張り上げねばならない。「ようし、入れ」と返事があつて武器庫に入ると、昼食時間以外食べてはならぬ筈の弁当をこっそり食べていたりして、「まんぐん」氏も、時に「諸君と苦勞をともし」できない事情をしばしば、目の当たり

にしたものだ。ここは武士の情け。見て見ぬふりをし、指示された木銃を担げるだけ担いで校庭へ走り、仲間の「馬鹿たれ」たち？ に手渡すわけだ。にもかかわらず銃剣術の教練では、遠慮会釈なく「足が交差している！」（どうやら銃剣術では一番まずい姿勢らしい）と怒鳴られた上に、木銃で勢いよく足払いをするものだから、たまらない。「まんぐん」氏の教練のあととは年端もいかぬ十三歳のわが足は、かくて「あざ」だらけになるという次第だ。

終戦も間近になると、空き校舎には軍隊が同居し、かなりのスペースを占拠した。若い下士官が指揮をして、老兵が、けだるそうに訓練をしているのをよく見かけた。福島隊といったような気がする。通信隊ではなかったかと思ふ。あるいは記憶違いかもしれない。

校庭は半分程が畑に利用されていた。食糧も一部、自給していたのだろうか。急速に自給率を高めたいと、考えたかどうか知らないが、老兵さんたちが、せっせと金肥をまくものだから、ときどき純なまの香り？ が風に運ばれてきて、鼻をつまんだのも懐かしい思い出である。風といえば畑の金肥にふくまれた糞殻が乾燥し、強い風の日などには教室に運ばれてきては机の上を覆い、「ふう！ ふう！」と息を吹きかけてから席についたことなども忘れられない。机上の糞殻は、くしくも兵隊さんの食糧事情をかいま見る思いがした。とはいえ、通用門から入って、左手のバラックでは時折、まんじゅうを造っていたから川越の一般家庭よりは豪勢だったに違いない。まんじゅう造りが始まると甘い匂いが教室まで漂い、空腹の僕らは、生唾を飲んで「ジツと我慢の子」であった。どうしても食い物の記憶ばかりが脳裏をかすめる。お許し願いたい。

飽食の時代といわれ、世紀末の危機などと、はやされている昨今ではあるが、なにはともあれ、毎日の糧がなんの苦もなく手にはいり、安穏な暮らしが営まれる。なんとすばらしいことではないか。戦争と縁をきって、平和を

希求したわが国の国是はやはり間違ひではなかつたと思う。戦時を経験した僕らが子供らの世代に語り継ぐものがあるとするれば「戦争はもうごめんだ」と実感をこめて言えることではあるまいか。

慈顔愛語

細谷哲夫

「三十九じやもの、花じやもの」とは、人生五十年と言つた時代の話であるが、今なら「四十九じやもの、花じやもの」と粹がるところだろう。

だが、それもままならない。さりとて、昔の記憶も定かでない。耄碌もろろくしたのかと内心面映ゆいが、多感な時代を思ひだすのも、また、一興かも知れない。

顧みると、白線入りの帽子に憧れて川越中学校に入学した年は、戦争も末期、無い無い尽しもきわまり、憧れた白線帽も戦闘帽に縫いつけられる始末であつた。

何はともあれ、田舎出の私にとっては、毎日が新しく、もの珍しく、名物のお説教を除けば、快適であつた。そのお説教もK先輩のお陰で窮地を脱することになる。

庇つてくれたK先輩も今は亡い。ご存命であれば、昔話と思うが、これも縁である。

学校の方針も質実剛健、世の風潮もあつてか、それに加え文武両道が求められた。

しかし、戦局も厳しくなると、頭の方の文は、ブンブン言うわりにはどこかへ行つてしまい、代わりに教練や勤

勞奉仕が大手を振って歩き出した。

そんな訳で日常生活でも、悪戯盛り、何の気もなく、まぎらわしいことをして、よく叱られた。

八月十五日、暑くて静かな昼下り、一人下校途中で、終戦の歴史的瞬間に遇うことになる。見知らぬ人が「戦争が終ったんだよ」と妙に乾いた声で教えてくれたのを思い出す。その瞬間、頭の中が真白になり、その後なにをしたか記憶がない。その夜、電灯の光がまぶしく、父が兵隊に行かずに済んだとポツンと言ったことを思い出す。

教科書が墨で塗りつぶされたのには、驚いた。昨日までの白が黒になる。先生方は、ご苦労の連続だったと思う。先生方は、とても個性のある方が多く、味わいのある言行は、しばしば心の琴線に触れ、深く考えさせられることが多かった。

最も印象に残っている言葉は、K先生が言われた「自由と放縦をハキ違えてらアナ」の一言である。

自由だ平等だといい気になっていた私は、戸惑っていた心がスッキリとしたことを思い出す。

K先生と言えば、後年、はからずも先生の勤務されていた日高の卒業式で話をする機会があった。話が終わってから、拙訥をお詫びすると、先生は一言、「よかったよ」と言ってくださった。その時の先生の笑顔は忘れられない。慈顔愛語とは、このようなことを言うのか。

今年も春が去り、やがて夏来たり、秋が巡って来る、そして閉蔵の冬が来る。余生は余禄として、「四十九じやもの、花じやもの」と川高に学んだことを喜びとし歩んでいきたい。

返せ！ 青春の一頁を！！

森田利寛

それは忘れもしない、高校三年のある日の放課後のできごとだった。

級友達がバレーボール（バスケットボールだったかな）の練習遊びをしていた。場所は剣道場東の校庭の片隅であった。運動好きにとってはたまらない光景。上着を脱ぎ、カバンと一緒に無造作に置き（剣道場の横木に掛けたかも）、ゲームに飛び込む。

運命のいたずらが忍び寄っているとも気づかず、夢中で汗をかき、楽しい一時を過ごす。

帰り支度、ハッと気付く。何の費用か記憶にないが、係りとして集金した現金ゲンナがない。内ポケットに入れておいたはず。カバンにも見当らない。級友より集金した公金の紛失。顔面蒼白。友に促され職員室へ盗難にあったことを届け出る。現金であり、保管状況もよくない、犯人は出したくない、等の理由から深い探求はしないことになる。帰宅して状況を話す。弁償するより方法なし。今金額の記憶はないが、わが家にとっては大金であったことは確かである。

数日後、学級会を開くことになり、司会者の角谷君から「森田、外へ出ててくれ」と言われ、内容を察し、一人ポツンと廊下へ。

やがて角谷君から「クラス全員で償うことにしたから、心配するな！」と再び集金が。クラスメートに迷惑をか

け大変申し訳ない。あの時、もう少し慎重であつたらと悔むと同時に、「盗^とつていった奴は誰なんだ。返してくれ」と大声で叫びたかつた。

級友への償いとして、修学旅行への参加をしないことにした。

修学旅行の土産を奥隅君が届けてくれたが、何であつたか覚えていない。やがて京都駅焼失のニュース。なおのこと参加できなかったことの無念さが高まつた。高校生としての青春の一頁を欠落させられた事件。「身から出た錆」誠に慚愧に耐えぬ。

四十三年前のことながら、当時の級友には大変ご迷惑をおかけいたしました。今改めてお詫びとお礼を申し上げます。

それにしても……。

閑話休題・数学の授業の思い出

掛原先生の口ぐせ……

〃掛ゾウ式 三段論法〃

「このような式をつくるというのは、神様か馬鹿である」

「お前は神様ではない」

「依ってバカである」

「思い出はつきないなあ。」

忍天の円

荻野英夫

私にとって、一生忘れ得ない、且つ有益な思い出がある。それは、一年三組の幾何の時間である。田舎出の私は、ユークリッド幾何は、本当に、新鮮な感じを受けた。その時である、担当の忍田先生が、フリーハンドで黒板に白墨で素晴らしい円を描いた。私達全員あつげにとられ、唯呆然とし、しばらくしてから全員の拍手が起きた。先生は、得意気に又書く。私達は唯感心するのみであった。

六年間、同じ学び舎にて過ごし、その後、仙台にて、機械工学を修め、自動車部品メーカーの設計業務に就いた。高度成長期で、CAD（コンピューター用語）などない時代である。世界一になるため、如何に早く業務を進めるか、開発試作の場合、フリーハンドで図面を書かせたことがある。その結果は、直線はともかく、円は惨憺たるもので図面の形を成さなかった。自分でもやってみたが、旨く書けない。

忍田先生は、何故書けるのか？ 今考えると、多分心には、ゆとりを持ち、バランスの才覚がとれていたのだと思う。それから四十八年、変化の激しい現在、器用な人でも難しいのではと思つて、心を慰めている。

昔の教育者は、かくあつたと思ふ今日この頃である。

処分が論じられたあの頃

平岡泰之

「封建の世の匂ひする川越の町を歩きぬ友と吾とは」はどなたの作であつたであらうか。この古い城下町川越で私達世代が旧制・併設の中学三年、新制高校三年と同一校舎で過ごした六年間は、丁度戦中・戦後の「食糧難」の時代と重なり合つていた。麦の多い麦飯、さつま(芋)、この切り干しを粉にし、水でこねて蒸したさつま団子、ふすま(小麦の皮)も粉にまぜて量を増やした焼餅などを主食としてよく食べたものである。現在、これらが健康食品として見直されているとかと聞くと、四十余年経つただけがもはや隔世の感と言えなくもない。

こういう食べるものがない時代だったから毎朝二両編成、三十分一本の西武電車にもまれて四十分、そして徒歩二十分で通用門を入つたそこからは帰宅するまで、すきつ腹と格闘する校内生活を否応なく強いられた。

校則では四時間目の授業が終つたら昼休みで弁当箱を開けてよいのだが、それを待ち切れずに三時間目が終つた十一時少し過ぎ、四時間目前の短い休み時間に弁当を食べてしまう者が高校進学の頃から目立ち始めていた。私もその一人だった。しかもこれでは足りず、昼休みには誘い合つて市内へ走つて行き、あのラグビーボールのような形の一個十円のコッペパンを一個買い求め(カネもなかった)、午後の授業から放課後の部活動に備えたものだ。身に覚えのある人も多いことと思う。

ことに高校三年になると最上級生、我が世の春、おおっぴらだった。先生方の目や耳にも入つていたのであろうが、

飢餓の時代だからと大目に見ていたのに違いない。三時間目が終わったら慢性空腹で、オカズの卵焼きやカツプシ、佃煮が目に浮かび、もう弁当箱を開けずにはられないのがその頃の私だった。箱の中の飯は隅々までようやく銀シヤリになっていた。それまでは表面は白米でも、箸を動かしていくと底の方には麦が混じっていた。

しかし、こんな放恣な（矛盾するようだが懸命な）生活態度がいつまでも続くわけがなく、やがてピリオドを打たれるようなことが起こった。口は禍いの門、私の失言、大袈裟な言い方になるが舌禍事件である。

空気が澄んで引きしまった二学期のある朝のこと、私は週番代表として朝礼台の上に行った。週番は毎週三年五つの組から一人ずつ順繰りに選出され、互選された代表は月曜日の朝礼の時、学校長、諸先生、全校生徒を前にして朝礼台から、その一週間に心がけるべきこと、注意すべきことなどを内容とした「意見」を述べることになっていた。ということは朝礼の行事は民主主義教育の下で生徒会の自治に任されていたようだ。

この時簡単に話をすませるつもりで台上に登った私は、終りのほうでとんでもないことを口走っていた。あがつていたのか、それともこの機会に何か面白いことを言ってみんなを沸かせてやろうという下心があったのか。

「……最近廊下で先生方とすれ違っても礼をしない生徒が多い。我々は先生方にちゃんと礼をすべきではないか。そして先生方はより丁寧これに応える……」と口がすべった時、前にいた生徒の集団の後方でドツと笑いが起り、何人が拍手を送る者もいた。拍手は多分、三年の仲間の一部のトッポイ連中だっただろう。後になってこの笑いや拍手が私の言葉に共感をしたものと受け取られ、よくない結果を招くことに気がつくのだが、この時私はまだ得意然と立っていた。

「朝礼終り」を告げ、一礼して台を降りて左右に並んでいる先生方に目を走らせるとこれがよくない。皆強張っ

た様子でこちらを見向きもしない。お互いが、この挨拶ではいつもの朝礼と違って生徒をねぎらうどころではないと感じていたのか。二、三の日頃私に好意的と思っていた先生も同様だ。好意的とは、授業の出来と関係なく、その先生と廊下などでサシで立ち話を交わせる程度の親しさをいう。六年間も師弟のお付き合いをしてきていたから垣根のない先生も結構いたのだ。そういう先生の一人に、一学期早々の学校の行事だった「生徒会長選挙の応援演説会」の時、私はH君を応援する演説(?)をしたのだが、終って会場の講堂を出たところで「平岡の演説は面白かったよ」と笑顔で声をかけられてもいた。弁当のことといい、要するにその頃から調子にのりすぎていたようだった。引き揚げて行く先生方の後ろ姿を見つめて私は茫然と立ち尽した。自分の軽率な発言によりやく気づいたのだがもう遅い!

その日の昼休み、渡り廊下ですれ違ったN先生は私を呼び止めてこんな風におっしゃったのである。「平岡の今朝の発言は今職員会議で問題になっている。どういう結論が出るかまだ分からないが心しておくように。だけどぼくはきみの味方だよ」。この言葉に元来は小心者の私はびっくりし心臓がドキドキしてきた。こうなりそうなことは午前中の授業で接した先生方の雰囲気です感はできたのだが、それが現実になりそうだった。

当時の状況をここで「私的」に想像して補うと、緊急職員会議が開かれて、私の発言を不問に付すべきではない。生徒でありながら我々教師に対する批判をしかも全校生徒の前でやったのは言語道断、断固処罰すべきだと強硬な(客観的にみて正当な)意見を述べる先生方と、何らかの注意は必要だが処罰には反対だとする同情的な先生方との二派に分かれ、私の処分をめぐって職員室でカンカンがくがくがあったようだ。今度ばかりは大目に見てもらえずに鉄槌が下りそうな形勢だった。

N先生は禁を侵してこの職員会議の模様の一端を洩らし、私に心の準備を促したことになる。この思いやりと励ましは何に基づく行為であっただろうか。同じ三年の別の組の担任だったから、卒業を控えた私の処分問題に一人一心を悩ませたには違いないが。

渡り廊下での会話がきっかけて、しばらくして私は前年二年の時の先生の授業を思い出すことになる。

その経緯は忘れたが、先生は英語の時間である日黒板に次のように書かれ、

Even Solomon in all his glory was not arrayed like one of these. (Flowers).

この言葉は聖書の「マタイによる福音書」六章二九節にあるからその日本語訳を次週までに調べてくるようにと言われた。「鬼畜米英」に負けて知った戦後の欧米文化の影響かどうか、我が家にふさわしくない聖書のあるのを知っていた私は、早速この部分を探し当て次回の授業を待ちかねたものだ。

先生の調べてきた者は、の聲に手を挙げたのはその時の二年某組では私一人だったみたいだ。もし私の記憶が間違っていたらお許しいただきたい。

栄華を極めたるソロモンだに、その服装、この花の一つにも及かざりき

と答えたように、文語訳だったこの聖句は強い語呂のよさもあってか中々忘れるものではない。そしてよく調べてきた、その通りだとお誉めに与ったことも。

栄耀栄華を極めたソロモン王にしても、この一本の野の花（百合の花）の美しさに勝ることはできない。自然の美しさに勝るものはないのだというこの名句の宿題、他の組でも出されていたのだろうか。因みに英語訳の方は今では even Solomon と glory 程度しか思い浮かばなかったのだ、さるところに問い合わせて正確を期したことを

ここで打ち明けるが、文語訳の方はこの時知って今日まで、私の脳裡にありつづけたそのままである。

私が聖書を読んでいる（実は右の部分だけだが）ことを知っていたので、先生は二年の時から親近感、連帯感を持たれていたのだろうか。だから私を裁くことはできないと早々と決心され、職員会議では軽はずみな発言などがめ立てするのではないと、初めから処分に反対する立場をとられたのだろうか。当時は迂闊にも先生の心中は推し測れなかったのだが、卒業後 even Solomon がふと口をつくごとくその時の先生のご苦勞が理解できるようになってきていた。

しかし先生のおかげで接した折角の聖書だがこの宿題の時だけで、私はその後ひもといっていない。聖書に「人を裁くな、自分が裁かれないためである」という言葉があるのを知るのは、ずっと後年、別の文献によってだった。英語の方も副読本で張り切っても肝心の實力のほうは三年にかけて一向に上がらず、模擬試験の成績の上位ランキングが二階の廊下の板壁に時々貼り出されても、私の名前は一度もなかった。

話を本題に戻すとその後の職員会議でどんなやりとりがあったか分からなかったが、私のことは結局不問に付されず、保護者召喚ということになり、共々やがて学校側の「判決」を受けることになる。どういう決着がつくのか、私は不安と緊張のうちに狭い応接室で冷徹な表情のM教務主任と机を挟んで向かい合い、その見解とお裁きを聞くことになる。自業自得ということなのだろうか。

この応接室を思うと廊下を隔ててすぐ前にあった宿直室でのごよみがえる。この部屋で、この年六月二十五日に勃発した朝鮮戦争の現状と見通しを解説したのは国語のK先生だった。たしか開戦から間もない七月初旬、夏休み前のことだ。

当時北朝鮮軍は破竹の勢いで南下し、アメリカ軍(国連軍)は朝鮮半島から追い落とされる寸前だった。しかし先生の子想は意表をつき、やがてアメリカ軍は反撃し三十八度線を越えて北朝鮮に進入する、これを中国が黙視するわけがないからいずればこの戦争に中国軍(先生は中共軍と称した)が介入する、というようなことを言われて何も知らない私達を煙に巻いたものだ。

その言葉のように、夏休みが終つて再登校した頃は情勢が一変していた。マッカーサーの計画した、北朝鮮軍背後の仁川上陸成功でアメリカ軍は息を吹き返し、この戦争が意外な長期化をしたのは周知の通りである(以上は年表を見て記憶を確かめた)。

正にK先生の予言したような不幸な展開となつたのだが、アメリカ占領下のあの頃、紙不足(一般紙で朝刊四頁、夕刊なしだったそうだが)、情報不足の時に先生は何をネタにして一部有志生徒を集めてこの話をしたのだろうか。五、六人の仲間は畳の部屋で膝つき合わせて話を聞いたのだが、当時の私達は戦況の推移にばかり気を奪われていて、一つの民族が二つの国家に分裂していて戦つた朝鮮戦争の事の重大さに思い至るのほもつと後のことになる。

さてM先生のお裁きはどんなものだったのか。たしかに処分は科されたのだが、この頃世間の高校でよくあつたらしい五日間登校停止、というようなこともなかつた。私が退学になるとの噂が飛びかい、三年の一部に動揺が生じていたことも学校側は無視できなかっただろう。また私の応援のおかげもあつて生徒会長に当選していたH君も、今度はそのお返しに私の苦境を救おうと学校側に働きかけたことは想像できる。どんな処分だったか今は曖昧模糊としてはお返しに私の苦境を救おうと学校側に働きかけたことは想像できる。どんな処分だったか今は曖昧模糊でないと判定し、口頭で戒告とか説諭する程度ですませてくれたらしい。教育的配慮ということか。しかし私は見

ていないが、M先生はこの件の記録を作り、職員会議で報告し、納得、承認を得たに相違ない。

この秋の最大の出来事は県民体育大会の総合優勝（二二一・八点）である。浦和高（二位、一一七点）、本庄高（三位、一一〇点）を抑えての初優勝だった。この記念撮影のため、校友会総務だった私は鶴岡写真館との交渉や各運動部員を一堂に集めるため奔走した。と同時に顧問の先生方の撮影会出席依頼で職員室を訪ねているのだから私にはもうわだかまりはなかったと思える。

三学期には各先生に色紙の書きささえ頼んでいる。それを眺めると月並みな「御健闘を祈る」がいくつかある中に「よき批判こそ人生の学である」「conscia mens recti」（疚しからざる心、の意）などあのことを暗示するような言葉もあるが、奇妙なのは、頼んだかどうか定かではないが署名のない先生方の存在である。手許にあるこの色紙と入れ替りに、私の懲戒記録は今も母校のどこかに保管されているのだろうか。

あの頃

桃井良之

昭和十六年に始まった戦争は、最初の華々しさ^が、またたく間に失われ、次第に、厳しくそして暗くなり、敗けて、終わった。川越は、軍都でもなければ、工都でもなかった^{ので}、戦火の被害は殆どなかった^が、物資の不足やら、インフレは避けられなかった。預・貯金も封鎖され、在学証明書で、月に五百？ 田余計に引き出せた。古い札は印紙を貼付しないと通用しなかった。新札^が発行されて、オシン・シンタンという隠語^が誕生した。軍隊の被服

や用具が払い下げになり、配給された。軍服を着、雑囊を下げ、軍靴で通学した。制服・制帽は求められない時代だった。一番困ったのは、食糧不足だった。米の代りに、砂糖が配給になったりもした。停電も多かったし、台風による水害も多かった。

学制が変わり、一級上の人達までで、旧制への門が閉ざされた。トビ級で受験できないものかと、教師に相談した優秀な同級生がいたと、風の噂に聞いた。

古い中学校の机と椅子は一体になっており、右にしか出られない構造で、表面の板には、インク壺を置く部分か丸い凹部があり、歴史を語るキズ跡のあるものもあり、身体の接する板の厚みの部分には、つれづれなるままの作品か、欲求不満の吐け口か、はたまた、特定の目的・用途のためか、小刀で穿った小さな穴があったりした。

随分、丁寧な施工により、校舎は出来ていた。二階の教室の時、床板にかなり大きい隙間があり、掃除当番の時、掃き寄せた塵をその隙間辺に集めると消えて行った。ある時、横からの光で、その隙間を頂点に、非常にゆるやかな傾斜が四方に広がっているのが見えた。「塵も積もれば……」は本当だなど思ったし、しっかりした天井だなど感心もした。幾つかある石の階段は、大勢の足に踏まれて滑らかにになり、中央部は凹んでいた。硝子窓は上下に動いて開閉し、窓枠の中は空洞で、バランスを取る重りが下っていた。

試験の時、五十音順に並ぶと、俺は、よく窓際になり、冬期は、無限に降り続ける雪を見上げていた。灰色の空から、無数の雪片が舞い降りて来た。あの頃は、地球も冷えていたのか、最近より降雪量が多かった。

試験と言えば、問題を見て、「アア！」と誰かが声を上げたら、すかさず「誰か夢なき」と続けた者がいた。富田常雄の小説が映画化され、その主題歌の末尾が「ああ 誰か夢なき」であった。

「社会」という教科が誕生し、大護八郎先生は、貧困をテーマに調査・討論をさせた。当時、眞面目にやらなかった酬いか、才能の貧困の故か、未だに俺は解決策を見出せず、貧困との交際を継続している。当時、他のテーマに「男女共学、是か非か」というのもあったが、賛否両論、兄たり難く、弟たり難く、引分けに終わった。そのためか？我等が母校はオケンとの共学不成立であった。

調査・研究の名目で図書館にも出掛けた。閲覧室で調査する者もいたが、俺は、貸出しの本を選んだ。あの頃、図書貸出窓口には、大きな馬鈴薯のような感じの老人司書が黒い詰襟服を着ていて、書庫から本を運んで来るのは、小柄な若い女性と、一寸口ウルサイ小母さんだった。カードを見て、本を選んでいる時に、「何て言ったって日本の現代文学じゃ、漱石と佐々木邦だ」と言っているのが聞えた。振り返って見れば、上級生だった。当時、トクさん・佐藤徳四郎先生は、「文豪と言えるのは、鷗外と露伴」と言っておられたのではなかったか。

トクさん・佐藤徳四郎先生

トクさんには、俳句・源氏物語・論語・成語など色々カジらされた。当時から一所懸命に努力を続けていれば、かなりの人物になれたのではなからうか。俺は、止むを得ず、オ目玉が落ちないように、少しずつカジっていたので、遂に、一つもモノにならなかった。

トクさんが、宿題をやって来なかった生徒を、「徹夜しても出来なかったというのなら認める。それ以外は駄目だ」と叱ったことがある。当時は、成程と納得したが、今になって考えて、対象の宿題が「俳句の提出」だとすると少々疑問を感じる。俳句の提出を強制できたのかなという点である。しかし、我々は、トクさんに提出を約束して、拒否しなかった（できなかった）のだから、仕方なかったのか。俺は、忘れたのに気付くと、登校後、苦吟してとに

角数だけ揃えて提出して胡麻化した。名句のない所以である。紙もノートを切って使用したりした。選者・吉田冬葉もアキれていたのではなからうか。

当時、ある友人は、「トクさんみたいな教師が、英語と数学に一人ずつおれば、レベルが上がるのに」と言っていた。他の教師が低レベルということではなく、トクさんの熱意が凄かったのだ。

トクさんは、授業中、他方面に触れた。映画・絵画・山等々。「歌もウマイんだ。何故って、俺は霧島昇の先生なんだから」。事実、霧島昇は、川越公演の際、木屋製作所内の先生の住居を訪ね、附近の人が大騒ぎをしたことであった。同郷の草野心平とも交友があったらしく、心平の詩が教科書に載った時は淋しそうだった。創立五十周年の記念に手書きの詩集を級別に作らされた。製本されたあの詩集は今何処にあるのか。

木村信寿先生

川高デビユーの際、そのユニークな個性を發揮された。普通、新任教師として紹介されると、抱負とか、よろしく、とか、何か御挨拶があるものだが、一礼されたのみで、壇上から下りられた。

授業中は、黒板の隅から隅迄利用され、しかも一回で終らないので、ノートするのが大変だった。加えて、ガリ版刷りの資料を毎回配って下さり、余白部分には、人生感やら何やらが、囲みになって記入されていた。今になって、保存しておけばよかったと思うのだが、転居の際処分してしまった。

当時、下宿しておられたのが、新宿辺の豪農の倉か何かで、天井の張られてない二階部分なので、オール・ハンギング・システムと称されて、梁に釘を打ち、色々な物を下げておられたと聞いた。飯能の名栗川の天然アイス・リンクだと思うが、スケートの練習を始めるのに、幼児の歩行器を大型化したような、転倒防止枠を作られ、持参

して、練習されたとの話も聞いた。

映画や山もお好きだったのではなかったか。独断で推測すれば、「わが道を往く」のオマリー神父がお好きで教職に就かれたのではなからうか。試験問題に「三百坪? の土地があればどのように使用するか」というのがあり、化学の設問にはほとんど不正解であったのに、この設問へ解答したことで救済して戴いた。しかも、この設問に対する悪童連の解答をプリントにして配布して下さった。

記憶違いかもしれないが、三Cで、火曜日にN先生の英語が午後二時限分続く時期があった。N先生の指摘が厳しいのと、映画館のフィルム替りとが相乗効果を生じて、エスケープする人間が続出した。在席した者が指されて「欠席です」と本人が答えて、教室から出て行ったりもした。N先生から、苦情が出されたのではなからうか、木村先生が、「授業に優るものを得られるのなら、欠席必ずしも悪いことではない」と言われた。そして、お叱りはなかった。

我々の在校中に始まった朝鮮動乱が軍需産業の再起をもたらし、修得された応用化学の知識と技術をそこで活かすべく転職されたとお聞きした。しかし、実際は、能力のない悪童連に絶望されたのではなかったか。先年、職場の先輩が、山形高校↓東京帝大工学部出身なので、お訊きしたが、かなり後輩のためか、学科が異なったためか、存じ上げないとのことだった。

俺の城下町

川越城は太田道灌以来の名城で、江戸期は江戸の背後を守る重要拠点だったとのことであるが、城の姿を今に伝えるのは武徳殿（現・本丸御殿）のみで、いささか淋しい。城のイメージは、堀と石垣と天守閣が三点セットで、特

に、石垣が印象深いものだが、明治期、徹底的に解体されたのか、これはと言えぬものが見当らない。しかし、城下町特有の曲りくねって、一見しては、通り抜けられるかどうか、判りかねる小路や、ひっそり静かな寺や祠に昔が偲ばれる。昔、杉下辺の赤間川の川辺の道を歩いていて、夕映えの中に埼玉の塔屋に続くいらかの波をシルエツトに見た記憶がある。が、冷静に考えると、前面の障害物で見えないのではないかと思われ、錯覚かなと迷ってしまふ。今となつては、高層建築物が増えて再確認は難しい。

江戸古謡「通りゃんせ」は、川越城内にあった三芳野神社を唄つたものだと言ふ。異説なきにしもあらずとのことだが、川崎駅前の横断歩道で、通りゃんせのオルゴールを聞くと、川越の三芳野神社を思い出す。

クラブ活動

排球Ⅱバレーボールは戦前は女子に人気があり、従つて女学校には伝統があつた。我々の対外試合も最初は女学校チームが相手だつた。プレッシャーに弱い俺は、周囲の人垣の中に小学校の同期生を見た途端に、ボールとなり、頭の中は真白、目の前真暗でミスをした。日本人は天孫民族でなく、テンション民族だと身に沁みて理解した。

高二の時か、杉本雅夫君が籠球部のマネージャーに変身し、浦和女高が国体に出場したら応援に出掛けた。原因は、競技そのものか、浦Gが特定個人か、情報が入らなかつた。国体に行つたのか、本人に訊いたのだが、脇を向いてニヤリとされて、返事らしい返事を聞かなかつた。

衝撃の中学一年生

早川昇一

私の人生に於いて、記憶に生々しく残るのは、中学一年生の時であった。

坂戸国民学校より昭和二十年四月晴れて川越中学校に入学した。終戦間際の時期である。

国民学校時代は軍国少年で陸士、海兵に憧れ、将来は軍人へと思う時代であった。

東京大空襲で傷ついて避難して来た、多数の人々を見たことを思い出す。

入学後はB29の爆撃、P51の機銃掃射等、すさまじい状態で、「欲しがりません勝つまでは」と敗戦を信じないことでもあった。

東上線に乗り川越市駅で降り、徒歩二十分位の通学の毎日であるが、日々戦局も激しさを加え、勤労奉仕や学校につくと警戒警報で家に帰る日が続いた時期で、勉強は出来ず、落ちつかない毎日であった。

授業中、墜落した米軍機の捕虜が、目かくしをされて学校につれてこられたこと、英語の先生、カエルさんの通訳での活躍を思い出させる。

七月の暑い一日、空襲での帰り、第一小学校近くの関東配電側でP51の機銃掃射、又再度川越駅、歩道橋では三、四メートル先で機銃弾の爆発、生きてる心地がしない状態でもあった。我が国は戦闘器財（飛行機、銃弾、等戦う武器）もなく、豊岡の陸軍航空士官学校の生徒が、動員されて霞ヶ関駅構内で働いていた所にP51の機銃掃射を受け、

十名前後の生徒が手、足、首、バラバラで死んでいる光景に出会い、一週間位食事が喉を通らなかつたことを今でも鮮明に思い出す。

人生にはいろいろな衝撃は受けるが、少年期より青年期、かかる感受性の強い時期に戦争の悲惨さをいやと知つたことである。

戦後は食糧難、無秩序の時代と変つたが、我々学生はなつかしい教師達、忍田さん、那須さん、佐藤徳さん他、よき教師に恵まれ、特に佐藤徳さんには厳しく鍛えられた。教員室に立たされたり、座らされたり、今に思うと懐かしい思い出となつた。私はどちらかというと、今の悪童の部類であつたのではないか、反省している次第である。中学から高校一年と四年間の川越生活であつた。その後、高校二年で慶応高校に編入し、吉崎君、故水村君、又松村君（早稲田高等学院）、須永君、佐々木君、竹内君（武蔵高校）等と東上線にて通学することになる。又故水村君とは偶然に高校三年で同級生となり一緒に卒業した。彼が不幸にも若くして逝つてしまつたことは残念である。又須永君（在ベネズエラ）には、フィールド・ホッケーを教えてもらい、大学時代、二度の栄光に輝いたこともあつた。感謝している次第である。伝統ある川越高校に在籍し、人生の誇りと思つてゐる。又どこかで同窓生に再会出来ることを楽しみにしており、皆様方の御多幸を念ずる次第です。

されどわれらが日々

長 島 恒 雄

早いもので、もう還暦を過ぎた。六十年という長いようであるが、いつの間にか経ったという感じである。不惑（四十歳）や知命（五十歳）はとくに過ぎた筈なのに、未だ惑いも多いし、天命を知るには程遠い。

とはいうものの、長い人生の一つの区切りではあるし、残念ながら肉体的な衰えは自覚せざるを得ない。従来のような走り方は、もう不可能であろう。一方で、職業や家庭上の制約は緩んできており、その分自由度は増している。今後どこまで生きられるかは分らないが、まあそれなりに生きて行く他ないであろう。

六十年余の生涯を振り返ってみると、思い出すことは多々ある。楽しい思い出も多くある反面、悲しいことや苦しいことも少なくはない。それは繰り返すことのできないものでもあるし、強いて繰り返したくもない。『されどわれらが日々』である。未だ回顧録など記す気もないし、余裕もない。未だ知られざる未来に期待して、生きて行きたい。

さて川越中学校に入学したのが一九四五年で川越高等学校を卒業したのが五一年であり、わが人生のちょうど十パーセントに当たるこの六年間は、実に貴重なものに感じられる。思想的には混迷し、経済的には貧乏の極にあった時代であったが、不思議に暗い思い出は少ない。時の流れが暗の部分を浄化し、明の部分だけを残したのかも知れないが、それとも、青春の感覚がそうさせたのだろうか。

現在大勢いる友人の中でも、この時代からの友人、在学中よりも卒業後親しくなり、交友を続けている友人が少なくない。生涯の友人であり、貴重な六年間の賜物でもあろう。

何かまとまった文を書こうと思っていたのだが、その余裕がなくなり、過去に書いた随想でこれに代えたいと思う。一九八九年二月十日付の日本工業新聞に載った「詠み続く日記代りの五七五」である。この後も俳句日記は続けており、遂に十二年目に入った。

この新聞随想の反響はかなりあり、「意外ですね」とか「結構なご趣味ですね」と言われたことが多く、また全く未知の方から、自作句集を贈られたこともあった。ただ残念ながら、俳句自体を褒められたことは、まあ稀である。某先輩俳人曰く、「強いて採るなら、高校時代の作である「生姜洗ふ水より秋気立ちにけり」かな」と。俳句の腕前は、高校時代が最高だったのかな。

詠み続く日記代りの五七五

日記の代りの五七五

早いもので、俳句で日記をつけ始めてから今年で八年目になる。正しくは「俳句」とは言えないかも知れない。季語の入らない時もあるし、字余りや字足らずもの場合も少なくない。時には川柳になってしまう。

俳句を作っているからといって、仲間と集って運座を開くわけでもなし、投稿するわけでもない。だから全くの自己流で、他人から見れば評価に値するものではあるまい。ただ折に触れ読み返してみると、その時々思い出が蘇って来る。俳句としては駄句であっても、私にとっては貴重な日記なのである。

昭和五十七年元旦から、毎日二句ずつ記し続けて来ているのだが、その第一号は、

新春は平和ニュースは事故ばかり

これは今年も全く同様であった。

昨年は仕事の上でも、個人的にも、かなり変動のあった年であった。仕事始めの一月四日には円が暴騰、株価が暴落、どんな年になるやらと不安が一杯であった。

歳しき年と誰もが語る年賀かな

ところが為替は比較的安定、株式相場も順調に上昇、明るい大納会を迎えた。

新高値に年を納めて冬日和

私には二人の息子がいるのだが、春には次男も大学を卒業、就職。親としてはほっとしたところである。

漸くに雛巢立つ春朝寒く

また長男は、生れて以来一緒に暮してきたものの、秋に大阪へ転勤、初めて「親離れ」することになった。

木枯しの朝籠離れ子鳥飛ぶ

子供がいなくなると、家庭も急に淋しくなるのは止むを得ない。クリスマスのケーキもプレゼントも無縁となる。

クリスマス祝ふことなく老夫婦

大晦日の夜更けて、久々に家族が揃い、新しい年を迎えることができた。

ともかくも家族揃ひて雑煮祝ふ

わが師トクさん

突如として七年前から俳句を作り始めたことについては、前史があり、それは中学時代に遡る。

私が入学した川越中学校（埼玉県）、といつても在学中に高等学校に変身した現在の川越高等学校に、佐藤徳四郎先生、愛称トクさんという漢文と国語の先生がおられた。六年間を通じて、漢文では論語、故事成語から時文、国語では源氏物語から奥の細道、猿蓑、去来抄など、授業時間のもとより、課外や夏休みの合宿などを含めて指導を受けた。とにかく猛烈な先生で、夏休みの宿題に、未だ目を通したこともない論語や源氏物語を指定し、本当に試験に出題するのだから。教えるというより、自ら本を読み、調べることを習慣づけられたといった方が正しいだろう。当時はひどい先生だと思つたが、今では感謝の念で一杯である。

トクさんは俳人でもあり、「獺祭」という俳句誌の同人でもあられた。そのためもあり、国語の授業の一環として、俳句の宿題を課されたり、一緒に運座を催されたりした。お蔭で同級生には、今でも俳句を趣味にしている者が多いようである。

数年前、同窓の有志が、当時宿題となり、「獺祭」に入選した句の中から選んで「初雁」という句集を作り、贈ってくれた。その中から私の句。四十年前の句であり、自分でもすっかり忘れていた。

生姜洗ふ水より秋気立ちにけり

紙鳶ひとつあがれる空や冬の雲

母校川越高校は川越城址にあり、時節には梅の花が美しかった。トクさんの自選の句として思い出す一句、

城址の古き校舎や梅の花

トクさんの訃報に接したのは何時だったろうか、寒風の吹く、春の初めの頃だった。

逝きし師の叱言懐し梅の花

俳句の効用

どうも駄句ばかりお目にかけて恐縮だが、作者の方には色々とメリットがある。

第一は、余暇の活用である。余暇といっても、極く短時間のことで、朝夕の通勤電車の中、仕事の一寸途切れた時、会議の遅れなど精々数分か十数分の時間のことであるが、とかく無駄に費やしがちなこれらの時間は、俳句作りには絶好である。今日の日記として俳句をどうまとめようかと考えていると、時間のロスは無くなる。そのために、常にポケットにメモとペンは用意している。

短時間の活用とも関連することだが、第二に精神安定効果も大きい。満員電車やスケジュールの遅れなどは、誰でもいらいらするもの。これを逆手に取って、俳句作りのために精神を集中すれば、まさに一石二鳥の効果がある。また、眠られない夜には、俳句を考えるのも良い。ただ考えている中に、何時しか白河夜船、幾多の名句を夢の中で作り、未だに思い出せないでいるのだが。

第三には、観察力、表現力の訓練である。感じたこと、考えていることを、僅か五、七、五、十七字に凝縮するのは至難の技である。切つて、捨てて、残ったのが十七字になるということだろうか。それにしても、歳時記には多くの名句があるものと感心する。

仕事上とはいえ、海外にも出張が多いが、カメラ代りに俳句でスケッチをしてきた。

雨に煙る古き都やリラの花

マロニエの芽稚くて雨の街

満月の浮ぶマインや春の宵

紅葉散る古き都の赤煉瓦

新月の尖塔の首刈らんとす

これらの句を見ると、カメラ以上にその時の映像が浮んで来る。といっても、これは主観的なもので、客観性は疑問だが。

このようにして、今後も俳句日記は継続するつもりである。そして「遠い将来」小遣いに困るようになったら、句集にまとめ、相手の所得に応じた「時価」で、友人、知己に買って貰いたいと思っている次第である。

「徳さん」を偲んで

水村 博光

中学・高校と川越での六年間の学生生活を通じ、最も強い影響を受け、印象に残っているのは、何といつても「徳さん」こと佐藤徳四郎先生ではなからうか。

確か私達が入学した年に赴任して来られたと思うが如何であつたろうか。私は二年生の時の担任であつたように記憶している。

「徳さん」はよく苦勞話をされた。給仕をしながら夜学に通い、資格を取って中学の教師になつたのだと胸を張って話された。苦學しながら中学の教師にまでなられた先生の努力に、深く感銘し強い尊敬の念を抱いた。私達にど

れ程のやる気と勇気を抱かせてくれたことであつたらうか。とは言え何回も繰り返し聞かされるうちには、またかと思ひながら聞き流したこともあつた。

「徳さん」は漢文の時間に成語集を教えてくれた。この時習つた成語の幾つかは、今日でも大変役立つている。

この時初めて熟語・諺・成語の類に接し、その幾つかを理解し、覚えることにより、大人の学問の雰囲気に入り、何となく大人に近付いたような気がした。我が家には漢和辞典しかなくて、成語の予習には苦勞した。

俳句の宿題にも苦勞させられた。元來文学的素養のない私にとり、毎週俳句を投稿することは大変に努力を要することであつた。それでも一生懸命投稿し、雑誌「獺祭」に掲載された自分の名前と拙い句とを見付け、満更でもない気分浸つたのも私一人ではなかつたことだろう。

野火止の平林寺の座禅にも連れて行つてもらつたことがある。朝早く起きて見ると、既に禅寺の境内は塵一つなく掃き清められ、身も心も洗われる思いがした。離れて武蔵野のあの雑木林が広がり、その中の小径を通つて行つた。

六年間に課外活動の登山に二回参加した。一度目は二年生頃か、秩父の雲取山だつた。秩父鉄道を三峰口で下車し、神社の大鳥居を横に見ながら登山口に差し掛かつた。

夏休みの蒸し暑い日であつた。熊笹の生い茂る道を行くうち、何度も転びそうになり、喘ぎながらやつとの思いで人の尻について行つた。いくら行つても中々頂上まで到着出来ず、顎を出し、泣く思いで訴えても誰もかまってくれない。ようやく休憩しても直ぐまた出発である。二度と登山などするまいと何度も思い、参加したことを悔みやつとの思いで列の最後からついて登つた。

山小屋に一泊して下山したのであるが、頂上に着いた時のあの感激を思い出すことが出来ない。登山の醍醐味は頂上に到達した時の感激に尽きるであろう。登り道の苦しみも吹っ飛んでしまうあの感激である。この時の登山ばかりは、唯々苦しかった記憶しか蘇ってこない。

もう一度の登山は日光の白根山であった。この時の引率者もやはり「徳さん」であった。

この時には既に高学年になっており、前の時のような苦しいだけの登山ではなかった。日光戦場ガ原を通り、湯元でキャンプした。初めて日光東照宮に行き陽明門を見、左甚五郎の眠り猫を見た。

白根山の山頂には、噴き出したマグマがそのままの形で冷え固まって出来た岩山が、見上げるだけで足がすくんでしまう程高くそそり立っている。岩山は縦横に裂け目が入り、今にも崩れんばかりに、覆いかぶさるようにして聳えている。山頂の至る所から白煙が噴き出し、強い硫黄の刺激臭が立ち込め、激しく鼻を刺した。

岩山の直下を巻くように避けて続く登山道を行く我々は蟻よりも小さく感じられ、自然の桁外れた大きさに圧倒され、驚愕した。この時の鮮烈な心象だけは、今でも記憶の奥深くに残っていると見え、この年になっても、時折夢の中に形を変え蘇ってくる。

昨年中国の蘇州に行き、寒山寺で拾得の石碑を見学し、拓本を買ってきた。「徳さん」のお気に入りの中の「寒山・拾得」という諱名あだなを自他ともに認めていた人があった。蘇州の拾得は白痴に近く、乞食の生活をしていたとのことであるが、我らの「寒山・拾得」は秀才であった。彼我の「拾得」を比べ一人笑いを堪えたものだった。

「徳さん」には数え切れぬほど多くの薫陶を受け、影響を受けた。私は高学年になってからは、直接授業を受けることはなくなったが、それでも何かと縁は切れなかったように思う。後々いろいろの形で私の生き様にも少なから

ぬ影響を与えられたものと考えている。

「徳さん」を思う時、我武者羅に自分の信念のみで、よき時代を生きた教師像が浮かんでくる。

あの頑固だった「徳さん」も今は亡い。慎んで冥福を祈り擱筆することにする。

徳さんの「顔洗って来い」

水口重雄

何年生の時であったか鮮明ではない、所は階段教室。私は授業中に「頭を掻いた」、それを徳さんに見咎められて「その頭を掻いたやつ、顔を洗って来い」という罰が出た。私は階段教室を出た。階段教室は校舎の端にあったから手洗場に行くには長い廊下を歩かなければならない。私は長い廊下をできるだけゆっくり歩いて手洗場に行って顔を洗って来た。当時は教室に入るのにいちいち名乗って「顔を洗って只今帰りました」と言わないと教室にも入れなかった。階段教室は悪いことに、生徒が向いている正面から入るので全員に「ジロ」と見られてしまう。私はその手続きをとった。しかし、徳さんの「いかり」は治まらない、「もう一度行って来い」であった。私はとぼとぼとまたもどって顔の洗い直しをして、また同じ手続きで入室、次に待っていたことばは「もう一度行って来い」であった。何回それをくりかえしたろうか、私は情なくなった。

情ない理由としては、一つには私は正直にその都度実際に顔を洗ったのである。しかも、今度は許されるだろうと思って誠意をこめて洗った。手拭(あの腰にはさんだ手拭である)はビチャビチャにぬれてしぼると水がたれた。年

の暮の寒い時だったと思う。顔がひりひりして寒かったのをおぼえている。顔を洗ったふりをして帰るような要領の良いことができない自分が情なかつた。

情ないもう一つの理由は入室の時の名乗りであつた。私の姓は「ズグチ」と強いきたならしい音が続くのである。それを十回は言わされたと思う。その屈辱と嫌悪感が身体中を走つた。徳さんの授業は佳境に入つたらしく「犬あつちいけ」(NHKのこと)と大声でどなる。生徒はどつと笑う。私の方はとぼとぼと同じ動作のくりかえしである。十回ほどでやつと許された。

川高の先生の思い出としては、徳さんのこの顔洗つて来いが一番強烈であつた。良い方の思い出は木島先生である。グリーク・ラテンにまでさかのぼつてする英語の授業は楽しかつた。私が大学の英文科をえらんだのも、木島先生の影響であつた。E・A・ポーについては大学の論文を書くのにはほとんど木島先生に教わつたもので間に合つたほどである。

本橋沓潮先生(ペーハー)は詩人であつた。川越祭りの最中の授業で、花火の音が頻繁になつてゐる時に音響測深の授業をしていた。生徒はともすると花火に気をとられて窓の外を見る者が多かつた。すると先生は「あれは音響捉心、こちらは音響測深」と「おち」をつけたのはさすがであつた。

さて、二十歳になつた時に、記念として私は自分の姓を変えようと思つた。すでに述べたように「ズグチ」ときかない音が続くいやな思い出から抜けたかつた。何とか品よくなれないかと思つた。そんな折、昔の東海道五十三次の京都に近い五十一番目に「水口の宿」というのがあつたことがわかつた。こちらは「ミナクチ」と読むのである。これは品がいい、広重の絵だと、さびれた宿場町の道の真中に大木があり、その木の根方に杭を打つてひもで

つなぎ、女の三人が干瓢を干している様子が描いてある。私はこの「ミナグチ」から「ミナグチ」という読み方を考えた。濁点の打ち方には問題があり、「アキバハラ」か「アキハバラ」か迷うところであるが、私はそうきめた。従って二十歳以後に知り合った人は「ミナグチ」と読んでくれる。よくどちらが正しいかと言われるが、これは私の単なる思いつきで、少年の頃の雪辱なのでお許し願いたい。

思い出の先生

山下文司

私は、今春、定年退職した中学教師の一人である。

私が教師の生涯を全うできたのは、多分に川中・川高時代にお世話になった先生方のおかげだと肝に銘じている。特に、旧制中学校の教師像を代表するような、イメージをもった先生方のインパクトは強烈だった。

漢文の松田先生、文法の島崎先生、国語の佐藤先生、物理の那須先生、英語の西川・木島両先生等には思い出も多く「ザ・教師」として畏敬の念を抱いている。

私が、佐藤徳四郎先生の思い出を「埼玉教育」（県教育センターの教育誌）に寄稿したことがあるので、次に、その文を再掲する。

私が、川越第一中に就職したころ、何かと引き合いに出したのが佐藤先生のエピソードである。この佐藤先生は県立川越中・高等学校で六年間お付き合いいただいた国語担当の、愛称「トクサン」のことである。

教科書を使って印象的な授業をされた記憶はないのだが、副読本として使用した「論語」「成語集」の授業のことはよく覚えている。先生が好んで口にした故事に、

「其恕乎。己所不欲。勿施於人。」

(それは「思いやり」だろう。自分の望まぬことは、他人にするな。)

「過ちては則ち改むるに憚ることなかれ。」

「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。」

などがあり、これらは必ずテストに出題されたのでほとんどの生徒が覚えてしまった。

授業は熱っぽいし、宿題に俳句をつくらせるし、テストの範囲は無制限とくるし、全く傍若無人であった。そればかりではない。指名されて答えられないと、鼻柱を人さし指ではねあげるのだ。寒い冬の一、二時間めにアタックをかけてくる佐藤先生のうれしそうな顔をいまでも思い浮べることができし、忘れられない先生でもある。

私は、教師駆出しのころ、恩師の指導技術、口調、スタイル等を何かとまねてみたが、いま考えると本当に恥かしい。改めて、「ザ・教師」の先生方に謝意を表し、ここに、「敬して、之を遠ざく」佐藤先生お得意の孔子の言葉をもって、母校、思い出の先生記を結ぶ。

徳門十哲の一人として

山崎 孝雄

徳門十哲とはだれだれをさすのか、なんてことはまるで無用な穿鑿というものだ。われわれ同級生は「お前たちは一番よくやったな」との徳さん晩年のおことばどおり、だれもが十哲の一人だと考えていけばよい。それほど脂の乗りきった、強烈な先生の指導に耐え、われわれはくつついていったのだ。

○

私自身は十哲に入りそうもないと思うことがある。国文学副部長でいたものの、徳さんにはそれで一度ならず反抗したことがあるからである。

図書室でだれもない時だった。「全校生から毎月十句ずつ集めてこい。なんで集めてこないんだ」といったことを言われ、部員相手ならいざ知らず、教師でもないのに全教室に入るなんて嫌だと思った私は、何と言ったか無言だったか忘れたが、思わず両手に力が入って机を鳴らしてしまった。「何だ、それは。きっと集めて持つてこい」と部屋を出る先生の背中。

しかし、私は月々教室を回り、教壇に立つ度胸もついできた。それだけでない。夏休みの自由研究に「俳句の道」上・中・下巻をガリ版刷りにして出し、何やらの賞を頂戴するや、これを増刷して、下級生に売り込んだのだ。俳句の歴史・作り方・同級生の作品集といった内容で、その時求めた鉄筆とやすりが現存しているけれども、

これを見るたび、先生のお陰で利益さえあげられて後ろめたさを感じざるをえない。

内容はもちろんガリ版技術も未熟だったし、謄写版とインクは学校のものだし、友人作は「獺祭」からの無断転載だった。校内売り込み自体、無許可なのも問題だったが、確か三十五円が後輩たちの役に立ったかどうか。

○

徳さんが実に多くの吟行会やら見学会やらに連れていってくださったのはありがたかった。小学校を借りての安上がりの旅行もあったが、館山小学校宿泊はなんと私が責任を持たされたのを思い出す。

その時の句会で私は「凧の句を作れば怒る教師あり」を出した。「凧の句を夏の浜辺で作るばかり」というわけだが、あんなくだらぬものを選ぶばかりもいたもんだ。タカオと言わざるをえなくて冷や汗もかいたが、教師のおとがめはなかった。

が、すでに前日おこられていた。受付で宿泊の話など聞いてないと言われて弱っていたところへ、「お前がちゃんと連絡しなかったからだろう！」

とはいえ、あの頃としては学校施設を借りての宿泊とは安上がりで、いいアイデアだったし、学校もよく泊めてくれたものだと思う。その時も、校長の返事などを持参した覚えがないのに、よく炊事なんかもさせてくれたもの。ただ、そろそろ寝ようかという頃、飢えたる蚊の襲来には悩まされ、それではと私は駅より遠い夜道を一人、親父の弟が経営していた木村屋旅館に蚊帳を借りに行った。それを釣るにはひっかける所がなければならぬが、どうだったかなどはすっかり忘れた。

その後、図書部員としても、南房総のどこぞの学校を借りたことがあった。海水浴に行ったのだが、生徒だけで

も利用でき、確か小使いさん夫婦にお世話になったはずだ。

国文学部や図書部がなぜ水泳なのか、それぞれ吟行句会・図書室見学という大義名分が通っていたのであろう。

○

国学院大学では「文法なんていらねえ」と言われた徳さんに反し、国語学を専攻とした。それが私の人生を決定した。文法を教えられないがために退任した人がいたからこそ浦和高校の教師になれたし、国語辞典類のアルバイトもできたし、今、盛岡大学で専攻を生かすこともできるのである。

しかし、教員採用試験でも今の授業でさえも、大学で学んだことより、徳さんに教わったことのほうが恩恵に浴したといって過言ではない。例えば、浦高時代の古文では輪講形式で、生徒にも教壇に立たせた。NHK学園は通信制なのでそれはできなかったが、機関誌文芸欄では俳句の選評を担当したし、今の大学には俳句会を創設し、あの味は出せないものの、似たようなことをやっている。徳さんから教わった詩吟、あの「涓城朝雨……」はもう何度うなったことか。

やはり徳門十哲の一人と称してよかろうか。

豆事典・ラクさんの由来

在学中亡くなられたが、最後まで真面目に、本気でお習字を教育された鈴木豊和先生の雅号は「梁山」。「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」という論語かなかの言葉が由来だそう。ジマンという言葉をはッキリ使って自慢話をされた。昭和十五年の紀元二千六百年記念書道展に入賞されたのが最大のジマンだそうだったが、同じ書道展の小学校低学年の部で二位に入っていたA君にとつて、先輩の出現がとても嬉しかったとのこと。

思 い 出

浦 部 俊 久

約半世紀前の事を思い出せ!! 何と難しい事か、頭の悪さを思い知らされました。

頭以外は健康な私ですが、一番のウイークポイントを指示され四苦八苦いたしました。

思い出は山ほどありますが、すべて霧の中の木立ちのようにボンヤリとしたもので、これはというものが見つかりません。ただ、一番印象に残っているのは、病気のお見舞の件です。

中三か高一の時(これもはっきりしていません)、徳さんのクラスに在籍し、毎日戦々恐々と過ごしたある日、相模湖に遠足に行きました。

前日から風邪を引いて調子が悪かったのですが、楽しい遠足なので無理をして参加しました。その上、よせばよいのに炎天下、ボートに乗りこぎまくったからたまりません。

帰宅した夜から四十二度の高熱でダウン。医者から「肋膜炎」で絶対安静を告げられ、学校を長期欠席する事になりました。

毎日、徳さんに怒鳴られる心配はなくなりましたが、登校した後の事が心配でした。すると一週間間位たったある日、ひよっこりと徳さんが見舞に来てくれました。

あの鬼のような恐い徳さんが、その日は、神様、仏様のようにやさしく別人のようだった事を覚えています。

徳さんは、クラスの寄せ書きを持参してくれました。巻頭の阿川洋君の徳さんの似顔に続いて「床あげの 日を待つ菊の さかり哉」という徳さんの句、その後にはクラス全員の見舞の言葉が入っています。

中身は、激励の言葉半分、冗談半分で中にはアイ・ラブ・ユーとか愛人よりとかふざけたものがありました。が、クラスの人々の暖かい気持ちに感激いたしました。現在も、私の宝物として大切に保管しております。

約二か月休んで登校しましたが、学習面では大変遅れ、成績も抜群に悪く、落ちこぼれになりました。けれども、クラス全体が暖かく迎えてくれ、以前と変らぬ友情を示してくれた事は大変うれしかったです。

それ以上に、徳さんが私に対してやさしくなり、朝遅刻してもおとがめなしになったのは何よりうれしい事でした。

川越から東京に通学する人々が増加している時に、東京から川越に通った変人の一人として、人情味厚い川越は忘れられない思い出として今も残っています。

東京がきらいな人間が、東京の子どもを指導する等、当時は考えられない事でしたが、これも運命なのでしょう。定年退職し、現在は、教育センターの教育相談員として勤務しておりますが、川高で受けた暖かい人情を大切に、子どもや親の相談を親身になって行って参りたいと考えております。

今後とも、よろしく願っています。

はるかなり異彩

秋 山 輝 一

トクさん、川高在学時の国語の担任。私にとって川高、即トクさんであった。

坊主頭にチヨボチヨボとはえた不精ひげ、カーキ色のよれた軍隊服にだだっぴろい下駄をはき、雑囊を肩からかけ、目を細めて飄々と歩いていった。

授業では、しばしば体ごと感情をぶつけて強烈で異彩な教師だった。

トクさんが授業中俳句誌「瀨祭」の紹介をしていた時、「金もうけをしている」とひやかしたので、たちまちゆでダコのようになり、揶揄した生徒の鼻をつまみ、ひっぱり出して憎悪をまともに表わした。

日は替わっても、しばらくは、授業で例の生徒のちよつとひねた言動でも、あからさまに指摘し、叱責した。時には、脅威さえ感じられた。

トクさんは古典を好み、万葉を愛し、西行や芭蕉に傾倒していた。

そのトクさんに国文学部に入れといわれ、気まづい気持ちになってもと思い、気は進まなかったが入部した。そのためか、授業中にハラハラすることもあったが、特別に叱責を受けることはなかった。

出来は悪くても真面目に国語の学習に取り組もうという態度をそれなりに認めてくれたのかも知れない。部活動時のトクさんは、うって変わって柔和となり、大変気さくでものわかりもよかった。

万葉集、源氏物語、奥の細道、去来抄、猿蓑、雨月物語等、十分に理解できないまでも原文に挑戦し、高校の部活動としては、かなり程度の高い研究活動であった。

定例の句会、折々の吟行は、私にはなにやら年寄りじみて、若くニキビふき出す高校生には似つかわしくもなく思えたが、真剣に進められていった。

今、新聞紙上の俳句を見て、自分なりの見方ができるのも、在学時の句会で、俳句づくりに励んだことによるものである。

トクさんを通じて学んだ国文学についての知識や理解、考え方は、私のその後の歩みに少なからぬ糧となった。トクさんは極めて個性的ではあったが、純粹で、授業に体と心をぶつけて指導に燃えた。

校種こそ異なるが、小学校三十八年間の教育活動をとおして、私は数多くの教師との出会いを得たが、今の時代では求められないかけがえのない教師であり、師であった。

佐藤徳さんのその後の思い出

江原 襄

卒業後も、教員になってからも、徳さんとは住所の関係で出会うことが多かった。道のまん中でバッテリー出会うこともあった。相変わらず下駄で腰に手ぬぐいをぶら下げていた。時には家の前を通り大声で呼び出したりした。当時は、木屋製作所の中に住んでおられた関係で、通勤途上に我が家があったからであろう。私は家の中にいて、

声を聞いて飛び出したり、時には木の枝を切っている時に呼ばれたこともあった。そんな時は、凶々しく木から降りず、徳さんを上から見下して話を交わした。何時も声が大きかったので、近所中に聞える声で「元氣かい」と言われると、少し恥ずかしかつた。いろいろ情報を知っていたのだから。知っている人のよい面だけは、必要に應じ話した。

先生が脳溢血で寝たきりになったと聞いたので、早速見舞いに行った。先生は寝たまま話を続けたが、本人は「これは年寄りの風邪引きのようなものだ。こんなのは病氣じゃない」と強がりを言いつつ、足の裏の水虫の皮をむしってみせたのが妙に印象に残っている。私が煙草を吸い出すと「俺は煙草を吸わなかったから、こうして今でも生きているって、医者が言ったよ」と、かかり付けの医者の説明を引用した。いろいろ四方山話を聞くのが楽しみだつたらしく、辞する時に、また来てくれと何度も言われ、奥さんからも頼まれたりしたので、本人も相當気が弱つていたのだと思う。

この病氣のため好きな酒も断つ破目になり、川高退職の時は、送別会の席で酒をコップ一杯うまそうに飲んだとことだが、奥さんの目を盗んでの最後の楽しみだったのである。

徳さんが存命中に、徳さんを招待して一緒に句会をやり、徳さんを慰めてやろうということになり、完成したばかりの川越市民会館の畳の部屋を借りて、そこで開催した。昔の国文学部の先輩、後輩を含め、十四、五人集つたと思う。川高前の自宅まで呼びに行き、肩を貸しつつ市民会館まで私と大澤（米）君と二人で連れてきたが、階段の降りる所では、もう息が苦しそつた。また足の衰えはもう隠せなかつた。道々、いろんなことを話しかけてくるが、あの短い距離でも相當に疲れたらしかつた。今思えば相當乱暴なことだつた。

句会になっても、徳さんは注意散漫で無駄話ばかりで、句は一句も作らなかつた。今思えば作れなかつたわけだったが、若い私どもにはうるさく、注意散漫に思えた。時間を延長しても出来なかつた。全員と話をするのが精一杯だったのだらう。疲れを見せず、誰彼となく話しかけてくるのが救いだった。それでも、句をいくつか選んだ。その半年後、徳さんが亡くなったという知らせを阿部君から受けた。何分急な話であり、当日は県教委へ行く用があつて、葬式には出られなかつた。句会が一番よい時にやつたと思つていたが、考えてみれば、徳さんの寿命を縮めてしまった結果になつたのかもしれない。

退職後

花の芽を数え直して春の風 襄

一日を占つてみたし藤の花

花花花子どもの招き声響く

地響きのごとく春風窓を打つ

牡丹の花芽数え直して家を出る

暗がりに椿落ちたる静寂かな

豆事典・双葉郡

トクさんの出身地。ある時「隻手」という言葉が出て「二つは隻、ふたつなら雙だ」ということになり、それが「双は雙の略字だ」となつて、「僕の田舎は福島県の双葉郡だが、あれは本当は雙葉郡と書くべきなんだ」となり、「だから双葉山も雙葉山だ」ということで黑板に「雙葉山」と大書した。次の時間に隣の教室の外を通りかかるとトクさんの時間で、黑板に「雙葉山」と大書してあつたので「やつてる、やつてる」と大笑いした。先生も同じネタを五つのクラスに公平に振り分けなければならぬんだ。

魚河岸で拾つたバナナ

トクさんの引率で早稲田の演劇博物館を見て、築地の河岸へ行った。河岸のコンクリの床に腐りかけた真つ黒なバナナが捨ててあつた。トクさんがそれを拾つてまわりのドロドロをこそぎ落として僅かに白っぽいところを口に入れた。「おい！分かるか？これがバナナだぞ」嬉しそうに、幸せそうな声だつた。当時はバナナがそれほど貴重品だつた。

秋
蜂

益子弘道

昭和二十三年の仲秋、十年D組の時代のことである。小生、国文学部に属し、徳門十哲の十番目とか言われて佐藤徳四郎先生指導の下、やたらと俳句の吟行会、「獺祭」句会に参加をしては駄作を捻って、一人悦に入っていた。その日は朝から糠雨が煙っていたが、予定された「獺祭」句会は開催された。場所は喜多院（であつたと思うが定かでない）、季題は「秋の雨」三句、参加者は「獺祭」主宰の吉田冬葉先生を始め、冬葉先生を尊敬する門下の方々、徳さんを慕う国文学部員と川越高校の面々で七十人近くの大句会であつた。雲低く垂れ込めた、侘しい、寂しい境内を傘をさしながら右往左往、大木の梢を振り仰ぎ、泥濘にへばりついている病葉わづはを眺めたりして、苦吟苦作を開始した。秋雨の物悲しさばかりを狙って句作していたが、ふと気が付くと、ブーンという唸り音が我が頭上に近付き、何やら黒い固まりが、雨の中を元氣よく過ぎ去ろうとしていた。蜂の集団である。空ろな、どんよりとした寂しさを吹き飛ばすように、精一杯羽音を響かせカーブしながら、本堂の屋根を目指して飛び去った。蜂の種類は解らなかつたが、これが以前話に聞いた、「蜂の巣分れ」と気がついた。ミツバチとスズメバチの集団の中には女王蜂がいて、その統率下に生活をしているが、もう一匹女王蜂が誕生すると、集団が二つに分れ、別天地を求め

て巢分れするという。それも秋に多いと聞く。この光景を早速句にしようと思つたが、うまくまとまらない。あれやこれやと迷つた挙句、「何処からの巢分れ蜂ぞ秋の雨」と出来上つた。何となく怪しい雨降る雰囲気の中、巢分れするといふ悲しさを表現するよりも、あの羽音に新集団を作るといふ希望に燃えた力強さを感じ取つたので、秋の雨を一蹴し、明るいイメージに変える意味で、「巢分れ蜂ぞ」と表現した。

幸いこの句は、大広間での車座になつた句会で最高点となり、一等賞を頂戴した。吉田冬葉先生の評では、「高校一年生の分際でこの様な難しい表現が出来るのは大した才能である。更に勉強して能力を伸ばしなさい」と言われた。然しながらその後秀句もなく、四十数年平凡に打ち過ぎてゐる。やはり凡人は凡人である。徳さんも愛弟子やつたりと大喜び、翌日、通用門の脇の掲示板に自ら筆をとつて、「十年D組益子弘道君は『獺祭』句会に於て一等賞の榮譽に輝いた」と張り紙をしてくださった(覚えてゐる諸兄はいないと思うが)。ダルマの様な赤い顔を更に真赤にして喜んでくれた恩師の姿を今でも鮮明に覚えている。

句会の帰途、国文学部の僚友松木信君が、「お前は今後『秋蜂』と名乗れ」と立派な俳号を贈つてくれた。秋の蜂では、小生、自称明朗闊達な性格なので、一寸外れている気もしたが、雨の中を意気揚々と飛び去つた群蜂を思い、すばらしい雅号を頂いたと、感謝の念を強くした。この「秋蜂」を大事にし、時々使つてゐる。

小生今でも川越に在住し、母校の門前を通る事がある。ふと立ち止つて見上げる大楠の梢を鳴らす爽やかな風音が、六年間過した中学・高校時代をまざまざと蘇らせてくれる。この「秋蜂」も楠と共に忘れる事の出来ない青春の思い出である。蘇れ!! 楠の青春!!

大楠の想い遥かに風光る

秋蜂

その時の色彩

伊藤 明

いつまでも消えない色の印象。それは終戦の頃の岡山と川越の街の対照的な色調だ。川中に入學して一か月余りで、私は父の転勤に従って岡山二中に転校した。空襲に曝さらされながらの旅だった。姫路を過ぎるあたりから、小高い山々が車窓に近付いて、気持ちも落ち着いてきた。新緑の木々の間を縫って山肌が白く光る。

この土の色を後年、司馬遼太郎が小説の中で触れている。幕末、大阪（坂）の路を行く土方歳三らの若い新選組の隊員は土が白色なのに驚いた。関東ローム層の黒土を見慣れた眼に花崗岩質の白土は強い印象を与えたに違いない。

市電の終点、東山の麓に二中の瀟洒な校舎があった。だが勤労奉仕のため教室での思い出はない。低学年の生徒も児島湾にそそぐ旭川の河口で軍の土木工事を手伝う。旭川の土手を走るバスから見た麦刈りの風景は長閑のどかだった。しかし、昭和二十年六月二十九日、B 29の空襲で、穏やかな景色は一変する。

焼夷弾の雨。真赤な炎。火の海。一夜で市は全焼した。

いく日か過ぎて、学校に行った。正門の所に担当の先生が立っていて一人一人の生徒に、状況を尋ねていた。

「無事だったか……」

「家族はどうした……」

報告を終えた生徒は校庭の周りの松林に屯していた。

皆、無言だった。その中に、私は一人の姿を探していた。岡山に来て、最初に声を掛けてくれた生徒を。

「君は何処から来た？ その方言は大阪か？」

「違う。川越からだ。埼玉県だ」

「知らないなあ。そういう所は。名古屋より向こうの方が」

その言葉のやりとりから数回、話をした仲だったか……。たがどこにもいなかった。校舎は消えたが、雨模様でなければクラスの仲間は学校にやって来る。黒板が調達できるまでの期間、皆でよく歌を歌った。その時はヨロツパの歌とは知らず、故郷の廃家（注・ヘイス作曲）などを繰り返しくりかえし歌った。

隣の県の広島に原爆が落ちて、やがて終戦。——進駐軍がやってくる。

そしてジープの走りと共に、街の空気はあわただしくなっていく。岡山駅の西側にあった空地が、進駐軍の残飯ゴミ捨場になると、そこに鳶が群れる。

鳥達までも、剥き出して生きる為に動きまわっていた。

中学二年になって、私は川越へ戻って来た。

川越の街は相変わらず落ち着いていて変わっていない。

転校手続きのため、川中の門を入った時、黒く聳える楠の奥から英語の教科書を読む声が聞こえてきた。(皆に聞いていけるかな……) 岡山での授業の空白を想い、不安が拡がった。

三年の時、美術書に魅かれて油絵を画いてみた。

川越の郊外の紅葉の林を写生した。初めての絵を学校に持っていった。

同じクラスの佐々木雄司君は、「ずいぶん、沢山の色を使ったなあ」と、一言いった。先日、四十数年ぶりにスケッチした場所に立ってみた。そこは、住宅や工場が立ち並んで、残念だが昔の面影はない。

変わらないのは遠景の山容だった。先祖の見た夕日に映える秩父の稜線を、後世の人も同じように眺めていくことだろう。

自然はいつも静寂である。

枯枝に烏かすとまりけり秋の暮 芭蕉

俳句

加藤敏一

梅咲けり海よりの風寒からず
桜散り波音高くなりにつけり
春の海遠き島見え白帆ふね
コスモスの倒れても尚咲き続く
平らなる波の眩しき春の海
蓑虫の風に揺らるる行手かな
そば搔きや遠い記憶の父の顔
小春日の雀が立てる土埃
武蔵野の樺老樹や忌日来る
つつましく蜜柑色づき海光る

伊豆の城ヶ崎海岸に居住して三十年になり、時々趣味として作ったものです。拙句で恥入るばかりです。

一句

田中修

川越中学、川越高校の思い出はいろいろあるが、どれも断片的で不確かだ。

数年前、青柳、小熊、沼田、比留間、新井（滄）諸兄と会った折、学校時代の話に花が咲いたが、僕が、あの時はああだった、こうだったと思っていたことほとんどが、記憶ちがい、思いちがいで、愕然としたものだ。

そんなわけで、今回の文集に何か書けといわれたまま、何もまとまらず日が経ってしまったところ、青柳君から「お前は発起人に名を連ねているのだから、書かなきゃ駄目だ」と半ば脅迫の電話がきた。

「何も書くことがないんだよ」

と答えると、

「俳句ぐらいあるだろう」と一喝された。

そういえば、佐藤徳サンの授業で、さんざん俳句に泣かされたっけ。

そうそう、一句だけ「獺祭」に載ったことがある。

蟻ん子や 松葉牡丹に 青い空

まるで小学生の句だね。

だけど、本当に「獺祭」に載ったのかなあ。——これも、僕の思いちがいかもしれない。

詩 二 篇

銀婚記念の旅

昭和五十九年五月三日 九州の地

(五十二歳の誕生日に)

畑 喜千松

緑豊かな鎮守の杜もりで

誓った二人の 縁結び

形だけの イルミの指輪

伊豆の湯ヶ島、下田のホテル

不安と希望の朝だった。

あれから早くも二十と五年

腕組み歩いた事もない

並んで歩いた事もない

俺に遅れて 歩く癖

今も ちっとも変わっちゃいない。

たとえ 我が児が倒れても

今の世 医学の進歩にまかせ

素人の俺に何出来るかと

勤め先にTELするな

言われて泣いた 妻だった。

我が児の長所は 俺ゆずり

悪いところは おまえの責任

勝手な俺に ついて来た

二人の娘も大学生

早く嫁げよ 愛せる人に。

嫌だな 爺ちゃんと 呼ばれるなんて

いいわね 婆ちゃんと 呼ばりたい

笑いころげて 旅に行く

ここは 長崎 出島の港

続く坂道 石だたみ。

共に楽しむ趣味持とう

選んだ道がソシアルダンス

願うは 二人の健やか身体

小さな幸せ 又 旅立ちと

肩抱き寄せた 平戸のホテル。

苦勞かけたね かけてるね

しみじみ話した 今日の旅

崙の字の歳(77)まで生き永らえて

二人で ぼっくり死ねたら いいね

旅のベッドで女房が笑った。

愛しているよとたア 照れくさい

忘れはしないよ 今日の幸せ。

二人の愛の 銀婚記念日。

時よ止まれよ 光りの中に

(第二の人生の旅立ちの日に)

朝まで寒い光りの中で

目やに拭きとり 振り返る

過ぎた人生 矢の如く

齢を重ねて 今年は還暦

まだまだ若いと 吾は思う

世は見てくれぬ 法の道。

昨日の過去は 光りの中で

勝つ勝てるより負けまいと

生き抜く為に 喰い働き

希望もあつたが苦勞も百倍

若い身体と感性は 戻らない

過ぎた時日に 悔いはない。

今日の今 光りの中で

五体のどこも 痛くない

咳き込むとはいえ 朝の一刻ひととき

孫と遊ぶにマゴマゴするが

嫁いだ娘の手編みの温もりぬく

赤いセーターのイニシアル。

夫婦喧嘩の種もない

家計簿もつけず、日記もやめた

流れるままに 小さく働き

小さな悩みは 喜びと差し替え

多くの友と交わって 健やかな身体に

心豊かな 趣味の道。

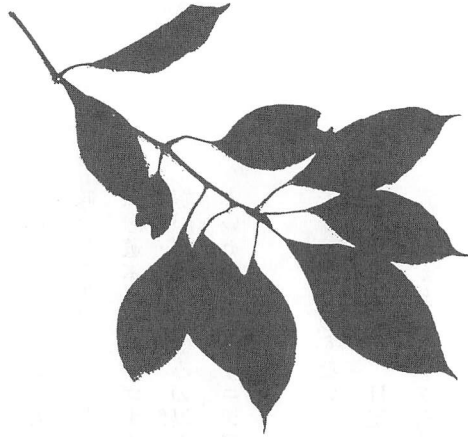
いつかは迎える 老いの身に
或いは病の床に泣く

天変地異の恐怖に おののく
こんな苦しみ 会いたくない
明日も 来る日も 次の日も
今日の今と 同じがいい。

時よ止まれよ 光りの中に

明日は故郷 ふるさと 幼き友と
還暦祝いの同窓会

光りの中に
風花の舞い散る。



俳句 三芳野

句集「流鏑馬」後二十句

宮崎敏昭

盆松の枝のひろがり春隣
初空や盆栽邑の槻高き
漫画館へ山茶花籬のみちつづく
正午告ぐるエーデル曲や春峠
一揆址の平和の鐘や福寿草
酒店の鎌掛柱春炉たく
武蔵野の老舗そば屋の内裏雛
初花や岬に日矢さす駿河灘
滄海へ蘇鉄つづきの春岬
春濤や流人の岩の淡日差

火渡りの五色の幣や春きたる
潮風のやさしや歌碑に姫莖(夢二碑)
視界みな房総の海遠霞
初蝶のよぎる明治の疏水橋(南禅寺)
夏柑や岬を目差す銚子みち
菜種梅雨利根にひとつの手漕舟
梅雨ぐもり智恵子の浜のうつせ貝
三芳野や老鶯去らぬ童謡碑
筒鳥やはや暮れそむる山毛櫨峠
紙魚はしる馬の医学書木曾の宿

森田先生のレコード・コンサート

小畑温治

今年（一九九三年）一月十六日夜、滋賀県近江八幡市文化会館において、私は、遠来のゲヴァントハウス絃楽四重奏団演奏会を聴いた。当日の曲目の二番目に、モーツアルト作曲「絃楽四重奏曲第十五番ニ短調K四二一」が演奏された。ナマで最高の音楽を聞いた印象はすばらしかったが、特にその第三楽章の暗い、孤独な旋律を聴きながら、私の思いは四十数年前に立ちかえっていった。

川越高校卒業生の記念文集に何を書こうか迷っていたとき、この演奏会があり、たしか高校二年生のころ、放課後に森田先生が催されたレコード・コンサート（当時からこういうことはあったかどうか、さだかではないが）を思い出した。森田先生について——申し訳ありませんが、音楽の時間に買ったばかりのレコードを聴かせて頂いたことしか、授業についての記憶は残っていませんが——ある時、講堂にあったピアノの傍で、先生がモーツアルトのトルコ行進曲を弾かれるのを聴いたことがあった。その森田先生が開かれた何回かのレコード・コンサートの中にモーツアルト特集があった。モーツアルトの名もろくに知らなかった私をはじめ本格的な音楽に接したわけで、このときのことは割によく覚えている。

先生は、モーツアルトの作品には明るく陽気な一面と、暗く孤独な一面とがある（あまりに早く完成された天才の孤独・悲哀）——このような指摘をされた。前者の代表として、「歌劇・フィガロの結婚序曲」、後者の典型とし

て絃楽四重奏曲の一部を聴かせて頂いた。それが、私が先日聴いたニ短調の曲にちがいない。特にその第三章について、「これを聞いて孤独を感じない人はどうかしている」とも言われた。最後に、この両面を総合した最高の傑作として交響曲第四十一番ハ長調・ジュピターを紹介された。

私はそれ以来、モーツアルトの音楽が好きになり、さまざまなジャンルにわたり、LPレコード、今日ではCD、演奏会などを通じて、その澄んだ、さわやかなメロディーに親しんできた。現在、関西モーツアルト協会の会員に加わっている。趣味をたずねられると、まず、音楽と答えることにしている。私の心の中に占めるモーツアルトの地位は極めて大きい。

今から思うと、あの日のレコード・コンサートが私の一生にとつていかに大きな意味をもっているか計りしれないものがある。その日聴いた曲のうち、「フィガロの結婚序曲」や「交響曲ジュピター」はともかく、「絃楽四重奏曲ニ短調」についてはこの曲だったという確信はない。しかし、私はこの曲にちがいないと思ひこんでいる。

去る一月十六日夜、たまたまこの曲を聴いて、はるか昔の高校生時代のことや次々に脳裡に浮び、胸が熱くなった。このことを記念文集にのせて頂きたくて筆をとった。当日はクラシックの地味な音楽会ということもあって聴衆はそう多くはなかったが、その中に、気迫のこもった演奏を聞いてこんな感慨にひたっていた者がいたことを、もし何かの機会があつて、ゲヴァントハウス四重奏団の方々にお伝えすることができたら、と思う。

咆哮 マイ・ミュージック

道 又 正 達

川越中学に在籍したこと、木島先生に巡り合ったことが現在の我が人生の誇りとなっております。何故なら川高という一応進学校として有名な方だから、頭脳はある程度の信用がありはしないか？ 英国紳士風で商船学校の先生が何ゆえ英語の教諭だったのか……今もってあのカッコよさにアコガレてる。先生は英語のテストが済むと、成績優秀な若干名を教室で披露して下さり、そのなかの常連だった事がその後の舶来ボーカルの基礎となってしまう。数学アレルギーがそうさせたとも言えるかも知れない。トータルでの成績はむしろ大変地味だったらしい。以下、西多摩医師会報のエッセイまがいのものを転載して少し楽をしよう。四十五歳当時の原稿で題名は「中年マイ・ジャズ」勿論一部削除の箇所もありますが……。

最近、一九六〇年代のジャズ再燃とか、終戦のとき旧制中学一年生（一九三三年生）だった私にとって進駐軍むけのラジオ放送 Armed Forces Radio Service の中から出てくる種々雑多なミュージックは、生まれたままの無心の状態で、からだじゅうで受けとめ、半ば放心した様に多感な思春期の胸をいたく刺激した。学習院出の伯母から「なあに、そんなウルサイ国際音楽なんか聞いて、クラシックの一つも聞いたら」と注意されたりもしたが、私なりの時代背景をとおして、現在心酔できるもの、とりわけスタンダードなジャズポップスが好きてたまらない。しか

も同年輩の今日日本のジャズ界のナイスミドル達のポピュラーナンバーをしつつこいぐらいいにきいてシビレている。彼等が長い年月をかけて築きあげた独特のモノに敬意と感動をまじえながら、以下人名と生まれ年と私の好きな曲などをはじめこみながらすすめてみます。

南里文雄（一九一〇年生—一九七五年病没）弱冠十五歳で大阪高島屋少年ブラスバンドでトランペットを口にして、デキシールからスイングまで彼のひきいるホットペッパーズの名演奏。また晩年盲目に近い視力でペットを吹きつづけたスピリット——聖者の行進（When The Saints Go Marchin' In）十二番街のラグ（Twelfth Street Rag）私の青空（My Blue Heaven）

見砂直照（一九〇九年生）東京キューバンボーイズは、惜しまれながら今年二月解散したが、ラテン専門バンド——メンボ No. 5（Mambo No. 5）、ベッサメ・ムーチョ（Besa Me Mucho）、ある恋の物語（Historia De Un Amor）。少々この御二方は年輩でしたが……これからが本格的なナイスミドル・ジャズメンで、

チャーリー石黒（一九二八年生）と東京パンチョスは、つい先頃二十五周年結成コンサートがあったそうで、彼は早大生のときからラテンリズムを中心にグレン・ミラーやペレス・プラドのスタイルをうまくとりいれたり、アームストロング張りのボーカルも上等——スワニー（Swanee）、煙が目にしみる（Smoke Gets In Your Eyes）、ビギン・ザ・ビギン（Begin The Beguine）

原信夫（一九二六年生）とシャープス&フラッツ。彼は海軍軍楽隊出身で、自らもテナーサクスを吹くし、横浜の米軍クラブで演奏を始めてから一貫して、第一級のモダンジャズサウンドを追求するバンドを持ちつつけている

——（Take Five, Work Song, Mercy Mercy Mercy）

渡辺貞夫(一九三四年生)今や知らぬ人なし。テレビにもヤマハバイクの宣伝でも有名、ご存じナベサダサマ。世界的ジャズミュージシャン。アルトサククス、フルート、ソプラニーノなどを吹き、作編曲拔群——(Chin Chim Chery, Woman Talk, Train Samba)

ジョージ川口(一九二七年生)文字通り戦後三十年間のナンバーワンドラマーで、ジョージのドラミングパワーは衰えを知らず、松本英彦、中村八大、小野満とのビッグ・フォアの出演依頼はあとを絶たずとか——(Sing Sing Sing)

平岡精二(一九三一年生)ヴィブラフォン、青山学院出身、あらゆる楽器をこなす器用人。しかも自らも甘い声で歌う。育ちの良さをうなルックス。「あいっ」「つめ」といった流行歌は有名。

横内章次(一九三三年生)ベテランギター奏者、ジャズアレンジが巧み、歌手の伴奏も上手い——魅せられしギター(Haunted Guitar)‘夜霧のしのび逢ふ(La Playa)’‘Johnny Guitar’

沢田駿吾(一九三〇年生)ダブル・ビーツの名で有名。ジャズ教育にも熱心で、ルーツ音楽院設立。優れたテクニクを基礎にオーソドックスなもの多々あり——黄金の腕(The Man With The Golden Arm)‘殺し屋のテーマ(The Executioner Theme)’‘帰るな河(The River Of No Return)’

日野皓正(一九四二年生)彼はズーツと若い部類に入るけれども、日本人とも思えないすぐくスケールの大きいサウンドをカッコよきかせる世界的トランペッター——夜空のトランペット(Silenzio)‘星空のブルース(Wunderland Bei Nacht)’‘夜のストレンジャー(Strangers In The Night)’

前田憲男(一九三四年生)大阪出身のデューク・エリントンに尊敬するジャズピアニスト——魅惑のワルツ

(Fascination) ' 旅情 (Summertime In Venice) ' 慕情 (Love Is A Many Splendored Thing) など、か好れたが、殊に映画「愛情物語」で耳に焼きついた曲で、シヨパンの変ホ長調を編曲したといわれる華麗な曲「To Love Again」これを拝聴すると私は何故かロマンチックなフリーリングで涙、涙、涙……。

佐藤允彦(一九四一年生) 中山千夏の旧旦那だった人だが、慶応在学中よりピアノを弾き、非常なモダンなタッチは天才的ピアニストと言われている——枯葉 (Les Feuilles Mortes, Vaya Con Dios, Pretend.)

北村英治(一九二九年生) 慶応在学中からジャズ界に入り、曲趣によって七色の音色を出すベニー・グッドマン以来のクラリネット奏者——(St. Louis Blues, Let's Dance)

鈴木章治(一九三三年生) グッドマン楽団の一員として来日したビーナッツ・ハッコーとの鈴懸の径、あの印象的なクラリネット二重奏——小さな花 (Petite Fleur) ' 森の小径等日本の曲をモノにするイイオトコ。

松本英彦(一九二六年生) テナー・サクソスのナンバーワン。スリーピーの名で親しまれ、戦後の日本のジャズ・ブームの中の多くのジャズメンの中で、不断の努力を重ねる国際的実力プレイヤー——ハーレム・ノクターン (Harlem Nocturne) ' 夕日に赤い帆 (Red Sail In The Sunset) ' 虹の彼方 (Over The Rainbow)

果たして今は、Polydorあたりでは Pops Karaoke International と銘うって、LD まである便利な時代、青春の郷愁に酔う Vocalist を毎度度々演じている次第です。中でも上手いのは、パット・ブーン の「I Will Be Home」あたりか? そしてこの瞬間はカントリー・ウエスタン出身ながら、大変な才能を生かした同年輩 Willie Nelson の唄を聴きながら、旧友、堀陽君に頼まれた原稿を書き終えます。

俳句

宮崎義宣

遠くより 又近くより見る 桃の花
雪景色 妻は車を とめにけり
たき火する 人は素朴の 顔なりき
旅人に 麦の芽の色 あたたかし
ようやくに 犬雪になれ 雪なめる

豆事典・レコード・コンサート

生のオーケストラなどそう簡単に聴く機会もなかった。レコードはSPで針の音が高くおまけに五分くらいで終わってしまう。それでも豊かな音楽鑑賞の芽を育てることができたのだから、デジタルの、CDのと余計なテクに浮かれている今の世代が、結局はCDに合わせた音楽しか作れなくなっていくのを見ていると情なくなってしまう（ついでに言えばSPは七十八回転シエラック盤、初期の頃はゼンマイ式手捲き蓄音器でかけた。LPは三十三回転ビニール盤。四十五回転は同じくビニール盤でドーナツ盤と呼んだ）。

初

雁



埼玉県立川越高校
第三回卒業生句集

だっさい
「獺祭」には泣かされた。

でも結局、今でも思い出話の中心は「獺祭」だ。



国・漢文の佐藤先生はレポーター
が広がった。映画、登山、そして東
京では野球部監督の経験まで持って
おられた。その先生が「結局、すべ
てを包含しているのは俳句だ」と悟
られて、俳句に力が入った。
吉田冬葉先生の「獺祭」に毎週十句
投句するように宿題が出た。田舎の
高校生にとっては大変なことだった。
まさに「泣いて戦う」日の連続だっ
た。しかし卒業して振り返れば、結
局一番必死でやったのも俳句だった
かもしれない。在校中から俳句に熱
中した人もいるし、卒業後急に俳句
が好きになったり、句集を出したり、
俳句で日記を綴る人まで現れたのだ
から……。



俳句クラブの送別句会

松木、大澤、江原、益子、山崎

